吉武遺跡群（よしたけ）

X

飯盛・吉武圃場整備事業関係調査報告書 4

－弥生時代の墓地の調査報告１－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第580集

福岡市教育委員会
No.
埋蔵文化財

1998

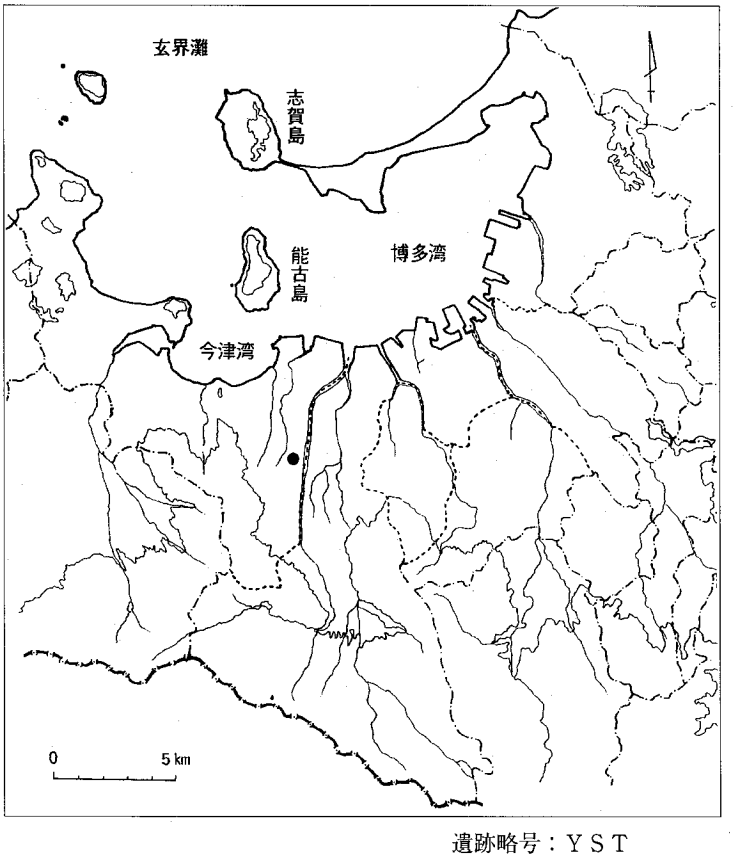
福　岡　市　教　育　委　員　会

吉武遺跡群

X

飯盛・吉武圃場整備事業関係調査報告書 4

福岡市埋蔵文化財調査報告書第580集



遺跡略号：ＹＳＴ
１・２・４・６・８・９次
調査番号：8102,8234,8335
8416,8518,8535

１９９８

福岡市教育委員会

序

古来より大陸の門戸であった福岡市域には、アジアとの交流を示す多くの文財が市内各所に残されています。

この中でも特に、市西郊の室見川左岸に広がる吉武遺跡群は、弥生～奈良時代にかけての遺跡が数多く分布する地域として知られています。

さて、この地域では昭和56年度より飯盛・吉武地区農業基盤整備事業の施工に伴い、工事によってやむなく消滅する埋蔵文化財について、事前に発掘調査による記録保存が必要となり、当該年度より事業が完結する昭和60年度まで調査を継続しました。

発掘調査の結果、紀元前二世紀に遡る弥生時代の豊富な青銅器を多く副葬した特定集団の墓地や大型建物群、紀元前後の弥生時代の墳丘墓、古墳時代中期の前方後円墳・円墳群及び集落址、奈良時代末～平安時代にかけての官衙あるいは寺院址など各時代の遺構が検出されました。

本書は弥生時代の墓地を収録したものですが、あまりにも出土数が多いため今回は弥生時代前期～中期初頭の墓地を中心に収録しました。本書が埋蔵文化財への理解と認識を深める手助けとなり、また学術研究や学校、社会教育の分野において役立てていただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にかかる飯盛・吉武土地改良組合、地元作業員および市農林水産局の方々、報告書にかかわった方々をはじめ、本遺跡の史跡指定について強力なご理解とご協力をいただきました地権者の方々に対し、心より感謝申し上げる次第です。

平成10年３月30日

福岡市教育委員会

教育長　町　田　英　俊

例　言

1．本書は飯盛・吉武地区土地改良事業（圃場整備）に伴い発掘調査を実施した福岡市西区大字飯盛・吉武地内に所在する吉武遺跡群の弥生時代の墓地についての発掘調査報告書である。

2．発掘調査は福岡市教育委員会文化課埋蔵文化財課が昭和56年度から昭和60年度にわたって実施した。

3．発掘調査で検出した各遺構は、その種類毎に記号を付し、土坑をＳＫ、溝状遺構をＳＤ、竪穴住居址をＳＣ、掘立柱建物をＳＢ、ピットをＳＰ、甕棺墓をＫと表記した。

4．本書は調査された各時代遺構の内、弥生時代の墓地（前期～中期初頭）を中心に報告するものである。

5．本書に使用した遺構実測図の作成は、調査担当者の他に別記の調査員が行い、また、遺物実測は担当者のほかに濱石正子、憮養久美子、大庭友子が行った。

6．本書に使用した図面類の整図および製図は、安野良、副田則子、大庭友子が行った。

7．本書に使用した写真は、空中写真を（有）空中写真企画に委託し、他は二宮忠司（第一～二次）、下村智（第三～四次）、横山邦継（第五次）、力武卓治（第六次）が行った。

8．本書で使用した方位は、すべて磁北である。真北は西偏に6°21′である。

9．本書の執筆は、第一章～第三章を二宮忠司・大庭友子、第四章を横山邦継、第五章を力武卓治が担当し、それぞれが編集した。

10．発掘調査によって出土した遺物や図面・写真等の記録類は収蔵要項に基ずき整理し、埋蔵文化財センターに保管・管理する予定である。

11．挿図・図版内に記した番号は遺物登録番号を示す。又，写真図版内にある番号は遺物登録番号・挿図番号・写真番号である。

12．表紙題字は杉山悦子氏にお願いした。記して感謝いたします。

本 文 目 次

第一章　はじめに…… 1

第二章　第一次調査－弥生時代の墓地の調査－…… 9
第一節　第一次調査の概要…… 9
1．II区検出の甕棺墓と木棺墓……11
（1）甕棺墓……11
（2）木棺墓・土壙について……27
（3）出土遺物……27
副葬品……36
2．IV区検出の甕棺墓と木棺墓 ……38
（1）甕棺墓……38
（2）木棺墓・土壙について……41
（3）出土遺物……44
副葬品……54

第三章　第二次調査－弥生時代の墓地の調査－……55
第一節　第二次調査の概要……55
1．IX区検出の甕棺墓 ……60
（1）甕棺墓 ……60
第一・二次調査のまとめ ……62

第四章　第四・五次調査－弥生時代の墓地の調査－……65
Ⅰ．第Ⅰ区の調査……65
Ⅱ．第Ⅱ区の調査……79
Ⅲ．第Ⅲ区の調査……92
Ⅳ．おわりに……99

第五章　第六次調査……103
甕棺墓……104

挿 図 目 次

Fig. 1　吉武遺跡群位置図(縮尺1/50,000) …… 6
Fig. 2　吉武遺跡群と周辺遺跡(縮尺1/4,000) …… 7
Fig. 3　調査区配置図（第一～第六次調査）（縮尺1/4,000） …… 8
Fig. 4　第一次調査遺構全体図 …… 12・13
Fig. 5　第一次調査弥生時代遺構配置図（II区） …… 14
Fig. 6　第一次調査II区甕棺墓・木棺墓配置図－1（縮尺1/80） …… 16
Fig. 7　第一次調査II区甕棺墓・木棺墓配置図－2（縮尺1/80） …… 18
Fig. 8　第一次調査II区甕棺墓・木棺墓配置図－3（縮尺1/80） …… 19
Fig. 9　第一次調査II区甕棺墓・木棺墓配置図－4（縮尺1/80） …… 20
Fig.10　第一次調査II区甕棺墓実測図－1（縮尺1/30） …… 22
Fig.11　第一次調査II区甕棺墓実測図－2（縮尺1/30） …… 24
Fig.12　第一次調査II区甕棺墓実測図－3（縮尺1/30） …… 26
Fig.13　第一次調査II区甕棺墓実測図－4（縮尺1/30） …… 28
Fig.14　第一次調査II区木棺墓・土壙実測図(縮尺1/30) …… 29
Fig.15　甕棺実測図－1（縮尺1/10） …… 32
Fig.16　甕棺実測図－2（縮尺1/10） …… 33
Fig.17　甕棺実測図－3（縮尺1/10） …… 35
Fig.18　遺物実測図(縮尺1/1,1/3,1/4) …… 37
Fig.19　第一次調査遺構配置図（IV区）（縮尺1/300） …… 40
Fig.20　第一次調査IV区甕棺墓・木棺墓配置図(縮尺1/80) …… 42
Fig.21　第一次調査IV区甕棺墓実測図－1（縮尺1/30） …… 43
Fig.22　第一次調査IV区甕棺墓実測図－2（縮尺1/30） …… 46
Fig.23　第一次調査IV区甕棺墓実測図－3（縮尺1/30） …… 47
Fig.24　第一次調査IV区木棺墓・土壙実測図(縮尺1/30) …… 48
Fig.25　甕棺実測図－1（縮尺1/10） …… 50
Fig.26　甕棺実測図－2（縮尺1/10） …… 52
Fig.27　甕棺実測図－3（縮尺1/6,1/10） …… 53
Fig.28　遺物実測図(縮尺1/1,1/2) …… 54
Fig.29　第二次調査遺構全体図 …… 56・57
Fig.30　第二次調査遺構配置図（IX区）（縮尺1/500） …… 58・59
Fig.31　IX区甕棺墓配置・実測図、形式分類(縮尺1/8,1/10,1/20) …… 61
Fig.32　第四・五次調査第Ⅰ区弥生時代墓地全体図 …… 63
Fig.33　第四・五次調査第Ⅰ区墓地全体図(F-15・16) …… 64
Fig.34　K101・104号甕棺墓出土状況実測図(1/30) …… 65
Fig.35　K101・104号甕棺実測図(1/10) …… 66
Fig.36　K104号甕棺墓副葬土器実測図(1/3) …… 66
Fig.37　K112・113号甕棺墓出土状況実測図(1/30) …… 67
Fig.38　K112・113号甕棺実測図(1/10) …… 68
Fig.39　K119・122号甕棺墓出土状況実測図(1/30) …… 69
Fig.40　K119・122号甕棺実測図(1/8) …… 70
Fig.41　K119号甕棺墓副葬土器実測図(1/3) …… 70
Fig.42　K131号甕棺墓副葬土器実測図(1/3) …… 71
Fig.43　K102・103・105・106・107・108・114・118・120号甕棺墓出土状況実測図(1/30) …… 72
Fig.44　K102・103・105・106・107・108号甕棺実測図(1/8) …… 73
Fig.45　K114・118・120号甕棺実測図(1/8,1/10) …… 74
Fig.46　K121・123・124・126・127・128・134号甕棺墓出土状況実測図(1/30) …… 75
Fig.47　K121・123・124・126・127・134号甕棺実測図(1/8) …… 76
Fig.48　K138・144号甕棺墓出土状況平面実測図(1/30) …… 77
Fig.49　K01・02・03・04・05号甕棺墓出土状況実測図(1/30) …… 77
Fig.50　第四・五次調査第Ⅱ区弥生時代墓地全体図(1/1000) …… 79
Fig.51　第四・五次調査第Ⅱ区墓地全体図①(F・G-17・18,1/100) …… 80
Fig.52　K01・02・03・04・05・06・09・11・17号甕棺墓出土状況実測図(1/30) …… 81
Fig.53　K08・10・12・13・14・15・19・20号甕棺墓・SX01石組み遺構出土状況実測図(1/30) …… 82

Fig.54　K04·06号甕棺実測図(1/10) ……83
Fig.55　第Ⅱ区出土土器実測図(1/6) ……83
Fig.56　K04·06号甕棺出土石剣·石鏃切先実測図(1/2) ……84
Fig.57　ＳＸ01石組み遺構副葬土器実測図(1/3) ……84
Fig.58　第四・五次調査第Ⅱ区墓地全体図②(H·I-17·18) ……85
Fig.59　K01·05·09·11·13·16·18号甕棺墓出土状況実測図(1/30) ……86
Fig.60　K16号甕棺実測図(1/10) ……87
Fig.61　K02·06·07·12·14·17·21·23·27号甕棺墓出土状況実測図(1/30) ……88
Fig.62　K15·19·22·24·26·28·29·34·35号甕棺墓出土状況実測図(1/30) ……89
Fig.63　K10·30·31·32号甕棺墓出土状況実測図(1/30) ……90
Fig.64　第四・五次調査第Ⅲ区弥生時代墓地分布〔1〕(1/4300) ……92
Fig.65　第四・五次調査第Ⅲ区墓地全体図①(K·L·M-15·16) ……93
Fig.66　K67号甕棺墓出土状況実測図(1/30) ……93
Fig.67　K67号甕棺実測図(1/10) ……94
Fig.68　K67号甕棺副葬素環頭刀実測図(1/2) ……94
Fig.69　樋渡墳丘墓他にみる甕棺と副葬品図 ……95
Fig.70　立岩遺跡にみる甕棺と副葬品図 ……95
Fig.71　第四・五次調査第Ⅲ区弥生時代墓地分布図〔2〕(1/1000) ……96
Fig.72　第四・五次調査第Ⅲ区墓地全体図②(M·N-16·17) ……97
Fig.73　K05・08号甕棺墓出土状況実測図(1/30) ……97
Fig.74　K05・08号甕棺実測図(1/10) ……98
Fig.75　第四・五次調査第Ⅲ区墓地全体図③(L·M-16) ……98
Fig.76　吉武遺跡群にみる甕棺と共伴する副葬土器 ……99
Fig.77　吉武遺跡群にみる木棺と共伴する副葬土器 ……100
Fig.78　胎土分析を行なった吉武遺跡群の甕棺図 ……101
Fig.79　吉武遺跡群周辺の主要な河川水系図 ……102
Fig.80　第六次調査（大石地区）弥生墓地全体図(1/200) ……103
Fig.81　K 2　K 4　K14　K15　K16号甕棺墓出土状況図(1/30) ……104
Fig.82　K18　K25　K26　K27号甕棺墓出土状況図(1/30) ……105
Fig.83　K18号甕棺実測図(1/10) ……105
Fig.84　K35　K43号甕棺墓出土状況図(1/30) ……106
Fig.85　K35号甕棺実測図(1/10) ……106
Fig.86　K46　K47　K50号甕棺墓出土状況図(1/30) ……107
Fig.87　K50号甕棺実測図(1/10) ……107
Fig.88　K52　K56号甕棺墓出土状況図(1/30) ……108
Fig.89　K56号甕棺実測図(1/10) ……108
Fig.90　K62　K64　K65　K68号甕棺墓出土状況図(1/30) ……109
Fig.91　K73　K74　K76号甕棺墓出土状況図(1/30) ……110
Fig.92　K73号甕棺実測図(1/10) ……110
Fig.93　K77　K82号甕棺墓出土状況図(1/30) ……111
Fig.94　K77号甕棺実測図(1/10) ……111
Fig.95　K81　K89　K90　K91号甕棺墓出土状況図(1/30) ……112
Fig.96　K91　K92　K130号甕棺墓出土状況図(1/30) ……113
Fig.97　K130号甕棺実測図(1/10) ……113
Fig.98　K133 K135 K136 K137 K141号甕棺墓出土状況図(1/30) ……114
Fig.99　K141号甕棺実測図(1/10) ……114
Fig.100 K142 K149号甕棺墓出土状況図(1/30) ……115
Fig.101 K142号甕棺実測図(1/10) ……115
Fig.102 K150 K166 K168号甕棺墓出土状況図(1/30) ……116
Fig.103 K171号甕棺実測図(1/10) ……116
Fig.104 K171 K172 K187 K203号甕棺墓出土状況図(1/30) ……117
Fig.105 K172号甕棺実測図(1/10) ……117

図 版 目 次

PL. 1　第一次II区検出甕棺墓・木棺墓検出状態－1　PL. 2　検出状態－2
PL. 3　検出状態－3　PL. 4　検出状態－4　PL. 5　検出状態－5
PL. 6　第一次IV区検出甕棺墓・木棺墓検出状態－1　PL. 7　検出状態－2
PL. 8　IV・IX区甕棺墓・木棺墓検出状態
PL. 9　甕形土器－1　PL.10　甕形土器－2　PL.11　甕形土器－3
PL.12　甕形土器－4　PL.13　甕形土器－5　PL.14　甕形土器－6　PL.15　副葬品
Pl.16　第四・五次調査第Ⅰ区全景(南から)
Pl.17　K101·102·103·104·105·106·123·107·124·108号甕棺墓出土状況
Pl.18　K112·113·114·118·119·120·121·122号甕棺墓出土状況
Pl.19　K126·127·128·129·130·131·132·133号甕棺墓出土状況
Pl.20　第Ⅰ区K134号、第Ⅱ区K04·06·16号、第Ⅲ区K67·05·08号甕棺墓出土状況
Pl.21　第Ⅰ区K101～104号甕棺
Pl.22　第Ⅰ区K105～108号・K112号甕棺
Pl.23　第Ⅰ区K113・114・118号甕棺
Pl.24　第Ⅰ区K119・120・122・123・126号甕棺
Pl.25　第Ⅰ区K124・126・127・134号甕棺およびK104・119・131号甕棺副葬土器
Pl.26　第Ⅱ区K04・06・16号甕棺、SX01副葬土器、03051・03052土器
Pl.27　第Ⅲ区K05・08・67号甕棺
Pl.28－1　第六次調査（大石地区）弥生墓地全景
　　－2　大石地区弥生墓地（南東から　右隅はM1とK172）
Pl.29　第六次調査甕棺墓出土状況
Pl.30　第六次調査甕棺墓出土状況
Pl.31　第六次調査K18　K35　K50　K56号甕棺
Pl.32　第六次調査K77　K130　K141　K142号甕棺

表 目 次

Tab. 1　吉武遺跡群調査一覧……2
Tab. 2　吉武遺跡第一・二次調査検出甕棺墓・木棺墓一覧……15
Tab. 3　吉武遺跡第四・五次調査I区弥生墓地遺構一覧……78
Tab. 4　吉武遺跡第四・五次調査II区弥生墓地遺構一覧……91
Tab. 5　吉武遺跡第六次調査出土甕棺墓一覧……118

第一章　はじめに

1．調査に至る経過

吉武遺跡群発掘調査のきっかけとなったのは、昭和55(1980)年６月11日に農林水産局農業構造改善部農業土木課より教育委員会文化部文化課に提出された福岡市西区の『飯盛・吉武団体営圃場整備事業』計画である。

当初の整備計画では、対象面積46.4haの内、昭和55年度－3.6ha・昭和56年度－9.0ha・昭和57年度以降－33.8haを整備するものであった。このうち昭和55年度対象地区は、地形的に明らかに東側を流れる室見川の比較的新しい氾濫源であることと工事施工の上で殆ど影響を受けないために本調査からは除外した。

昭和56年度以降の対象地は、昭和44年に行われた九州大学による分布調査やその後の市教育委員会の遺跡分布調査によって、全域に弥生～古墳時代の遺物が散布することがしられていた。

教育委員会文化課では、昭和56年度事業地(対象7.5ha)について試掘調査(56年６月16～19日・７月８～１０日)を実施して遺構内容の把握を行ったところ、弥生時代前期～中期にかけての甕棺墓群や竪穴式住居址・溝・柱穴群など弥生時代～古墳時代にかけての遺構が、全体に広がっていることが明らかとなった。この後、この成果をもとに対象地のうち、造成工事に伴って遺構の失われる切土・構造物(道路・水路)部分などの範囲を確定するために事業者と協議を重ね昭和56年11月１日より本格的な調査を開始した(第一次調査)。

第一次調査以降、工事施工と発掘調査が時期的に重複するため、各事業年度での発掘調査規模を設計変更などで調査面積を最低に押さえるための協議が土地改良組合、文化課、事業指導課(農業土木課)とで定期的にもたれ、事業の円滑な推進が計られた。

また、圃場整備で六次にわたって調査された吉武遺跡群のうち、豊富な青銅製武器・鏡・玉などの副葬品を伴う吉武高木弥生墓地(第四・五次)や吉武大石弥生墓地(第六次)の一部は、弥生時代の墓制を考える上で学術的に非常に価値が高く、地権者の理解をえて国史跡『吉武遺跡』として永久に保存されることとなった。

2．調査の組織

昭和56年度の調査関係者は下記の通りである。

【調査委託】　農林水産局農業土木課、飯盛・吉武地区土地改良組合
【調査主体】　福岡市教育委員会　教育長　西津茂美
【調査総括】　文化課　甲能貞行
埋蔵文化財係長　柳田純孝
【調査庶務】　文化課　岡島洋一
【調査担当】　発掘調査　二宮忠司、田中壽夫、小林義彦　試掘調査　横山邦継
【整理調査員】　大庭友子
【整理作業員】　牛尾美保子、海内美也子、尾崎京子、斉藤美紀枝、真名子順子
【調査作業員】　青柳弘子、石橋輝江、伊藤みどり、牛尾秋子、牛尾シキヲ、牛尾準一、牛尾二三子、牛尾波美江、大内文恵、大穂朝子、大穂栄子、尾崎達也、尾崎八重、金子ヨシ子、菊池栄子、菊池キミ、菊池ミツヨ、倉光千鶴子

Tab.1　吉武遺跡群調査一覧(平成10年１月現在)

次数	遺跡調査番号	遺跡略号	調査地地籍	分布地図番号	調査対象面積	調査面積	調査期間	調査担当者	既刊報告書
1次	8102	YST-1	飯盛地区 (圃場整備一次)	092-A-12 (0405)	83,000	12,000	1981.11.1～ 1982.3.5	二宮忠司 田中壽夫 小林義彦	福岡市埋蔵文化財 調査報告書第437集 ・第514集・第580集
2次	8234	YST-2	飯盛地区 (圃場整備二次)	092-A-12 (0405)	79,000	21,000	1982.9.1～ 1983.2.15	二宮忠司	調査報告書第437集 ・第514集・第580集
3次	8235	YST-3	飯盛地区 (田・飯盛線一次)	092-A-12 (0405)	5,200	5,200	1982.9.22～ 1983.2.12	山崎龍雄 二宮忠司	福岡市埋蔵文化財 調査報告書第127集
4次	8335	YST-4	吉武地区 (圃場整備三次)	092-A-10・ 12 (0405)	101,000	25,000	1983.9.12～ 1984.3.24	下村　智 横山邦継	調査報告書第143集 ・第437集・第461集 ・第514集・第580集
5次	8415	YST-5	飯盛地区 (田・飯盛線二次)	093-A-10 (0405)	1,600	1,600	1984.4.13～ 1984.5.31	濱石哲也 二宮忠司	福岡市埋蔵文化財 調査報告書第194集
6次	8416	YST-6	吉武字高木地区 (圃場整備四次)	093-A-10 (0405)	70,000	36,000	1984.7.1～ 1985.3.20	下村　智 横山邦継 常松幹雄	調査報告書第143集 ・第437集・第461集 ・第514集・第580集
7次	8426	YST-7	吉武地区 (野方・金武線) (第一次)	093-A-7 (0405)	1,200	1,050	1985.3.26～ 1985.5.5	下村　智 横山邦継	調査報告書第187集
8次	8518	YST-8	吉武字高木地区 (圃場整備五次)	093-A-10・ 12 (0405)	70,000	470	1985.7.2～ 1985.7.24	横山邦継	調査報告書第437集 ・第461集・第514集 ・第580集
9次	8535	YST-9	吉武地区 (圃場整備六次)	093-A-10 (0405)	106,000	23,000	1985.8.1～ 1986.3.31	力武卓治 下村　智 常松幹雄 加藤良彦	調査報告書第437集 ・第461集・第514集 ・第580集
10次	8650	YST-10	吉武地区 (圃場整備)	092-A-12 (0405)	5,000	5,000	1986.11.17～ 1987.2.27	力武卓治 常松幹雄	調査報告書第437集
11次	8662	YST-11	飯盛地区 (野方・金武線) (第二次)	093-A-2 (0405)	4,320	3,780	1987.3.1～ 1987.5.10	二宮忠司 佐藤一郎	調査報告書第303集

倉光三保、倉光ユキエ、孤田洋子、榊スミ子、榊太郎、榊光雄、柴田大正、
白坂フサヲ、新町ナツ子、惣慶トミ子、高原ナヲ、高地幸枝、典略初、
中牟田サカエ、鍋山千鶴子、西島タミエ、西島初子、能美八重子、浜田澄美枝、
林嘉子、平田タマエ、平田政子、平野ミサオ、藤タケ、藤崎友記、細川ミサヲ、

又野栄子、真名子千恵子、真名子時雄、八尋君代、山下サノエ、結城君江、
結城千賀子、結城信子、横溝恵美子、横溝ユキエ、吉岡あつ子、吉岡アヤ子、
吉岡員代、吉岡竹子、吉岡タヤ子、吉岡蓮江、吉岡フサエ、吉岡文子、
米島ハツネ、脇坂ミサヲ

昭和57年度の調査関係者は下記の通りである。

【調 査 委 託】 農林水産局農業土木課、飯盛・吉武地区土地改良組合

【調 査 主 体】 福岡市教育委員会　教育長　西津茂美

【調 査 総 括】 文化課　生田征生
埋蔵文化財係長　柳田純孝

【調 査 庶 務】 文化課　岡島洋一

【調 査 担 当】 発掘調査　二宮忠司、山崎龍雄

【整理調査員】 大庭友子

【整理作業員】 牛尾美保子、海内美也子、尾崎京子、斉藤美紀枝、真名子順子

【調査作業員】 青柳弘子、石橋輝江、伊藤みどり、牛尾秋子、牛尾シキヲ、牛尾準一、
牛尾二三子、牛尾波美江、大内文恵、大穂朝子、大穂栄子、尾崎達也、
尾崎八重、金子ヨシ子、菊池栄子、菊池キミ、菊池ミツヨ、倉光千鶴子
倉光三保、倉光ユキエ、小林ツチエ、菰田洋子、榊スミ子、榊太郎、榊光雄、
坂田セイ子、柴田大正、柴田常人、清水フミ代、白坂フサヲ、新町ナツ子、
惣慶トミ子、高田マサエ、高原ナヲ、高地幸枝、典略初、舎川春江、
中牟田サカエ、鍋山千鶴子、西島タミエ、西島初子、西納トシエ、西納テル子、
能美八重子、浜田澄美枝、林嘉子、平田タマエ、平田政子、平野ミサオ、
藤タケ、藤崎友記、細川ミサヲ、又野栄子、松尾鈴子、松尾キミ子、松尾久代、
真名子千恵子、真名子時雄、真鍋チエ子、八尋君代、山下サノエ、山西人美、
結城君江、結城千賀子、結城信子、横溝恵美子、横溝ユキエ、吉岡あつ子、
吉岡アヤ子、吉岡員代、吉岡竹子、吉岡タヤ子、吉岡蓮江、吉岡フサエ、
吉岡文子、米島ハツネ、脇坂ミサヲ

昭和58年度の調査関係者は下記の通りである。

【調 査 委 託】 農林水産局農業土木課、飯盛・吉武地区土地改良組合

【調 査 主 体】 福岡市教育委員会　教育長　西津茂美

【調 査 総 括】 文化課長　生田征生
埋蔵文化財第2係長　折尾　学

【調 査 庶 務】 埋蔵文化財第１係　岡島洋一、古藤国生

【調 査 担 当】 発掘調査　下村　智、横山邦継　試掘調査　田中壽夫

【調査・整理調査員】 田中克子、緒方俊輔

【調査作業員】 村本健二、溝口武司、中山章、牧重幸、川田初、橘哲也、大賀敏明、青柳貴子、
青柳弘子、青柳陽子、池田由美、石橋洋子、井上カズ子、井上喜美子、
井上清子、井上千代子、井上トミ子、井上ヒデ子、井上麿智子、井上ムツ子、
鬼尾喜代子、岸田浩、清末シズエ、倉光アヤ子、倉光京子、倉光千鶴子、
倉光イワ子、倉光スマ子、倉光ナツ子、倉光信子、倉光初江、小柳和子、

斉藤国子、柴田憲子、柴田タツ子、柴田春代、滝良子、高松美智子、
筒井ひとみ、堤直代、土斐崎つや子、富崎栄子、富崎フミ子、冨永ミツ子、
鳥飼タキ子、永井鈴子、中島栄子、中西ヒデ子、中西美由紀、中牟田チエ子、
中山サダ子、西島美千代、西原春子、野下久美子、花畑照子、原幸子、
原口マサ子、平田節子、平田美絵子、三角清子、溝口博子、宮原富代、
宮崎泰子、矢富富士子、柳井順子、柳浦八重子、山口タツエ、結城千代子、
吉岡朱美、吉岡津幾子、吉積ハル子、吉積フサノ、横溝恵美子、横溝チエ子、
脇坂マキノ

【整理作業員】 花畑照子、溝口博子、安野良、副田則子、伊藤美紀、鳥飼悦子、室以佐子、
坂井香代子、持原良子

昭和59年度の調査関係者は下記の通りである。

【調 査 委 託】 農林水産局農業土木課、飯盛・吉武地区土地改良組合

【調 査 主 体】 福岡市教育委員会　教育長　西津茂美

【調 査 総 括】 文化課長　生田征生
埋蔵文化財第2係長　折尾　学

【調 査 庶 務】 埋蔵文化財第１係　岡島洋一、松延好文

【調 査 担 当】 発掘調査 下村　智、横山邦継、常松幹雄　試掘調査　田中壽夫

【調査・整理調査員】 田中克子、岩本陽児、矢野建一、緒方俊輔

【調査作業員】 村本健二、松田定美、溝口武司、池上宏、山下清作、平川謙一、沖浩人、
吉岡勝美、辻繁一郎、川田初、橘哲也、亀井照義、北園諭、藤嶋博明、
甲斐美佐江、末松一馬、青柳貴子、青柳弘子、青柳陽子、池田由美、石橋洋子、
井上カズ子、井上喜美子、井上清子、井上千代子、井上トミ子、井上ヒデ子、
井上麿智子、井上ムツ子、鬼尾喜代子、川口シゲノ岸田浩、木村厚子、
清末シズエ、倉光アヤ子、倉光京子、倉光千鶴子、倉光信子、倉光初江、
小林恵美子、小林ツチエ、小柳和子、斉藤国子、坂田セイ子、柴田常人、
柴田タツ子、柴田春代、白坂フサヨ、末永鶴子、高田マサエ、滝良子、
高松美智子、田中カヨ子、筒井ひとみ、土斐崎つや子、富崎栄子、富崎マチ子、
冨永ミツ子、舎川春江、永井鈴子、中島栄子、中牟田チエ子、中山サダ子、
西山秀子、能美須賀子、花畑照子、原ハナエ、原口マサ子、平田千鶴子、
平田美絵子、堀尾久美子、松尾キミ子、松尾鈴子、松本育代、溝口博子、
溝口洋子、宮原富代、宮崎泰子、森山早苗、矢富富士子、柳井順子、
柳浦八重子、山口タツエ、山下アヤ子、山本キクノ、山田トキエ、結城千代子、
吉積エミ子、吉田勝代、横田松ノ、横溝恵美子、横溝カヨ子、横溝チエ子、
吉武早苗、脇坂マキノ、脇山喜代子

【整理作業員】 花畑照子、溝口博子、別府加代子、矢野隆子、安野良、副田則子、伊藤美紀

昭和60年度の調査関係者は下記の通りである。

【調 査 委 託】 農林水産局農業土木課、飯盛・吉武地区土地改良組合

【調 査 主 体】 福岡市教育委員会　教育長　西津茂美

【調 査 総 括】 埋蔵文化財課長　柳田純孝

埋蔵文化財第２係長　飛高憲雄

【調 査 庶 務】 埋蔵文化財第１係　岡島洋一、松延好文

【調 査 担 当】 発掘調査　力武卓治、下村　智、常松幹雄　加藤良彦

【調査・整理調査員】 田中克子、岩本陽児、矢野建一、緒方俊輔、樋口秀信、進藤敏雄、溝口孝司

【調査作業員】 村本健二、松田定美、溝口武司、池上宏、山下清作、平川謙一、沖浩人、吉岡勝美、辻繁一郎、川田初、橋哲也、亀井照義、北園諭、小路永智明、藤嶋博明、甲斐美佐江、末松一馬、青柳貴子、青柳弘子、青柳洋子、池田由美、石橋洋子、井上カズ子、井上喜美子、井上清子、井上千代子、井上トミ子、井上ヒデ子、井上麿智子、井上ムツ子、鬼尾喜代子、川口シゲノ、岸田浩、木村厚子、清末シズエ、倉光アヤ子、倉光京子、倉光千鶴子、倉光信子、倉光初江、小林恵美子、小林ツチエ、小柳和子、斉藤国子、坂田セイ子、柴田常人、柴田タツ子、柴田春代、白坂フサヨ、末永鶴子、高田マサエ、滝良子、高松美智子、田中カヨ子、筒井ひとみ、土斐崎つや子、富崎栄子、富崎マチ子、冨永ミツ子、舎川春江、永井鈴子、中島栄子、中牟田チエ子、中山サダ子、西山秀子、能美須賀子、花畑照子、原ハナエ、原口マサ子、平田千鶴子、平田美絵子、堀尾久美子、松尾キミ子、松尾鈴子、松本育代、溝口博子、溝口洋子、宮原富代、宮崎泰子、森山早苗、矢富富士子、柳井順子、柳浦八重子、山口タツエ、山下アヤ子、山本キクノ、山田トキエ、結城千代子、吉積エミ子、吉田勝代、横田松ノ、横溝恵美子、横溝カヨ子、横溝チエ子、吉武早苗、脇坂マキノ、脇山喜代子

【整理作業員】 花畑照子、溝口博子、別府加代子、矢野隆子、安野良、副田則子、伊藤美紀

凡　例

第一・二次調査での遺物登録番号を下記のように定めた。

福岡市では、遺物に対して五桁の番号を与える。そこで今回、第一・二次の遺構と遺物に対して区別を与えるため下記のように記した。

区	遺構	0	0	1

遺構は　0－掘立柱建物
1－住居址内遺物
2－溝出土遺物
3－甕棺墓及び副葬品
4－土壙墓
5－井戸
6－縄文時代貯蔵穴
7－石器
8－木製品
9－不明土壙

甕棺墓出土のうち、下棺、上棺の順で登録番号を付している。

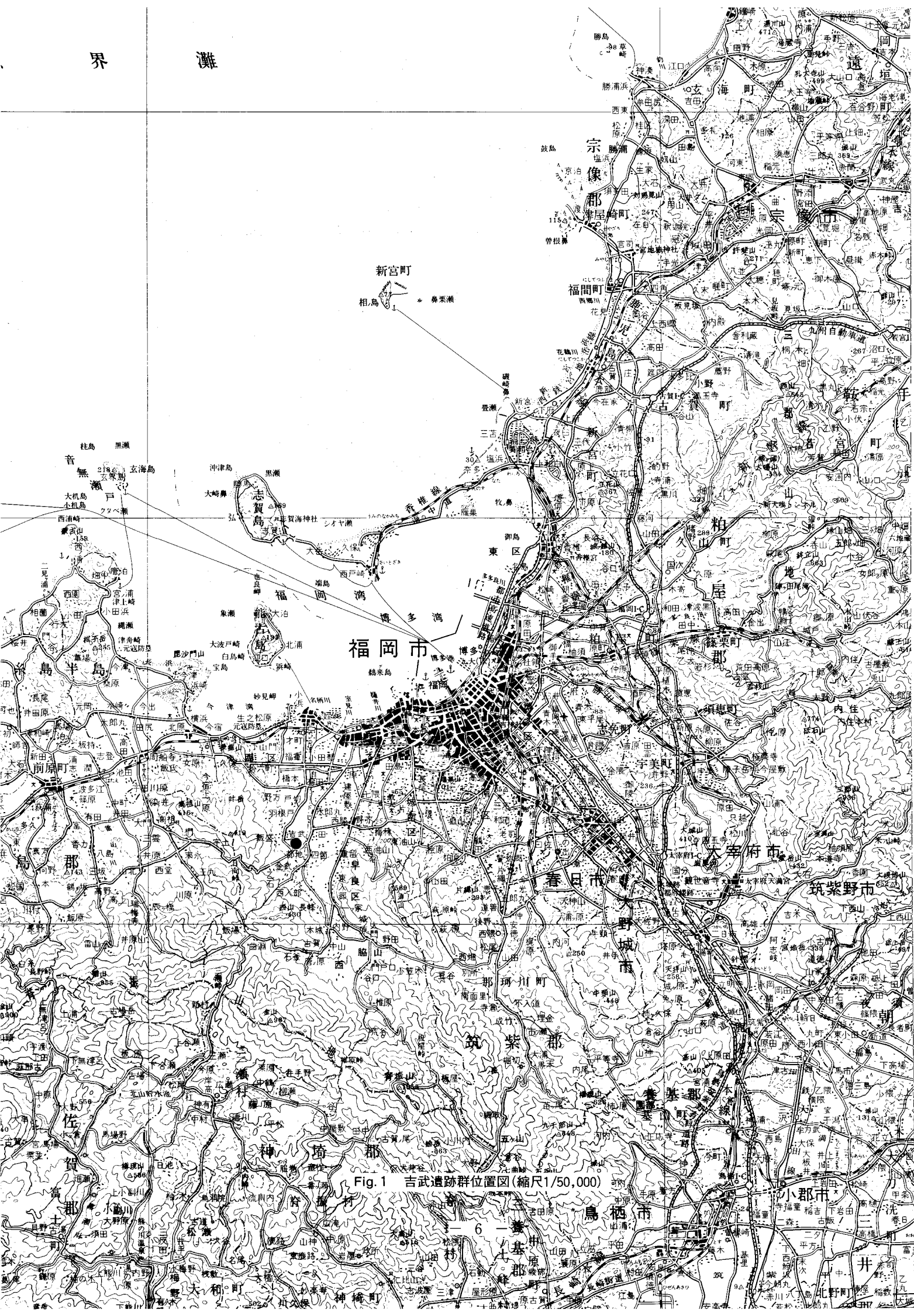


Fig. 1　吉武遺跡群位置図(縮尺1/50,000)

Fig. 2　吉武遺跡群と周辺遺跡（縮尺1/4,000）

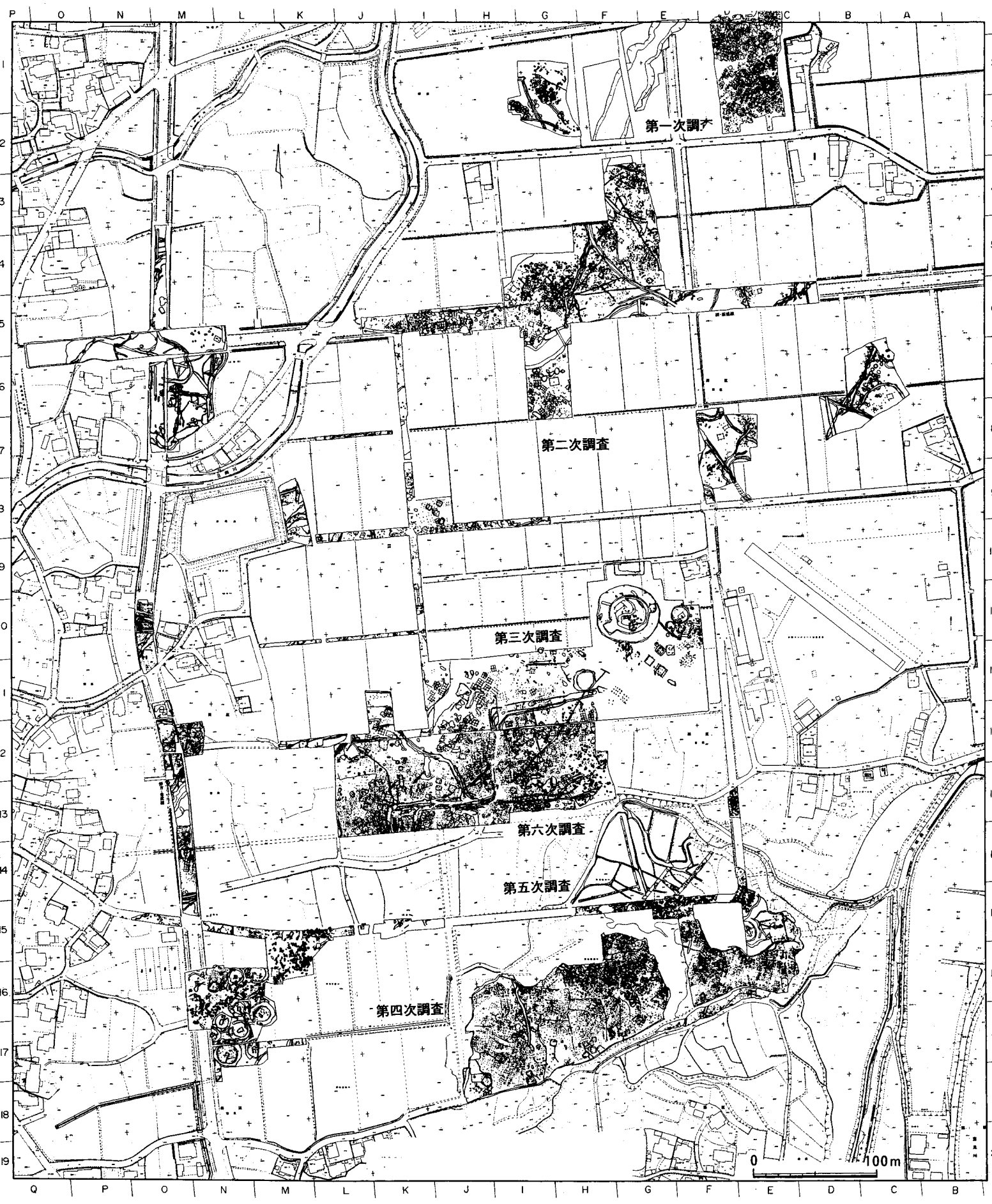


Fig. 3　調査区配置図（第一～第六次調査）（縮尺1/4,000）

第二章　第一次調査－弥生時代の墓地の調査－

第一節　第一次調査の概要

飯盛地区圃場整備に伴う発掘調査

所在地	：	福岡市西区飯盛字本名地区
圃場整備面積	：	61ha
発掘調査対象面積	：	2.5ha
発掘調査面積	：	1.2ha
発掘調査年月日	：	昭和56年11月9日～57年3月10日

昭和56年７月に試掘調査を行い、発掘対象面積を盛土する部分を除いて2.5haとし、この中で著しく削平を受ける1.2haを実際の調査面積とした。ただ耕作土排除後にすぐ検出される甕棺墓は破壊を免れないため調査の対象とした。全体の2.5haの内、区割りによりⅠ区からⅣ区とした。これとは別に磁北を区割りの中心線とし東西・南北に50ｍ単位でグリットを設定し、将来の基準線とした。

Ⅰ区の調査

掘立柱建物１棟と柵列を検出した。東側は段落ちとなり、室見川の氾濫源ともしくは水田の可能性が考えられたが、削平されない所から調査から除外した。

Ⅱ区の調査

今回の対象区の中でⅣ区とともに最も削平される部分が多く、8,000㎡ある。この内完掘の必要な面積は4,000㎡であった。Ⅳ区とともにⅡ区も遺構の遺存状態がよく、上層に古墳時代初期の住居址・祭祀遺構等を検出し、下層からは弥生時代後期・中期の住居址等が検出された。また、弥生時代前期末の甕棺墓が44基と木棺墓１基を検出した。

古墳時代初期の住居址を９軒(方形)、祭祀遺構・土器溜が27基検出でき、弥生時代後期の住居址９軒、その内の１軒(SC-06)から石戈・石剣を出土した。弥生時代中期の円形住居址は16軒検出した。遺構の遺存状態は非常によく壁高が40～50㎝程度残っているものも少なくない。弥生時代中期の甕棺墓は小児棺を２基検出した。弥生時代前期の甕棺墓は44基検出され、その内の１基は倒置棺であった。成人棺のうち２基から棺外副葬品（板付II式壺形土器、内１点は彩文土器）が出土した。

弥生時代中期に属する掘立柱建物は27棟検出され、弥生時代後期に属する掘立柱建物は６棟、古墳時代に属する掘立柱建物が20棟検出された。

Ⅲ区の調査

Ⅲ区全体で表土排除作業を行った面積は、4,000㎡であるが、検出した遺構は甕棺墓14基と台地を切断する幅12～20ｍの河川である。この河川は断面調査の結果、両岸に杭列を検出し、底面付近から弥生時代中期初頭の土器が出土していることから河川を人工的に使用した可能性を持つ。また、人工的に手を加え使用した時期は底面から出土した弥生時代中期の土器を基準と考えてこの前後の可能性がある。ただ最上層から須恵器片が出土しているところから、この河川は急激に埋まったものと考えられ、時期も弥生時代～古墳時代の範疇に納まる。甕棺墓は河川を挟んで弥生時代中期中葉の５基(西側)と東側に弥生時代中期後半の９基が検出された。

Ⅳ区の調査

調査対象面積は、6,000㎡で表土排除作業面積4,500㎡である。検出した遺構は、弥生時代前期末の

甕棺墓・住居址・溝、弥生時代前期・中期初頭～後半にかけての住居址・甕棺墓・井戸・掘立柱建物・中世の溝二条・井戸等を検出した。甕棺墓は149基検出し、その内24基が弥生時代前期末の金海式甕棺墓であり、125基が弥生時代中期の時期に属する。

以上のことから一次調査の問題点は

1．弥生時代前期末の墓域について

一次調査の成果として弥生時代前期末から中期・後期・古墳時代・中世の遺構を検出し、連続した複合遺跡であることが判明した。特にⅡ区に44基、Ⅳ区に24基と二ケ所で弥生時代前期の墓域が検出された。この中でⅣ区の甕棺墓Ｋ－88とＫ－60の２基だけに棺内副葬品（細形銅剣の切先）が出土した点、棺外副葬も４例しか認められないことに第一次調査の弥生時代前期末の甕棺墓の問題点を集約できる。本報告で弥生時代前期末～中期初頭の甕棺墓について明らかにしたい。

2．住居址と甕棺墓について

Ⅱ区の弥生時代中期の住居址群は中央部と東側・南側に位置する。これに対して甕棺墓は北側に東西に長く配列され、あたかも列埋葬を思わせる配置を呈する。

住居址は切合関係がみられるが、これは建替及び増築の要素を持つもので弥生時代中期の範疇に入るもので、その時間的経過も50年前後と考えられる。

Ⅳ区の中心部に甕棺墓が約100基ほど集中して検出された。その下層から弥生時代前期末～中期初頭にかけての方形・円形住居址が検出された。甕棺墓は弥生時代中期中葉～後半の時期に限定されることから、住居址が破棄された直後に多量の土砂により完全に埋没し、その後墓域として甕棺墓が埋葬されたものと思われる。

3．Ⅱ区における遺構の広がり

遺構の遺存状態が非常に良かったⅡ区は上層に古墳時代の住居址・祭祀遺構等を検出し、下層に弥生時代中期・後期の住居址群を検出した。この他に弥生時代前期末の甕棺墓を検出し、Ⅱ区がほかの地域よりも集中的に遺構が多いことかが認められた。遺構の広がりは、西は河川部分まで達し、東はⅠ区の台地段落部分にまで達している。今回遺構上面で終了したⅡ区北側（盛土部分で遺構面まで掘削が達しない範囲）でも数十軒の竪穴式住居址を確認している。

4．Ⅰ区の水田址の可能性について

Ⅰ区の中央部に台地が急激に落ちる部分を検出した。これは北から南にほぼ放物線を描くように台地の端が認められた。これは室見川の氾濫による蛇行時に作られた部分であり、水田址の可能性が高い地点と考えて良い。今回は調査対象外であったため、その実態は不明であるが、Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅳ区の集落を考えるとき水田の利用地としては、最適な場所であったと思われる。

1．Ⅱ区検出の甕棺墓と木棺墓

Ⅱ区は概要に述べたように弥生時代前期から後期の住居址・掘立柱建物、古墳時代の住居址・掘立柱建物が数多く検出されている。調査区の北側半分は削平されない部分であったが、甕棺墓自体は破壊されるため調査対象とした。

（1）甕棺墓

Ⅱ区の墓域として調査区の東側と北側に列をなして検出された内、東列の最も南側に集中して５基検出した。すべて成人棺であり、西側には弥生時代中期のSC－24がある。

また、ＳＣ－02の北東側に位置する木棺墓（ＳＫ－11）とその北北東側に３基（21～23）、北側（21～23の西側）にＫ－06、それより4ｍ北にＫ－07・08・26の３基がある。

Ｋ－01（Fig.6·10 PL.１・２）　Ｋ－01は倒置棺で、Ⅱ区ではこの１基だけである。胴部下位から底部は欠損している。墓壙は東側が二段掘りで、大きさは150㎝×119㎝、深さ75㎝、墓壙の長軸はN-21°-Wを測る。埋土は暗茶褐色土で、若干の砂粒を含み締まりは良くなくサクサクしていた。

Ｋ－02（Fig.6·10 PL.１・２）　Ｋ－02と03は切り合い関係がある。墓壙が接近しており、02が03を切る形状を呈する。02は01の北側、03の北東側に位置する。墓壙は北東側が二段掘りされ、挿入口は北東側から行われている。上甕は口縁部を打ち欠いた壺形土器で、潰れた状態で検出され上甕と下甕の合せ方は呑口の方法であった。墓壙の大きさは140㎝×114㎝、深さ62㎝、墓壙の長軸はN-50°-E、下甕底部傾斜角度は48°30′を測る。埋土は茶褐色土と黄褐色粘土を含む白色砂で、あまり締まりの良くない状態でサクサクしていた。下甕の下は粘質の強い粘土を薄く敷いている。

Ｋ－03（Fig.6·10 PL.１～３）　Ｋ－03は02に墓壙が一部切られ、03は01の北西側、02の南西側に位置する。墓壙は北東側が二段掘りされ、挿入口は北東側から行われている。上甕は甕形土器で、胴部下が欠損している。上甕と下甕の合せ方は合口の方法である。墓壙の形状は二段掘りされており、緩やかな傾斜で下甕の掘方部に達する。下甕の上部は、甕棺スレスレの掘方を行っている。下甕胴部に水ぬきの穿孔が施され、その部分は墓壙に接している。墓壙は160㎝×106㎝、深さ65㎝、墓壙の長軸はN-57°-E、下甕底部傾斜角度は61°を測る。埋土は暗茶褐色土と白色砂で、パサパサしていた。口縁部の周りに粘土帯がみられ、つなぎ部分を密閉した状況で検出された。

Ｋ－04（Fig.6·10 PL.１・２）　Ｋ－04は01から03より北西に約３ｍ離れ、北側から挿入している。土壙は北側が三段掘りされ、一段ごとに緩やかな斜面を持つ。上甕は二段目の傾斜面から設置され、下甕の掘方はぎりぎりの掘方である。上下甕は口縁部が打ち欠きの甕形土器であるが、別の口縁部が墓壙内に副葬されている。上甕と下甕の合せ方は覆蓋の方法である。墓壙の一段目に石の上に磨製石鏃が出土している。又、三段目に甕形土器の口縁部と共にほぼ完形の板付Ⅱ式の彩紋壺形土器を副葬している。下甕の上部は、甕棺スレスレの掘方を行い、下甕胴部に水ぬきの穿孔が施され、その部分は粘質の強い暗褐色粘質土で固めた部分に接している。墓壙は193㎝×150㎝、深さ74㎝、墓壙の長軸はN-48°-E、下甕底部傾斜角度は31°を測る。埋土は暗茶褐色土で、粘質が強い。下甕の下は粘土を敷き、口縁部の周りには粘土帯がみられ、つなぎ部分を密閉した状況で検出された。

Ｋ－05（Fig.6·10 PL.１・２）　Ｋ－05は04の北側に近接する。遺存状態は悪く、下甕の底部しか遺存しない。墓壙は35㎝×35㎝、深さ10㎝、墓壙の長軸はN-23°-E、下甕底部傾斜角度13°を測る。

Ｋ－06（Fig.7·10 PL.３）　Ｋ－06は上部が削平されているため明かではないが、上棺の破片が見あたらないため単棺の可能性がある。底部及び胴部下は非常に厚くどっしりとした感じがある。掘方は甕棺の大きさの割には小じんまりしている。墓壙の大きさは95㎝×75㎝で、深さ40㎝、墓壙の長軸はN-24°30′-E、下甕底部傾斜角度は45°を測る。埋土は暗茶褐色土である。

Fig. 4　第一次調査遺構全体図

Fig.4　第一次調査遺構全体図

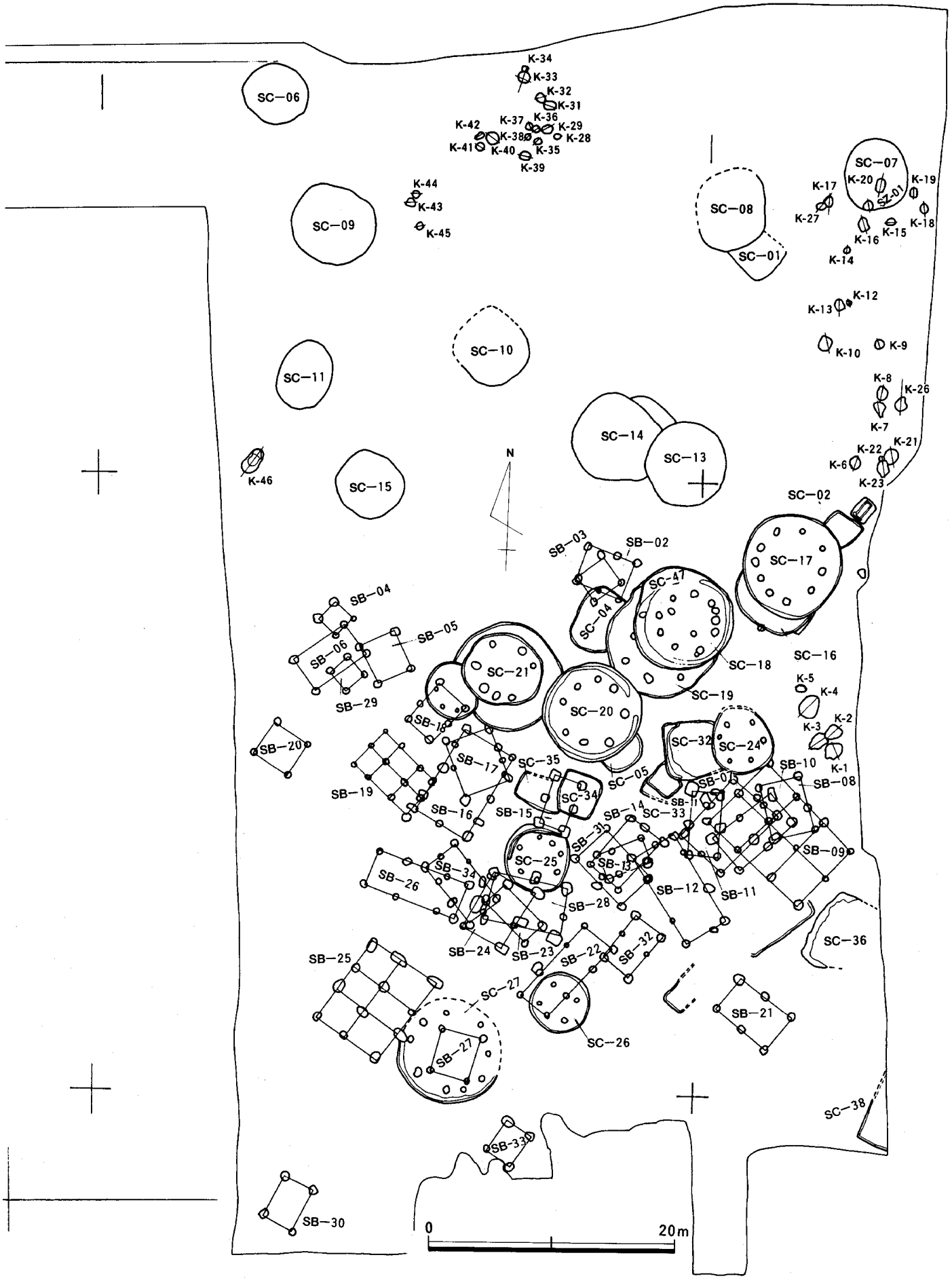


Fig. 5　第一次調査弥生時代遺構配置図（Ⅱ区）

Tab.2 吉武遺跡第一・第二次調査検出甕棺墓・木棺墓一覧(2・4・9・区)

通番号	甕棺墓番号	次数・区	時期	合せ口の方法	特記事項	使用棺の組み合わせ	方位	傾斜角度	墓壙の規模(単位:cm)
1	K-01	1次2区	弥生時代前期末	成人　単口	倒置棺	甕	N-21°-W	-	150×119×75
2	K-02	1次2区	弥生時代前期末	成人　呑口	上棺口縁打ち欠き	甕＋壺	N-50°-E	48°30′	140×114×62
3	K-03	1次2区	弥生時代前期末	成人　合口		甕＋甕	N-57°-E	61°	160×106×65
4	K-04	1次2区	弥生時代前期末	成人　覆蓋	板付Ⅱb小壺(彩文)、磨製石鏃副葬　上下口縁打ち欠き	甕＋甕	N-48°-E	31°	193×150×74
5	K-05	1次2区	弥生時代前期末	成人	底部のみ	甕	N-23°-E	13°	35×35×10
6	K-06	1次2区	弥生時代前期末	成人　単口		甕	N-24°30′-E	45°	95×75×40
7	K-07	1次2区	弥生時代前期末	成人　覆蓋	上下口縁打ち欠き	甕＋甕	N-3°-W	44°	128×86×41
8	K-08	1次2区	弥生時代前期末	小児	形状から合せ口の可能性が考えられる	甕	N-21°30′-E	54°	104×70×30
9	K-09	1次2区	弥生時代前期末	小児　覆蓋	上半分口縁打ち欠き	甕＋甕	N-14°-W	47°	74×68×22
10	K-10	1次2区	弥生時代前期末	成人　単口	胴部上半部欠除	甕	N-10°30′-W	43°	108×90×47
11	K-11	1次2区	弥生時代前期末	小児　合口？	底部のみ	甕	N-28°-E	35°	38×30×13
12	K-12	1次2区	弥生時代前期末	小児　単棺？	胴部上半部欠除	甕	N-10°-W	43°	43×33×12
13	K-13	1次2区	弥生時代前期末	成人　単口		甕	N-2°30′-E	19°	96×72×47
14	K-14	1次2区	弥生時代前期末	小児　単棺？	底部のみ	甕	N-4°30′-E	50°	51×47×10
15	K-15	1次2区	弥生時代前期末	小児　覆蓋	下棺　口縁打ち欠き	甕＋壺	N-86°30′-W	48°	74×55×22
16	K-16	1次2区	弥生時代前期末	成人　呑口	上棺　口縁打ち欠き	甕＋甕	N-16°30′-W	36°	109×70×50
17	K-17	1次2区	弥生時代前期末	成人　単口？		甕	N-8°30′-E	38°	77×66×38
18	K-18	1次2区	弥生時代前期末	成人　単口	胴部上半部欠除	甕	N-9°-W	68°	82×64×26
19	K-19	1次2区	弥生時代前期末	小児　覆口	上・下棺　口縁打ち欠き　底部欠除	甕＋甕	N-2°30′-E	-	74×60×8
20	K-20	1次2区	弥生時代前期末	成人　覆口	上・下棺　口縁打ち欠き	甕＋甕	N-15°30′-E	55°	108×68×58
21	K-21	1次2区	弥生時代前期末	成人　呑口	上・下棺　口縁打ち欠き	甕＋甕	N-11°30′-W	44°	113×104×40
22	K-22	1次2区	弥生時代前期末	小児　単口	胴部上半部欠除	甕	N-5°30′-W	34°	47×40×16
23	K-23	1次2区	弥生時代前期末	成人　呑口	上棺　口縁打ち欠き	甕＋甕	N-14°-W	56°	125×89×23
24	K-26	1次2区	弥生時代前期末	成人　合口	上棺　胴部下位欠損	甕＋鉢	N-9°30′-E	37°	89×90×57
25	K-27	1次2区	弥生時代前期末	小児　単口	壺棺	壺	N-40°-E	47°	64×49×28
26	K-28	1次2区	弥生時代前期末	小児　覆蓋	上棺　口縁打ち欠き　下棺　壺	壺＋甕	N-43°-E	52°	58×39×23
27	K-29	1次2区	弥生時代前期末	成人　単口？	胴部上半部欠除	甕	N-57°-E	49°30′	84×66×24
28	K-30	1次2区	弥生時代前期末	成人　単口	胴部上半部欠除	甕	N-88°-E	44°	60×54×20
29	K-31	1次2区	弥生時代前期末	成人　単口	口縁部欠損	甕	N-67°30′-W	58°	90×67×30
30	K-32	1次2区	弥生時代前期末	成人　単口	胴部上半部欠除	甕	N-78°-E	34°	75×80×25
31	K-33	1次2区	弥生時代前期末	成人　単口	胴部上半部欠除	甕	N-18°-E	44°	70×96×34
32	K-34	1次2区	弥生時代前期末	成人　単口？	底部のみ	甕	N-42°-E	30°	47×50×8
33	K-35	1次2区	弥生時代前期末	小児　単口？	胴部のみ	甕	N-48°30′-E	-	36×53×15
34	K-36	1次2区	弥生時代前期末	小児　覆蓋	下棺　口縁打ち欠き	壺＋鉢	N-55°30′-E	39°	59×59×18
35	K-37	1次2区	弥生時代前期末	小児　覆蓋	上・下棺　口縁打ち欠き	壺＋鉢	N-20°-W	33°	59×58×15
36	K-38	1次2区	弥生時代前期末	小児　単口	胴部上半部欠除	甕	N-41°-E	31°	44×45×16
37	K-39	1次2区	弥生時代前期末	成人　覆口	上・下棺　口縁打ち欠き	鉢＋甕	N-76°-W	42°	80×63×52
38	K-40	1次2区	弥生時代前期末	成人　覆口	上・下棺　口縁打ち欠き	甕＋甕	N-47°30′-W	43°30′	111×89×42
39	K-41	1次2区	弥生時代前期末	小児　単口	胴部上半部欠除	甕	N-56°30′-W	34°30′	61×60×18
40	K-42	1次2区	弥生時代前期末	成人　単口	胴部のみ	甕	N-55°-E	-	73×47×8
41	K-43	1次2区	弥生時代前期末	小児　覆蓋	下棺　口縁打ち欠き	甕＋鉢	N-87°-E	54°	72×56×22
42	K-44	1次2区	弥生時代前期末	小児　覆蓋	上棺　鉢形土器　下棺　板付Ⅱ壺	壺＋鉢	N-88°30′-W	22°	53×50×29
43	K-45	1次2区	弥生時代前期末	小児　単口	ほぼ直立　口縁部破壊	甕	N-77°-E	0°	54×54×26
44	K-46	1次2区	弥生時代前期末	成人　覆口	板付Ⅱ小壺副葬　下棺口縁打ち欠き	甕＋甕	N-37°-E	55°	209×119×60
45	K-60	1次4区	弥生時代前期末	成人　合口	板付Ⅱb　小壺副葬・合口の可能性もあり	甕	N-27°-E	28°	76×85×43
46	K-62	1次4区	弥生時代前期末	成人　単口	倒置棺の可能性が強い　口縁部のみ	甕	N-84°-W	-	108×95×15
47	K-63	1次4区	弥生時代前期末	小児～成人　単口	口縁打ち欠き	甕	N-25°-E	57°	95×86×26
48	K-64	1次4区	弥生時代前期末	小児～成人　単口	胴部上半部欠除	甕	N-4°-W	48°	107×90×20
49	K-65	1次4区	弥生時代前期末	成人　合口		甕＋甕	N-16°-E	67°	250×184×94
50	K-66	1次4区	弥生時代前期末	成人　単口	倒置棺の可能性が強い　口縁部のみ	甕	N-46°-E	-	108×86×12
51	K-68	1次4区	弥生時代前期末	小児　単口？		甕	N-7°30′-W	35°	68×65×20
52	K-69	1次4区	弥生時代前期末	成人　呑口	上棺　口縁打ち欠き	壺＋甕	N-70°-W	55°	156×113×50
53	K-74	1次4区	弥生時代前期末	成人　合口	上棺　鉢形土器　底部欠	鉢＋甕	N-87°-E	58°	160×108×76
54	K-76	1次4区	弥生時代前期末	成人　単口		甕	N-3°-E	51°	148×113×62
55	K-79	1次4区	弥生時代前期末	成人　合口	上棺　鉢形土器	鉢＋甕	N-27°-E	57°	115×104×83
56	K-80	1次4区	弥生時代前期末	成人　合口	墓壙内に口縁部あり　上甕か？	甕＋甕	N-12°30′-W	31°	95×86×52
57	K-81	1次4区	弥生時代前期末	成人　単口		甕	N-29°-E	61°	111×84×67
58	K-82	1次4区	弥生時代前期末	成人　合口？	上棺　口縁部のみ	甕	N-5°-W	-	95×73×50
59	K-83	1次4区	弥生時代前期末	成人　単口	若干の傾斜があるが倒置棺の可能性　石組あり	甕	N-28°30′-E	-	161×129×76
60	K-84	1次4区	弥生時代前期末	成人　単口		甕	N-29°-E	34°	105×82×37
61	K-85	1次4区	弥生時代前期末	成人　合口	底部欠損	甕＋甕	N-18°-E	41°	130×98×55
62	K-86	1次4区	弥生時代前期末	成人？　単口	倒置棺の可能性あり　口縁部のみ	甕	N-4°-E	-	60＋α×90×10
63	K-87	1次4区	弥生時代前期末	成人　単口	上半部欠損	甕	N-6°-E	28°	92×73×40
64	K-88	1次4区	弥生時代前期末	成人　呑口	細形銅剣刃先　上棺口縁部打ち欠け	壺＋甕	N-10°-E	51°	117×90×70
65	K-89	1次4区	弥生時代前期末	成人　合口	上棺　鉢形土器	鉢＋甕	N-6°-E	50°	134×92×69
66	K-93	1次4区	弥生時代前期末	小児　単口？		甕	N-76°-W	30°	65×54×16
67	K-221	1次4区	弥生時代前期末	成人　合口	図面なし遺物だけ取り上げ　工事の際発見			-	-
68	K-222	1次4区	弥生時代前期末	成人　合口	図面なし遺物だけ取り上げ　工事の際発見			-	-
69	SK-11	1次2区	弥生時代前期末	木棺墓			N-46°-E	-	186×141×47
70	SK-12	1次2区	弥生時代前期末	土壙墓	副葬品小型壺形土器(810224040)出土		N-9°30′-W	-	186×52×31
71	SK-01	1次4区	弥生時代前期末	土壙			N-31°-E	-	108×112×72
72	SK-02	1次4区	弥生時代前期末	木棺墓			N-50°-E	-	277×162×56
73	SK-03	1次4区	弥生時代前期末	土壙			N-55°-W		183×108×67
74	K-901	2次9区	弥生時代前期末	成人　単口		甕	N-72°30′-W	40°	68×62×26

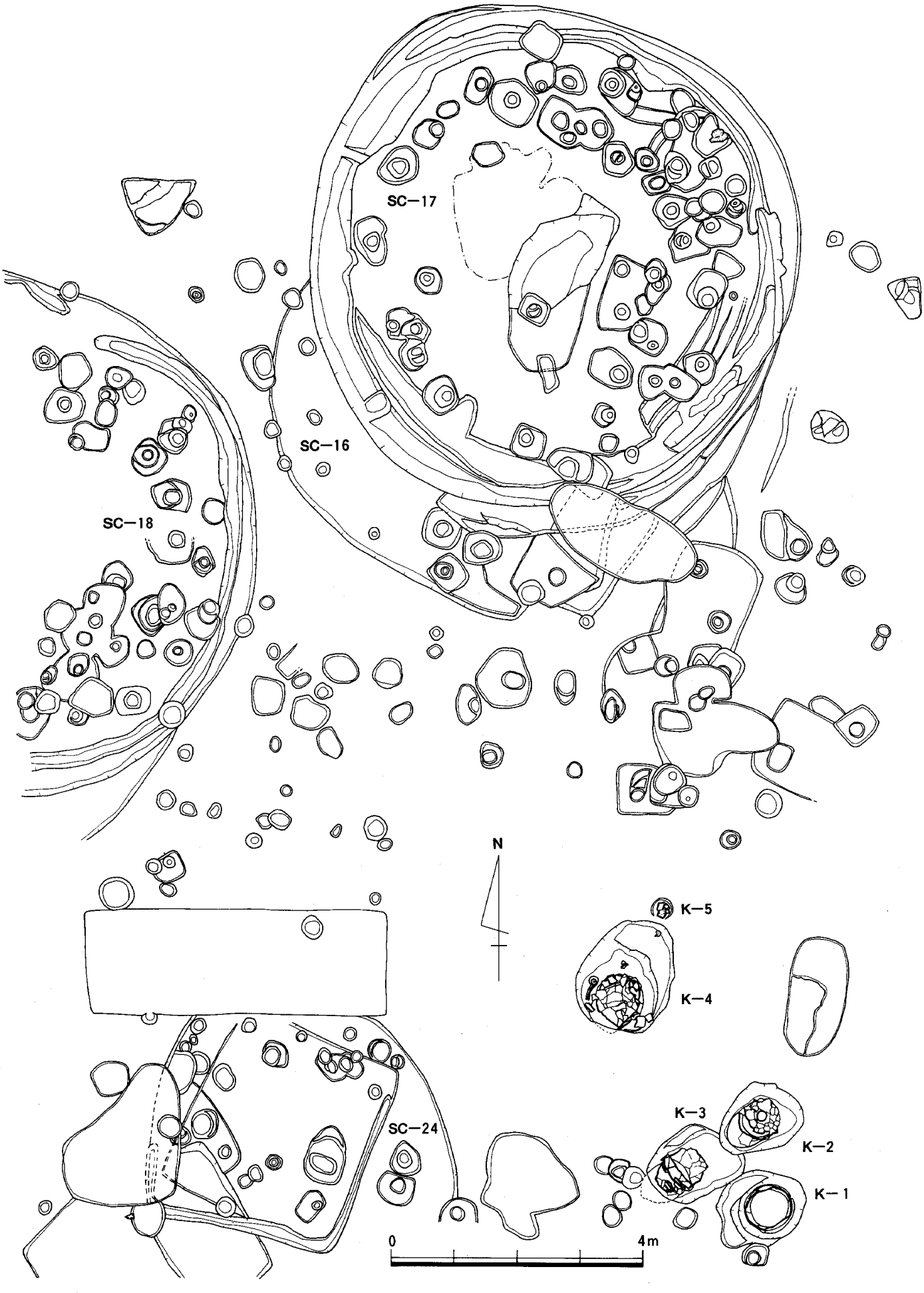


Fig. 6　第一次調査II区甕棺墓・木棺墓配置図－1（縮尺1/80）

K－07(Fig. 7・10 PL. 1・3・5・6)　K－07も上部が削平されているが、覆口式の成人棺である。上下とも口縁部は打ち欠いている。掘方は甕棺の大きさの割には小じんまりしている。墓壙は128cm×86cm、深さ41cm、墓壙の長軸はN-3°-W、下甕底部傾斜角度44°を測る。埋土は暗茶褐色土である。

K－08(Fig.7・10 PL. 1・3・5・6)　K－08は上甕及び下甕の胴部上位が後生の遺構によって破壊されている。甕棺底部しか遺存していないが、恐らく合口式の小児棺であろう。墓壙は104cm×70cm、深さ30cm、墓壙の長軸はN-21°30′-E、下甕底部傾斜角度は54°。埋土は暗茶褐色土である。

K－09(Fig. 7・8・10 PL. 1・4)　K－09の遺存状態は約半分が削平されている。甕棺自体、ほぼ水平に設置されているため、上甕が若干低い。上下甕棺とも口縁部打ち欠きの覆口式小児甕棺墓である。掘方は甕棺の大きさの割に深く掘り込まれ、甕棺を設置するため埋土（暗黄茶褐色土と茶褐色土のブロックを含む）し、設置している。墓壙の大きさは74cm×68cm、深さ22cm、土壙の長軸はN-14°-W、下甕底部傾斜角度は47°を測る。埋土は暗黄色褐色土で、粘質が強い。

K－10(Fig. 7・8・11 PL. 1)　K－10は約1/2が削平されているため明かではないが、上甕部が出土していないことから単棺の成人棺である。墓壙は住居址、ピットを切り構築されている。掘方は甕棺の大きさの割には大きい。墓壙の大きさは108cm×90cm、深さ47cm、墓壙の長軸はN-10°30′-W、下甕底部傾斜角度は43°を測る。埋土は灰褐色土で若干粘質のある暗茶褐色土を含む。

K－11(Fig. 8・11 PL. 1・3)　K－11は約4／5が削平されているため明かではないが、合わせ口の小児棺である。墓壙は底部付近が若干さがる浅いレンズ状を呈する。掘方は甕棺の大きさの割には小じんまりしている。墓壙の大きさは38cm×30cm、深さ13cm、墓壙の長軸はN-28°-E、下甕底部傾斜角度は35°を測る。埋土は茶褐色土で若干粘質のある暗茶褐色土を含む。

K－12(Fig. 8・11 PL. 1・3)　K－12は上部が削平されているため明かではないが、上棺の破片が見あたらないため単棺の可能性がある。底部及び胴部下は非常に厚くどっしりとした感じがある。掘方は甕棺の大きさの割には小じんまりしている。墓壙の大きさは43cm×33cm、深さ12cm、墓壙の長軸はN-10°-W、下甕底部傾斜角度は43°を測る。埋土は砂礫質の地山に、暗茶褐色土で粘質が強い土を詰め込んでいる。

K－13(Fig. 8・11 PL. 1・3)　K－13は上部が削平されているため明かではないが、上棺の破片が見あたらないのと埋置角度がかなり高いため成人の単棺の可能性がある。大型の甕形土器を使用している。底部及び胴部下は非常に厚くどっしりとした感じがある。掘方は南方が広く、北方が狭い。墓壙の大きさは96cm×72cm、深さ47cm、土壙の長軸はN-2°30′-E、下甕底部傾斜角度は19°を測る。埋土は砂礫質の地山に、暗茶褐色土で粘質が強い土を詰め込んでいる。

K－14(Fig. 8・11 PL. 1)　K－14は上部が削平されているため明かではないが、上棺の破片が見あたらないため単棺の可能性がある。底部及び胴部下は非常に厚くどっしりとした感じがある。掘方は甕棺の大きさの割には小じんまりしている。墓壙の大きさは51cm×47cm、深さ10cm、墓壙の長軸はN-4°30′-E、下甕底部傾斜角度は50°を測る。埋土は茶褐色土で、粘質が強い。

K－15(Fig. 8・11 PL. 1)　K－15は上部が約2/3程度削平されている。上甕が僅かに遺存していることから覆口式の小児棺であることが判明した。上棺は中型の甕形土器、下棺も同じく甕形土器である。墓壙は中央部が僅かに低いレンズ状を呈し、上棺にそって緩やかに立ち上がる。墓壙の大きさは74cm×55cm、深さ22cm、墓壙の長軸はN-86°30′-W、下甕底部傾斜角度は48°を測る。埋土は暗茶褐色土で、粘質が強い。

K－16(Fig. 8・11 PL. 1)　K－16は上棺、甕形土器、下棺、甕形土器の組み合わせの成人棺である。上棺部分が削平されているが上棺の一部が遺存している。これから呑口式の成人棺と判明した。上棺

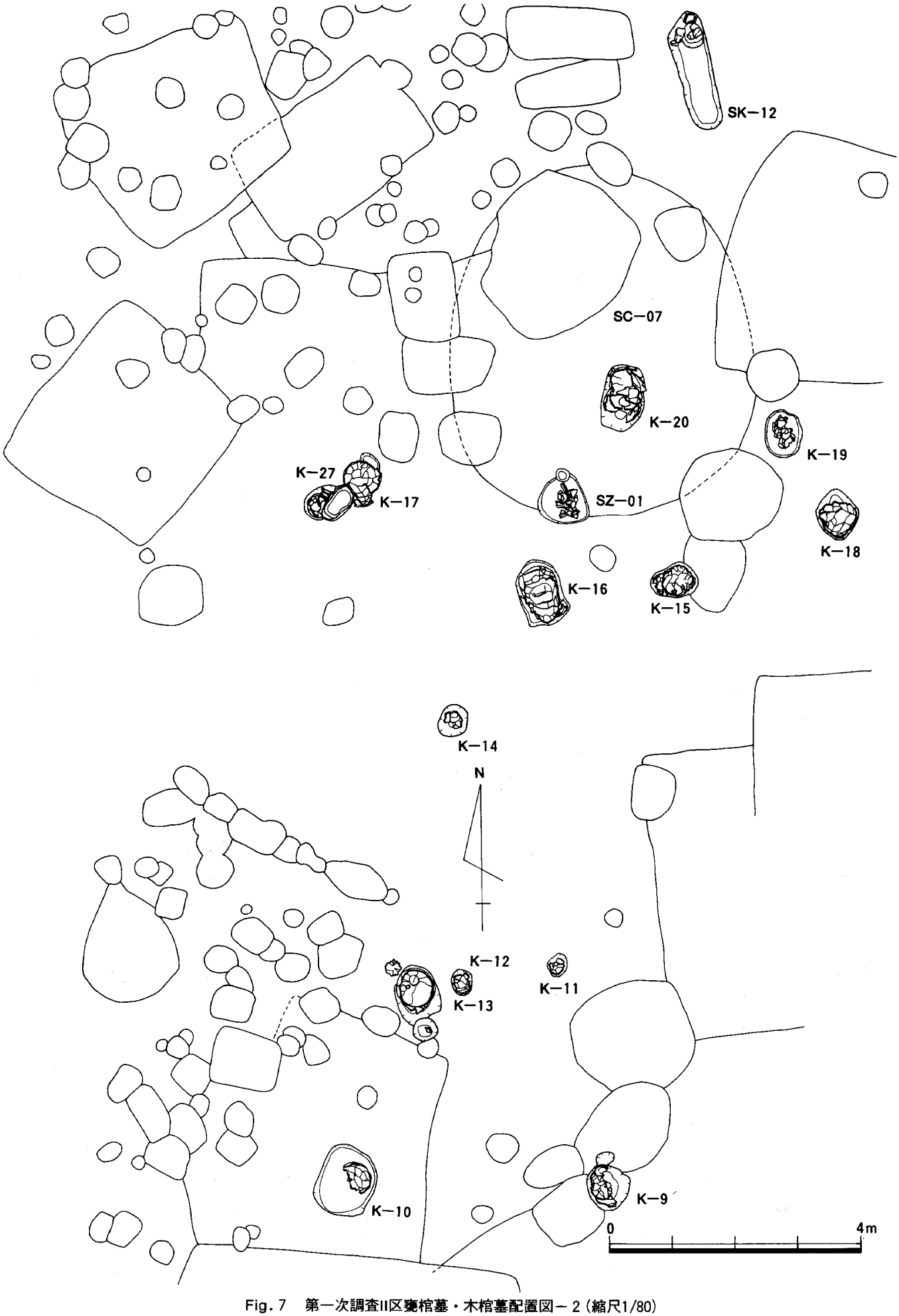


Fig. 7　第一次調査II区甕棺墓・木棺墓配置図－2（縮尺1/80）

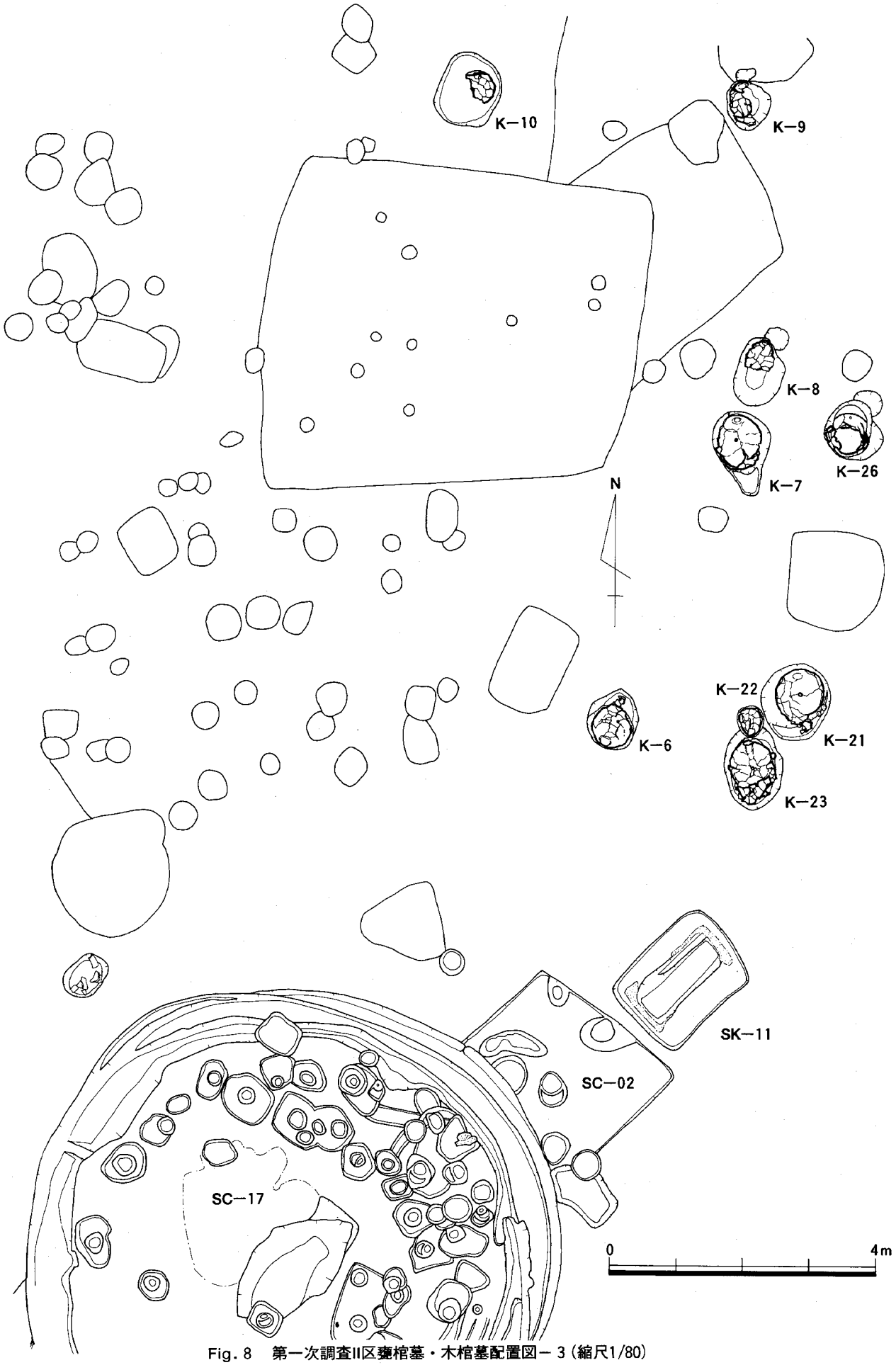


Fig. 8　第一次調査II区甕棺墓・木棺墓配置図－3（縮尺1/80）

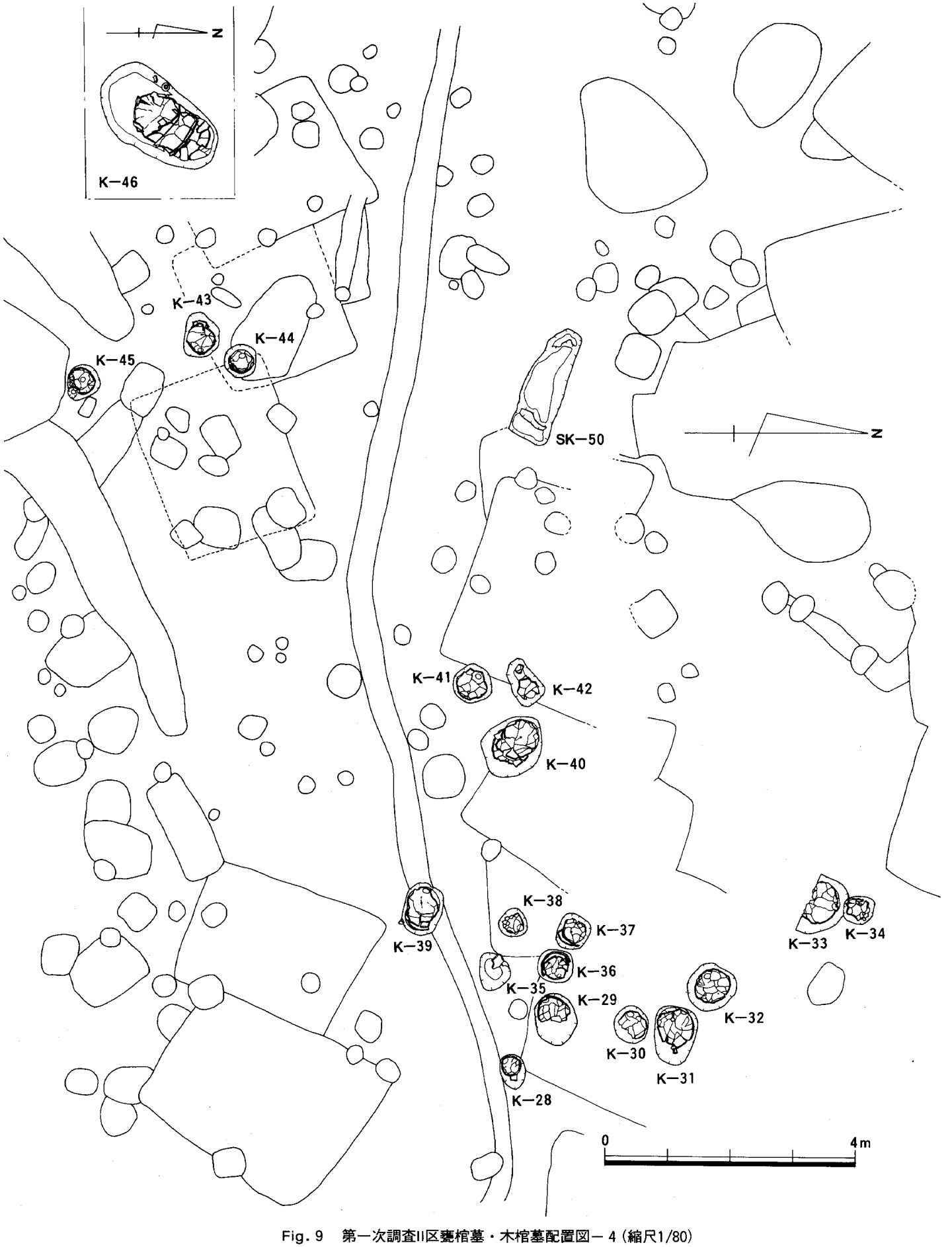


Fig. 9　第一次調査II区甕棺墓・木棺墓配置図－4（縮尺1/80）

の甕土器は口縁部が打ち欠かれており、下棺は土圧によってかなり歪んでいる。掘方は二段掘りされ台形状に形成されている。墓壙の大きさは109㎝×70㎝、深さ50㎝、墓壙の長軸はN-16°30′-W、下甕底部傾斜角度は36°を測る。埋土は茶褐色土で、粘質が強い。

K－17(Fig. 8・11 PL. 1)　K－17は上棺の破片が見あたらないため単棺の可能性がある。北側・南側は後世のピットによって切断されている。掘方は上部では検出できなかった。墓壙はこの群に特徴的に見られる方法（小さく掘り、その中に甕棺を貼り付けるように埋納する）で、甕棺の大きさの割には小じんまりしている。墓壙は77㎝×66㎝、深さ38㎝、墓壙の長軸N-8°30′-E、下甕底部傾斜角度38°を測る。埋土は暗褐色土である。

K－18(Fig. 8・11 PL. 1)　K－18は上部が削平されているため明かではないが、上棺の破片が見あたらないため単棺の可能性がある。底部及び胴部下は非常に厚くどっしりとした感じがある。掘方は甕棺の大きさの割には小じんまりしている。墓壙は82㎝×64㎝、深さ26㎝、墓壙の長軸N-9°-W、下甕底部傾斜角度68°を測る。埋土は暗褐色土で、若干の小礫を含む。

K－19(Fig. 8・11 PL. 1)　K－19は上部が4／5程削平されている。遺存状態は非常に悪く、かろうじて小児棺の覆口式であることが認められる。上下棺とも口縁を打ち欠いており、底部は欠損している。下甕の下に3個の小石を敷いている。上甕に偏平な石を敷く。掘方は楕円形を呈し、甕棺の大きさの割には小じんまりしている。墓壙は74㎝×60㎝、深さ8㎝、墓壙の長軸N-2°30′-E、下甕底部傾斜角度は不明。埋土は暗黄褐色土で、粘質が強い土を詰め込んでいる。

K－20(Fig. 8・11 PL. 3)　K－20は上下口縁部を打ち欠き覆口式の成人棺である。下甕は東・北側が土壙上面より内側に入り、甕棺ぎりぎりに掘込まれている。掘方は二段掘りされており、上段の掘方は浅く、下段は上棺部より緩やかに傾斜している。墓壙は甕棺の大きさの割には小じんまりしている。墓壙は108㎝×68㎝、深さ58㎝、墓壙の長軸N-15°30′-E、下甕底部傾斜角度55°を測る。埋土は暗褐色土で、一部暗茶褐色粘質土を詰め込んでいる。

K－21(Fig. 7・11 PL. 1・3)　K－21は上部が削平され約半分しかないが、上棺部が僅かに遺存しており、呑口式であることが判明した。上下とも口縁部を打ち欠いている。掘方は上下甕棺接合部で1段フラットな面を有し、下甕部へ傾斜する。埋土は暗褐色土で、接合部及び東側に裏込石がある。墓壙は113㎝×104㎝、深さ40㎝、墓壙の長軸はN-11°30′-W、下甕底部傾斜角度44°を測る。

K－22(Fig. 7・11 PL. 1・3)　K－22は上部が削平され明かではないが上棺の破片がないため小児の単棺の可能性がある。K－22はK－23を切って埋納している。墓壙は楕円形の掘方で浅いレンズ状に掘込む。埋土は暗褐色土である。底部は非常に厚い。墓壙は47㎝×40㎝、深さ16㎝、墓壙の長軸N-5°30′-W、下甕底部傾斜角度34°を測る。

K－23(Fig. 7・11 PL. 1・3)　K－23は上部が削平されているが、呑口式の成人棺である。上下甕とも口縁は打ち欠きで、下甕口縁下に裏込石が配置されている。墓壙は上方が緩く傾斜し、下甕下半が窪む。地山は砂礫混じりの暗黄褐色粘質土で、埋土は暗褐色粘質土である。墓壙の大きさは125㎝×89㎝、深さ23㎝、墓壙の長軸はN-14°-W、下甕底部傾斜角度は56°を測る。

K－26(Fig. 7・12 PL. 1・3・4)　K－26は上部の一部が削平されている程度で、遺存状態は良い。合口式の成人棺である。上甕の底部は欠損するが、下甕の遺存は良い。掘方は南側で二段形成され、墓壙は89㎝×90㎝、深さ57㎝、墓壙の長軸はN-9°30′-E、下甕底部傾斜角度は37°を測る。埋土は砂礫質の地山に、暗茶褐色土で粘質が強い土を詰め込んでいる。

K－27(Fig. 8・12 PL. 1)　K－27は後世の土壙によって約1/3切られている。上棺の破片が見あたらないため単棺の可能性がある壺棺である。これもK－17と同様に上面では墓壙を検出出来なかっ

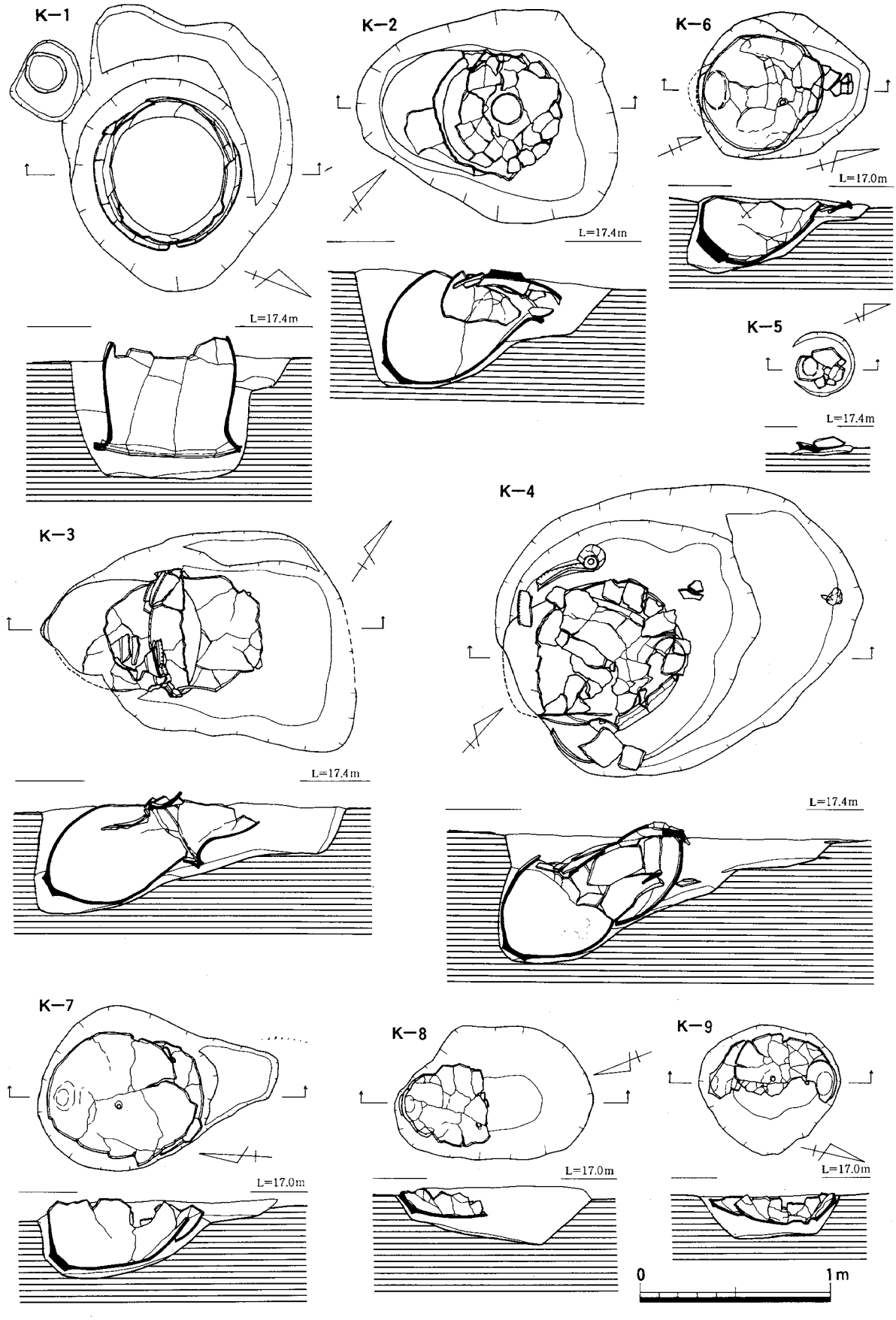


Fig.10　第一次調査II区甕棺墓実測図－1（縮尺1/30）

た。掘方は甕棺の大きさのとほぼ同じである。墓壙は64cm×49cm、深さ28cm、墓壙の長軸N-40°-E、下甕底部傾斜角度47°を測る。埋土は暗褐色土である。

K－28(Fig. 9・12 PL. 2・5)　K－28は約2/3が削平されている。上下口縁部が打ち欠きの覆口式小児棺である。下棺は壺形土器で、底部及び胴部下は非常に厚くどっしりとした感じがある。掘方は甕棺ギリギリであるが、底面には粘質が強い土を詰め込んでいる。墓壙は58cm×39cm、深さ23cm、墓壙の長軸N-43°-E、下甕底部傾斜角度52°を測る。埋土は暗褐色土である。

K－29(Fig. 9・12 PL. 2～5)　K－29は他の遺構によって下甕胴部より上を抜き取られている。上部は削平されているが、単棺の可能性がある。掘方は小じんまりしている。墓壙は84cm×66cm、深さ24cm、墓壙の長軸N-57°-E、下甕底部傾斜角度49°30′を測る。埋土は暗茶褐色土である。

K－30(Fig. 9・12 PL. 2～4)　K－30は遺存状態が非常に悪く南東側は後世の遺構によって切られている。。約4/5を削平されているため明かではないが、成人の単棺の可能性もある。底部及び胴部下は非常に厚くどっしりとした感じがある。掘方は甕棺の大きさの割には大きい。墓壙は60cm×54cm、深さ20cm、土壙の長軸N-88°-E、下甕底部傾斜角度44°を測る。埋土は暗茶褐色土である。

K－31(Fig. 9・12 PL. 2～5)　K－31は上部が削平されているため明かではないが、上棺の破片が見あたらないため成人棺の単口式の可能性がある。底部及び胴部下は非常に厚いが、土圧によって屈曲している。掘方は甕棺ギリギリの大きさに掘られ、北側に裏込めの小石を配置している。墓壙は90cm×67cm、深さ30cm、墓壙の長軸N-67°30′-W、下甕底部傾斜角度58°を測る。埋土は砂礫質の地山に暗茶褐色土で、粘質が強い土を詰め込んでいる。

K－32(Fig. 9・12 PL. 3・4)　K－32も31と同様に上部が削平されている。上棺の破片が見あたらないため成人棺の単口式の可能性がある。墓壙は住居址を切り、造られているが、住居址は調査を行っていないため、その時期は不明である。甕棺墓から切られていることから弥生時代前期末以前であることは明かである。墓壙は80cm×75cm、深さ25cm、墓壙の長軸N-78°-E、下甕底部傾斜角度34°を測る。埋土は淡褐色土で、暗黄褐色粘質土のブロックを含む。

K－33(Fig. 9・12 PL. 2・3)　K－33は胴部中位から上を後世の溝状遺構によって削平されているため明かではないが、成人棺の単口式の可能性がある。墓壙は甕棺の大きさより一回り大きく造られ、底面には暗黄褐色粘質土のブロックを含む褐色土を敷く。墓壙は96cm×70cm、深さ34cm、墓壙の長軸N-18°-E、下甕底部傾斜角度44°を測る。埋土は暗茶褐色土である。

K－34(Fig. 9・12 PL. 2・3)　K－34は上部が殆ど削平され、約1/10程度しか遺存しない。K－33との切り合い関係があり、33の墓壙を僅かに切るように設置されていた。甕棺墓の形状から成人棺の単棺の可能性があるが、遺存状態が悪いため不明。底部及び胴部下は非常に厚い。胴部中央部に穿孔が認められる。墓壙は47cm×50cm、深さ8cm、墓壙の長軸N-42°-E、下甕底部傾斜角度30°を測る。埋土は灰黄色褐色土で、茶褐色粘質土のブロックを含む。

K－35(Fig. 9・12 PL. 2・4・5)　K－35は上部が削平され約1/5も遺存していない状態で検出した。口縁部は打ち欠かれ、僅かに胴部の一部が立ったまま出土しているが、その胴部の破片も僅かで甕棺墓か否かは不明である。甕棺墓とすれば小児棺と考えられ、倒置棺の可能性がある。墓壙は36cm×53cm、深さ15cm、墓壙の長軸N-48°30′-E、を測る。埋土は暗茶褐色土である。

K－36(Fig. 9・12 PL. 2・4・5)　K－36は上部が約1/3程度削平されている。上甕は口縁下に刻目のある二条の三角凸帯を巡らせる鉢形土器である。下棺は口縁部を打ち欠いた甕形土器を使用している覆口式の小児甕棺である。掘方は甕棺の大きさギリギリに掘られ、墓壙は59cm×59cm、深さ18cm、墓壙の長軸N-55°30′-E、下甕底部傾斜角度39°を測る。埋土は暗茶褐色土で、粘質が強い。

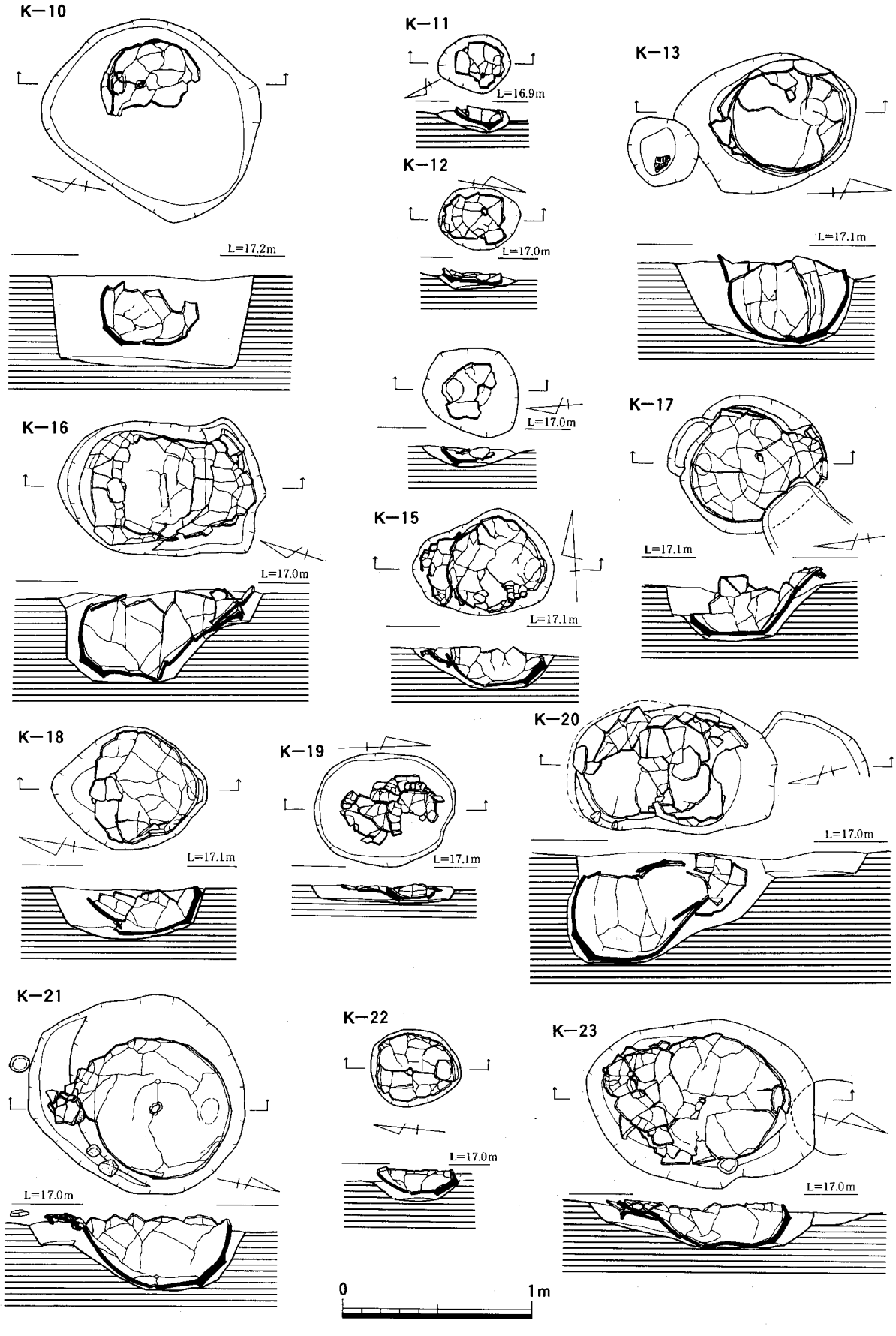


Fig.11　第一次調査II区甕棺墓実測図－２（縮尺1/30）

K－37(Fig. 9・12 PL. 2・4・5)　K－37は上部が約2/3程度削平されている。上甕は鉢形土器を使用し、下甕は口縁部を打ち欠いた壺形土器を使用した覆口式の小児甕棺墓である。掘方は他の遺構を切っており、遺構の埋土中（白色砂粒を含む黒灰褐色）に墓壙があるため明確ではない。墓壙は59㎝×58㎝、深さ15㎝、墓壙の長軸N-20°-W、下甕底部傾斜角度33°を測る。埋土は砂礫質の地山に、暗茶褐色土で暗黄褐色粘土のブロックを含む。

K－38(Fig. 9・12 PL. 2・4・5)　K－38は上部が削平されているため明かではないが、上棺の破片が見あたらないため小児の単棺の可能性がある。墓壙は45㎝×44㎝、深さ16㎝、墓壙の長軸N-41°-E、下甕底部傾斜角度31°を測る。埋土は暗茶褐色土で、粘質が強い土を詰め込んでいる。

K－39(Fig. 9・12 PL. 2・4)　K－39は上甕の大部分が削平されている。又、溝状遺構を切り、埋設している。上下甕とも口縁部は打ち欠かれており、上甕がかなり深く入り込む覆口式成人棺である。墓壙は甕棺ギリギリに掘られ、しかも二段掘りがなされている。墓壙は80㎝×63㎝、深さ52㎝、墓壙の長軸N-76°-W、下甕底部傾斜角度42°を測る。埋土は暗茶褐色土で、粘質が強い。

K－40(Fig. 9・12 PL. 2・5)　K－40は約1/2程度が削平されている。上下口縁部を打ち欠き、上甕がかなり深く覆う形状を呈する。下甕の中央に水ぬきの穿孔を施す覆口式の成人棺である。掘方は甕棺の大きさの割には小じんまりしている。墓壙は111㎝×89㎝、深さ42㎝、墓壙の長軸N-47°30′-W、下甕底部傾斜角度43°30′を測る。埋土は暗茶褐色土で、粘質が強い土を詰め込んでいる。

K－41(Fig. 9・12 PL. 2)　K－41は上部が削平されているため明かではないが、上棺の破片が見あたらないため単棺の可能性がある。底部及び胴部下は非常に厚くどっしりとした感じがある。掘方は他の遺構を切り、甕棺墓の掘方がある。掘方は楕円形の緩やかなレンズ状を呈する。墓壙は61㎝×60㎝、深さ18㎝、墓壙の長軸N-56°30′-W、下甕底部傾斜角度34°30′を測る。埋土は暗茶褐色土で、全体にパサパサしている。

K－42(Fig. 9・13 PL. 2)　K－42は上部が削平されているため明かではないが、上棺の破片が見あたらないため単棺の可能性がある。底部と胴部が分離して出土した。掘方は甕棺の大きさの割には小じんまりしている。墓壙は73㎝×47㎝、深さ8㎝、墓壙の長軸N-55°-Eを測る。埋土は砂礫質の地山に暗茶褐色土で、粘質が強い土を詰め込んでいる。

K－43(Fig. 9・13)　K－43は上部が約2/3程削平されている。上甕は口縁部に刻目を施す鉢形土器である。下甕は口縁部を打ち欠いている覆口式小児棺である。掘方は甕棺の大きさの割には小じんまりしており、底面に5個の小石を配置している。墓壙は72㎝×56㎝、深さ22㎝、墓壙の長軸N-87°-E、下甕底部傾斜角度54°を測る。埋土は暗褐色土で、黄褐色粘土ブロック粒を含む。

K－44(Fig. 9・13)　K－44は上部が約1/2程削平されている。僅かに上甕の口縁部が認められる。上甕は口縁部に刻みを有し、胴部中位に沈線を巡らす鉢形土器、下甕は壷形土器で、口縁部を打ち欠く覆口式の小児棺である。掘方は甕棺の大きさの割には小じんまりしている。墓壙は53㎝×50㎝、深さ29㎝、墓壙の長軸N-88°30′-W、下甕底部傾斜角度は22°を測る。埋土は暗茶褐色土で、粘質が強い土を詰め込んでいる。

K－45(Fig. 9・13)　K－45は上部が約1/2程削平されている。上棺の破片が見あたらず単口式小児棺の可能性がある。K－45は44よりも直立して埋納されている。底部直上に水抜き用の穿孔が見られる。掘方は甕棺ギリギリに掘られている。墓壙は54㎝×54㎝、深さ26㎝、墓壙の長軸はN-77°-Eを測る。埋土は灰褐色土で、黄褐色粘質土粒を多く含む。

K－46(Fig. 9 .13 PL. 2)　K－46は上部が約1/3程度削平されている。大型の甕形土器2個覆口式にした成人棺である。上甕は口縁下に二条・頸部に三条の沈線を巡らし、口縁には刻み目を施して

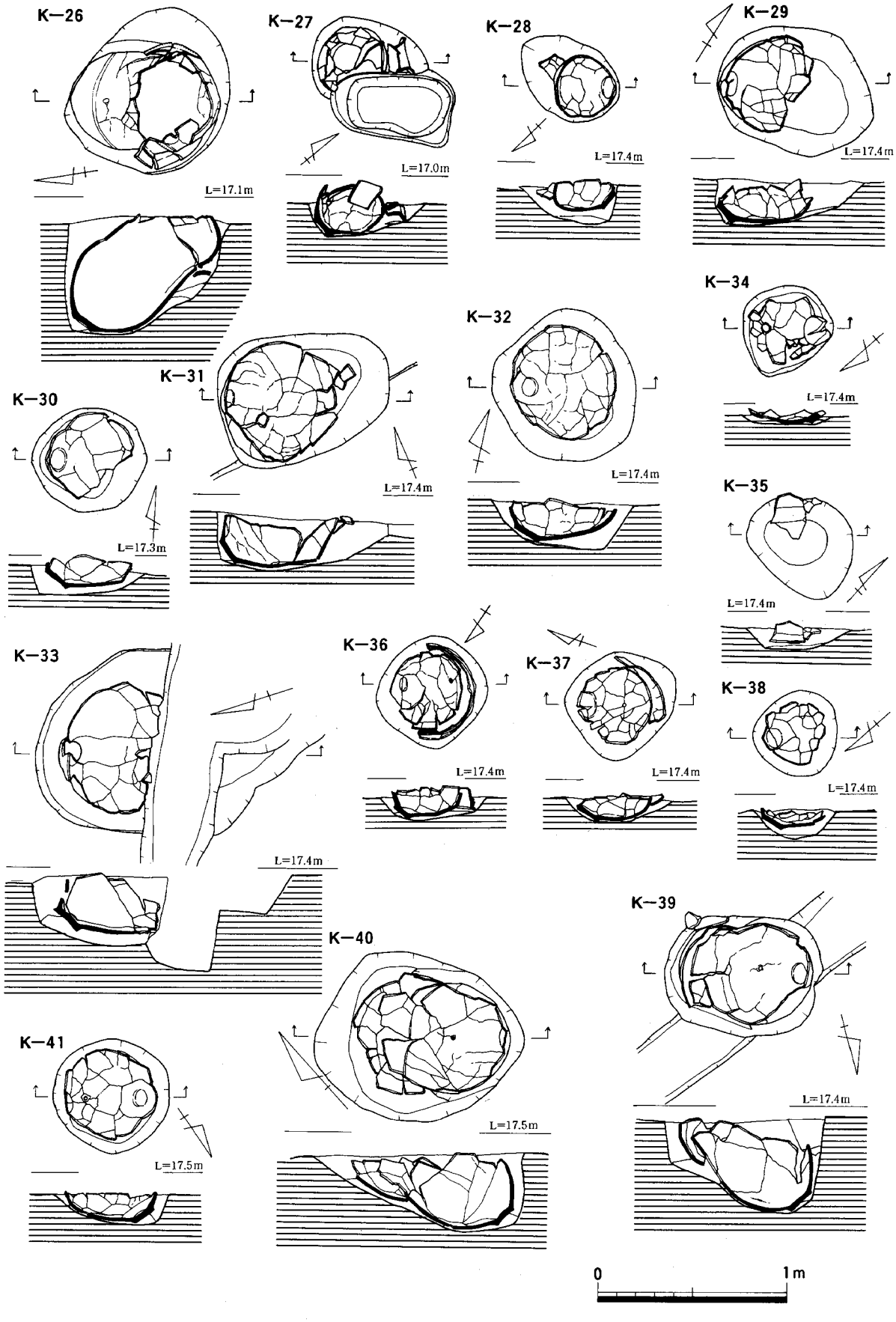


Fig.12 第一次調査II区甕棺墓実測図－3（縮尺1/30）

いる。下棺は口縁部を打ち欠いている。棺外には板付II式の小型壷形土器を副葬している。この１基だけが調査区の北西部にあり、住居址を切る形で出土した。II区ではこの甕棺墓が最大で、墓壙は209cm×119cm、深さ60cm、墓壙の長軸N-37°-E、下甕底部傾斜角度55°を測る。埋土は暗茶褐色土で、粘質が強い土を詰め込んでいる。

（２）木棺墓・土壙について

ＳＫ－11(Fig. 7・14 PL. 2・3)　ＳＫ－１１はＳＣ－02の北東側に位置する。二段掘りと成っており、一段目に粘土帯が巡る。二段目の西側途中に段を有する。底面に木棺墓の痕跡は検出できなかったが、粘土帯が巡ることから木棺墓とした。土壙の大きさは一段目が186cm×141cm×深さ13cm、二段目が140cm×62cm×深さ34cm、土壙の長軸はN-46°-Eを測る。土層は第Ｉ層が黄青褐色土で、若干サラサラした茶褐色斑を含む。第Ⅱ層が黄青褐色土で、Ｉ層に比べ茶褐色が強い。第Ⅲ層が淡茶褐色土で、若干粘質を帯びている。第Ⅳ層が茶褐色土で、Ⅲ層より茶色と粘質が強い。第Ｖ層が同じ茶褐色土であるが、若干淡くサラサラしてる。Ⅵ層が淡茶褐色土で、Ｖ層より淡くサラサラしている。第Ⅶ層が黄灰褐色土、第Ⅷ層が淡黄褐色土で、僅かに黒灰色気味を帯び粘質が強い。第Ⅸ層が淡黄灰色土で、よく締め固めている。

ＳＫ－12(Fig. 8・14)　ＳＫ－12は土壙墓である。北側に後世のPitにより一部破壊を受けているが、墓壙の大きさは186cm×52cmで、深さ31cm、土壙の長軸はN-9°30′-Wを測る。北側の一角に副葬土器が出土(Fig.18 PL.15)した。土層は第Ｉ層が灰青褐色粘質土。第Ⅱ層が暗黄褐色粘質土で、茶褐色粘土斑を多く含む。第Ⅲ層が黄灰褐色粘質土で、若干サラサラしている。

（３）出土遺物

Ⅱ区からは44基の甕棺墓と副葬品として小型壺形土器３点が検出された。甕棺墓の内51個体が大型甕形土器を棺として使用し、大型鉢形土器６個体、大型壺形土器７個体が棺として使用されている。

甕形土器　甕棺墓として使用されている甕形土器の内、29点を図示した。

Ｋ－01（810223001）（Fig.15 PL. 9）

Ｋ－01の倒置棺に使用された大型甕形土器である。胴部中央部と頸部下にそれぞれ２本の沈線を巡らす。胴部からやや内湾しながら頸部で大きく外反し、口縁部を折曲げ、さらに口唇部を嘴状に仕上げ、口縁部は凹む。最大径は口縁部にあり、口径73.6cm、残存高62.2cmを測る。風化が著しく調整方法は定かではないが、一部に横・縦方向の篦削りが認められ、口縁内面は一部に刷毛目の後、横ナデがみられる。倒置棺であったため底部は遺存していなかった。胎土は３mm程度の石英・金雲母・砂粒を多く含む。焼成は良好で、内・外面に黒斑を有する。

Ｋ－02（810223002・810223003）（Fig.15 PL. 9）

Ｋ－02の上下棺に使用された下棺の大型甕形土器(810223002)と上棺の口縁打ち欠きの壺形土器(810223003)である。02は胴部最大径が下位にあるため安定感のある甕形土器である。Ｋ－01と同じタイプで、胴部中央部と頸部下にそれぞれ２本の沈線を巡らす。胴部からやや内湾しながら頸部で大きく外反し、口縁部で折曲げ、さらに口唇部を嘴状に仕上げ、口縁部は凹む。最大径は口縁部にあり、59cmを測り、器高は、77.5cm、底径15.3cmで、01より小型の甕形土器である。03は口縁部打ち欠きの壺形土器で、Ｋ－02の上甕として使用されている。胴部最大径は53cm、底径15.4cm、残存高40.4cmを測る。底部内面は強い力で、指オサエを施しているため凹凸が激しい。胴部上位が横方向の篦ミガキを施す。02は調整方法はナデ仕上げで、内面は指オサエの後ナデ仕上げを行っている。胎土は２～５mm程度の石英・金雲母・砂粒を多く含む。焼成は良好で、外面に黒斑を有する。

Ｋ－03（810223004・810223005）（Fig.15 PL. 9）

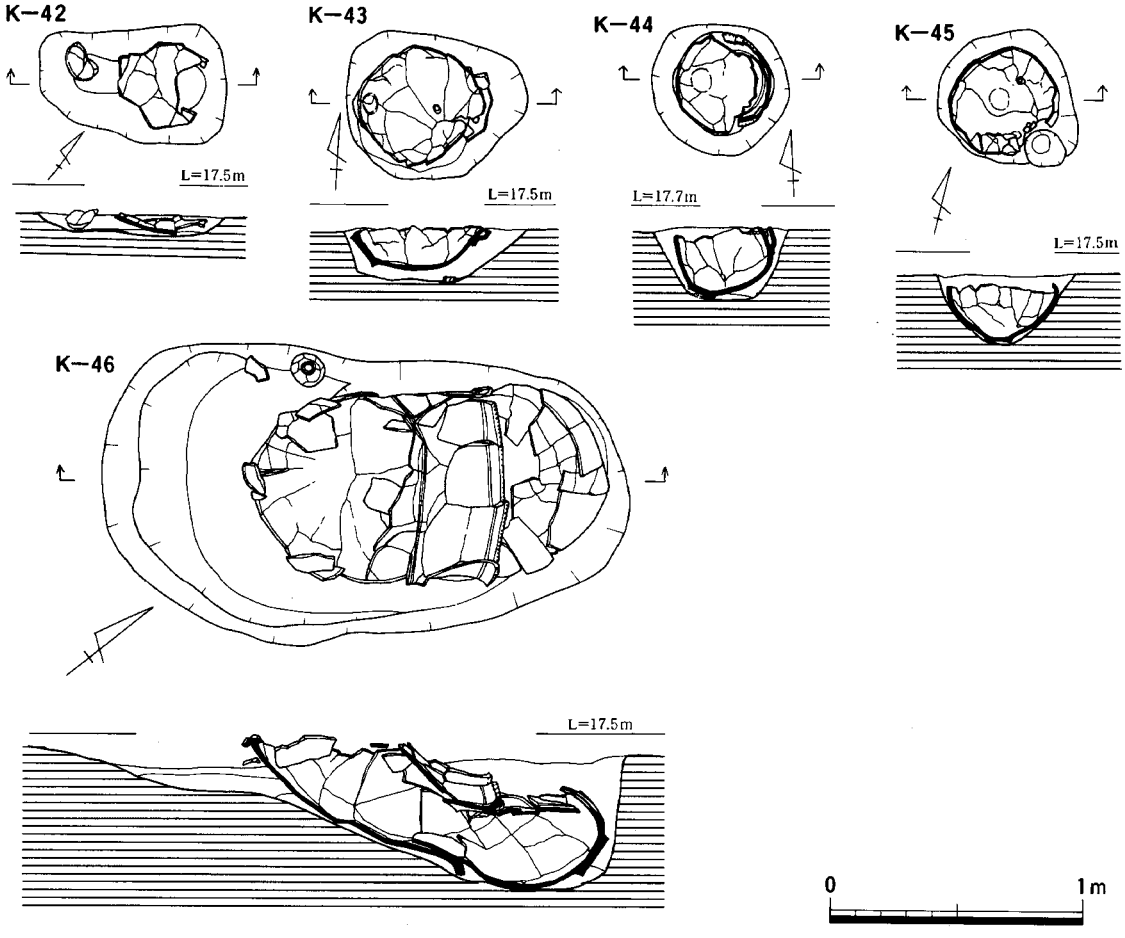


Fig.13　第一次調査II区甕棺墓実測図－4（縮尺1/30）

K－03の上下棺に使用された大型甕形土器(810223004)と上棺の(810223005)である。04は頸部下に2本の沈線を巡らし、胴部からやや内湾しながら頸部で大きく外反し、口縁部は折曲げず口唇部に刻目を施すが、上下の刻みの間隔が異なる。05は頸部下に3本の沈線を巡らし、胴部からやや内湾しながら頸部で大きく外反し、さらに口唇部を嘴状に仕上げ、口縁部は凹む。口唇部に刻目を施すが下位のみである。両方とも最大径は口縁部にあり、04が57.2cm、05が57.8cmを測る。器高は、04が76.5cm、05は不明。調整方法は両方とも外面が横・斜めの篦ミガキとナデを施し、内面は指オサエの後横刷毛目・縦と斜めの篦ミガキを施している。胎土は3mm程度の石英・金雲母・砂粒を多く含む。焼成は良好で、外面に黒班と赤色顔料が認められる。

K－04（810223006・810223007）（Fig.15 PL.10）

K－04の上下棺に使用された大型甕形土器(810223006)と上棺の(810223007)である。両方とも口縁部を打ち欠くが、06は胴部上位に2本の沈線を巡らし、胴部からやや内湾しながら頸部でほぼ直立する。07も口縁部から頸部を打ち欠く。両方とも最大径は胴部下位あり、06が63.6cm、07が69cmを測る。残存高は、06が81.3cm、07が63cm。調整方法は両方とも外面が横・斜めの篦ミガキとナデを施し、内面は指オサエの後ナデを施している。胎土は2～5mm程度の石英・金雲母・砂粒を多く含む。焼成は良好で、外面に黒班を有する。

K－06（810223009）（Fig.16）

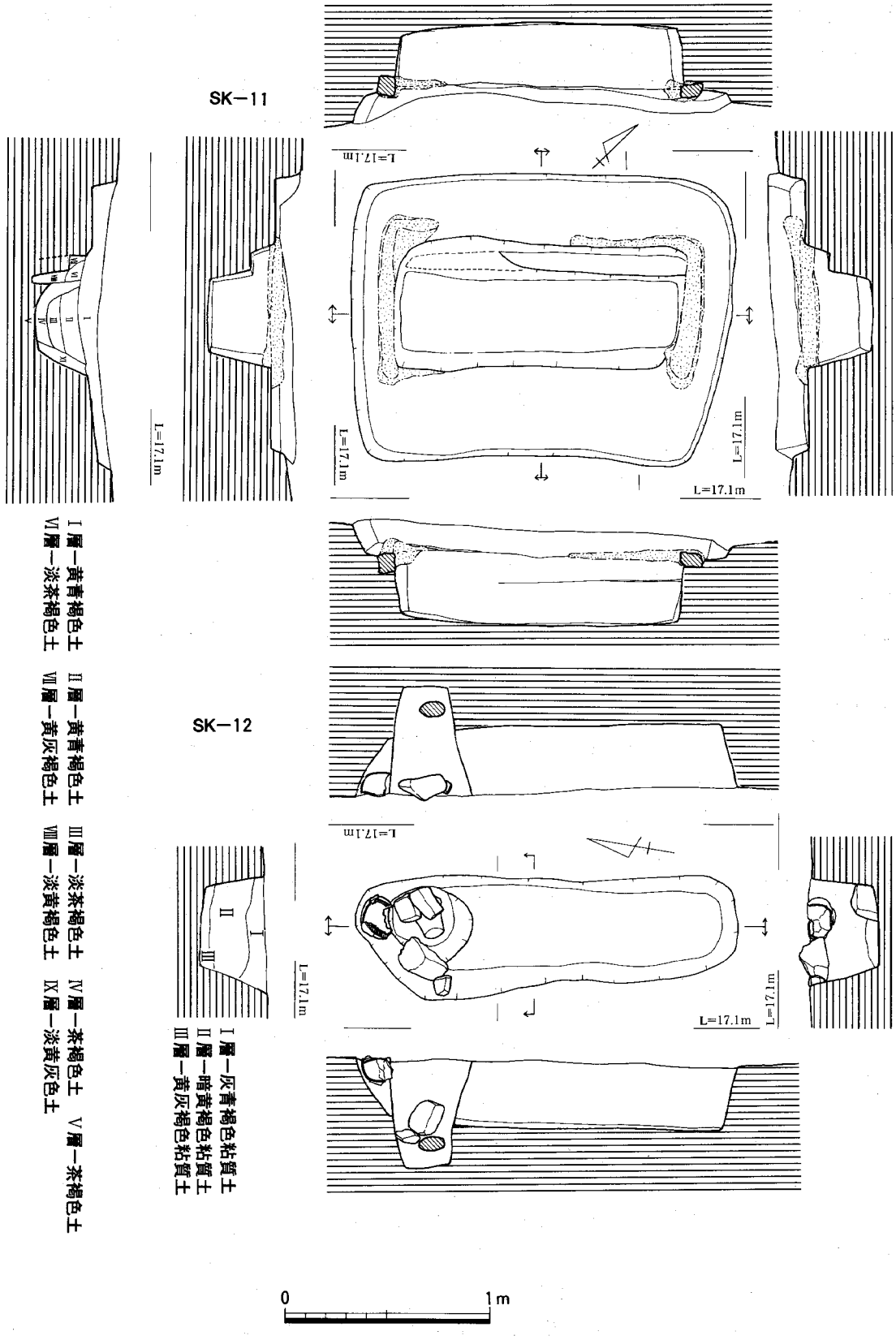


Fig.14　第一次調査II区木棺墓・土壙実測図(縮尺1/30)

810223009はＫ－06で、単棺である。大型甕形土器である。胴部中央部に２本の沈線を巡らすが、沈線は交わらない。器形は、胴部からやや内湾しながら頸部で外反し、口縁部で折曲げ、さらに口唇部を嘴状に仕上げ、口唇部は凹む。口唇部下位に刻み目を施す。最大径は胴部中央にあり、59cmを測る。口径が58.8cm、器高が72.6cm、底径15cmを測る。調整方法は外面がナデと篦ミガキ、内面が指によるナデと刷毛目の後、横ナデがみられる。外面に四角の黒班が認められる。胎土は３～５mm程度の石英・金雲母・砂粒を多く含むが、表面には精製された粘土仕上げをしている。焼成は良好で、色調は外面が黒褐色と黒班、内面は褐色と赤色顔料が付着している。

Ｋ－09（810223013・810223014）（Fig.16）

810223014はＫ－09の上棺である。大型甕形土器の口縁部を打ち欠いたもので、底部を欠損する。最大径(58cm)は胴部中位上にあり、その上位に一条の沈線が巡る。調整方法は、内面全体に刷毛目施行と口縁部下には指オサエが認められる。外面は、篦による研磨が全面に施されている。胴部下位に黒班がある。胎土は１～２mm大の砂粒や金雲母を多く含む。焼成は良好で、色調は暗褐色と赤褐色に黒班があり、内面は赤褐色を呈する。

810223013は大型甕形土器の胴部から上を打ち欠いたものである。やや上底の底部から外反しながら立ち上がり、最大径(50cm)の胴部中位から内傾している。ここで打ち欠かれているため頸部・口縁部の形状は定かでない。調整は外面全体が摩滅しているため定かではないが、一部に斜め方向の篦研磨が見られる。内面は、底部より4.5cmまで横の篦研磨が施され、それより上方は斜め方向の篦研磨と刷毛目を施す。底部は、指オサエ後ナデ仕上げで、径が15.6cmある。胎土は細砂及び３mm大の石英粒・金雲母を含む。焼成は良好。色調は外面が明黄茶褐色と黒班で、内面が明黄褐色である。

Ｋ－15（810223021）（Fig.18 PL.14）

810223021はＫ－15の上棺である。壺形土器で口縁部のみを図示した。口縁部下位に刻み目を配し、胴部に二条の沈線を巡らす。調整方法は、内外面とも横位の篦研磨、口縁部横ナデを施す。胎土は細砂と赤色粒・金雲母を含む。焼成は良好で、色調は暗茶褐色を呈し、外面の一部に黒班を有する。

Ｋ－16（810223022・810223023）（Fig.16）

810223022はＫ－16の下棺である。底部は上底で底径15.8cmを測る。底部から外反しながら胴部下位(胴部最大径59cm)に達し、それから内湾しながら頸部まで立ち上がる。頸部で大きく外反し、口縁部に達する。口唇部は下りぎみで、下端部に１cm単位の刻み目を施す。頸部に二条と胴部上位に二条の沈線を巡らす。口径59.5cm、器高82.4cmを測る非常にスマートな形状を呈する。調整方法は、内面が指オサエと刷毛目・篦ミガキ、外面は口縁部付近がナデ、胴部が横ミガキを施している。胎土は２～３mm大の石英粒・金雲母を含み、色調は内面赤茶褐色、外面茶褐色と二ヶ所の黒班を有す。

810223023はＫ－16の上棺である。底部は欠損して不明であるが、口縁部打ち欠きの大型甕形土器である。胴部と頸部との境に一条の沈線を巡らす。調整方法は、内外面とも摩滅が著しいが、外面に篦ミガキ、内面の一部に指オサエの後刷毛目を施している。胎土は１～３mm大の石英粒・金雲母を混入させた良質の粘土を使用している。色調は内外面とも赤茶褐色を呈する。

Ｋ－17（810223014）（Fig.18）

Ｋ－17も口縁部だけ図示した。大型甕形土器で、口唇部内面に粘土帯を貼付けるタイプで、口唇部外面の上下端に刻目を施し、上端部は横ナデにより消されている。調整は、内外面とも横ナデを施し、口唇部内面は指オサエ後横ナデを施す。胎土は１～３mm大の石英粒・金雲母を含み、色調は内外面とも明黄褐色を呈する。

Ｋ－20（810223028）（Fig.16）

K－20の上下棺の内、下棺の810223022だけ図示した。大型甕形土器で、底部はわずかに上底で厚く底径14.6cmを測る。胴部最大径は中位下にあるため安定感のある感じである。口縁部は打ち欠かれているが、打ち欠きかたも丁寧である。胴部下位に内側からの打撃による穿孔がある。調整方法は、全体に器面が著しく摩滅しているため不明である。胎土は2～3mm大の石英粒・金雲母を含み、色調は内外面とも明赤黄褐色を呈し、外面に黒班がある。残存高70cm、胴部最大径59cmを測る。

K－22（810223032）（Fig.16）

K－22は単棺である。中型甕形土器であるが、胴部上位から欠損している。底部はわずか上底で分厚い。調整方法は、内外面とも篦研磨を施し、特に底部付近は丁寧である。胎土は2～3mm大の砂粒を含み、特に大粒の石英・金雲母を含む。色調は内面が暗赤褐色、外面が暗赤褐色を呈し、外面に黒班がある。残存高32cm、底径13cm、胴部最大径39cmを測る。

K－23（810223033）（Fig.18 PL.14）

K－23の下棺口縁部しか図示出来なかった。大型甕形土器であるが、胴部から垂直に伸び頸部で大きく外反し納めるが、内側の粘土帯の貼付けは見られない。外面口唇部の上下端に刻目を配し、内部をナデで消す。調整方法は、内外面とも器面が摩滅し調整は不明であるが、一部内面に横ナデ、横刷毛目痕がわずかに残っている。胎土は2～3mm大の砂粒を多く含み、特に大粒の石英・金雲母を含む。色調は内外面とも明黄褐色を呈する。

K－26（810223035・810223036）（Fig.17 PL.10）

810223035はK－26の下棺である。大型甕形土器で、底部は小さく上底を呈する。底部から外反しながら胴部下位で頸部まで垂直に伸びる。頸部上端で大きく外反し、口縁部に達する。口縁部は、内側に粘土帯はなく、口縁部外側の下端をつまみ出している。口縁下に一条と頸部・胴部に二条の沈線を巡らせるが丁寧な引き形ではなく雑である。胴部下位に外側から開けた穿孔がある。調整方法は、篦研磨とナデ仕上げが行われている。胎土は2～3mm大の砂粒を多く含み、特に7mm大の石英・金雲母を含む。色調は外面が暗褐色及び暗茶褐色で黒班がある。内側は暗茶褐色に一部黒班が認められる。口径58.5cm、器高68.8cm、底径11cmを測る。

810223036は底部を欠損するが、K－26の上棺として使用された大型鉢形土器である。口縁部はやや下がり気味で端部に刻目を配する。胴部に二条の三角突帯を配するが、上位の突帯に刻目を配するため三角突帯が凸状と成っている。調整方法は、全体に縦ミガキを施すが、口縁部付近と内面はナデ仕上げである。全体に煤が付着しており、外面には黒班がある。胎土は1mm大の砂粒を多く含むが、4～5mm大の石英・金雲母も混入している。色調は内外面とも暗褐色及び黒褐色。口径54.8cm。

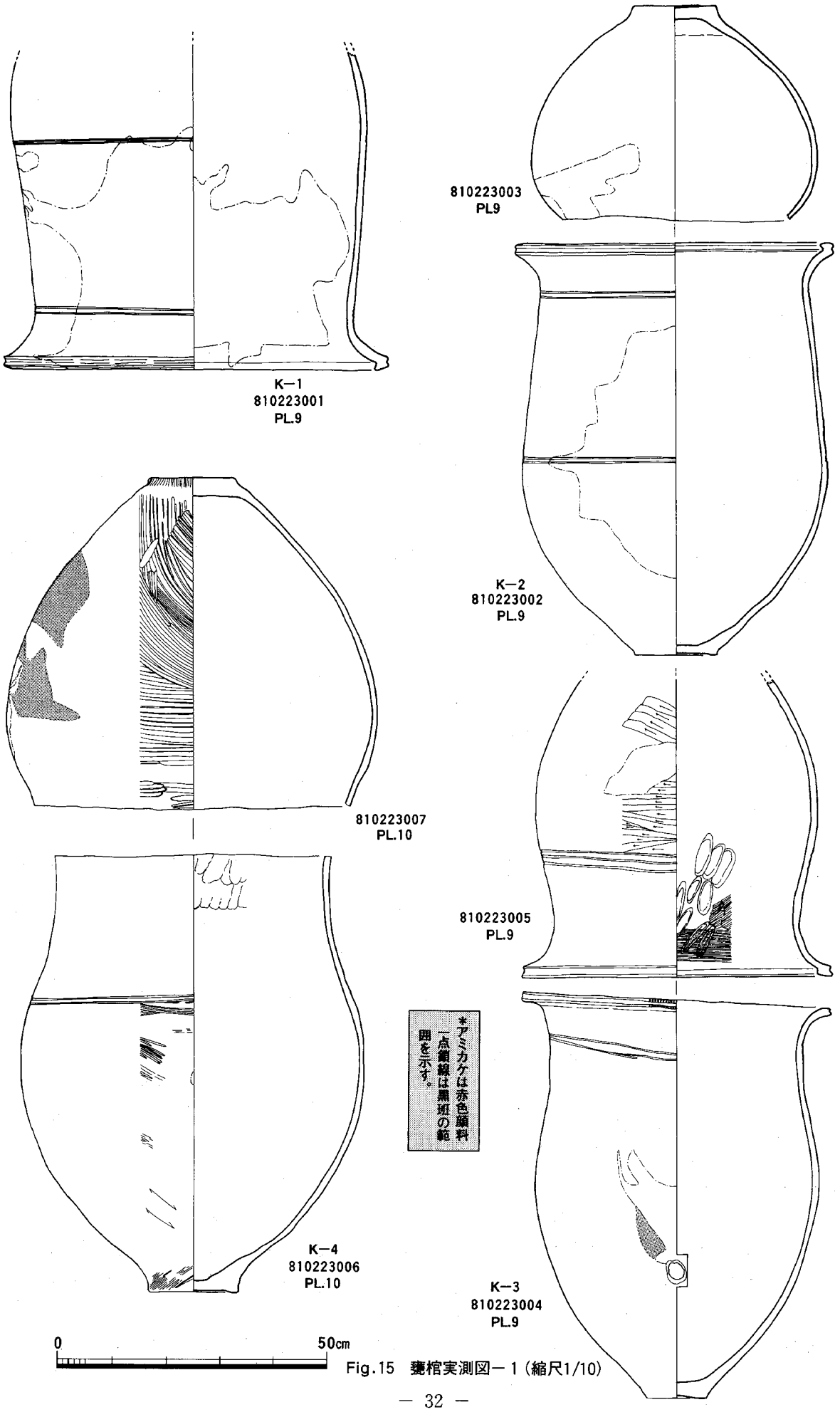
K－27（810223037）（Fig.16）

K－27の下棺で、口縁部打ち欠きの大型壺形土器である。底部は僅かに上底で、復元底径11cmを測る。調整方法は、内面に指オサエが認められ、他は横ナデ仕上げである。外面は器面の摩滅が著しく不明な点が多いが、一部に篦研磨が認められる。胎土は2～4mm大の石英・長石粒を多く含む。色調は外面が赤茶褐色と黄褐色、内面が赤茶褐色を呈し、外面の一部に黒班がある。

K－36（810223047・810223048）（Fig.17 PL.10）

K－36の上下棺の内、下棺は大型壺形土器の口縁部打ち欠き、上棺は大型鉢形土器を使用している。810223047は胴部上位まで打ち欠きが行われており、底部は平底で径が10cmを測る。調整方法は、器面が著しく摩滅しているため不明である。胎土は1～2mm大の砂粒を多く含み、さらに4～5mm大の石英粒を多く含む。色調は外面が淡白褐色と黒班、内面が明褐色である。

810223048は鉢形土器で、底部は欠損している。胴部に二条の三角突帯があり、この突帯に刻目を



＊アミカケは赤色顔料
一点鎖線は黒斑の範囲を示す。

Fig.15　甕棺実測図－1（縮尺1/10）

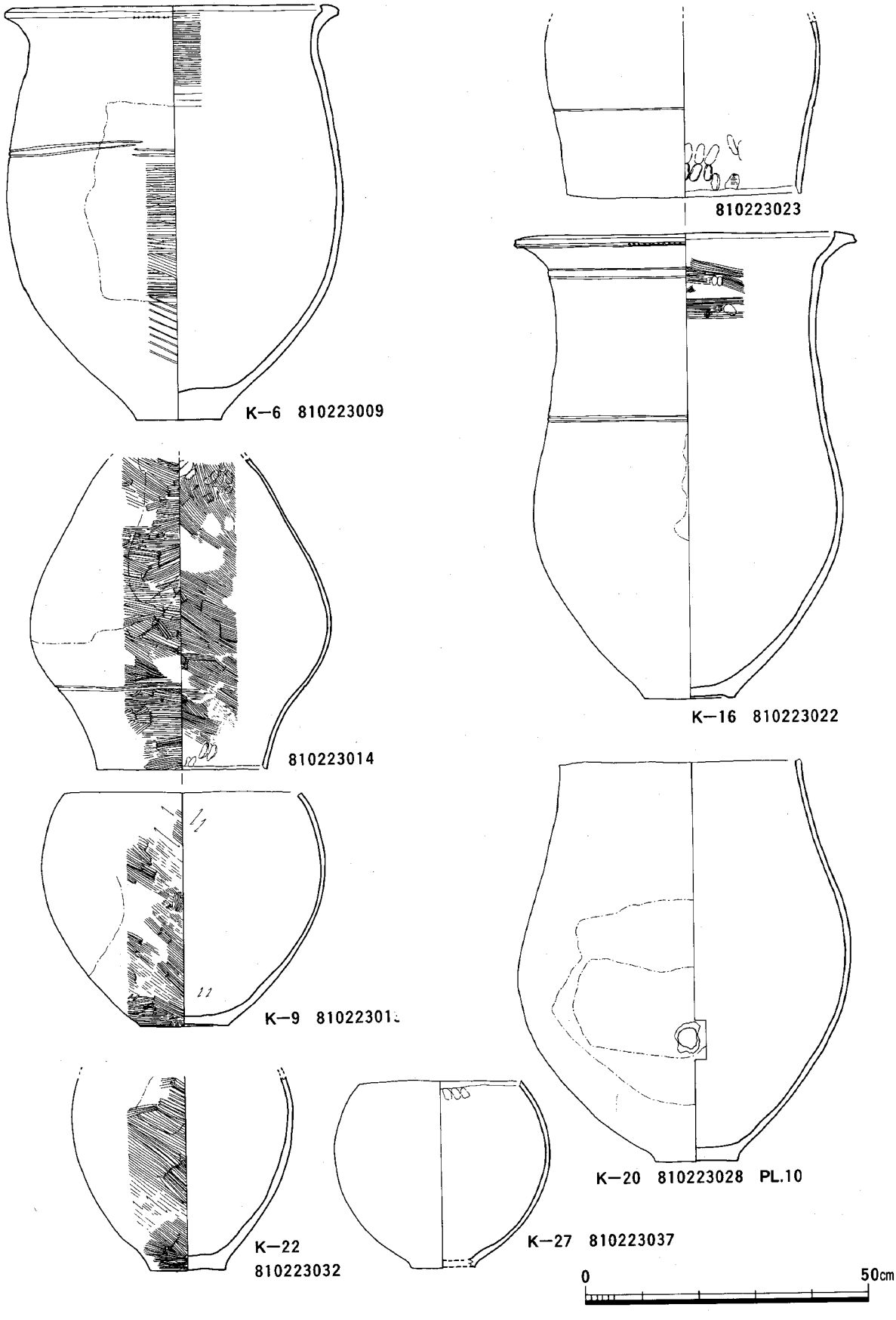


Fig.16 甕棺実測図－2（縮尺1/10）

施す。調整は縦刷毛目とナデ仕上げ。口径40cm。胎土は1～2mm大の砂粒と3～4mm大の石英・長石・金雲母も含んでいる。色調は内外面とも黒褐色と淡白褐色で、外面に黒班が認められる。

K－39 (810223052) (Fig.17 PL.10)

K－39の上棺は図化できなかった。下棺は口縁部打ち欠きの大型甕形土器である。底部は僅かに上がる形状を呈し、内面に指オサエ痕が残る。胴部中位下に最大径があり53cmを測る。調整方法は、器面が著しく摩滅しているが、外面の一部に篦研磨があり、内面には指オサエとナデ仕上げを行っている。胎土は2～3mm大の砂粒と金雲母を多く含む。色調は外面が明赤褐色と黒班、内面が淡黄褐色である。底径13.4cm、残存高64.1cmを測る。外面からの打撃による穿孔がある。

K－40 (810223054) (Fig.17 PL.11)

K－40の上棺は図化できなかった。下棺は口縁部打ち欠きの大型甕形土器である。底部から大きく外反しながら立ち上がり、大きく外反するところで打ち欠かれている。頸部中位内側に粘土つなぎの痕跡が残っている。外面には黒班が大きく残っており、胴部下位には、外側からの打撃によってあけられた水ぬきの穿孔がある。調整方法は、器面が著しく摩滅しているるため外面は明かでない。内面は篦削りとナデ仕上げを行っている。胎土は3～5mm大の砂粒と金雲母を多く含む。色調は外面が淡黄褐色と黒班、内面が淡茶褐色である。口径46cm、底径14cmを測る。

K－44 (810223060・810223061) (Fig.17 PL.11)

K－44は上棺が鉢形土器(810223061)、下棺が口縁部打ち欠きの壺形土器(81022360)である。

81022360は下棺で、平底の底部から内湾しながら大きく外へ張り出し胴部最大径の中位まで達し、そこから内湾しながら緩やかに立ち上がり頸部に達する。胴部と頸部の境に四条の沈線(幅1cm前後)を巡らす。調整方法は、胴部下位は横方向の篦ミガキを施すが、内面・外面上位は摩滅が著しく調整は不明である。胎土は1～4mm大の砂粒と金雲母を多く含む。色調は外面が灰褐色を呈するが、外面に黒班が認められる。内面が茶褐色である。残存高33.5cm、底径9cm、最大径40.4cmを測る。

810223061は底部を欠損する。口縁部に刻目を施し、頸部に一条の沈線を巡らす。調整方法は器面の摩滅が著しく部分的にしか判明しない。口縁部付近は外面がナデ仕上げ、内面は横方向の篦ミガキとナデ仕上げを行っている。胎土は2～3mm大の砂粒・長石を多く含む。また、細かな金雲母を多く混入している。色調は内外面とも暗赤褐色を呈する。口径30.6cmを測る。

K－46 (810223063・810223064) (Fig.17 PL.11)

K－46は上棺が甕形土器(810223064)、下棺が口縁部打ち欠きの甕形土器(810223063)である。

810223063は口縁部を打ち欠いた甕形土器で、打ち欠いた部分が揃っていない。底部は平底で、底部から外へ大きく開き、内湾しながらやや丸みを持って立上がる。最大径は胴部中位にあり、内に傾斜しながら頸部へとつづく。外面には沈線は巡らさない。調整方法は、器面が著しく摩滅しており、外面は不明。内面は頸部に指オサエが認められる。他はナデ調整。胴部下位に内側から開けた穿孔がある。胎土は2～5mm大の石英粒・砂粒と金雲母を多く含む。色調は内外面とも明黄褐色と淡黄褐色で、外面の一部に黒班が認められる。残存高68.3cm、底径17.6m、最大径61cmを測る。

810223064は底部を欠損する。最大径は胴部中位下で、胴部下位が張った形状を呈し、器の断面が厚く仕上げている。最大径の胴部からやや内傾しながら立ち上がり頸部に達する。頸部から大きく外反し口縁部に達する。口唇部上端部・内面に粘土帯を巡らし、内面を僅かに摘みだしている。その部分はナデ調整の後、指オサエを行っている。口唇部外面の上下端に刻目を施す。頸部に二条の沈線を巡らすが、一部三条となる部分もある。また、胴部中位上に三条の沈線も巡らしている。調整方法は外面が横・斜め方向の篦ミガキを施し、口唇部に横ナデを施す。内面は指オサエ、横ナデ、板状工具

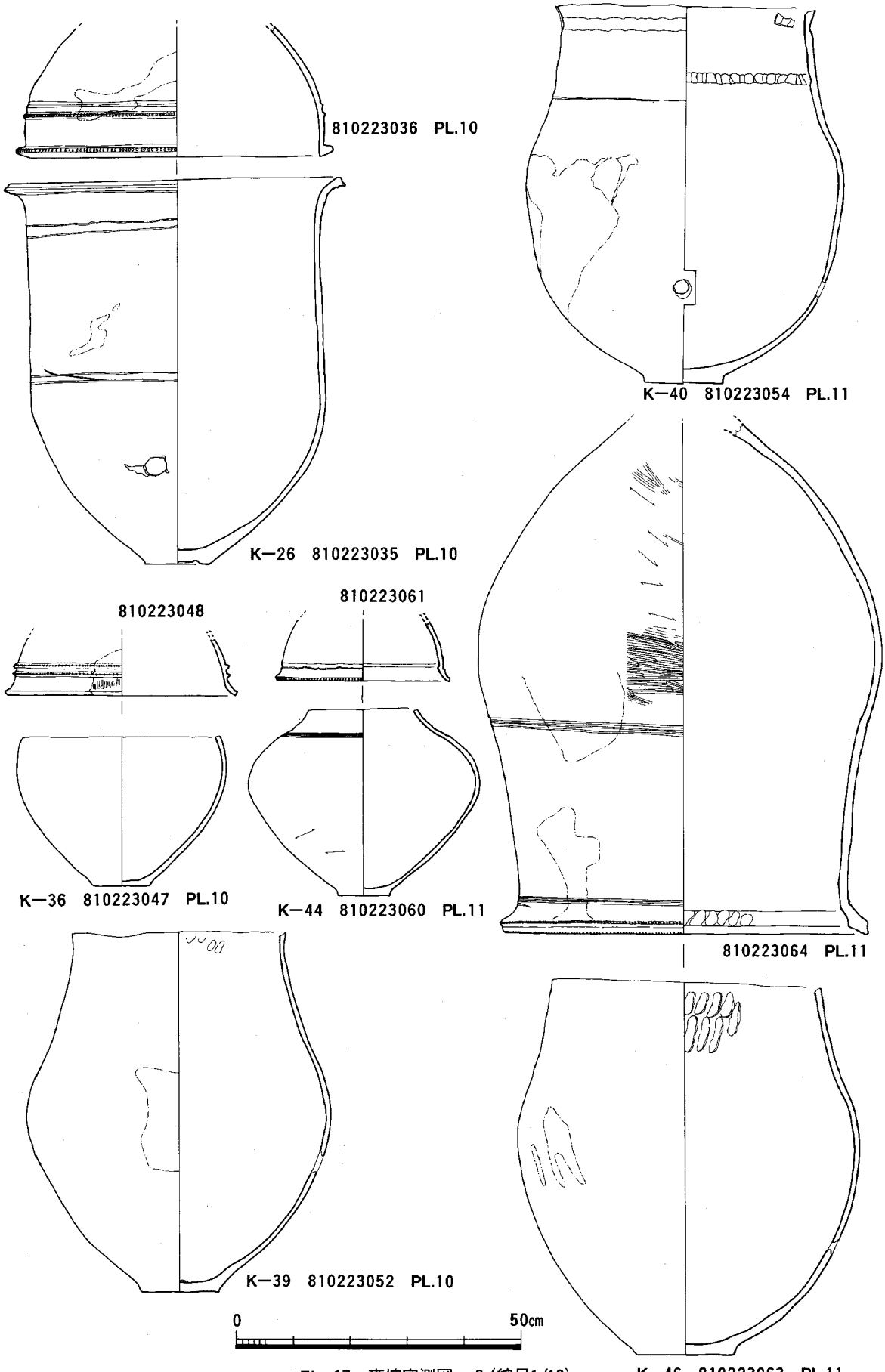


Fig.17 甕棺実測図－3（縮尺1/10）

によるミガキを行っている。胎土は１～５㎜大の砂粒・長石を多く含み、また、１～２㎜大の金雲母も混入している。焼成は良好で、色調は外面が暗黄褐色と前面と裏面に黒班を有す。内面は暗黄褐色と暗褐色を呈する。口径65.1㎝、残存高89.7㎝を測る。

副葬品(Fig.18 PL.14･15)

810223066 (Fig.18 PL.14) 81022366はＫ－04の土壙内から出土した大型甕形土器の口縁部である。この口縁部は、Ｋ－04の上下棺の口縁部とは異なるため、また、出土状態から副葬品とした。頸部から口縁部にかけて外側に粘土帯を貼付け、そこに段を成す。内側の口唇部にも粘土貼付けを行い口唇部を厚くしている。口唇部外側に上下端に刻目を配している。調整方法は口唇部は横ナデ、他は内外面とも横方向の篦研磨を施す。胎土は２～３㎜大の石英・長石・金雲母を多量に含む.焼成は良好で、色調は外面が暗褐色、口縁部内部に黒班がある。内面は淡汚黄褐色を呈する。

Ｋ－04副葬品(810223065) (Fig.18 PL.15) Ｋ－04から棺外副葬品として板付II式小型壺形土器が出土した。口縁部に彩文を施す完形品である。やや上底の底部から大きく外反して立ち上がり最大径は胴部中位に達する。この部分から内湾し頸部に達するが、内面に段を有する。頸部には、一状の低い三角突帯を巡らす。頸部は締まり内傾しながら口縁部付近まで内湾するが、口縁部に向かって大きく外反する。この部分に一条の沈線を巡らす。口唇部の造りは丁寧で端部は鋭利に仕上げられている。口縁部下に縦方向の彩文を巡らす。その間隔は1.5㎜前後、幅が１㎜前後である。胴部にも彩文の痕跡がある。調整方法は、外面横方向の篦ミガキを前面に施すが、原体幅は２～３㎜前後である。底部はナデ仕上げ。内面は口縁部付近が横方向の篦ミガキ、その下位は横・縦方向のナデ仕上げである。胎土は石英・黒雲母・砂粒を若干含み、焼成は良好である。色調は外面が黒褐色と一部黒班、内面が灰褐色を呈する。器高13.6㎝、口径7.6㎝、底径3.8㎝胴部最大径15㎝を測る。

Ｋ－04出土の磨製石鏃(810223068) (Fig.18 PL.15) 小型の舌を持つ磨製石鏃である。全面を研磨した痕跡は残るが、表面が剝落しているため研磨方向は不明。先端部は鋭利で、形状は柳葉形を呈する。基部の造りは丁寧である。全長6.4㎝、幅2.1㎝、厚さ0.4㎝を測る。

ＳＫ－12出土副葬品(810224040) (Fig.18 PL.15) ＳＫ－12の土壙内より出土した。口縁部は欠損しているが、中型の壺形土器である。底部は平底で、端部はやや丸みを持つ。胴部の最大径は中位にあり、頸部との境に三角突帯を一条巡らす。この突帯下に五条の沈線を横方向に入れ、その間隔は上から0.7･0.8･1.40･0.5㎝である。第一間には右上から左下への沈線と第二間は左上から右下への沈線がある。この点線は継続しているものと第二間のみに入る沈線がある。第三間には格子文が入るが、右上から左下が最初に描かれ、次に左上から右下への沈線が描かれている。第四間は無文である。調整方法は外面上面がナデ、胴部下位が篦研磨（横・斜め方向）底部が指オサエ下篦研磨を施す。内面はナデ仕上げと底部付近が指オサエと指ビキが施されている。胎土は細砂及び２～３㎜大の石英・長石を含む。また、赤色粒・金雲母も混入している。色調は外面が淡明褐色と黒班が認められ、内面は暗褐色を呈する。焼成は良好で、残存高18.2㎝、底径７㎝、胴部最大径28㎝を測る。

Ｋ－46副葬品 (810243067) (Fig.18 PL.15) Ｋ－46の墓壙内より出土した。底部は平底であるが、端部がやや丸みを持つ。最大径は胴部中位にあり、頸部に向かって内湾するが、頸部と胴部の境に緩やかな三角突帯を巡らす。口縁部は欠損する。調整は外面篦ミガキを施している。胎土は１～２㎜大の石英・白砂粒を多量に含む。色調は内外面とも明褐色を呈する。最大径10.4㎝、残存高9.2㎝、底径2.8㎝を測る。

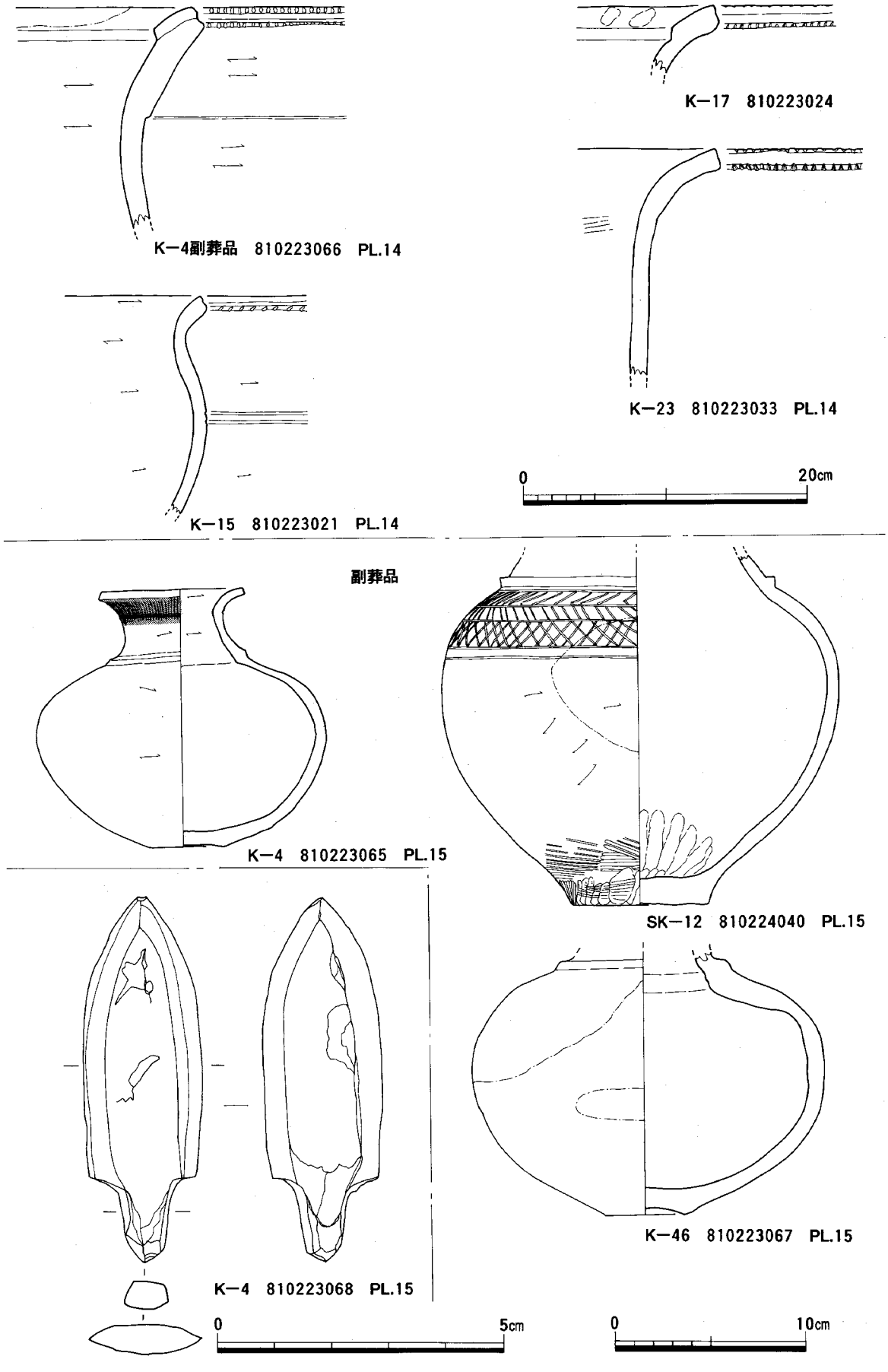


Fig.18 遺物実測図(縮尺1/1,1/2,1/4)

2．ＩＶ区検出の甕棺墓と木棺墓

調査対象面積は、6,000㎡で表土排除作業面積4,500㎡である。検出した遺構は、弥生時代前期の竪穴式住居址15軒・溝状遺構一条、弥生時代前期末の甕棺墓24基（金海式甕棺墓）・弥生時代中期初頭～後半にかけての竪穴式住居址8軒・溝状遺構二条、甕棺墓126基・井戸２基・　掘立柱建物６棟・中世の溝二条・井戸等を検出した。甕棺墓は149基検出し、その内24基が弥生時代前期末の金海式甕棺墓・３基の木棺墓があり、125基が弥生時代中期の甕棺墓である。

Ⅳ区検出の弥生時代前期の遺構

弥生時代前期の遺構は、５軒（未確定(12軒)を除く）の竪穴式住居址（SC-50･53･61･62･65)、掘立柱建物４棟（SB-36～39）と甕棺墓24基である。その位置関係は住居址が中央部と西側に集中し、掘立柱建物は、西側に位置する。甕棺墓は、Ⅱ区の在り方と異なり南東側の一角に集中する。

（１）甕棺墓

Ｋ－60(Fig.20･21 PL.６)　Ｋ－60は上部が約1/2程度削平されている。このため上棺の破片が遺存しないが、ただ１点西側に口縁部が落ち込んでおりこれからすると成人棺の合口式と考えられる。掘方はほぼ垂直に近く、甕棺もやや斜めではあるが、直立して埋置している。下甕の中に(Fig,28 PL.15)の板付II式の小型壷形土器が埋納されている。 墓壙は85㎝×76㎝、深さ43㎝、墓壙の長軸N-27°-E、下甕底部傾斜角度28°を測る。埋土は暗茶褐色土で、暗灰褐色土と小礫を混入しブロックで黄褐色粘土を詰め込んでいる。

Ｋ－62(Fig.20･21 PL.６)　Ｋ－62はその殆どが削平されている。墓壙内に口縁部を巡らしていることから倒置棺の可能性がある。口縁部には刻目を施している。掘方は楕円形で、浅いレンズ状を呈する。墓壙は108㎝×95㎝、深さ15㎝、土壙の長軸N-84°-Wを測る。埋土は暗茶褐色土である。

Ｋ－63(Fig.20･21 PL.６)　Ｋ－63上部が削平されているため明かではないが、上棺の破片が見あたらないため単棺の可能性がある。底部及び胴部下は非常に厚くどっしりとした感じがある。掘方は円形で、胴部付近が深い。その部分に水抜きの穿孔がある。胴部上位は、意識的に折り曲げられ、ほぼ横に設置されている。墓壙は95㎝×86㎝、深さ26㎝、墓壙の長軸N-25°-E、下甕底部傾斜角度57°を測る。埋土は黄褐色土。

Ｋ－64(Fig.20･21 PL.６)　Ｋ－64は上部が約2/3程度削平されているため明かではないが、成人単棺の可能性がある。底部及び胴部下は非常に厚くどっしりとした感じがある。胴部中央に穿孔が認められる。掘方は甕棺の大きさの割には小じんまりしている。墓壙は107㎝×90㎝、深さ20㎝、墓壙の長軸N-4°-W、下甕底部傾斜角度48°を測る。埋土は暗茶褐色土、粘質が強い。

Ｋ－65(Fig.20･21 PL.６･８)　Ｋ－65は上部が僅かに削平されているが、ほぼ現況を保つ合口式の成人棺である。上甕と下甕の口縁部が接する部分を粘土帯で覆う。この甕棺墓は第一次調査の中で最大の墓壙を持つ。墓壙は大きく北側に段を有している。掘方は大きく呑口状を呈し、下甕部分はギリギリに掘られ、上甕は、緩やかな傾斜で大きい。墓壙は250㎝×184㎝、深さ94㎝、墓壙の長軸N-16°-E、下甕底部傾斜角度67°を測る。埋土は暗茶褐色土。

Ｋ－66(Fig.20･21 PL.６)　Ｋ－66はその殆どが削平されている。僅かに底面だけが、遺存している。この部分に口縁部が逆さまに約半分ほど配列され遺存していた。甕の大きさから単口式の成人棺で、倒置棺の可能性がある。掘方は一部後世の溝状遺構によって切られている。墓壙は108㎝×86㎝、深さ12㎝、墓壙の長軸N-46°-Eを測る。埋土は暗茶褐色土である。

Ｋ－68(Fig.20･22 PL.６)　Ｋ－68は上部が約2/3程度削平されているため明かではないが小児の単棺の可能性がある。底部及び胴部下は非常に厚いが、焼きが悪いためボロボロしている。掘方は甕

棺ギリギリに造られている。墓壙は68cm×65cm、深さ20cm、墓壙の長軸N-7°30′-W、下甕底部傾斜角度35°を測る。埋土は粘質が強い暗茶褐色土。

K－69(Fig.20・22 PL.6) K－69は上甕部が殆ど削平されている。辛うじて呑口部が一部が確認できた。これから呑口式の成人棺である。目張りの粘土は、下甕口縁部には付かず、上甕の安定のため張付けている。上甕は口縁部を打ち欠いている。下甕胴部中央に穿孔が認められる。掘方は二段掘りされており、上段は削平のためわずかに確認できる程度である。墓壙は156cm×113cm、深さ50cm、墓壙の長軸N-70°-W、下甕底部傾斜角度55°を測る。埋土は灰褐色粘質土。

K－74(Fig.20・22 PL.8) K－74は上甕棺部が殆ど削平され、僅かに一部が残る程度である。上甕は、鉢形土器で、下甕よりやや径が大きいため呑口気味になる。下甕は甕形土器で、合口式の成人棺である。上甕のあった位置及び口縁部には粘土帯がまかれており、特に上甕には全体に巻かれていた可能性がある。又、下甕の墓壙には木炭の細片が認められる。墓壙は160cm×108cm、深さ76cm、墓壙の長軸N-87°-E、底部傾斜角度は58°を測る。埋土は砂粒と粘質土に木炭の細片を混入させ、敷き詰めていた。

K－76(Fig.20・22 PL.6) K－76は上部が削平されているため明かではないが、単棺の可能性がある。掘方は二段掘りされ、下段部分では甕棺を安定させるため淡黄褐色粘質土を傾斜に併せて張り付けている。墓壙は148cm×113cm、深さ62cm、墓壙の長軸N-3°-E、下甕底部傾斜角度51°を測る。地山は砂礫質で埋土は砂粒を多く含んだ灰茶褐色土で、パサパサしている。

K－79(Fig.20・22 PL.8) K－79は第一次調査の内、一番残りの良い甕棺墓である。上甕部が僅かに削平されているだけで、その殆どが遺存している。上甕は鉢形土器、下甕は甕形土器の合口式の成人棺である。合口の部分には粘土帯が厚く敷き詰められている。墓壙は挿入式で、甕棺の大きさギリギリに掘られている。墓壙は115cm×104cm、深さ83cm、墓壙の長軸N-27°-E、下甕底部傾斜角度57°を測る。埋土は暗茶褐色土の粘質のが強い粘土を敷き詰めている。

K－80(Fig.20・22 PL.69・7・8) K－80は上部が殆ど削平されているため定かではないが、墓壙上部に上甕口縁部が認められることから合口式の成人棺と思われる。底部及び胴部下は断面が厚くどっしりとした感じがあり、中央部に水ぬきの穿孔がある。掘方は甕棺ギリギリに掘られている。墓壙は95cm×86cm、深さ52cm、墓壙の長軸N-12°30′-W、下甕底部傾斜角度31°を測る。埋土は暗褐色土と砂粒を多く含み、サクサクして締まりが悪い。

K－81(Fig.20・22 PL.6・7) K－81は上部が削平されているため明かではないが、単棺の可能性がある。棺は大型甕形土器を使用している。底面に接する底部付近は緩やかな傾斜をもつ。墓壙は111cm×84cm、深さ67cm、土壙の長軸N-29°-E、下甕底部近くから胴部にかけて意識的に大きく割られている。掘方は挿入口の方は緩やかな傾斜を持つが、反対の部分はほぼ垂直に掘り込まれている。下甕底部傾斜角度は61°を測る。埋土はK－80と同様に暗褐色土と砂粒を多く含む。

K－82(Fig.20・23 PL.6・7) K－82も上部が削平されている。上甕しか遺存していなく下甕が抜き取られた可能性もあるが、倒置棺の可能性も考えられる。しかし上甕の位置が、倒置棺にしては高く、下甕が抜き取られた可能性を考えた方が妥当かもしれない。掘方は楕円形で、台形状を呈する。墓壙は95cm×73cm、深さ50cm、墓壙の長軸N-5°-Wを測る。埋土は暗褐色土で砂粒は少なく、粘質が強い土を詰め込んでいる。

K－83(Fig.20・23 PL.6・7) K－83は上部が約1/2程度削平されている。口縁部がやや斜めに傾斜して検出されているところから、成人棺の一種の倒置棺と考えられる。傾斜角度は25°30′を測る。甕棺内に大きな石が落ち込んでいるが、これは墓標の可能性も考えられる。掘方は二回行われている

Fig.19　第一次調査遺構配置図(IV区)(縮尺1/300)

可能性がある。最初に挿入形の掘り方を造り、その後、倒置棺用に挿入部・底面を埋め立てている。この部分の埋土は、暗褐色の砂粒まじりの粘質土を堅く固めている。墓壙は161cm×129cm、深さ76cm、墓壙の長軸N-28°30′-Eを測る。埋土は黄褐色土で、粘質が強い土を詰め込んでいる。

K－84(Fig.20・23 PL.6・7・8)　K－84は上部が約1/2程度削平されているため明かではないが、成人棺の単棺の可能性がある。しかしながら、墓壙の形態から合口式の可能性もある。棺は大型甕形土器使用している。掘方は甕棺の大きさの割には小じんまりしている。墓壙は105cm×82cm、深さ37cm、甕棺ギリギリに造られている。墓壙の長軸N-29°-E、下甕底部傾斜角度34°を測る。埋土は砂礫まじりの灰褐色粘質土である。

K－85(Fig.20・23 PL.6・7・8)　K－85は上部が殆ど削平されている。僅かに下甕口縁部に接する上甕部の口縁部が遺存していることから、合口式の成人棺と確認できた。上・下とも甕形土器を使用している。底部及び胴部下は非常に厚くどっしりとした感じがある。下甕の胴部中央には、水ぬき用の穿孔が見られる。掘方は二段掘りされ、二段目は下甕口縁部下から始まる。墓壙は130cm×98cm、深さ55cm、墓壙の長軸N-18°-E、下甕底部傾斜角度41°を測る。埋土はK－84と同じく灰褐色粘質土に砂礫を混ぜたもので、甕棺底面を覆っている。

K－86(Fig.20・23 PL.6)　K－86は殆ど削平されているためと後世の遺構によって破壊されている。現況では口縁部が下を向き倒置棺の可能性が考えられる。しかしながら、口縁部の遺存状態があまりにも少ないため確定は出来ない。掘方は浅く、後世の遺構によって破壊されている。墓壙の大きさは60cm×90cm、深さ10cm、墓壙の長軸はN-4°-Eを測る。埋土は灰褐色粘質土。

K－87(Fig.20・23 PL.6)　K－87は約4/5程度が削平されおり、下甕部の胴部以下しか残っていないことから成人棺の単棺の可能性がある。底部及び胴部下は非常に厚くどっしりとした感じがある。掘方は甕棺の大きさの割には小じんまりしている。墓壙の大きさは92cm×73cm、深さ40cm、墓壙の長軸はN-6°-E、下甕底部傾斜角度は28°を測る。埋土は暗褐色土で、粘質が強い。

K－88(Fig.20・23 PL.7)　K－88は上部が約1/2程度削平されているだけで、遺存状態は良い。上甕の口縁部を打ち欠き下甕の内部に入れ込む呑口式の成人棺である。口縁部付近には、粘土の目張りが施されており、その粘土は、淡黄褐色の粘質土で粘質が強い。下甕口縁部には刻み目があり、胴部下には三条の沈線を二ヶ所に巡らせ、縦に三条の沈線を入れる甕形土器である。第一次調査の中（前期甕棺墓67基）で、このK－88だけに始めて銅剣の切先(Fig,28 PL.15)が出土した。掘方は甕棺ギリギリに掘られ、墓壙の大きさは117cm×90cmで、深さ70cm、墓壙の長軸はN-10°-E、下甕底部傾斜角度は51°を測る。埋土は暗褐色土で、粘質が強い土を詰め込んでいる。

K－89(Fig.20・23 PL.7)　K－89は上部が約4／5削平されている。上下棺は合口式で接合する部分とその下位に粘土帯をまいている。下面は湧水点まで掘り下げられている。底部及び胴部下は非常に厚くどっしりとした感じがある。掘方は甕棺の大きさの割には小じんまりしている。墓壙の大きさは134cm×92cmで、深さ69cm、墓壙の長軸はN-6°-E、下甕底部傾斜角度は50°を測る。埋土は暗茶褐色土で、粘質が強い。

K－93(Fig.20・23)　K－93はその殆どが削平されているため明かではない。下棺底部の一部だけが遺存するだけである。ただ小型であることから小児の単棺か合わせ式甕棺墓の可能性がある。掘方は甕棺ギリギリに掘られている。墓壙の大きさは65cm×54cmで、深さ16cm、墓壙の長軸はN-76°-W、下甕底部傾斜角度は30°を測る。埋土は暗茶褐色土で、小石を比較的多く含み砂質混入の灰褐色土（青味を帯びている）がブロックで詰め込まれている。

（2）木棺墓・土壙について

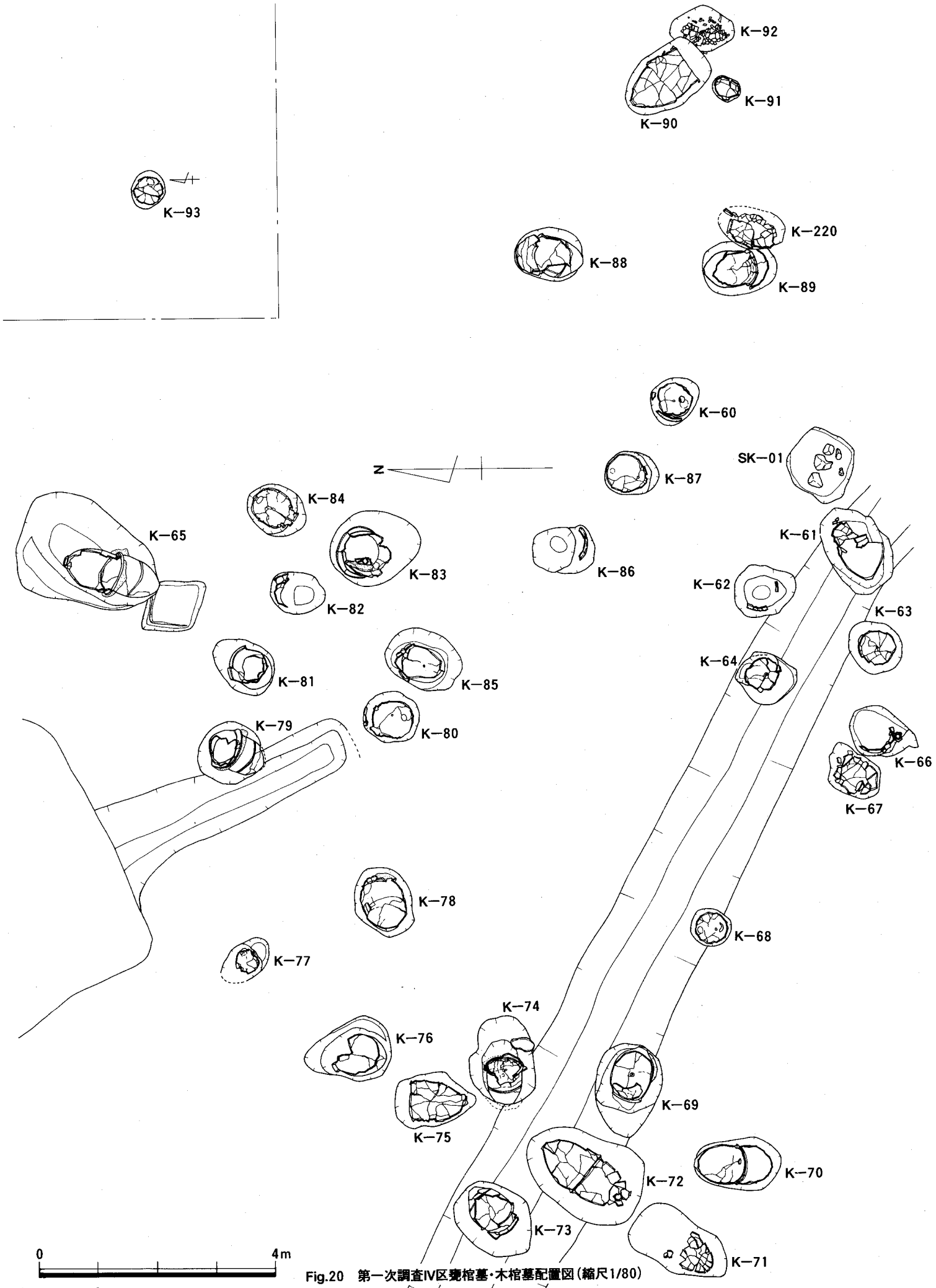


Fig.20　第一次調査Ⅳ区甕棺墓・木棺墓配置図（縮尺1/80）

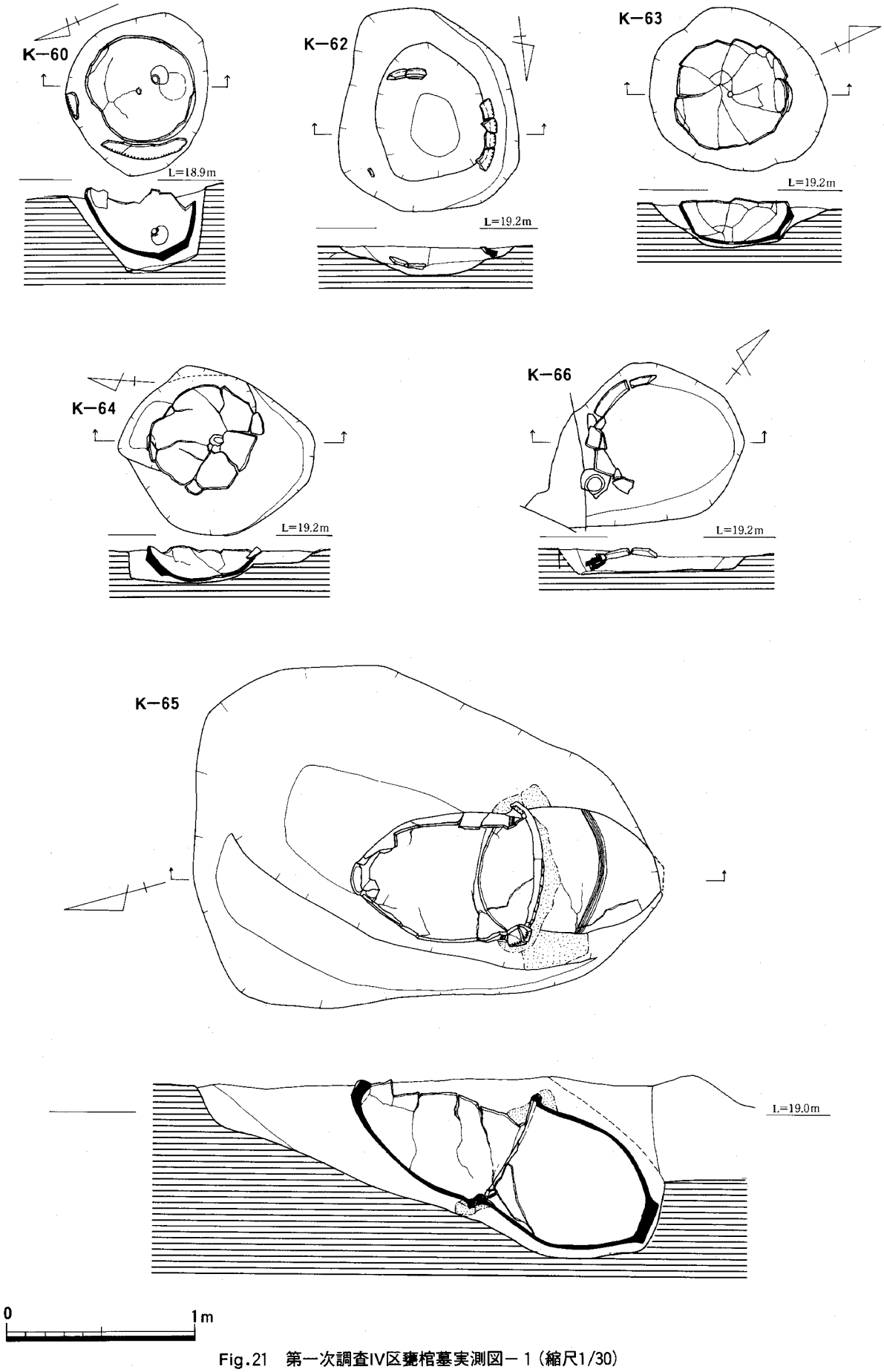


Fig.21　第一次調査IV区甕棺墓実測図－1（縮尺1/30）

ＳＫ－01(Fig.20･24 PL.６)　ＳＫ－01は調査区南東隅から検出した。周辺部には前期末から中期初頭の甕棺墓で、それに伴う土壙である。長軸112㎝×短軸108㎝×深さ72㎝の隅丸方形で土壙の長軸はN-31°-Eにとる。埋土中に20㎝×25㎝程度の角礫が８個検出された。

ＳＫ－02(Fig.19･24 PL.６・７)　ＳＫ－02はＳＣ－58の南東側、ＳＤ－03の東側に位置する。ＳＸ－200から（前回の報告（吉武遺跡群P71）での図面が間違い）切られる形で検出した。。すぐ横にはＳＫ－03がある。三段掘りの部分と二段部分からなっており、一・二段目は浅い。底面に木棺墓の痕跡は検出できなかった。土壙の大きさは一段目が277㎝×162㎝×深さ６㎝、二段目が220㎝×88㎝×深さ４㎝、三段目は170㎝×46㎝×深さ46㎝である。土壙の長軸はN-50°-Eを測る。土層は第Ⅰ層が黄褐色土。第Ⅱ層が暗褐色土。第Ⅲ層が淡茶褐色土である。

ＳＫ－03(Fig.19･24 PL.６・７)　ＳＫ－03は小口に板石を配した土壙墓である。墓壙の大きさは183㎝×108㎝で、深さ67㎝、土壙の長軸はN-55°-Wを測る。土層は第Ⅰ層が褐色粘質土。第Ⅱ層が暗黄褐色粘質土。第Ⅲ層が黄褐色粘質土である。

（３）出土遺物

Ⅳ区からは24基の甕棺墓と木棺墓・土壙墓3基が検出された。Ｋ－88に第一次調査で始めて細形胴剣の切先の副葬品が出土した。また棺外副葬として小型壺形土器１点が検出された。甕棺墓の内25個体が甕形土器を棺として使用し、壺形土器は２個体、鉢形土器３個体が棺として使用されている。

Ｋ－60(810243001)(Fig.27 PL.14)

Ｋ－60は単棺である。復元不可能であったため口縁部のみを図示した。頸部に二条の沈線を巡らし、口唇部上下端に刻目を入れる。断面形状が他の形状とは異なり、丸みを持つ。口唇部内部はつまみ出しの突起を持つ。調整方法は、外面がナデと箆研磨、内面が刷毛目とナデ仕上げ。胎土は２～３㎜程度の石英・砂粒を多く含む。焼成は良好で、色調は外面が暗褐色、内面が褐色を呈する。

Ｋ－62(810243004)(Fig.27 PL.14)

Ｋ－62も単棺で、復元不可能であったため口縁部のみを図示した。口唇部の造りは緩やかでシャープさに欠ける。口唇部下端に刻目を入れるが、この甕は内側にも刻目の痕跡が認められる。上下の刻目は別々に施されている。胎土は３～４㎜大の石英・長石・金雲母を多く含む。焼成は良好で、色調は内外面とも黄褐色を呈する。

Ｋ－65(810243007・810243008)(Fig.25 PL.11)

810243007はＫ－65の下棺である。非常にスマートで、最大径が口縁部にある大型甕形土器である。底部は厚く、平底を呈し、胴部最大径は中位下にある。胴部中位と頸部に各三条づつ沈線を巡らす。口縁部は頸部から大きく外反するが、短い。この部分に粘土帯を巡らし、口唇部を形成する。口唇部外面上下端には刻目を施し、内面はナデ仕上げである。口縁部はやや上向きに形成する。調整方法は、外面が箆研磨の後、ナデ仕上げを施し、内面がナデ仕上げを行っている。胎土は２～３㎜大の石英・砂粒を多く含む。焼成は良好で、色調は外面が灰褐色と褐色で一部に黒斑がある。内面は褐色と茶褐色を呈する。口径72㎝、器高89.5㎝、胴部最大径70.2㎝、底径15㎝である。

810243008はＫ－65の上棺に使用された大型甕形土器で、形態的には下棺に類似する。胴部中位の三条の沈線の幅が狭い点と口縁部の造りが異なる程度である。口縁部は下棺より緩やかに外反し、上端と側面に粘土帯を貼り付けている。口唇部は平坦面を造り、外面の上下端に刻目を入れるが、上端と下端は別々に施文されている。調整方法は外面が箆研磨の後箆ナデを施し、内面はナデ仕上げを行っている。色調は、外面が淡黄褐色と黒斑(36×34cm)で、内面は淡褐色を呈する。胎土は３㎜大の石英・砂粒を多く含む。口径77㎝、器高86.8㎝、底径16.2㎝、胴部径71.1㎝を測る。

K－66(810243009)(Fig.27 PL.14)

K－66は単棺であるためと遺存状態が非常に悪く、復元不可能であったため口縁部のみを図示した。頸部に三条の沈線を巡らせ、口唇部上下端に刻目を入れる。口唇部内側は平坦でなく内に入るタイプである。調整方法は外面がナデと篦研磨、内側がナデ仕上げを行っている。胎土は1～2㎜大の砂粒を多く含む。焼成は良好で、色調は内外面とも明褐色で外面の一部に黒斑を有する。

K－69(810243011・810243012)(Fig.25 PL.12)

K－69は上棺が壺形土器、下棺が甕形土器のセットである。810243011は下棺の大型甕形土器である。底部は平底で、胴部最大径は中位下にあり、形状は胴長を呈し、下位に安定感のある土器である。胴部中位からやや内傾しながら立ち上がり頸部まで達する。頸部で大きく外反し、口縁部は粘土帯を巡らせ嘴状の口唇部に仕上げている。口唇部外面上下端に刻目を施し、口唇部をやや上方に向けて仕上げる。胴部中位上と頸部下に三条の沈線を巡らす。胴部下位に内側から穿孔している。調整方法は外面が篦研磨、内側が刷毛目とナデ仕上げ。胎土は2～3㎜大の白色砂粒を多く含む。焼成は良好で、色調は外面の口縁部に赤色顔料がみられ、他は茶褐色及び暗褐色を呈し、内側は淡黄褐色を呈する。外面の口縁部と胴部沈線を中心に黒斑。口径59㎝、器高88.7㎝、底径16.0㎝を測る。

810243012はK－69の上棺である。口縁部・頸部等を打ち欠いた大型壺形土器であり、底部は欠損している。調整方法は、外面が篦研磨、内面がナデ仕上げを行っている。色調は、外面が淡灰黄褐色と一部に黒斑がある。内面は褐色を呈する。胎土は石英・白砂粒を多く含む。焼成は良好である。胴部最大径は56.0㎝、打ち欠き部分の径が42.6㎝、残存高26.1㎝を測る。

K－74(810243013・810243014)(Fig.25 PL.12・14)

K－74は上棺が鉢形土器、下棺が甕形土器のセットである。810243013は下棺の大型甕形土器である。底部は平底で、胴部最大径は中位にある。胴部からほぼ垂直に立ち上がり、頸部付近でやや内傾する。頸部からやや外反して口縁部に達し、口唇部形成のため粘土帯を巡らし嘴状を呈し、やや上方を向く。口唇部外面上下端に刻目を施すが、上下同時に行われるタイプである。胴部に三条、頸部直下に二条、頸部上に一条の沈線を施すが、沈線を見る限り新しいタイプである。調整方法は外面が篦研磨と底部に刷毛目を施し、内側が刷毛目とナデ仕上げ、底部で指オサエ痕が認められ、そのため器面が凸凹と成っている。胎土は1～2㎜大の白色砂粒と金雲母を多量に含む。色調は外面が淡黄褐色で、底部付近にコールタール状の付着物がある。内側は暗赤褐色を呈し、外面口縁部下より胴部にかけて一部に黒斑がある。口径61㎝、器高77.8㎝、底径14.5㎝、最大径は60㎝を測る。

810243014はK－74の上棺である。大型鉢形土器で、底部付近は欠損する。器形は口縁部が平坦面を持ちやや口唇部が下がり気味である。調整方法は、外面が篦研磨と刷毛目、内面が指オサエの後ナデ仕上げを行っている。胎土は1㎜前後の白色砂粒を多く含む。色調は内外面とも暗褐色を呈する。焼成は良好である。口径65㎝、残存高13.2㎝を測る。

K－76(810243015)(Fig.26 PL.12)

810243015はK－76の下棺で、大型甕形土器である。上棺は復元不可能であるため下棺だけ図示した。底部は平底でやや小さい。底部から外に大きく立ち上がり、やや内傾しながら胴部最大径に達する。そのまま内傾しながらほぼ垂直に立ち上がる。頸部は締まらず口縁部に達する。口縁部はL字状口縁を呈し、口唇部上下端に刻目を施す。形状的に新しいタイプである。調整方法は外面が刷毛目、内面がナデ仕上げを施し、外面に大きく黒斑が認められる。胎土は2～5㎜大の石英・砂粒を多く含む。色調は外面全面に煤が付着し、黒赤褐色を呈する。内面は明赤褐色を呈し、焼成は良好である。口径69.5cm、器高87.8cm、底径12cm、胴部最大径69cmを測る。

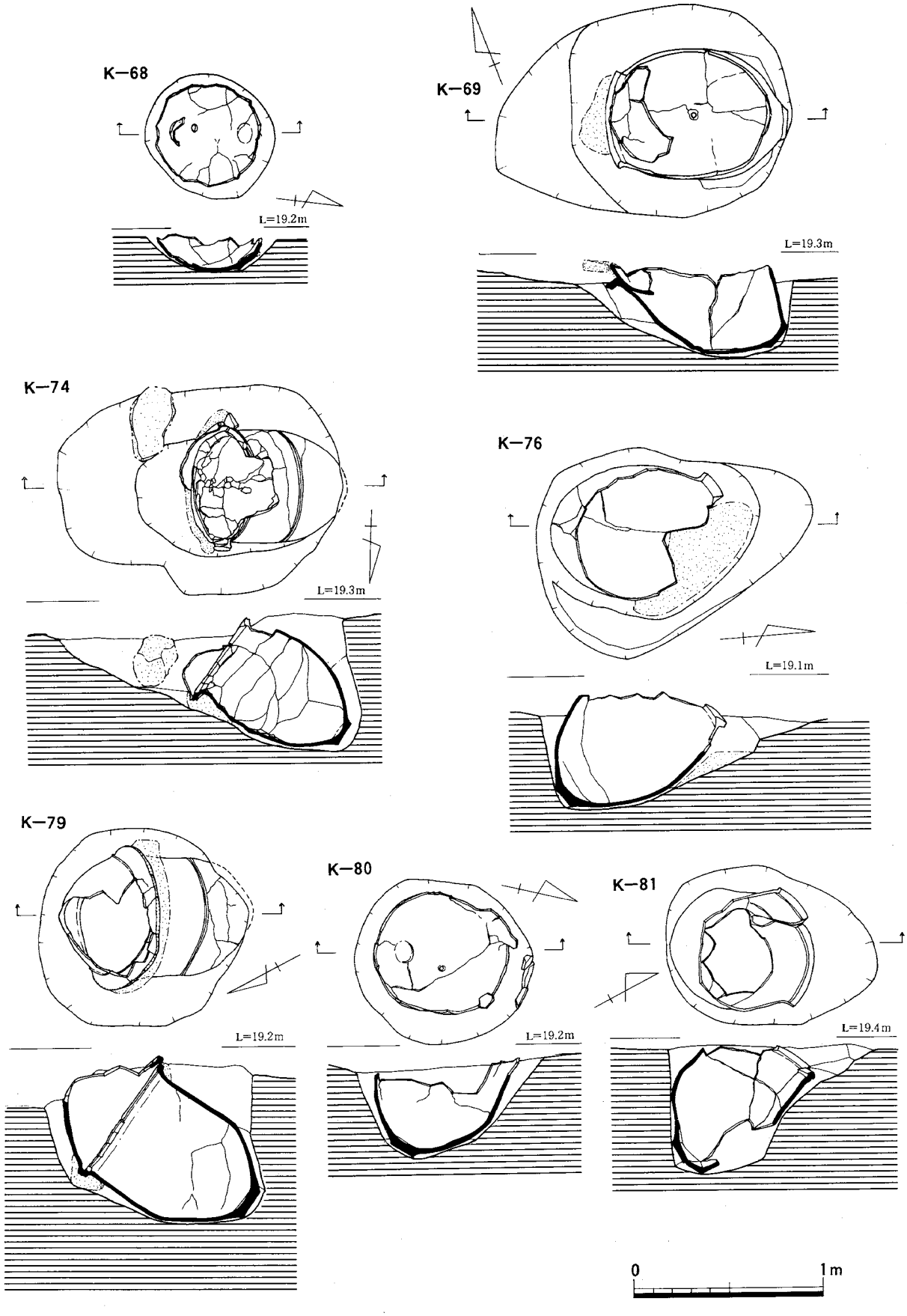


Fig.22 第一次調査IV区甕棺墓実測図－2（縮尺1/30）

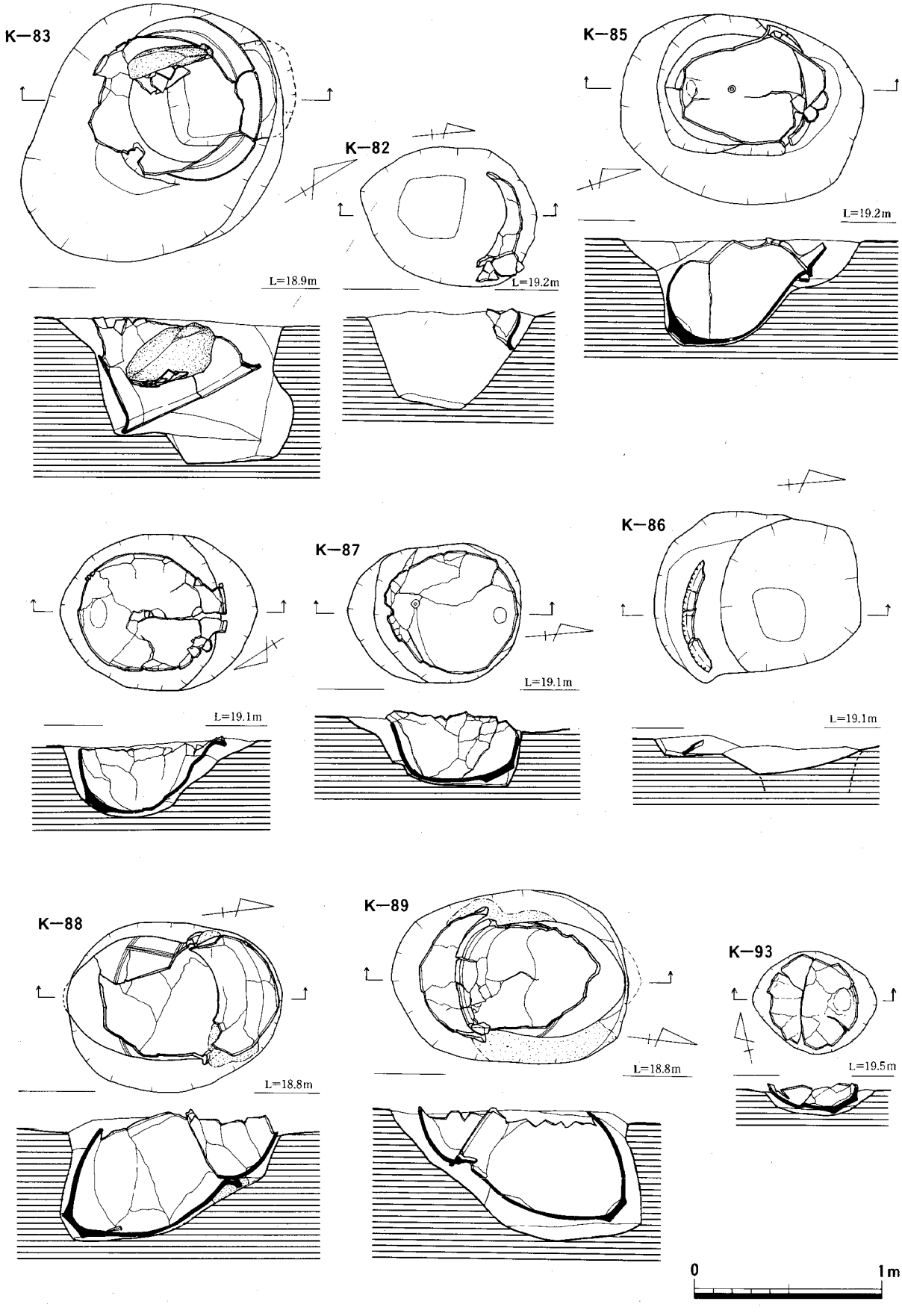


Fig.23　第一次調査IV区甕棺墓実測図－3（縮尺1/30）

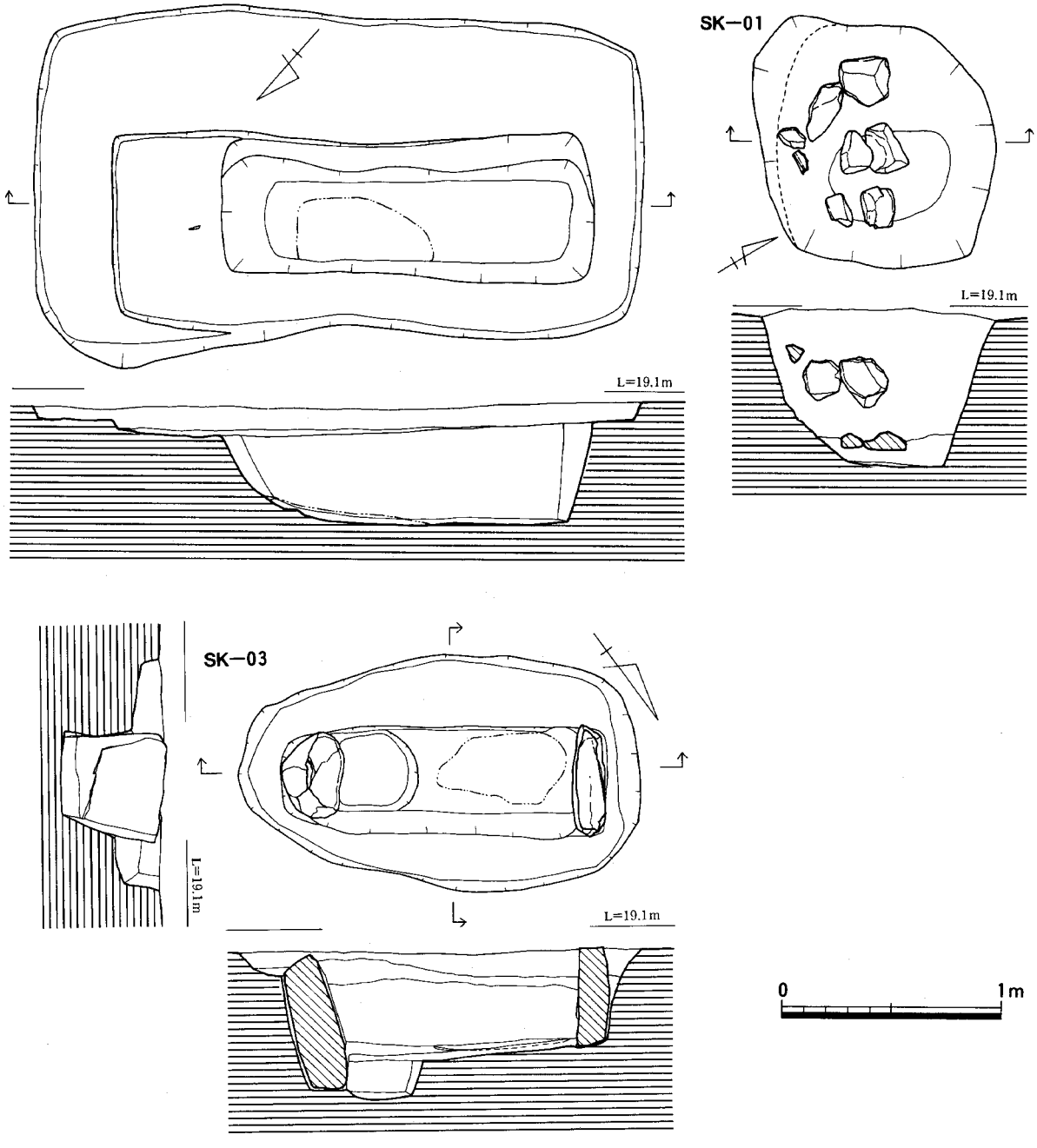


Fig.24　第一次調査Ⅳ区木棺墓・土壙実測図(縮尺1/30)

K−79(810243016・810243017)(Fig.26 PL.12)

810243016はK−79の下棺で大型甕形土器である。底部が不明であるが、胴部形状がいびつである。胴部最大径は中位下にあり、この部分からやや内傾しながら垂直に立ち上がり頸部に達する。頸部から大きく外反し、その部分に粘土帯を貼り付け口縁部とする。口縁部は平坦面を呈し、口唇上下端に箆状工具による刻目を施す。頸部下と胴部中位に各々三条の沈線を巡らす。調整方法は外面上部がナデ、下部が3.5cm前後の幅を持つ板状工具による刷毛目を施し、内面は、幅4cm大の工具によるナデで、下から上方へのナデが認められ、上方は横方向の刷毛目を施す。胎土は2～3mm大の白色砂粒を多く含む。色調は外面が暗褐色を呈し、胴部中位に丹塗りと思われる明赤褐色部分が残る。また、黒斑も点在する。内面は明褐色を呈する。口径65.5cm、残存高80cmを測る。

810243017はK－79の上棺で、大型鉢形土器である。底部は平底である。頸部下に一条の三角突帯を巡らせ、頸部から口縁部にかけてやや外反する。内側口唇部はつまみ出され、端部はやや上方に傾く形状を呈する。口唇部外面上下端に刻目を施す。調整方法は、外面が箆研磨の後ナデ仕上げ、内面ナデ仕上げを行っている。胎土は２～３㎜大の砂粒を多く含む。色調は、外面が明褐色と大きな黒斑が認められ、内面が茶褐色を呈する。口径73.2㎝、器高36.4㎝、底径14.3㎝を測る。

K－80(810243018)(Fig.27)

K－80は大型甕形土器であるが、遺存状態が悪く上甕口縁部のみを図示した。口唇部が平坦面を有する形態で、外面上下端に刻目を施す。調整方法は器面が著しく磨滅しているため不明。胎土は４～６㎜大の砂粒を多く含む。色調は内外面とも濃い黄褐色を呈する。

K－81(810243019)(Fig.26 PL.13)

81024319は大型甕形土器を使用している。本来底部まで遺存していたが、底部・胴部が不明で口縁部と胴部の一部を図示した。胴部は張らず頸部までやや内傾しながら垂直に立ち上がる。口縁部はあまり外反せず、内側に粘土帯を巡らせ成形している。口唇部外面下端を少しつまみ出し、内側には粘土帯による成形を行う。調整は、外面が箆研磨を施し、口縁部付近がナデ仕上げである。内面は口縁部付近でナデと刷毛目、他はナデ仕上げ。胎土は石英・白砂粒を多く含む。色調は外面が茶褐色で、二ケ所に黒斑がある。内面は淡黄褐色を呈する。口径66㎝、胴部径66.3㎝、残存高40㎝。

K－82(810243031)(Fig.26 PL.14)

810243031は大型甕形土器の口縁部のみで、他は欠損している。胴部から垂直に伸び、頸部で緩やかに外反する。口唇部に粘土帯はなく、外側上下端に刻目を施すが、上端と下端の刻目の方向が異なる。頸部下に二条の沈線を巡らす。調整は外面の摩滅が著しく不明。内面の一部にナデ仕上げを行っている。胎土は3～4mm大の砂粒を多く含み、特に５～６㎜大の石英が多い。色調は外面が明黄褐色と黒班、内面が明褐色を呈する。口径60.2㎝、残存高19.7㎝。

K－83(810243020)(Fig.27 PL.14)

810243020は倒置棺として利用された大型甕形土器である。復元不可能であったため口縁部のみを図示した。胴部から外反しながら頸部でさらに外反し、口縁部を丸く納めるが、内側端部はつまみ出され嘴状を呈する。この部分と外面上下端に刻目を施す。頸部下に二条の沈線を巡らす。調整は外面がナデと箆ミガキ、内面が箆状工具によるナデを施している。胎土は２～３㎜大の砂粒と金雲母を多く含む。色調は内外面とも明黄褐色を呈する。

K－84(810243021)(Fig.27 PL.14)

810243021はK－84の成人棺と思われるが、上棺の痕跡がなく、一応単棺とした。遺存状態が悪く甕形土器の口縁部しか図示できなかった。頸部から大きく外反し、口縁部上端に粘土帯を巡らせる。口唇部上下端に刻目を施す。外面に煤が付着している。調整は内外面ともナデ仕上げである。胎土は３～４㎜大の砂粒を多く含む。色調は外面が明褐色、内面が褐色を呈する。

K－85(810243022・810243023)(Fig.13 PL.13)

K－85は甕と甕のセットである。810243022は下棺に使用された大型甕形土器である。底部は上底で分厚い。底部から大きく外に外反し、胴部下位で立ち上がり、そのまま垂直に頸部まで達する。頸部から緩やかに外反して口縁部に達する。口縁部には粘土帯がみられず外面上下端に細かい箆状工具による刻目を施すが、刻目は上下の向きが逆で羽状文風になっている。調整方法は、外面が刷毛目を施した後、箆研磨を行ったと思われるが、摩滅のため不明瞭である。底部に刷毛目が残る。内面は指オサエ・指ナデの後、板状工具によるナデ仕上げを行っている。口縁下は横方向で、その下位は斜め

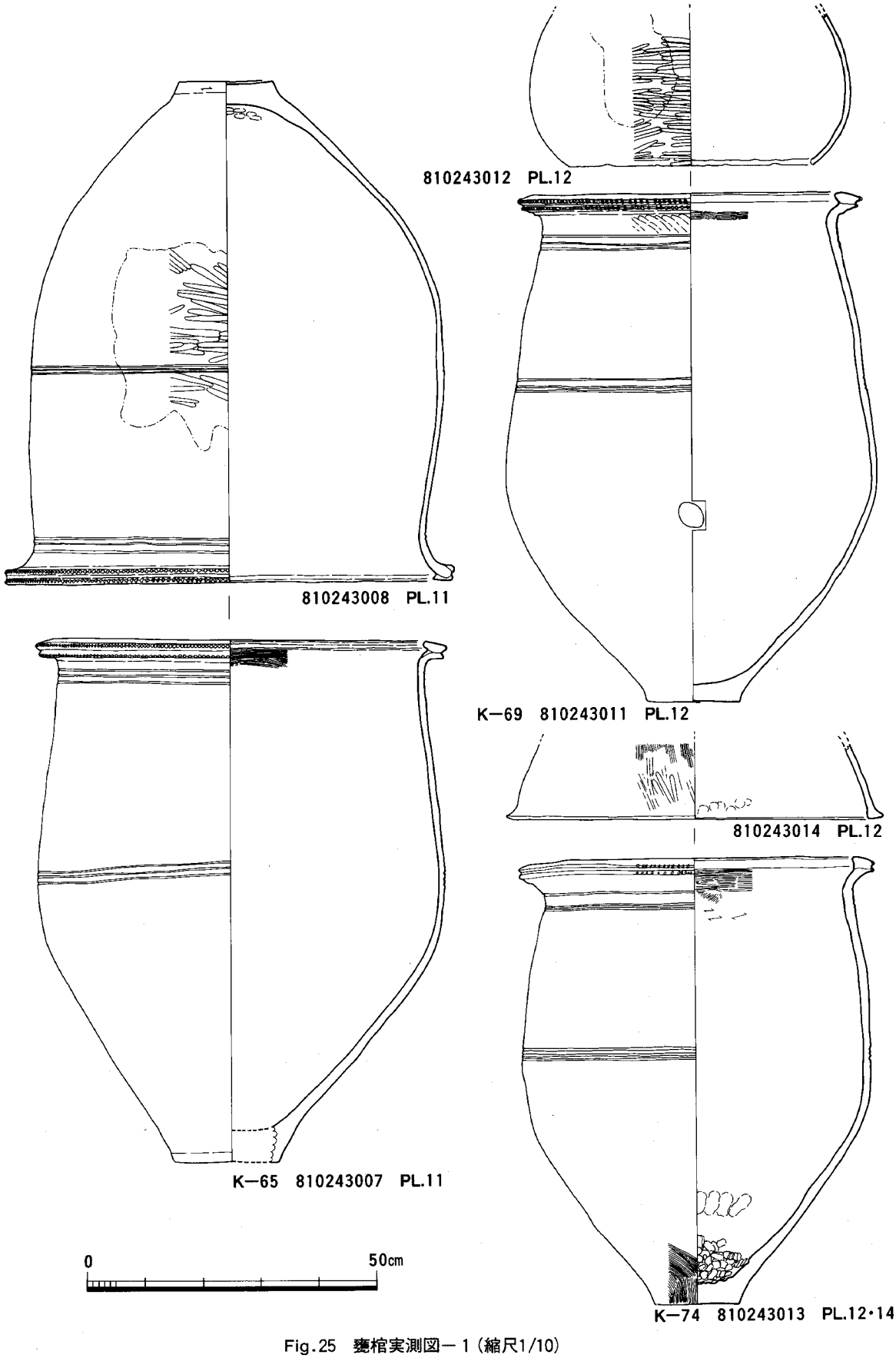


Fig.25 甕棺実測図－1（縮尺1/10）

方向（右下がり）である。胎土は２～３㎜前後の白色砂粒を多く含む。色調は、外面が淡黄褐色で胴部下半に黒班がみられる。口径は65㎝、器高77㎝、底径12㎝を測る。

810243023は形態・調整方法等はまったく同じものである。胎土は石英・白砂粒を多く含み、色調は内外面とも淡黄褐色を呈する。口径63㎝、残存高20.3㎝を測る。

Ｋ－86(810243024)(Fig.27 PL.14)

810243024はＫ－86に使用された大型甕形土器の口縁部のみを図示した。頸部から大きく外反し口縁部に達するが、口縁部内面に粘土帯を貼り付けている。口唇部外面上下端には方向の違う刻目が施されている。口縁下には二条の沈線を巡らす。調整方法は横ナデで仕上げている。胎土は大粒（３～５㎜)の砂粒と金雲母を多量に含む。色調は内外面とも明黄褐色を呈する。

Ｋ－88(810243026・810243027)(Fig.27 PL.13)

Ｋ－88の下棺からは細型銅剣が出土した。第一次調査で甕棺墓128基を検出したが、このＫ－88のみに細型銅剣の切先が出土している。ただ第四・五・六次調査から副葬品として出土した銅剣とは異なり、切先部分だけであることが意識的に副葬されたものではなく、埋葬者に付随して出土した物と考えられる。つまり銅剣によって死に至り、銅剣の切先が破損して体内に残ったと考えられる。

甕棺墓も他の甕棺墓より大きく、甕自体も第四～六次調査から副葬品を持つ甕棺墓に類似し、甕自体の文様・形態が同一である。Ｋ－88は壷と甕との組合せである。

810243026はＫ－88の下棺である。大型甕形土器を使用する。底部はやや上底で、底部から内傾しながら胴部中位まで立ち上がる。最大径が胴部中位にあり、この部分から内傾しながら頸部に向けて絞まりながら頸部に達する。頸部から緩やかに外反し、口唇部内側に粘土帯を貼り付ける。外面上下端に同一方向から施文された刻目を施す。沈線は、頸部に三条、胴部中位に三条を巡らすが、この上下の沈線に縦方向の沈線四条が交差し、これが七ケ所に配置される。この型式の甕型土器は第Ｉ次調査ではＫ－89の下棺にあるだけである。調整方法は外面が箆研磨、内面がナデ仕上げを行っている。胎土は石英・小石等を多量に含む。色調は全体に黒ずんだ灰褐色を呈し、他の甕形土器とは異なる。内面も黒ずんだ黄褐色を呈する。外面に黒班が認められる。口径66.6㎝、胴部最大径が68.4㎝、底径16.5㎝、器高84.7㎝を測る。

810243027はＫ－88の上棺で、大型壷形土器を口縁部・頸部打ち欠いた状態で使用したものである。底部は欠損してないが、胴部最大径は65.8㎝を測り、打ち欠き部分の径は44.2㎝である。内外面とも箆研磨を施している。胎土は石英を多量に含み、色調は内外面とも黄褐色を呈する。

Ｋ－89(810243028・810243029)(Fig.27 PL.13)

810243028はＫ－89の下棺で、大型甕形土器を使用している。形態的にはＫ－88下棺と非常に類似している。底部はわずかに上底で、外反しながら胴部中位に達する。胴部中位から内湾しながら頸部に達し、口縁部は緩やかに外反する。口唇部内側に粘土帯を巡らせ、上端は平坦面を形成する。口唇部外面上下端には同じ方向からの刻目を施している。頸部と胴部中位上に各々三条の沈線を巡らすが、この他にＫ－88下棺と同じく縦方向に四条の沈線を計七ケ所配置する。調整方法は、外面箆研磨とナデで底部に縦方向の刷毛目を施す。内面はナデ仕上げと底部に指オサエ痕が残る。胎土は２～３㎜大の砂粒を多く含み、金雲母や５㎜大の石英・長石も含む。色調は外面が明赤褐色を呈する。口径は67㎝、器高87.8㎝、底径15.6㎝を測る。

810243029はＫ－89の上棺で、大型鉢形土器を使用している。底部は欠損してない。頸部下に二条の三角突帯を巡らせ、口縁部は平坦面を有し、口唇部は平行に引き伸ばす。調整方法は、内外面とのナデ仕上げを施す。胎土は２～３㎜大の石英・白砂粒を多量に含む。色調は内外面とも明褐色を呈す

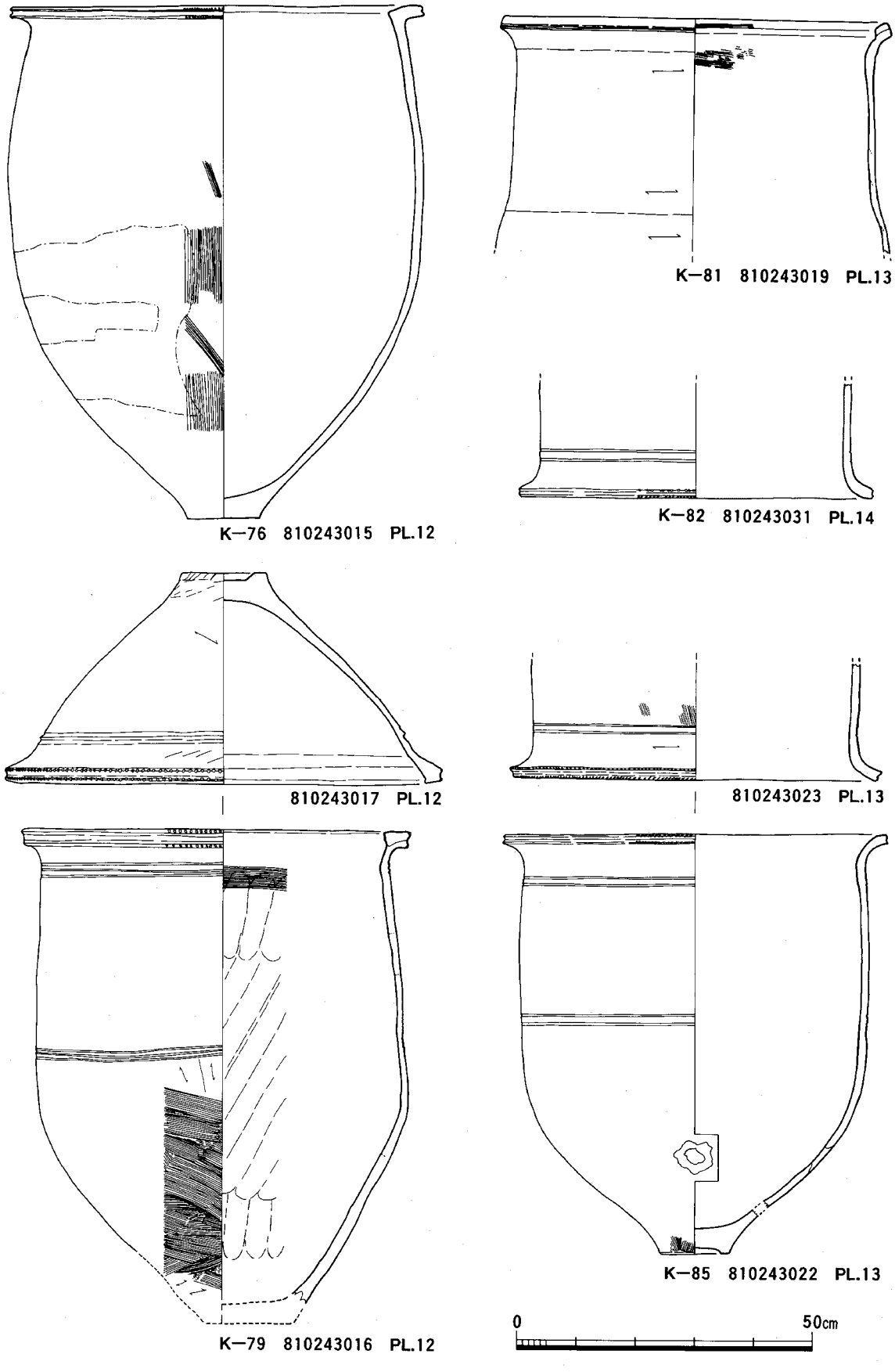


Fig.26 甕棺実測図－2（縮尺1/10）

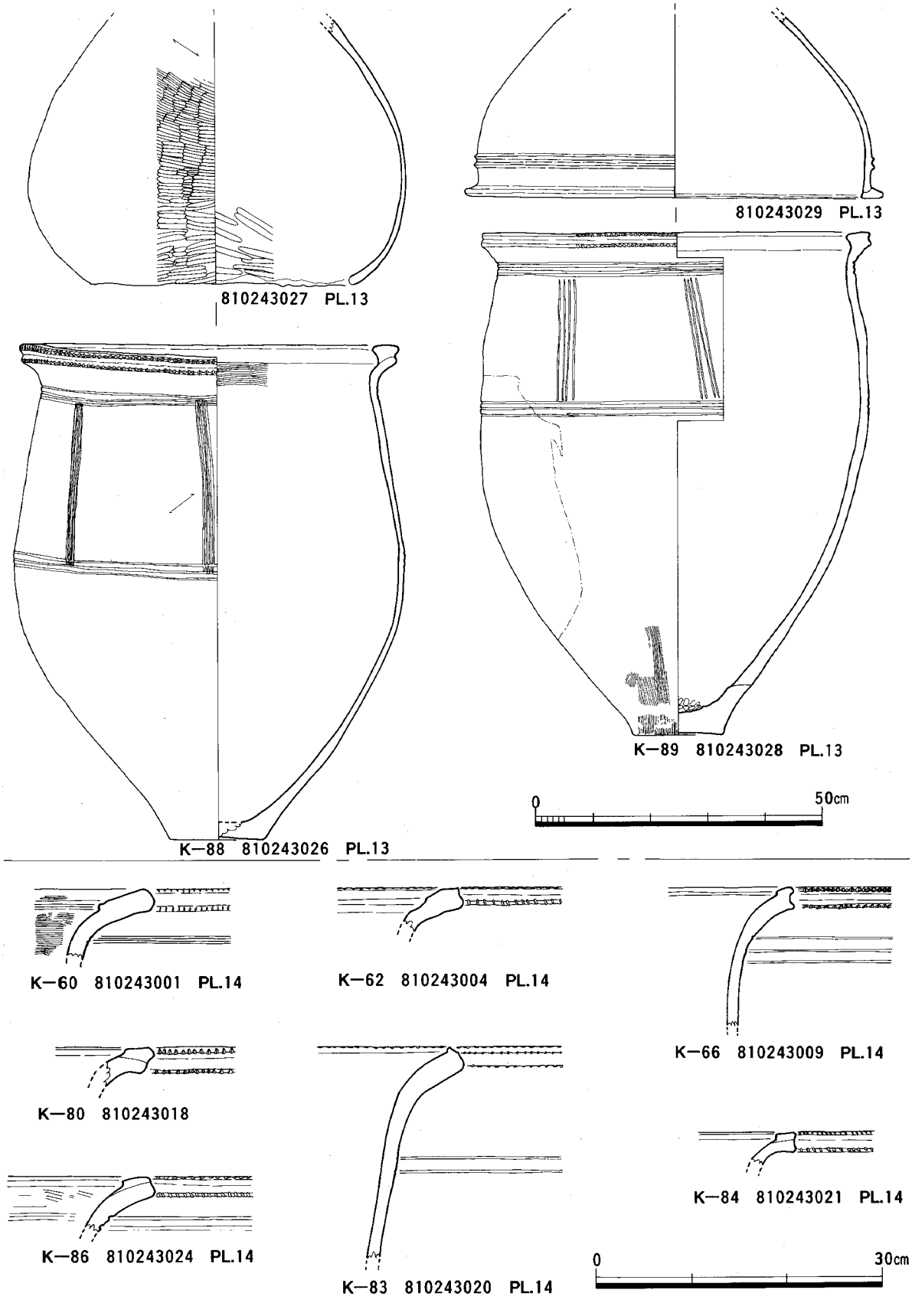


Fig.27 甕棺実測図－3（縮尺1/6,1/10）

る。口径73cm、残存高31.7cmを測る。

副葬品

細形銅剣切先(810243033) (Fig.28 PL.6・15)

K－88甕棺墓内の下棺中央部より、先端を下に向けて張り付いた状況で出土した。先端部は欠損してないが、先端部より12.5cmで折れている。保存状態は良好で、一部青錆はなく黄銅色を呈している部分もある。特に中央部にその部分が多く見られた。研ぎの痕跡が明確に残り横方向以外に縦方向も見られる。

全体に細身で宇木汲田遺跡12号甕棺墓出土の銅剣に類似する。

先端部から約9cmで樋の先端部となり、鎬は菱形を呈し、樋は深く鋭利に仕上げている。ただ裏面の樋の長さは不揃いである。刃部が鋭利に仕上げられ、研ぎも丁寧に施されている。先端だけであるため、銅剣か銅戈かは判断しにくいところであるが、細身で断面形状から細形銅剣の範疇に入ると思われる。現存する長さは115cm、幅2.6cm、0.9cm、厚さ0.7cm、0.2cmを測る。

K－60副葬品(810243032) (Fig.28 PL.15)

K－60の墓壙内より出土した。底部は上底の小型壷形土器である。胴部が張り頸部は締まる形状を呈し、頸部に三角突帯を巡らす。口縁部は欠損してない。調整は外面箆ミガキを施し、外面の一部に黒班が認められる。胎土は1～2mm大の石英・白砂粒を多量に含む。色調は内外面とも明褐色を呈する。最大径12.2cm、残存高9cm、底径2.8cmを測る。

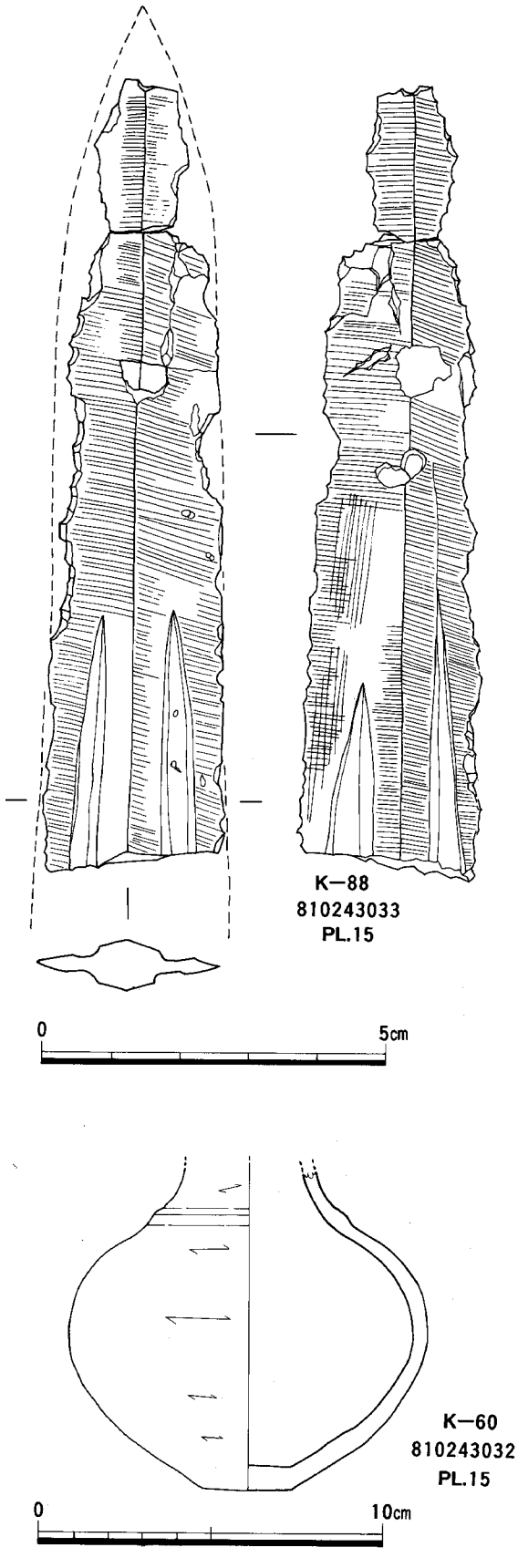


Fig.28 遺物実測図(縮尺1/1,1/2)

第三章　第二次調査－弥生時代の墓地の調査－

第一節　第二次調査の概要

飯盛地区圃場整備に伴う発掘調査

所在地　　：　福岡市西区飯盛字本名地区

圃場整備面積　：　61ha

発掘調査対象面積：　7.8ha

発掘調査面積　　：　2.1ha

発掘調査年月日　：　昭和57年9月15日～58年2月15日

試掘調査の結果、約６haに遺構を確認し、その内の約４haについては盛土、2.1haが削平することとなり、発掘調査面積を2.1haとした。調査区は五ケ所となり、第二次調査はＶからＸ区の調査区を設定した。Ｖ・Ⅵ区が3,400㎡、Ⅶ区が3,300㎡、Ⅷ区が2,800㎡、Ⅸ区が7,100㎡、Ｘ区及び道路・水路部分の調査で4,168㎡、計20,768㎡を調査した。

Ｖ・Ⅵ区の調査

検出された主な遺構は、縄文時代後期初頭の貯蔵穴、弥生時代中期の溝・掘立柱建物と奈良時代の溝である。

縄文時代後期の遺構

貯蔵穴を47基検出した。中央部に柱・柱痕を残すものが約半数ある。最大の物はＳＴ－16で、径3.9ｍ、深さ1.6ｍである。最小のものはＳＴ－38で、径1.9ｍ、深さ1.8ｍである。形状は擂鉢状やわずかに袋状を呈するもの、ほぼ垂直に立ち上がるものの三種類に大別できる。出土遺物は土器のほか種子(ドングリ等)が約半数の貯蔵穴から出土した。土器形式は後期初頭に比定される鐘崎式土器、北久根式土器を中心に出土している。早良平野で縄文時代後期初頭の遺構が発見されたのは有田遺跡についで二例目である。

弥生時代中期の遺構

五条の溝と掘立柱建物一棟を検出した。溝は台地を北西から南東に切断するＳＤ－10にＳＤ－11・12が流れ込む状態で検出された。ＳＤ－10の南東端は台地が段落ちする部分まで続く形状を呈する。土器は多量に出土し、特に祭祀用に使用された丹塗りの高杯形土器・甕形土器・壺形土器が多い。

ＳＤ－10は幅３ｍ、深さ1.5ｍの大溝であり、溝より多量の土器と共に三叉鍬・平鍬の柄・用途不明の木器が出土した。ＳＤ－11が幅1.9ｍ、深さ0.4ｍ、ＳＤ－12が幅2.5ｍ、深さ0.7ｍである。掘立柱建物は2間×2間の建物で、ＳＤ－１１に囲まれた中に検出した。

Ⅶ区の遺構

弥生時代中期の遺構と中世の遺構を検出した。

弥生時代の遺構

溝五条・甕棺墓1基・掘立柱建物2棟・ピット多数を検出した。溝はＳＤ－14・15・16・17・18が弥生時代中期に属する。ＳＤ－14は調査区中央部の約6ｍに出入口が設けられ、両側に巡る環濠である。ＳＤ－16はＳＤ－13の下層から検出したもので、二叉・三叉鍬や浮子等が出土した。

甕棺墓はただ１基のみしか検出されていない。時期は弥生時代中期に属する。遺構が散発的にあるため理解しやすいが、甕棺墓が１基だけしか検出されないところが、不可解である。

IX区
VIII区
0

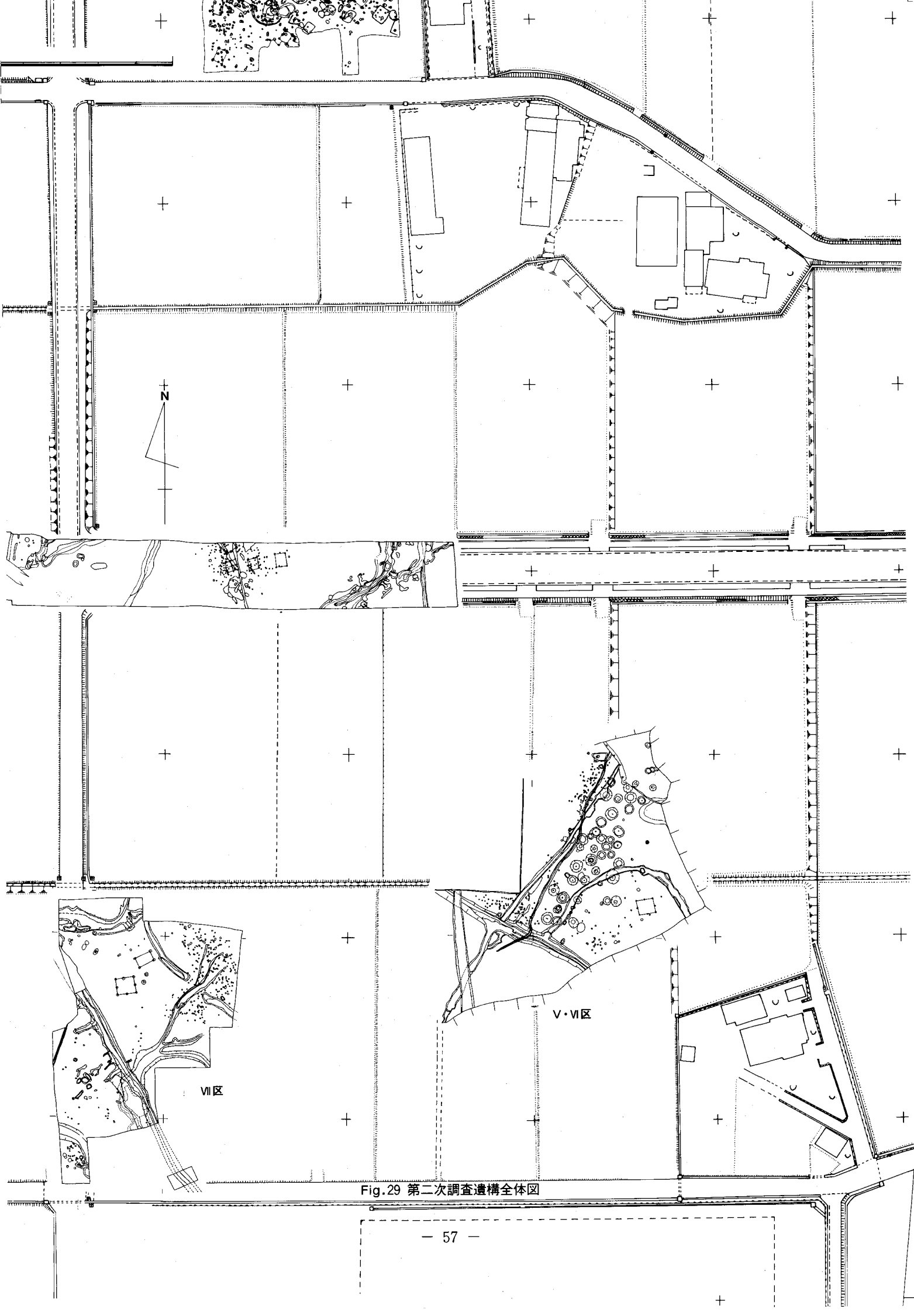
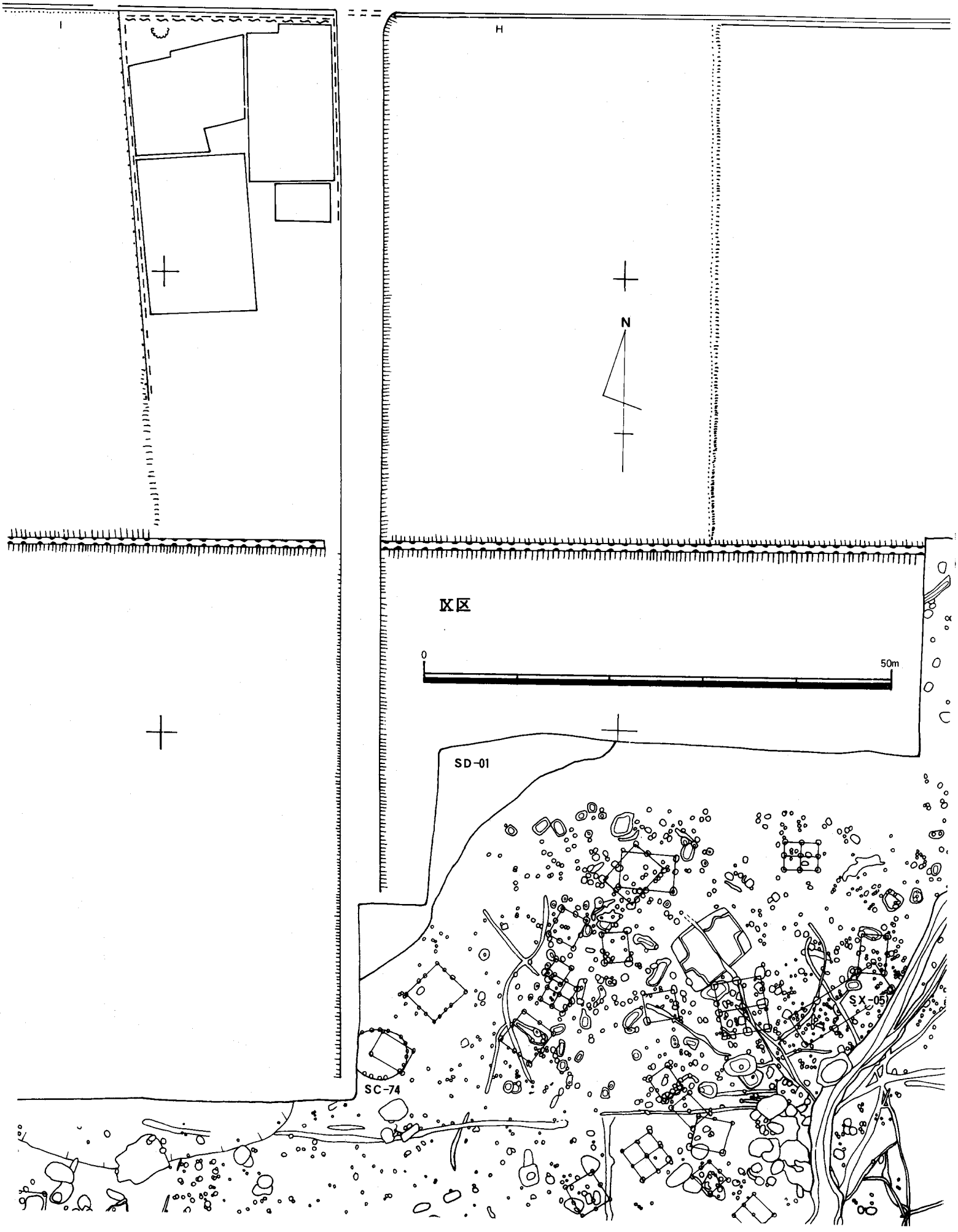


Fig.29 第二次調査遺構全体図


I
H
N
Ⅸ区
0
50m
SD-01
SX-05
SC-74

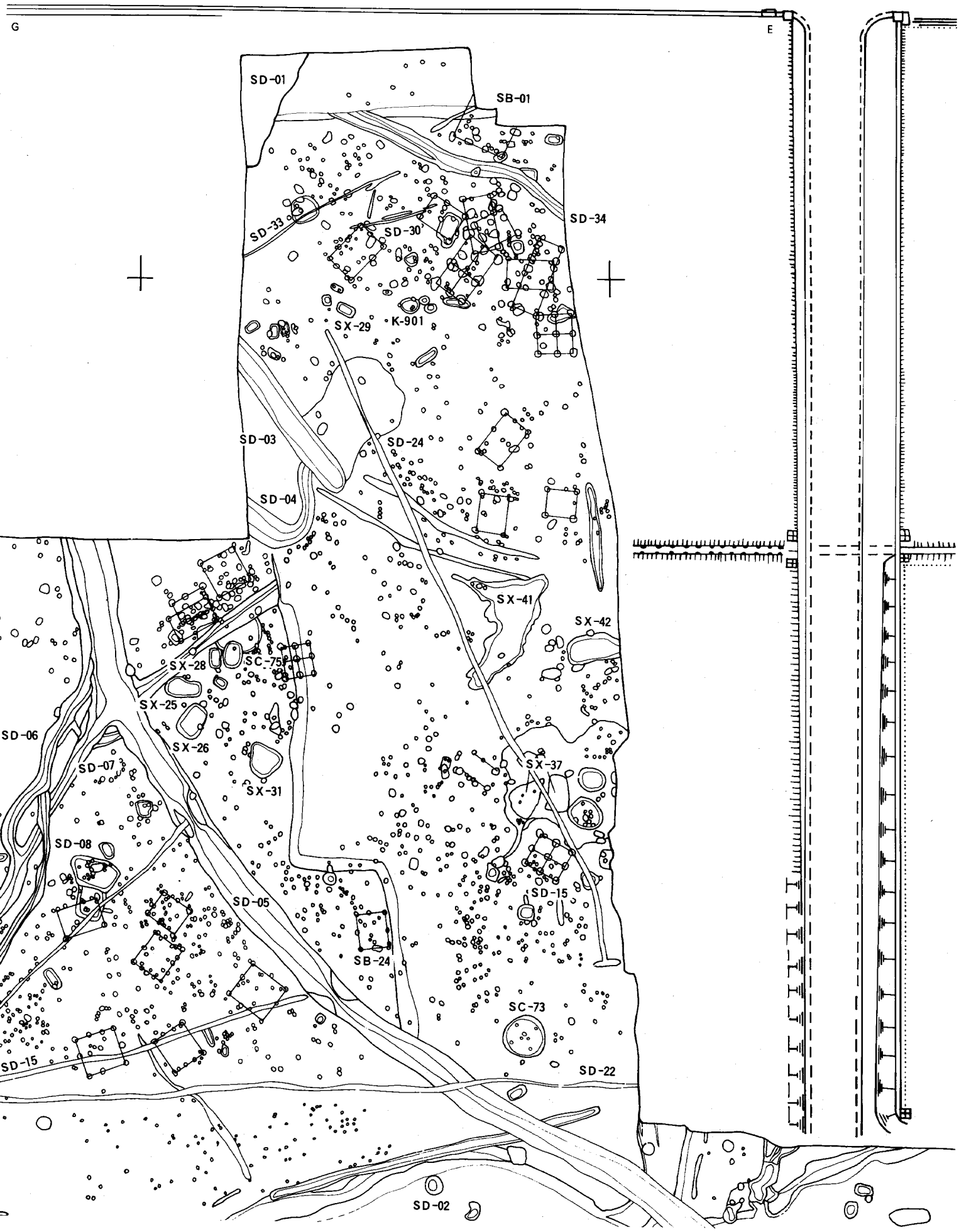


Fig.30 第二次調査遺構配置図（IX区）（縮尺1/500）

1．Ⅸ区検出の甕棺墓

Ⅸ区の概要

Ⅸ区は7,100㎡を発掘調査した。Ⅸ区はＳＤ－01(旧河川：おそらく旧日向川及びその支流と思われる)ＳＤ－02(ＳＤ－01と同様に旧河川)に挟まれた台地に弥生時代前期から古墳時代前期にかけての遺構が重複している。特に弥生時代の遺構はⅨ区全域に広がっている。この台地を三分する溝四条(ＳＤ－05～08)がある。この四つの溝は合流してＳＤ－05となりＳＤ－01に流れ込む。これによって台地が三分される。時期は弥生時代後期に形成され、合流地点には堰状遺構が検出された。

ＳＤ－01は第一次調査のⅣ区から検出された旧河川の上流部分に位置し、時期はⅢ区の下層で出土した遺物から弥生時代前期～中期初頭と考えられる。

弥生時代の遺構

弥生時代の遺構としてＳＤ－01～08・24・30・34の十二条の溝と円形住居址3軒、掘立柱建物40棟、甕棺１基を検出した。

弥生時代中期に比定できる遺構は、ＳＤ－01～04・24・30・31・34の溝状遺構と円形住居址３軒、掘立柱建物19棟であり、中央部には殆どなく東西・北側に配置されている。

北側から検出された遺構のうち、ＳＤ－03・04はＳＤ－01に流れ込むものである。

第一次調査のⅣ区検出遺構は、その殆どが弥生時代前期から中期に比定でき、第二次調査のⅨ区とは道路幅15mを挟む距離しかなく遺構的には、同一時期のものが多い。しかしながらＳＤ－01がその間を切断する形で検出されている。北側にある掘立柱建物12棟と第一次調査のⅣ区の方形住居址・円形住居址・甕棺墓との関連性を考えなければならず、ＳＤ－01を大きな環濠として考え、住居址と掘立柱建物とを区域によって区別した可能性が考えられる。

南東の円形住居址と三棟の掘立柱建物はセットとして考えられるが、ＳＢ－13はあまりにも離れすぎている。むしろＳＣ－75とのセットとして考えられる。

西側は円形住居址１軒と４棟の掘立柱建物で構成される。住居址と掘立柱建物との距離が多少気にかかるが、建替え等を考えた時、ほぼ妥当な数であろう。

弥生時代後期に比定できる遺構は、ＳＤ－05～08・24の溝状遺構と掘立柱建物19棟である。全体的に中央部から西側に位置し、溝によって三つに分けられる。溝はＳＤ－05が中心で、他はＳＤ－05に流れ込む形状を呈している。又、このＳＤ－05はＳＤ－01・02とを結ぶ溝であり、ＳＤ－01から流れ出た水を堰状遺構で一時せき止め、この水をＳＤ－02に流し込む水路である。掘立柱建物は北側に３棟、南側に６棟、西側に９棟あるが、このうちＳＢ－31の３間×２間の掘立柱建物は規模・広さとも他の掘立柱建物をしのぐものである。

（1）甕棺墓

北側のＳＤ－01とＳＤ－34に挟まれた区画から1基だけ検出した。Ⅸ区自体かなりの削平を受けているところから、Ｋ－901自体も遺存状態は悪く、約2/3が消滅し、残っているのは、胴部・底部のみであった。主軸はN-72°30′-Wで底部角度は40°である。墓壙の大きさは68㎝×62㎝×26㎝で、中央部に穿孔がある。

Ｋ－901(823493001)（Fig.31 PL.8）

口縁部を欠損するが、頸部に一条の沈線が巡り、最大径が胴部上位にくることから前期大型の甕形土器で、底径15㎝を測る前期末の甕棺である。

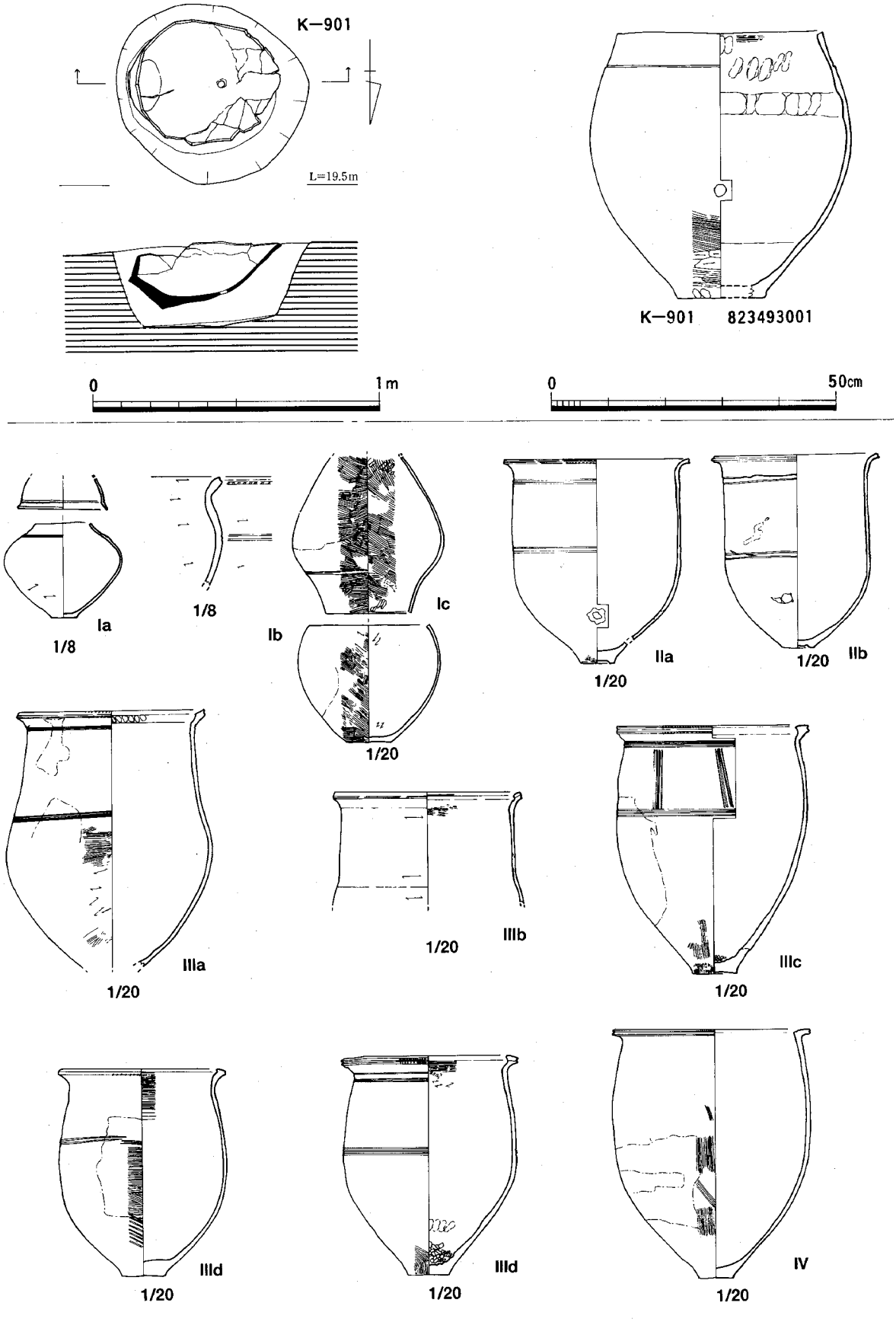


Fig.31 IX区甕棺墓配置・実測図、形式分類(縮尺1/8、1/10、1/20)

第一・二次調査のまとめ

第一次調査検出甕棺墓について

第一・二次調査から検出した甕棺墓の内、今回報告した甕棺墓に使用された甕形土器・壺形土器の形態分類を行った。形態分類の要素として口縁部の形態、沈線、底部の形状等を主として分類している。Ⅰ型～Ⅳ型まで分類し、Ⅰ型をａ～c、Ⅱ型をa,b、Ⅲ型をa～d、Ⅳ型をaに細分した。

Ⅰa型　壺形土器そのもので、口縁部を打ち欠いている。胴部上位に二条の沈線を巡らせる。底部は平底で、最大径は胴部中位にある。K-44下棺に使用されている。K-36下棺もこのタイプである。

Ⅰb型　壺形土器の形状を残すもので、頸部がやや締まり口縁部が外反する如意形を呈する。胴部に二条の沈線を巡らし、口縁部外面下端に刻目を施す。内外面とも篦ミガキを施し、K-15上棺に使用されたタイプである。

Ⅰc型　K-9を標準とするタイプで、壺形土器の形状を残し、大型化してくる。口縁部は欠損しているが、頸部が締まる。おそらく口縁部は如意形を呈すると思われる。胴部に一条の沈線を巡らし、最大径は胴部上位(58cm)にある。調整方法は、内面全体に刷毛目施行と口縁部下には指オサエが認められる。外面は、篦による研磨が全面に施されている。K-22,27が同タイプである。

Ⅱ型　基本的には如意形口縁を呈し、口唇部の粘土帯は貼り付けない。刻目によりa,bに細分した。

Ⅱa型　基本的には、K-85下棺の形式で、底部が上底、胴部がほぼ垂直に立ち上がり口縁部で外反する如意形を呈する。胴部中位と頸部下に各々二条の沈線を巡らす。口縁部外面上下端に刻目を施す。口径60～65cm、器高60～72cm、底径13cm前後である。K-3下棺、K-23下棺、K-82・85上棺がある。

Ⅱb型　形態的にはⅡa型とほぼ同じであるが、口縁部外面をⅡa型より摘み出し端部に刻目を施さない。K-26がその代表である。本来は刻目を施さないだけで、Ⅱa型に属するものである。

Ⅲ型　如意形の口縁部に粘土帯を貼り付ける形態をⅢ型とした。貼り付ける部位・形態から４種に分類した。

Ⅲa型　如意形の口縁部内側に内向する形で粘土帯を貼り付け、また、外側頸部までに薄く粘土帯を貼り付ける。このため口縁部は厚くなり外側頸部付近に段及び沈線を巡らし、胴部上位にも二条の沈線を巡らしている。口唇部外面に刻目を施す。このタイプに属する甕棺はK-46上棺、K-4副葬品、K-17、60、62、66、86で、このタイプが今回の調査で二番目に多く出土している。

Ⅲb型　K-81にみられるタイプで、内側だけに粘土帯を貼り付け、口縁部があまり外反しない。口唇部の刻目もなく、胴部の張りもなく壺の要素をまだ残している。口径64cm、器高90cm程度。

Ⅲc型　如意形口縁部の先端に粘土帯を貼り付け端部を平坦にするタイプである。胴部はくびれることなく内湾しながら頸部まで達し、壺形土器の要素は全く無くなる。底部は僅かに上がるタイプで口径67cm、器高85cm、底径16cm程度が平均である。沈線は頸部下と胴部上位にそれぞれ二～三条巡らす。K-88・89は各々三条づつの横方向の沈線の他に縦方向に四条の沈線を四ケ所施す。このタイプの棺はK-2下棺、3・65上棺、79・80・84・88・89下棺で、このタイプが一番多く出土している。

Ⅲd型　口縁部の粘土帯の貼り付けが上方を向くタイプで、Ⅲa,cより小型である。内側が嘴状を呈し、底部は平底である。口唇部外面には刻目を施し、胴部・頸部に沈線を巡らせる。K-1・6、16・65・69・74・83の下棺がこのタイプである。

Ⅳ型　K-76下棺の１個体であるが、口縁部が「L」字状口縁を呈するタイプである。口唇部上下端に刻目を施すタイプである。口径70cm前後、器高88cm前後でⅠ～Ⅲ型より一回り大きい。

以上、Ⅳ類に分類したが、Ⅳ型を除いて前期の範疇に納まる。Ⅳ型については、次年度の中期甕棺墓の中で分類を行いたい。

第四章　第四・五次調査報告

概　要　第四・五次調査地点は、吉武遺跡群の南端に位置し、西から東に緩やかに傾斜する扇状地上に展開する墓地群である。この墓地群は、弥生時代前期末から後期前半までの時期に形成されており、大きく4群に区別されるが、調査区西側は第六次調査の吉武大石地区の大部分を占める「甕棺ロード」の南半部付近にあたり、墓地として連続分布しており、金海式タイプ甕棺を初源として中期甕棺を主体にした墓地構成となっている(第Ⅲ区)。甕棺墓500基、土坑墓30基が検出された。また、東側は、

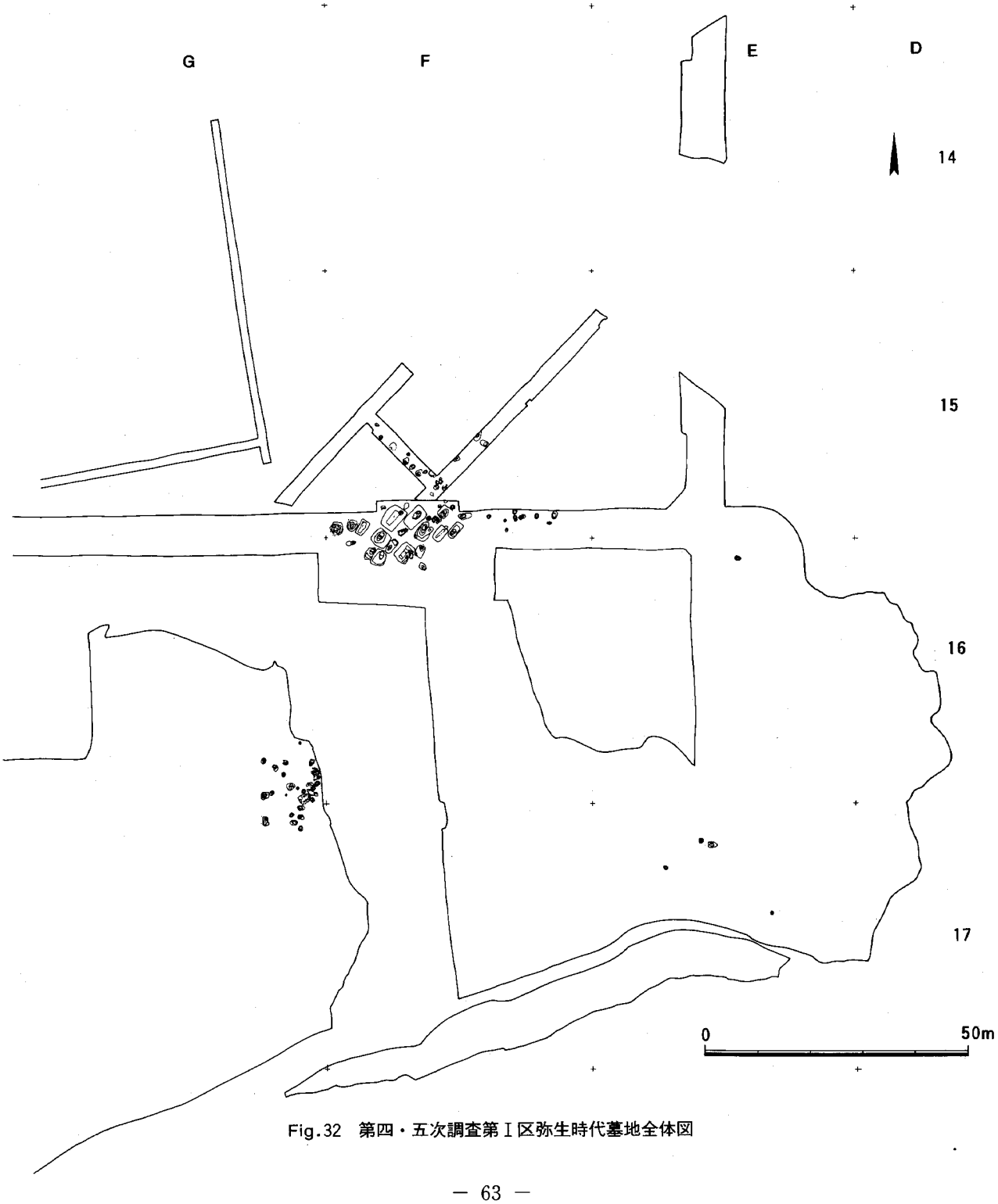


Fig.32　第四・五次調査第Ⅰ区弥生時代墓地全体図

浅い谷を挟んで東側に延びる舌状の丘陵上に3群が分布する。最も東側地点(第Ⅰ区)では、前期末～中期前半までの甕棺墓50基、木棺墓4基等が検出され、金海式タイプ大型甕棺7基・木棺墓4基には青銅武器や多紐鏡・装身具が数多く副葬され、前期末期の厚葬墓として突出している。更に西側の比高差数mをもつ丘陵上で前期末～中期前半の2群55基が見つかった(第Ⅱ区)。

今回報告では第四・五次調査で検出された弥生時代の墓地遺構のうち、前期後半から中期初頭にかけての甕棺墓、土坑墓について報告を行う。

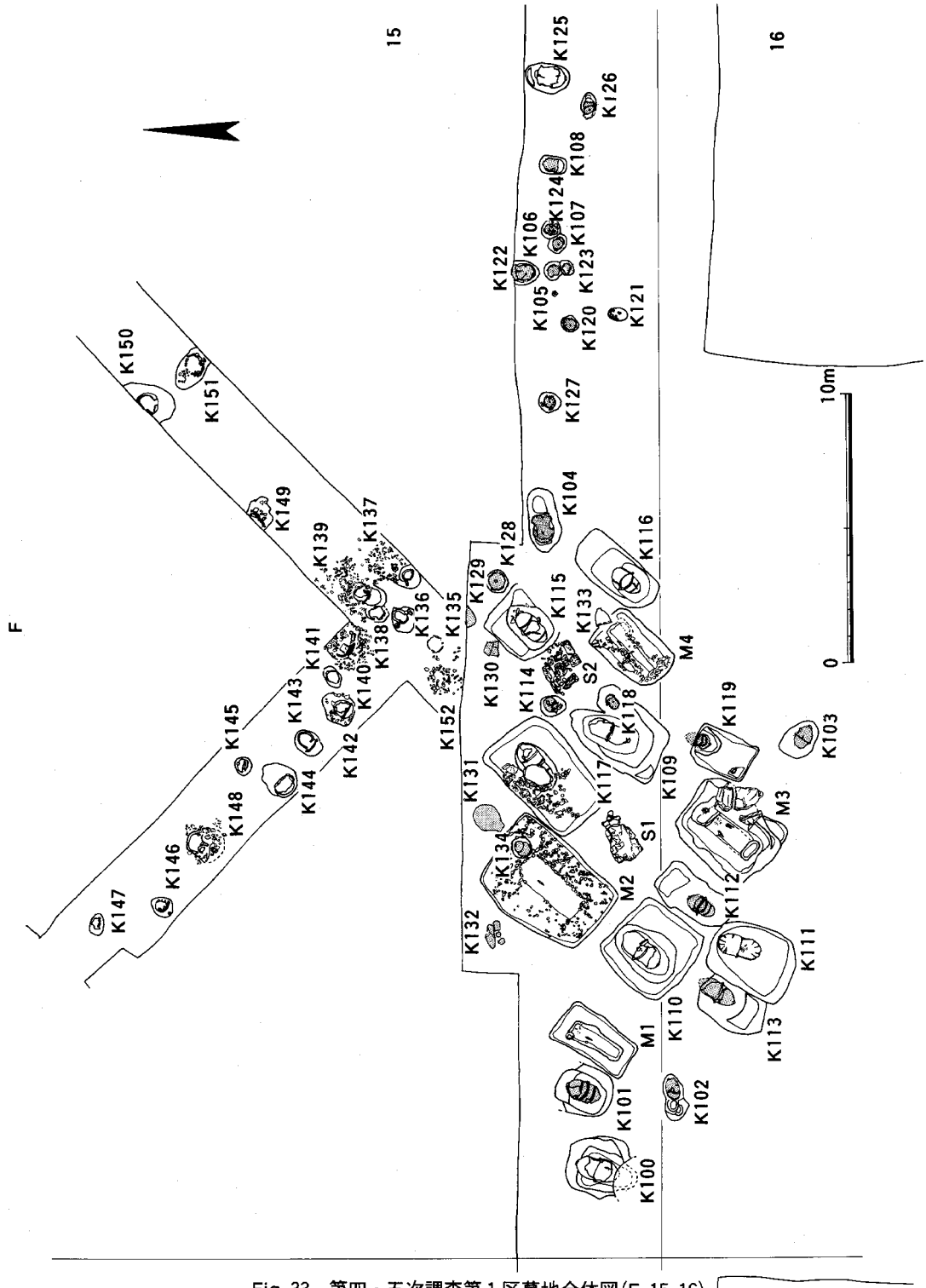


Fig.33　第四・五次調査第1区墓地全体図(F-15･16)

Ⅰ．第Ⅰ区の調査

第Ⅰ区では、副葬遺物を多く出土した厚葬墓の一群については当該期の図化可能なものの全てを報告し、地区の南東側に散在する小児棺群については紙面の都合から出土状況のみの掲載とした。以下、個別に説明を加える。

K 101 号甕棺墓(Fig.33・34・35、Pl.17・21)

墓地の西端に位置し、細型銅剣1振を副葬したK100号の東側に隣接する大型の甕棺墓である。埋置は、主軸をN-22°-Eに向け、35.5°程度の急角度で埋置されている。上下ともに金海式の大型の甕を使用した接口式甕棺である。下甕に人骨の頭蓋部・大腿骨片が若干残る。

上　甕　肥厚する口縁口唇の上下に細かい整然とした刻目を施す。全体に膨らみの少ない胴で、口縁下及び胴部中位に3条単位の横沈線を巡らす。調整は、外面胴上部に斜めヘラナデ、下部に横ヘラナデ。内面口縁下に荒い横ハケ目を施す。器色は、内外面ともに暗褐色を呈し、外面は丹塗り後に黒色顔料を塗布する。また、外面口縁下と胴部中位に小黒斑あり。口径64.6cm、器高76cm、底部径17.4cmを計る。胎土は、密。焼成は、堅緻である。

下　甕　肥厚する口縁口唇の上下にサイズの異なる刻目を施す。胴部中位以下は急速にすぼまり底部へ移行する。口縁下と胴部中位よりやや上に3条単位の横沈線を巡らす。調整は、器面の磨滅のため不詳である。器色は、外面暗褐～淡黄褐、内面暗

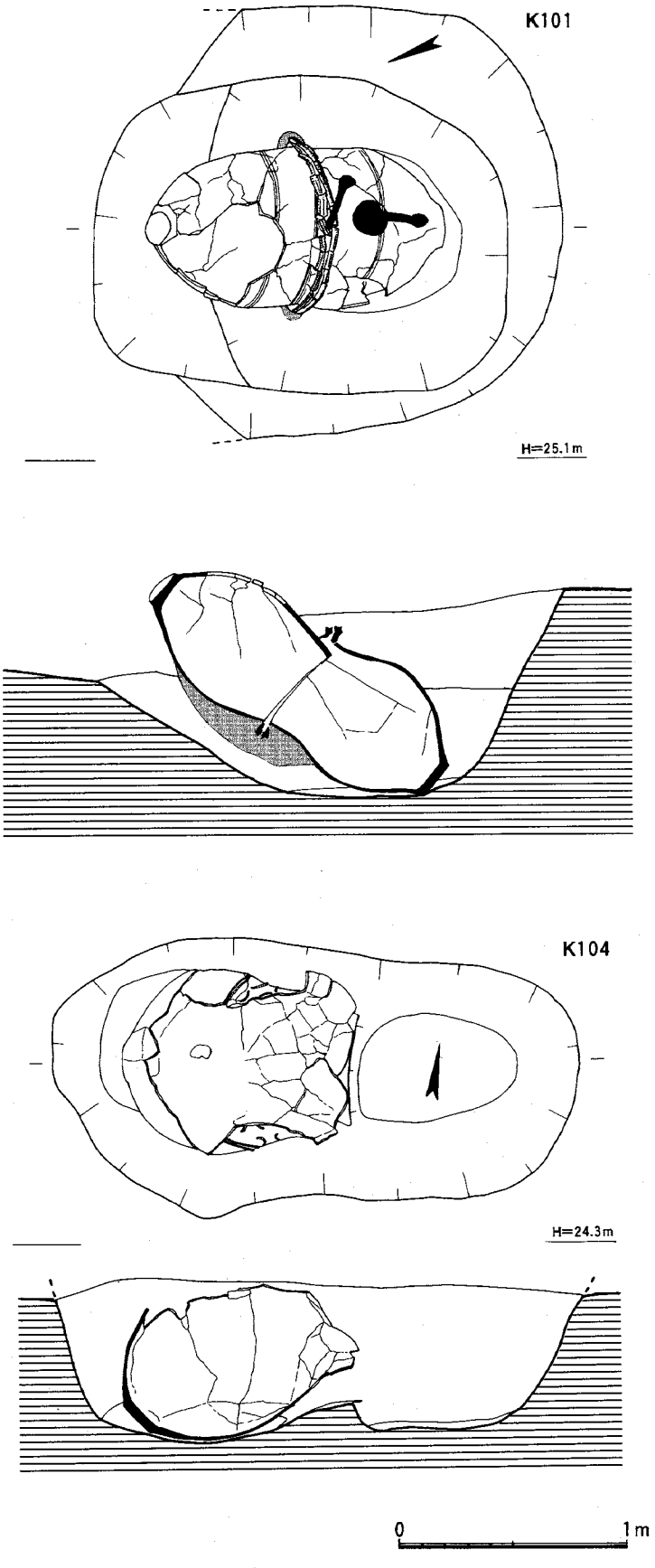


Fig.34　K101・104号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

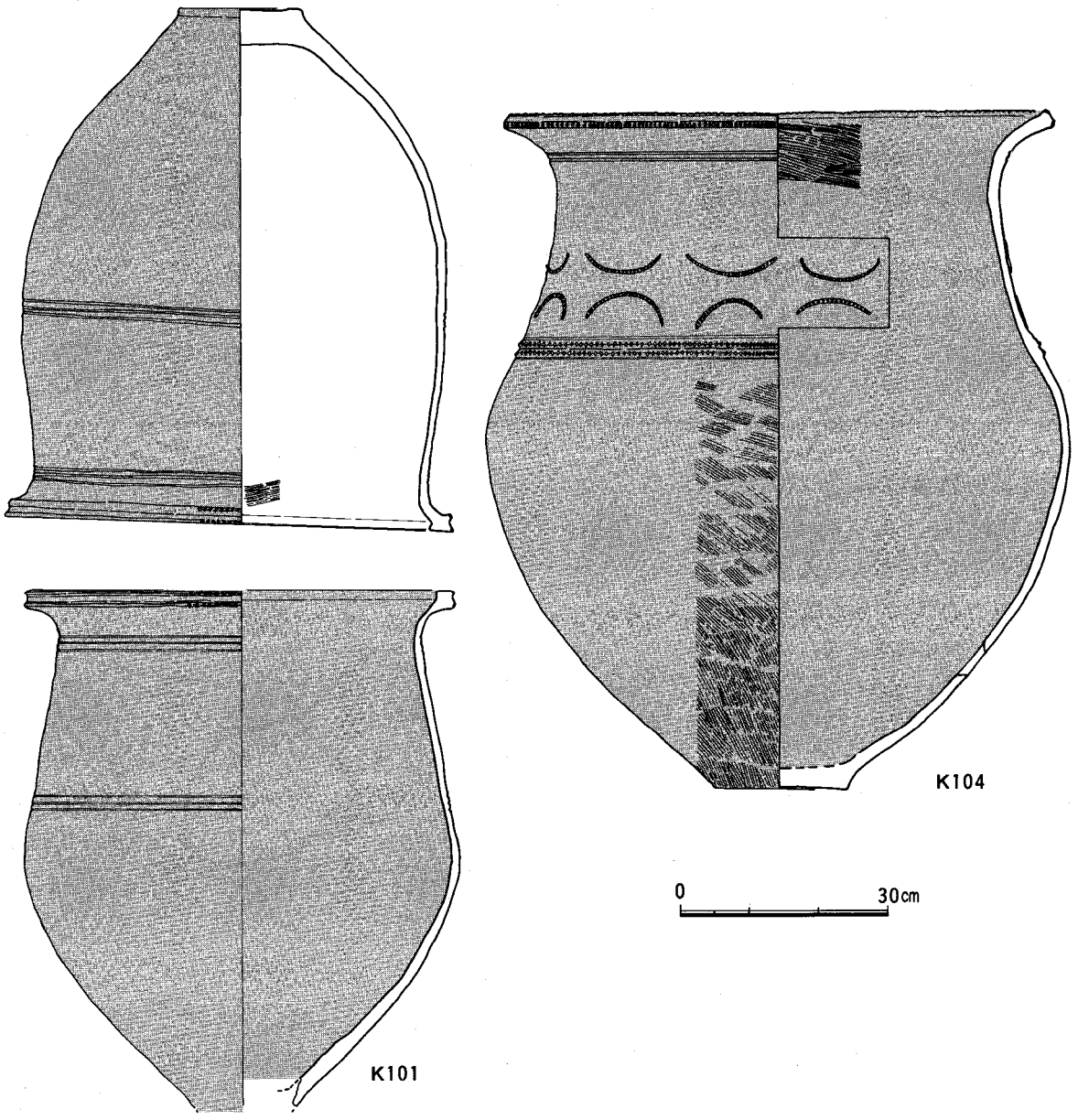


Fig.35　K101・104号甕棺実測図(1/10)

褐色を呈する。外面は、丹塗り後に黒色顔料を塗布し、内面は黒色顔料のみ塗布する。また、胴部中位を主にして上・下部にも小黒斑がある。口径62.2cm、器高74.7cm、胴部最大径63cmを計る。底部欠損。胎土は、密で粗砂を多く混入する。焼成は、堅緻である。

K104号甕棺墓(Fig.33～36、Pl.17・21)　成人墓の東辺に位置する大型の単棺墓である。埋置は、主軸をほぼ東西のN-80°-Eに向け、傾斜40°で埋置される。小形の甕形土器の副葬があった。

甕　棺　胴部がよく膨らみ、内傾する頸部は口縁端で外方に開く大型の壺形土器である。口唇の上下に細かい刻目を施す。また、口縁下に２条単位の横沈線を巡らし、頸部にも刻目を施した低い２条の三角突帯を巡らす。更にこの間には刻目を施した張り付けの弧文を２個ずつ対向させて、連続的に巡らしている。調整は、外面胴部の中位以下は荒い斜め・縦方向のハケ目で、他はヘラナデか。内面は、

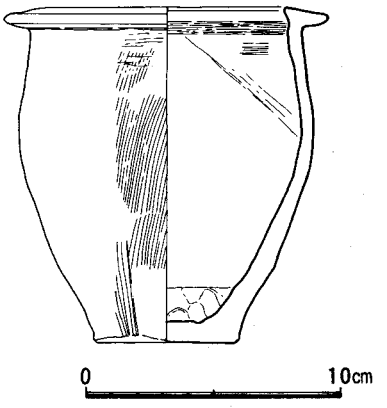


Fig.36　K104号甕棺墓副葬土器実測図(1/3)

口縁に荒いハケ目で、他はヘラナデか。器色は暗褐色を呈し、内外面に黒色顔料を塗布する。
胴部下半を中心に大黒斑がある。口径79cm、器高98.2cm、底部径19cmを計る。胎土は、やや粗。焼成は、堅緻。胴下部に外面からの二次的穿孔が1個見られる。

副葬土器　小形の甕形土器である。胴がやや膨らみ、比較的大きな底部を有する。小さな平坦口縁はやや垂れる。調整は、口縁付近は横ナデで、外面は荒い縦ハケ目、内底に指オサエ。口径12.8cm、器高13.2cm、底径5.7cmを計る。

K112号甕棺墓(Fig.33・37・38、Pl.18・22)　墓地の南西隅に位置する大型の覆口式甕棺である。埋置は、主軸をN-32°-Eに向け、傾斜31°で埋置される。

上　甕　肥厚する口縁の上・下端にサイズの異なる刻目を施す。口縁下及び胴部中位より上部に3条単位の横沈線を巡らす。

調整は、外面上半が縦・斜めのヘラナデ調整、内面口縁に荒い横ハケ目、内底に指オサエが残る。器色は、淡黄褐色～暗褐色を呈し、外面は丹塗り

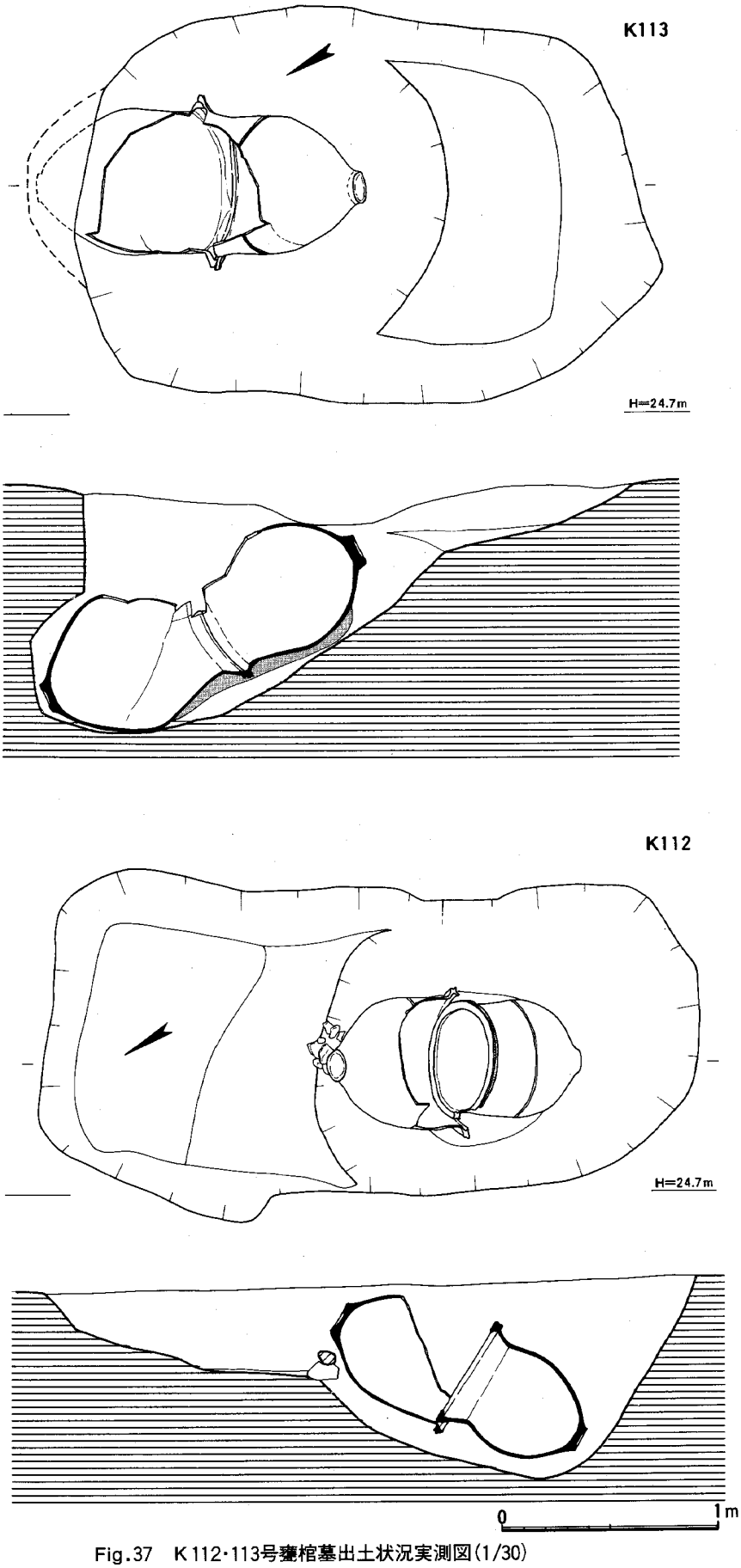


Fig.37　K112・113号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

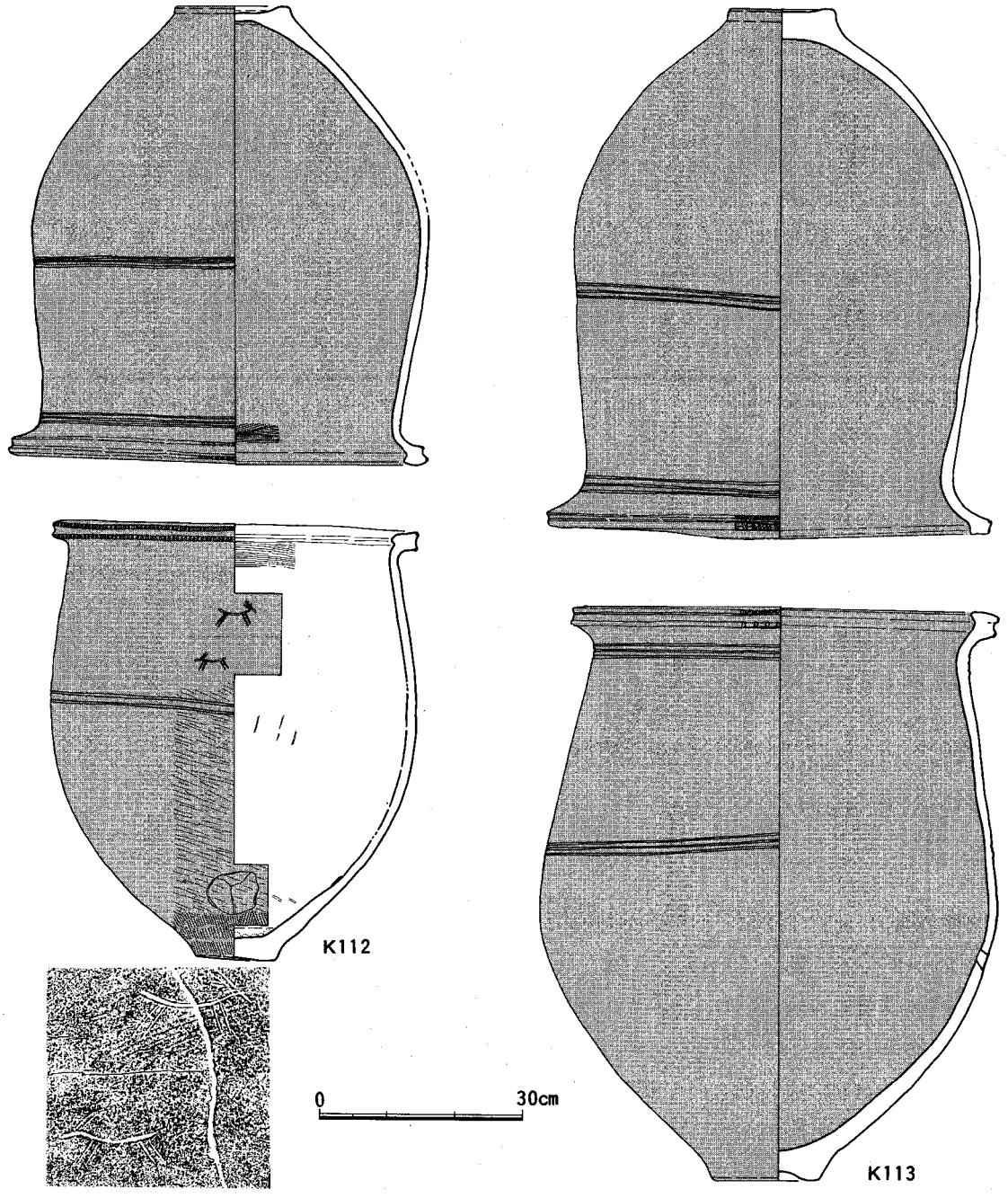


Fig.38　K112･113号甕棺実測図(1/10)

後に黒色顔料を塗布する。内面は黒色顔料のみ塗布する。胴部中位に黒斑が1個見られる。器形は土圧のために楕円形にゆがんでいる。口径61cm、器高68.5cm、底径16.2cmを計る。胎土は、やや粗である。

下　甕　肥厚した口縁の上・下に別作業による均一な刻目を施す。また、胴部中位よりやや上に2条単位の横沈線を巡らす。調整は、外底部に細かい縦ハケ目を残す。他は、斜めのヘラミガキ後にナデ調整を施す。また、内面は口縁下に荒い横ハケ目で、これ以下はハケ目調整後にナデを施し、内底に指オサエが残る。器色は、暗黄褐色を呈し、外面に黒色顔料を塗布する。また、外面胴部中位に大黒斑が残る。上甕に比較するとやや小形の甕であるが、胴部上半に2頭の疾駆する鹿をヘラで線刻する。上方の鹿(6×3cm)は角が枝分かれした成獣のオス鹿、下方のもの(5×2.5cm)は更に若いオス鹿であろうか。また、底部よりやや上部に焼成前に穿孔を行い、この後に粘土で塞いだ痕跡が残る。口径

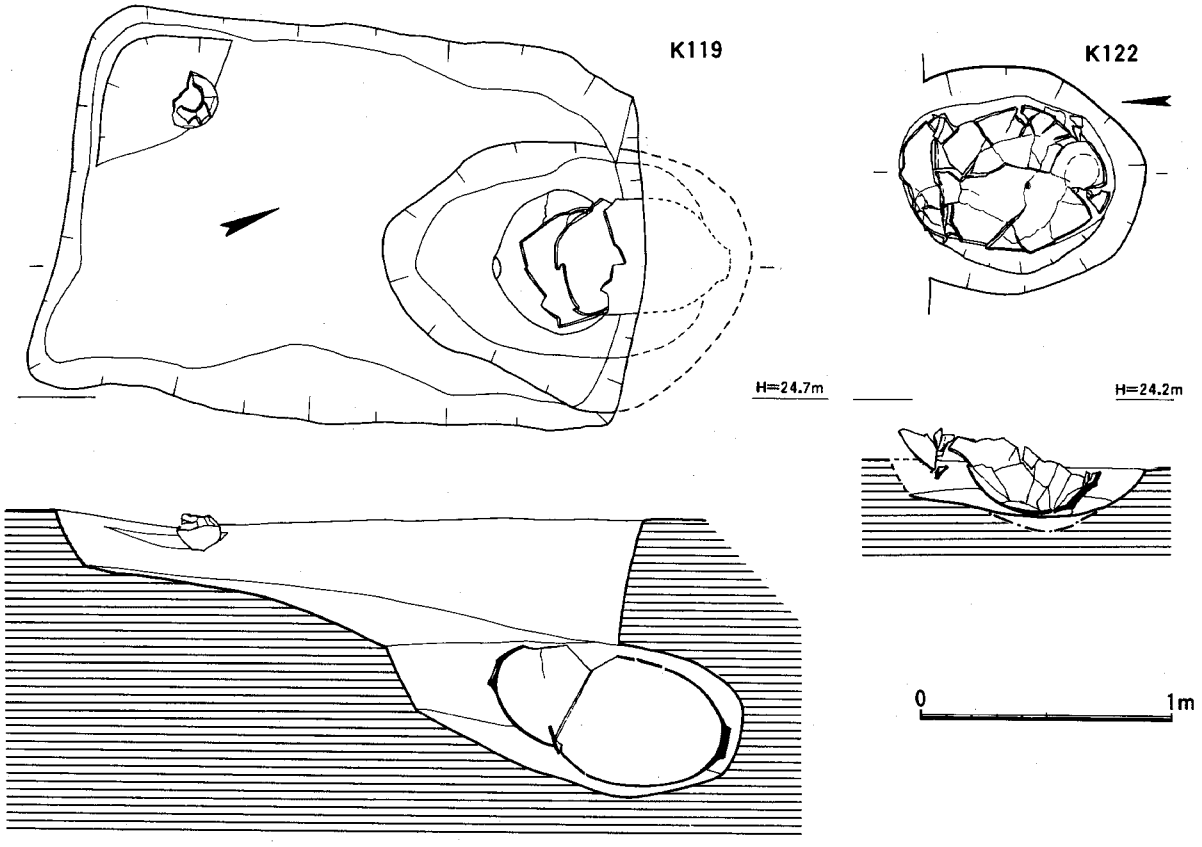


Fig.39　K119・122号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

53.7cm、器高64.8cm、底部径11.8cmを計る。胎土は、石英・長石・雲母片を多く含む。焼成は、堅緻。

K113号甕棺墓(Fig.33・37・38、Pl.18・23)　墓地の南西側に位置する接口式の大型甕棺墓である。埋置は、N-30°-Eに主軸をとり、25°の傾斜で埋置される。

上　甕　肥厚した口縁の口唇上下にサイズの異なる刻目を施す。また、口縁下と胴部中位よりやや上に3条単位の横沈線を巡らす。調整は、外面が器面磨滅のため不詳、内面は口縁が強い横ヘラナデで、これ以下は横ナデを施す。器色は、外面が黄褐色～赤褐色、内面が暗黄褐色を呈する。外面全面及び内底部に丹塗りが残り、この後内外面に黒色顔料を塗布している。口径65.5cm、器高78.7cm、底部径14.8cmを計る。底部は、分厚い。胎土は、粗砂を多量に含み、やや粗である。焼成は、堅緻である。

下　甕　肥厚した口縁の口唇上下に施文間隔の異なる刻目を施す。また、頸部と胴部中位より上がった位置に3条単位の横沈線を巡らす。調整は、外面胴上半が斜めのヘラナデで、口縁上端部は荒い横ハケ目である。内面は、不詳である。器色は、外面が暗赤褐色～黒褐色、内面が暗赤褐色を呈する。外面に丹塗りを施し、この後内外面ともに黒色顔料を塗布する。胴部中位より下がった位置に内側からの二次穿孔が1ヶ所ある。口径63.5cm、器高85cm、底部径16cmを計る。全体に肉厚で、重量も他に比較して大きい。胎土は、密で、焼成は堅緻である。

K119号甕棺墓(Fig.33・39～41、Pl.18・24)　墓地南東端に位置する覆口式の甕棺墓である。埋置は、N-20°-Eに主軸をとり、17°の傾斜で南側から行われる。上下棺とも壺打欠きで、小壺を副葬する。

上　甕　胴部が半球状に膨らむ壺である。調整は、外面が全体に斜めのヘラナデ、内底はケズリを施

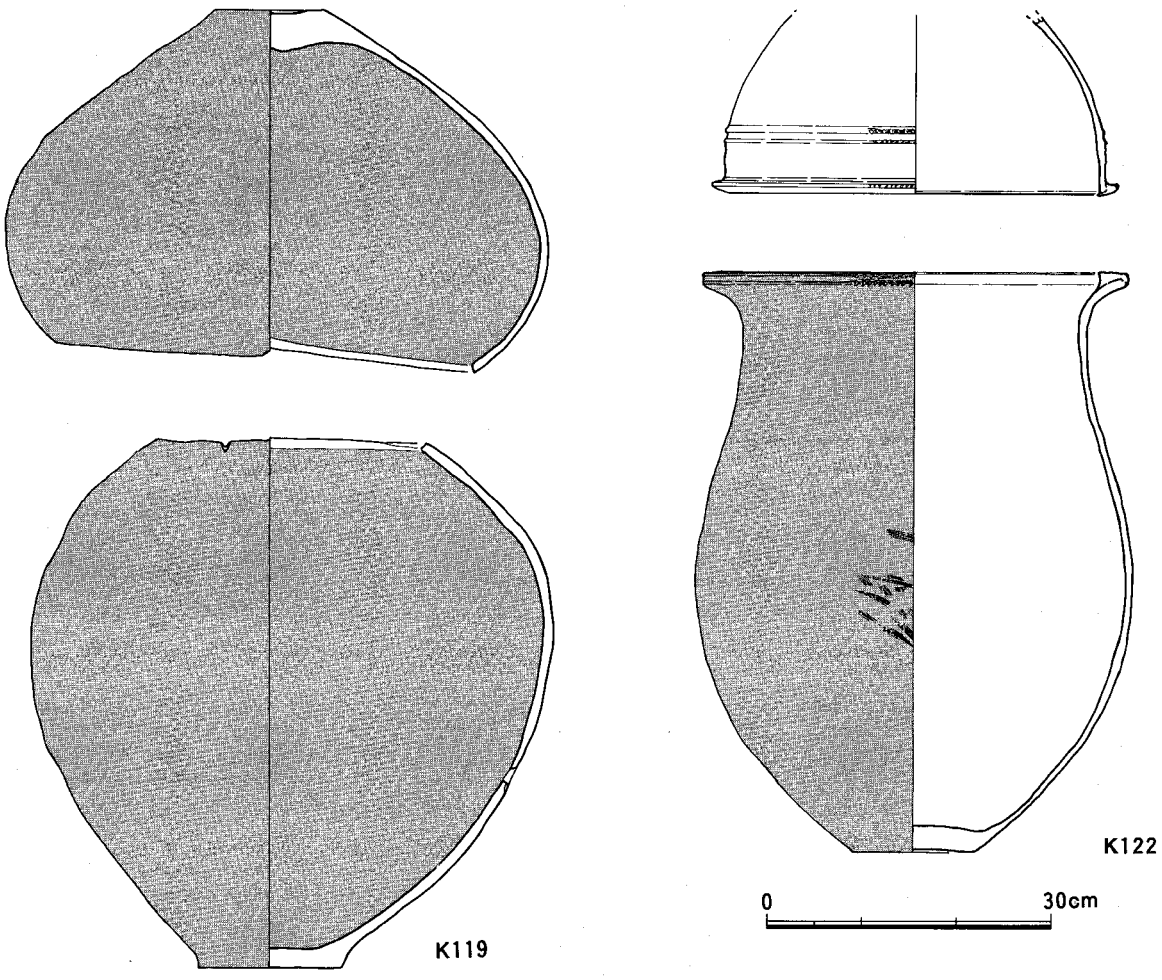


Fig.40　K119･122号甕棺実測図(1/8)

さず、ナデのみで瘤状に盛り上がる。器色は、外面暗褐～赤橙色のまだらで、内面淡赤褐色を呈する。また、黒斑は外面全体に多く、内外に黒色顔料を塗布する。器高38.5cm、胴部最大径57cm、底部径11.5cmを計る。胎土は、密で、焼成は堅緻である。

下　甕　胴部が球状に膨らみ、最大径の位置が高い壺である。調整は、外面上部に横・斜めのヘラナデ、下半部に斜めヘラナデを施す。器色は、外面淡黄褐色、内面淡褐～淡黄褐色を呈する。黒斑は、外面胴部上半に見られる。また、外面上半には丹塗り痕跡があり、内外に黒色顔料を塗布する。胴部の中位下に内面より二次穿孔がある。器高56.5cm、胴部最大径54.7cm、底部径15.1cmを計る。胎土は密で、細砂を多く混入する。焼成は堅緻である。

副葬土器　半球状の胴部に緩く立ち上がる短い頸部と外方に開く口縁を有する小壺である。頸部の付け根には段状の低い突帯１条を巡らす。頸部には暗文状の縦の短沈線を施し、この後に外面に黒色顔料を塗布したため沈線部分に濃く残る。調整は、外面上部が斜め・横のヘラナデ、底部付近が縦ヘラナデで、内面頸部は横ヘラナデを施す。内底は指オサエが残る。器色は、外面が赤～黄褐色、内面暗褐色を呈する。底部の一部に黒斑が見られ

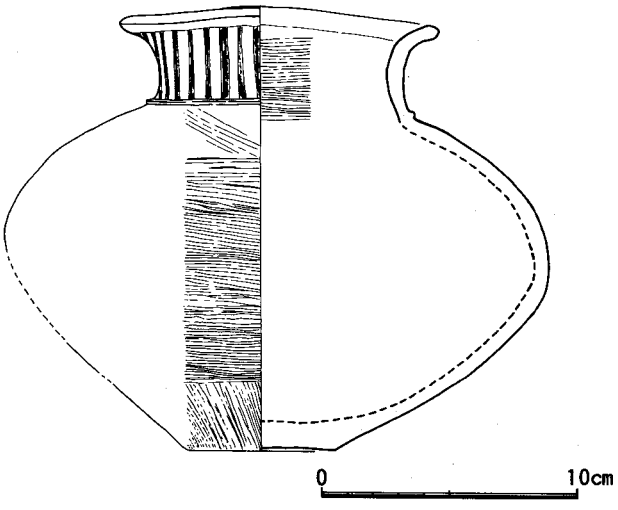


Fig.41　K119号甕棺墓副葬土器実測図(1/3)

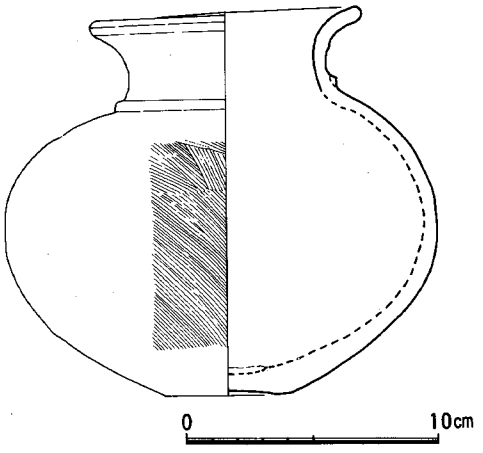


Fig.42　K131号甕棺墓副葬土器実測図(1/3)

る。外底部を除く外面には丹塗り後に黒色顔料を塗布する。口径12.8cm、器高17.8cm、胴部最大径21.6cm、底部径5.8cmを計る。胎土は、密で、焼成は堅緻である。長方形墓坑の南西隅に出土。

K122号甕棺墓(Fig.33・39・40、Pl.18・24)　墓地東側の北端に位置する中型の接口式甕棺墓である。主軸をほぼ南北にとり、46°の傾斜で埋置される。上甕に鉢、下甕に甕を使用する。

上　甕　小さな平坦口縁を有する鉢で、口縁外側に半月状の刻目を巡らす。また、口縁下には低い2条の刻目突帯を巡らす。突帯は、上が断面三角状で、下が台形状をなす。器面の荒れが著しい。器色は、外面赤褐色、内面淡褐色を呈する。口縁内面と胴部外面に小黒斑がある。口径42.4cm、器高19cm以上を計る。胎土は、密で細砂を多く混入する。焼成は非常に堅緻である。

下　甕　肥厚する口縁の外側に刻目を巡らす甕である。刻目は上部が細かく、下部は半月形の刻目でいずれも施文の間隔は広い。調整は、外面胴部上半が横・斜め方向の丁寧なヘラ磨きで、下半が横・斜めの細かいハケメが残る。器色は、外面暗褐～淡褐色、内面淡褐色を呈する。黒斑は、胴部中位に横方向に細いものが3ケ所見られる。また、外面に黒色顔料を塗布する。口径44.8cm、器高61.8cm、胴部最大径46cm、底部径13cmを計る。胎土は、密で、粗砂を多く混入する。

K131号甕棺墓(Fig.33・42、Pl.19・25)　第2号木棺墓に近接する壺使用の単棺で、取り上げを行っていないが、副葬と考えられる小壺が出土しており、これについて報告しておきたい。

副葬土器　半球状の胴部を有し、口縁は短い頸部から外方に開く小壺である。頸部の付け根には低い段状の突帯1条を巡らす。調整は、胴部の殆どに細かい斜めハケメを施し、この後に口縁内外に横ナデ、外面底部付近に縦のヘラナデを行う。器色は、外面淡黄褐色を呈し、外底部を除く外面に黒色顔料を塗布する。口径6cm、器高14.4cm、胴部最大径17.2cm、底部径5cmを計る。胎土は密で、焼成は堅緻である。

K102号甕棺墓(Fig.33・43・44、Pl.17・21)　墓地西南隅に位置する接口式小形甕棺墓である。主軸をN-76°-Eにとり、ほぼ水平に埋置される。上下にそれぞれ小型の壺の打欠き・甕を使用する。

上　甕　胴部最大径部に低い流れるような段状突帯1条を巡らす。器面は荒れが著しい。器色は、外面暗赤褐色、内面黒～黒褐色を呈する。器高28.6cm、胴部最大径38.5cm、底部径7.6cmを計る。胎土は、密で粗砂を混入する。焼成は、堅緻である。

下　甕　やや内傾する平坦口縁を有する甕である。口縁下に1条の低い突帯を巡らす。調整は、外面縦ハケメ後に突帯以上を横ナデ。器色は、外面赤褐色、内面暗赤褐色を呈し、内外に黒色顔料を塗布する。口径39.5cm、器高47.6cm以上を計る。胎土は、やや粗で砂粒を多く混入する。焼成は、堅緻。

K103号甕棺墓(Fig.33・43・44、Pl.17・21)　墓地南東端に位置する接口式小形甕棺墓である。主軸はN-57.5°-Wに向け、傾斜16°で埋置される。上下にはそれぞれ小型の鉢・甕が使用されている。

上　甕　口縁下に1条の断面三角突帯を巡らす鉢である。調整は、外面ヘラナデか。器色は、外面暗

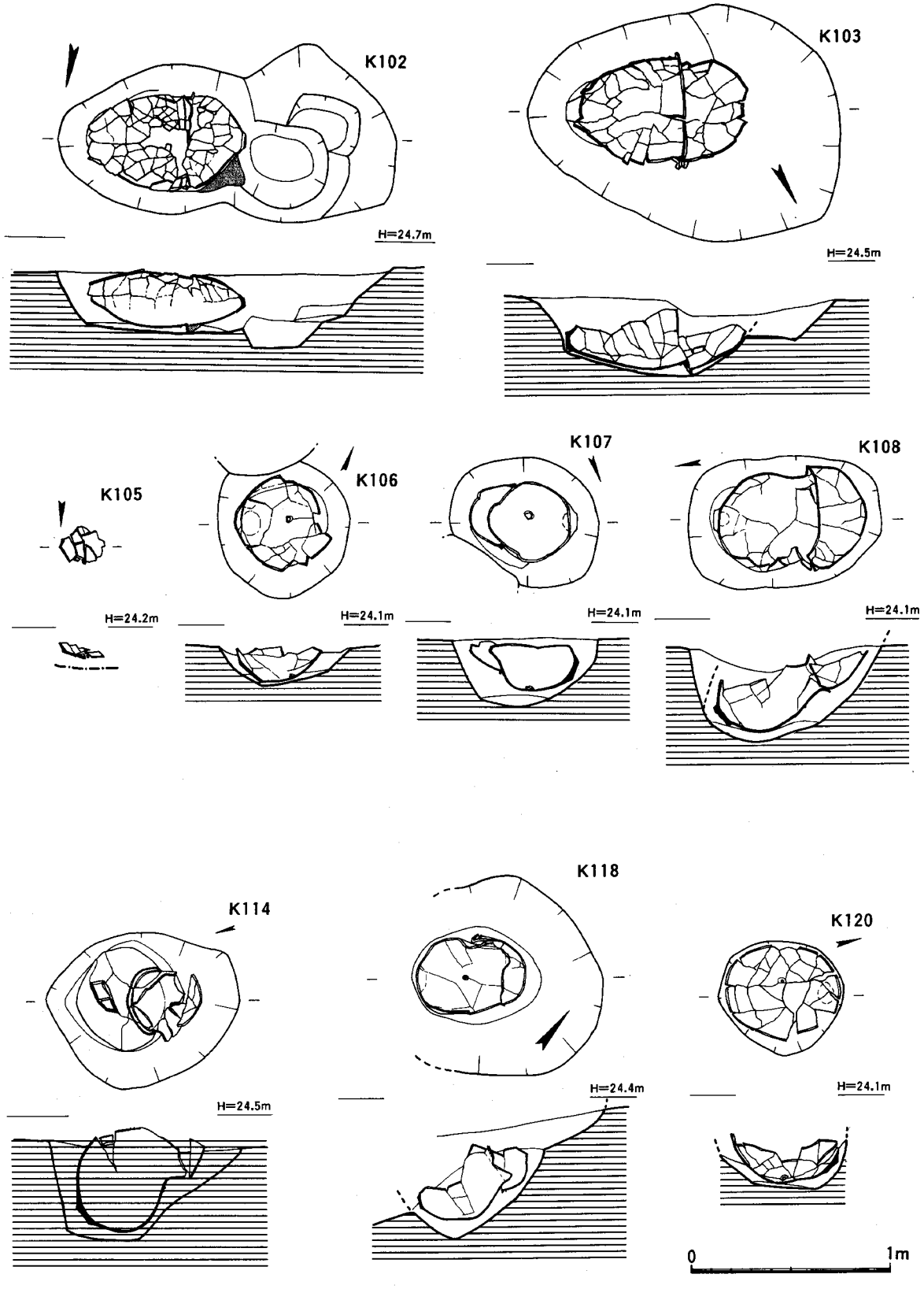


Fig.43　K102・103・105・106・107・108・114・118・120号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

赤褐色、内面褐色を呈する。口縁上端・内外底部に黒斑がある。また、外底部以外の外面に黒色顔料を塗布する。口径54.8cm、器高36.4cm、底部径12cmを計る。胎土は、密で、粗砂を多く混入。

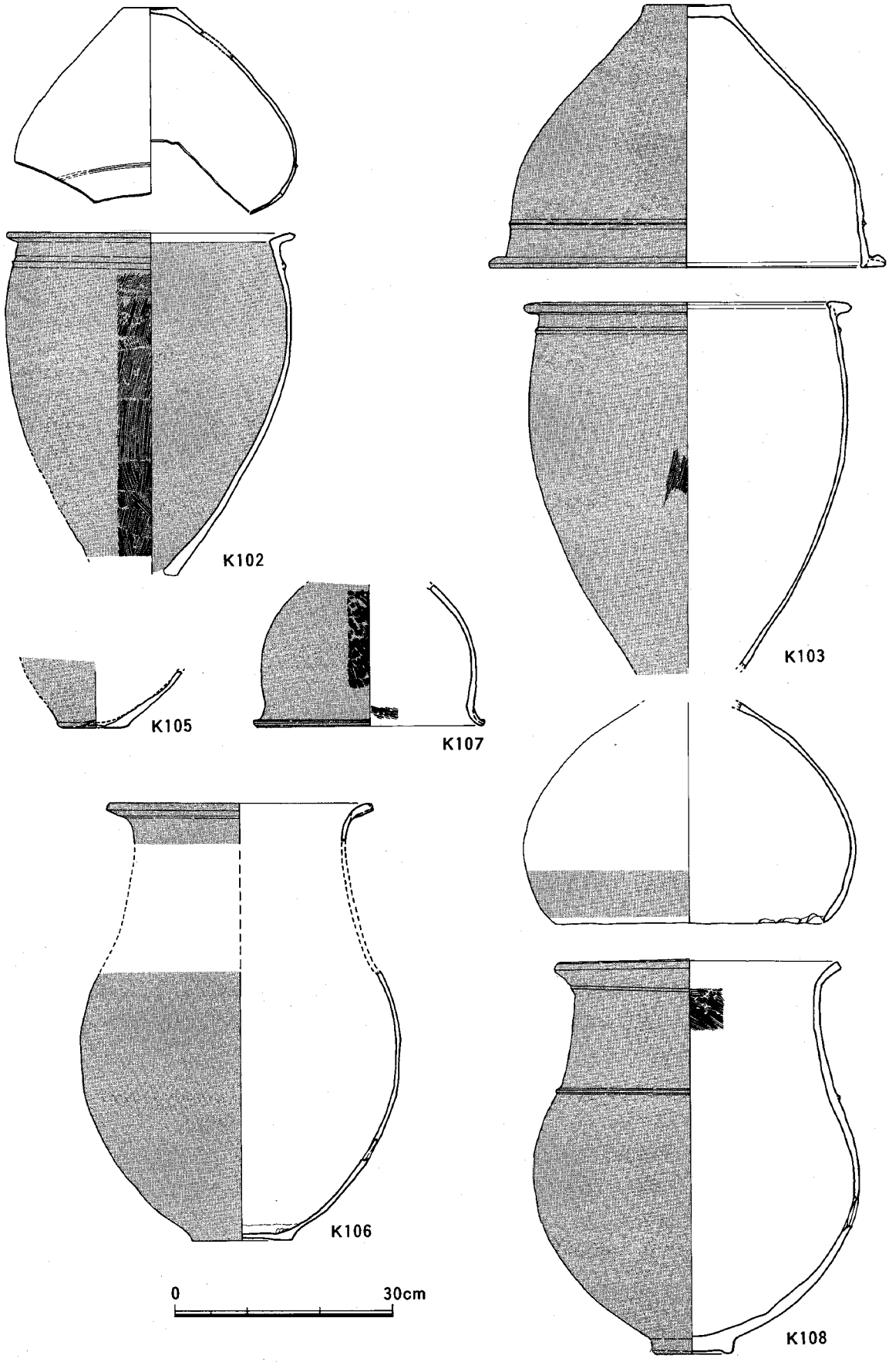


Fig.44　K102・103・105・106・107・108号甕棺実測図(1/8)

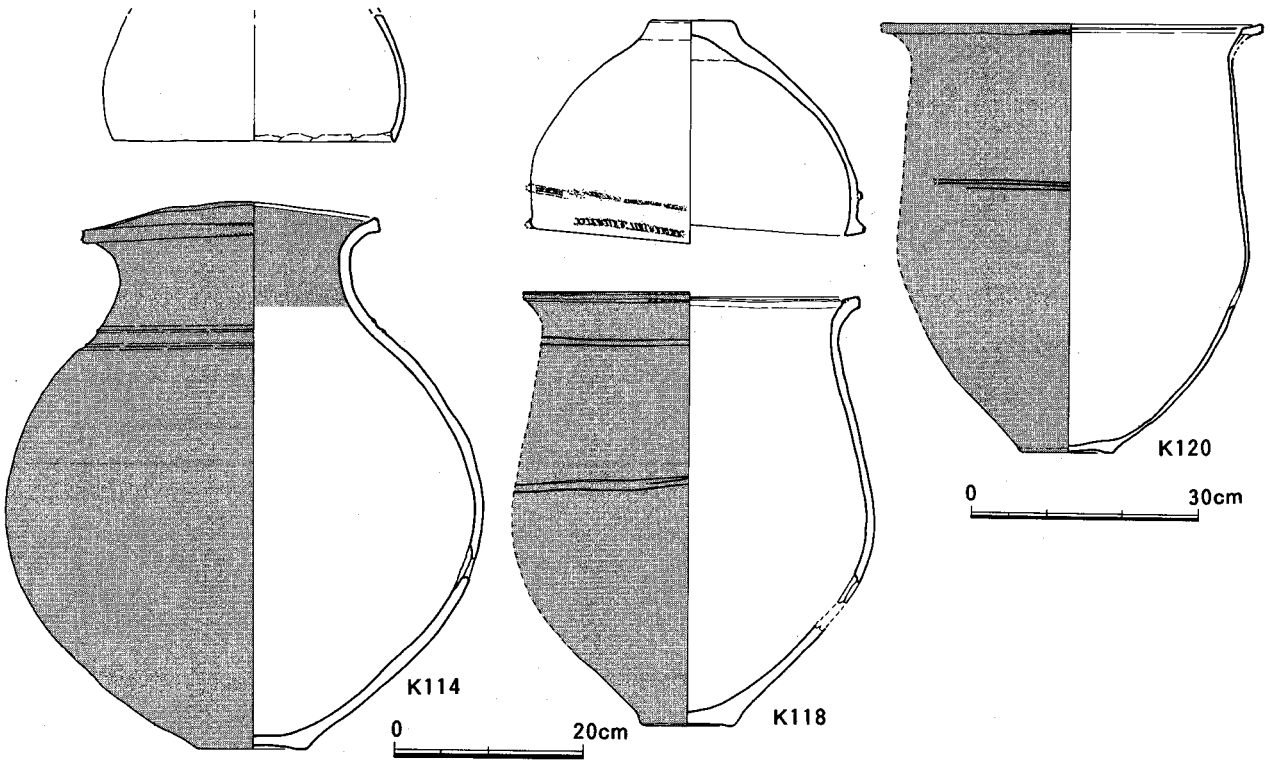


Fig.45　K114･118･120号甕棺実測図(1/8･1/10)

下　甕　短い平坦口縁を有し、口縁下に１条の三角突帯を巡らす。調整は、外面胴部に細かい縦ハケメが残る。器色は、内外面とも暗赤褐色を呈する。外面に黒色顔料を塗布する。胎土は、密である。

K105号甕棺墓(Fig.33・43・44、Pl.17・22)　墓地東側の非常に残存の悪い小型甕棺墓である。

下　甕　底部のみ遺存する。外面横ヘラナデを施す。器色は、外面暗褐色、内面淡灰褐色を呈する。外面に黒色顔料を塗布する。底部径10.2cmを計る。胎土は、やや粗で、焼成もやや軟質である。

K106号甕棺墓(Fig.33・43・44、Pl.17・22)　墓地東側のK119号に隣接する壺使用の小型単棺である。主軸をN-15.5°-Eに向け、傾斜47°の急角度で埋置される。

下　甕　胴部・口縁の接点がなく、高さは推定となる。底部は、やや上げ底となる。球状に膨らんだ胴部に肥厚し外反する口縁を有する。調整は、内外ともにヘラナデで、内底に指オサエが見える。器色は、外面赤褐～暗褐色で、内面淡褐色を呈する。外面に黒色顔料を塗布する。また、胴部の下部に外面からの二次穿孔が１孔ある。口径36.8cm、胴部最大径43.2cm、底部径13.9cmを計る。胎土は非常に密で、焼成も堅緻である。

K107号甕棺墓(Fig.33・43・44、Pl.17・22)　墓地東側のK106号の東に隣接する覆口式小型甕棺墓である。上下棺にはそれぞれ小型の鉢と壺の打欠きを使用している。ここでは上甕のみを報告する。

上　甕　底部を欠くが、半球状の胴部に屈曲して外方に開く口縁を有する。調整は、外面が細かい縦・斜めハケメ後に口縁部に横ナデを施す。ハケの幅は0.7cm程度のサイズである。内面は口縁が横ハケメで、下部はナデか。器色は、内外とも淡褐～暗褐色を呈する。胴部外面の中位に小黒斑あり。また、外面に黒色顔料を塗布する。口径32cm、器高19.5cm以上を計る。胎土は、やや粗、焼成は堅緻。

K108号甕棺墓(Fig.33・43・44、Pl.17・22)　墓地の東端近くに位置し、上下に小型の打欠き壺と壺をそれぞれ使用する呑口式小型甕棺墓である。主軸をN-10°-Eに向け35.5°の傾斜角度で埋置されてい

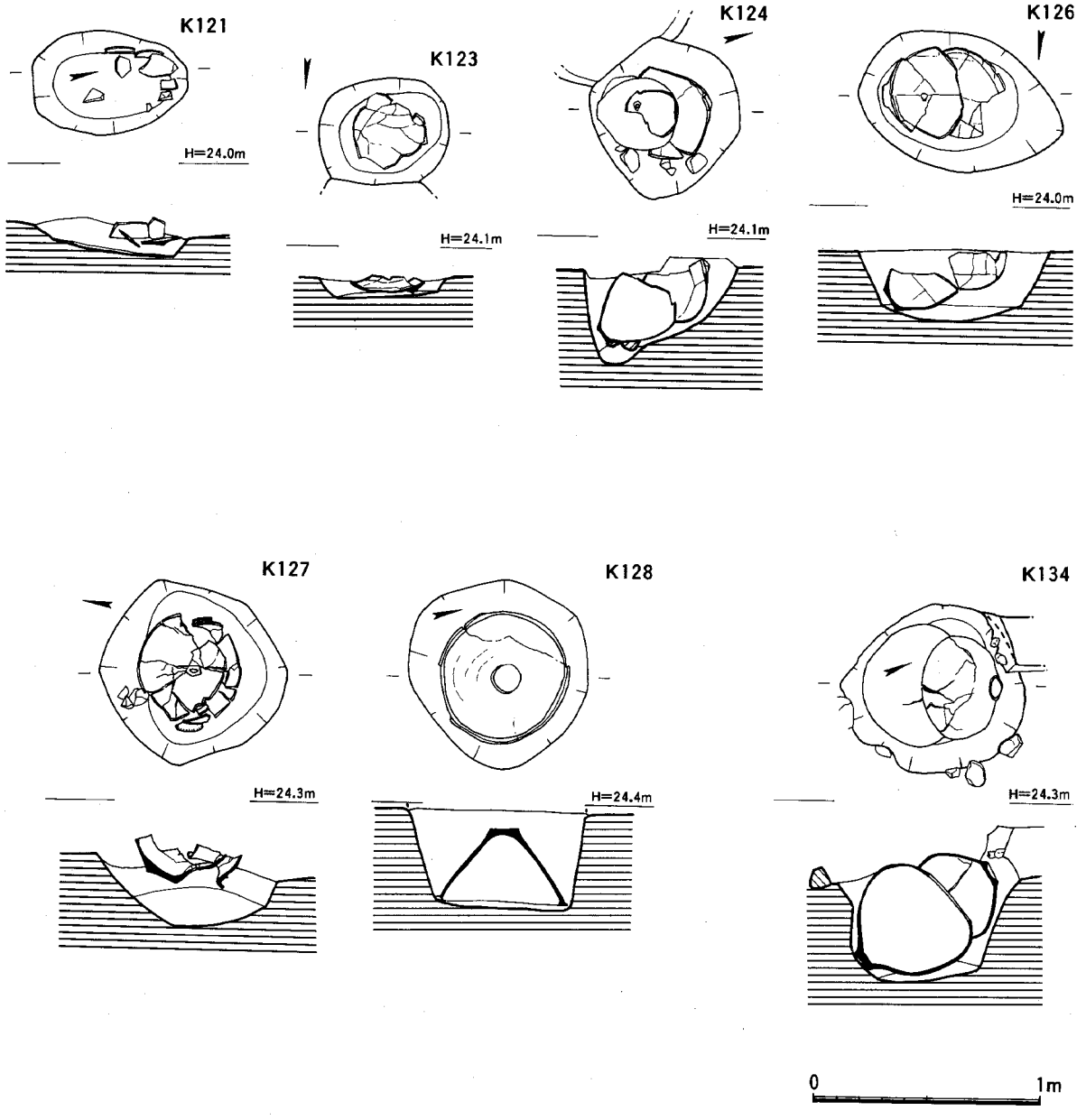


Fig.46　K121・123・124・126・127・128・134号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

る。

上　甕　口縁部打欠きで、約1/2が残存する。調整は、内外面ともに斜め・横のヘラナデを施す。器色は、外面淡赤褐色、内面淡褐～淡赤褐色を呈する。外面の一部に黒斑あり。外面胴部に一部黒色顔料が残る。胴部最大径46cmを計る。胎土は、やや粗で細砂を多く含む。

下　甕　よく整った球状の胴部に緩く立上がる頸をのせる。頸部には低い断面三角の突帯１条を巡らす。また、底部は円盤張付けの手法をよく残す。調整は、外面ヘラミガキ、内面口縁下に細かいハケメを施す。器色は、内外面とも赤褐～淡褐色である。胴部中位を主にタテ方向の黒斑がある。また、外面に黒色顔料を塗布する。胴部中位下に外面からの２次穿孔がある。口径38.7cm、器高54.5cm、胴部最大径45cm、底部径11.1cmを計る。胎土は、密で細砂の混入が多く、焼成は堅緻である。

K114号甕棺墓(Fig.33・43・45、Pl.18・23)　墓地中央のK117に隣接する上下に壺を使用する覆口

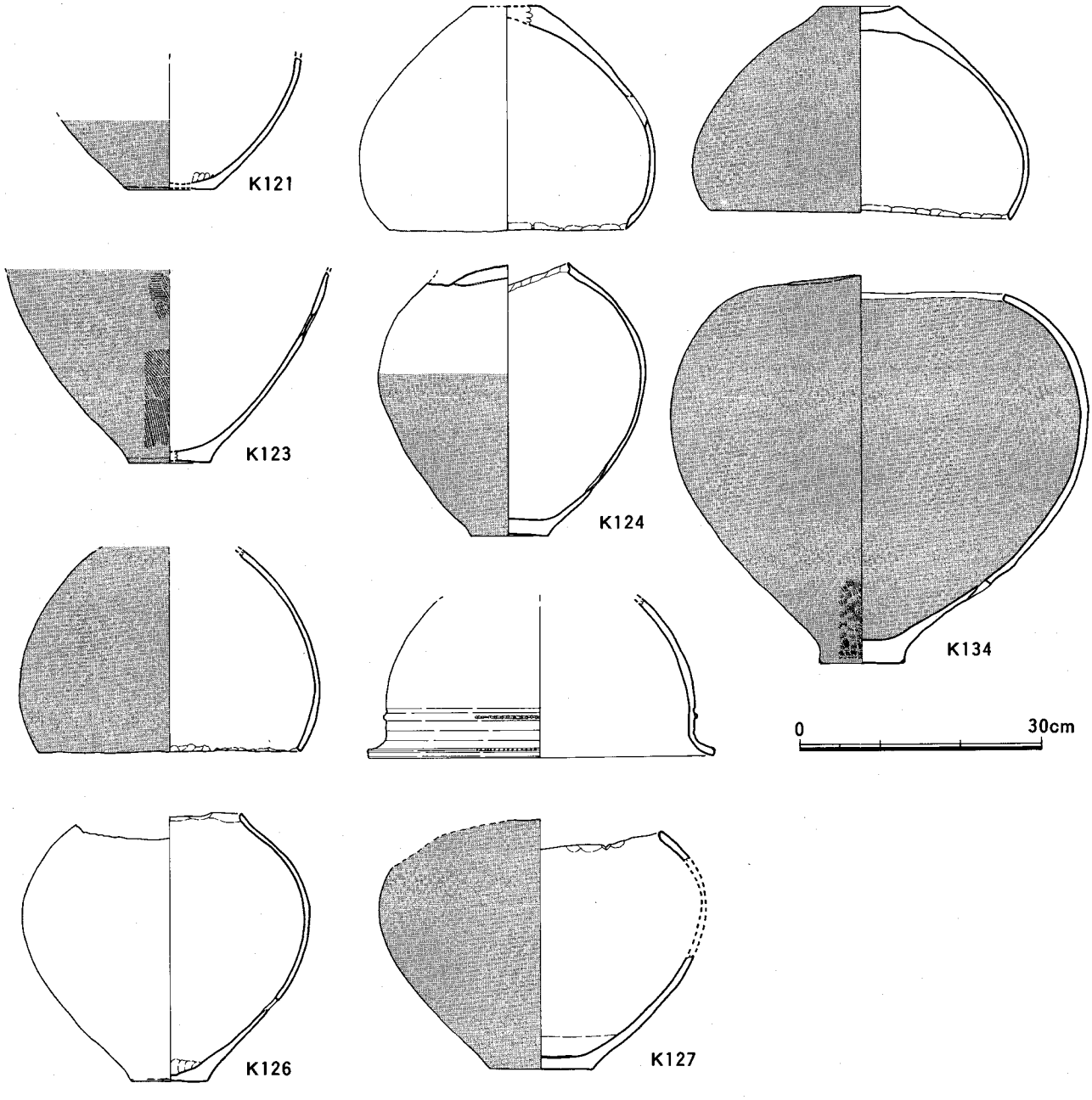


Fig.47　K121・123・124・126・127・134号甕棺実測図(1/8)

式の小型甕棺墓である。主軸をN-17°-Eに向け、傾斜36°で埋置される。

上　甕　壺の打欠きを使用する。調整は、内外面とも斜めのヘラナデである。外面淡黒褐色、内面明褐色を呈する。外面に大黒斑あり。胎土は、密で、焼成は堅緻である。胴部最大径31.8cmを計る。

下　甕　よく球状に膨らむ胴部に短い口縁をのせる。頸部には非常に低い断面三角突帯２条を巡らす。口縁端部の上下に押さえるような細かい刻目を巡らす。調整は、外面上半部が横ナデで、下半部縦ナデである。器色は、内外面共に暗赤褐色を呈する。胴部中位に多くの黒斑あり。外底を除く外面及び内面口縁に丹塗り後、同部位に黒色顔料を塗布する。口径31.2cm、器高55～58.5cm、胴部最大径50.2cm、底部径11.3cmを計る。胎土は、密で、焼成堅緻である。外面からの２次穿孔が胴部下位にある。

K118号甕棺墓(Fig.33・43・45、Pl.18・23)　墓地中央のK109を切る小型甕棺で、上下に鉢と甕を使用する覆口棺である。主軸をN-51°-Eに向け、傾斜25°で埋置される。

上　甕　口縁下にやや下方を向く刻目突帯１条を巡らす鉢である。突帯の接着は弱く、剝落が著しい。

調整は、内面に縦・横のヘラナデが残る。器色は、外面暗赤褐色、内面赤褐色を呈する。外面口唇に黒斑あり。復元口径36cm、器高23.8cm、底部径8.8cmを計る。胎土は、やや粗で、焼成は堅緻である。

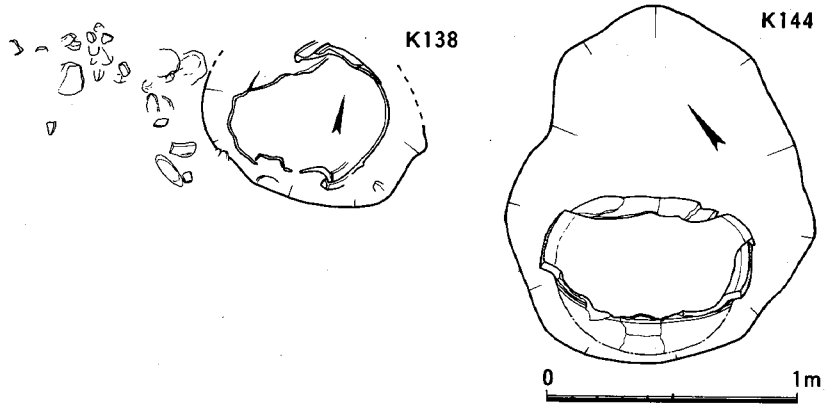


Fig.48　K138・144号甕棺墓出土状況平面実測図(1/30)

下　甕　肥厚する口縁を有し、頸部下に2条、胴最大径付近に3条のヘラ描き沈線を巡らす甕である。調整は外面の全面がヘラナデにより、器面が光沢を放つ。器色は、外面上部淡褐色～下部暗赤褐色で、内面暗褐色を呈する。外面は上下方向に斑状、内面は胴部中位に小型の黒斑あり。外面に黒色顔料を塗布する。口径35.5cm、器高46.2～46cm、底部径9.4cmを計る。胎土は、密で細砂を多く混入する。焼成は堅緻である。胴下部に外面よりの2次穿孔が見られる。

K120号甕棺墓(Fig.33・43・45、Pl.18・24)　墓地東側の小児棺群中にあり、中型甕を使用する単棺で、主軸をN-14°-Eに向け、傾斜43°の角度で埋置される。

甕　棺　口縁が肥厚する全体に薄作りの甕で、全体に器面の磨滅が激しい。口縁下端に細かい刻目を巡らす。胴部中位よりやや上った位置に3条の沈線を巡らすが、下端のものは途中で消える。器色は、外面黒褐色、内面黄色味をおびた褐色を呈する。外面の胴部中位に大黒斑あり。また、外面に黒色顔

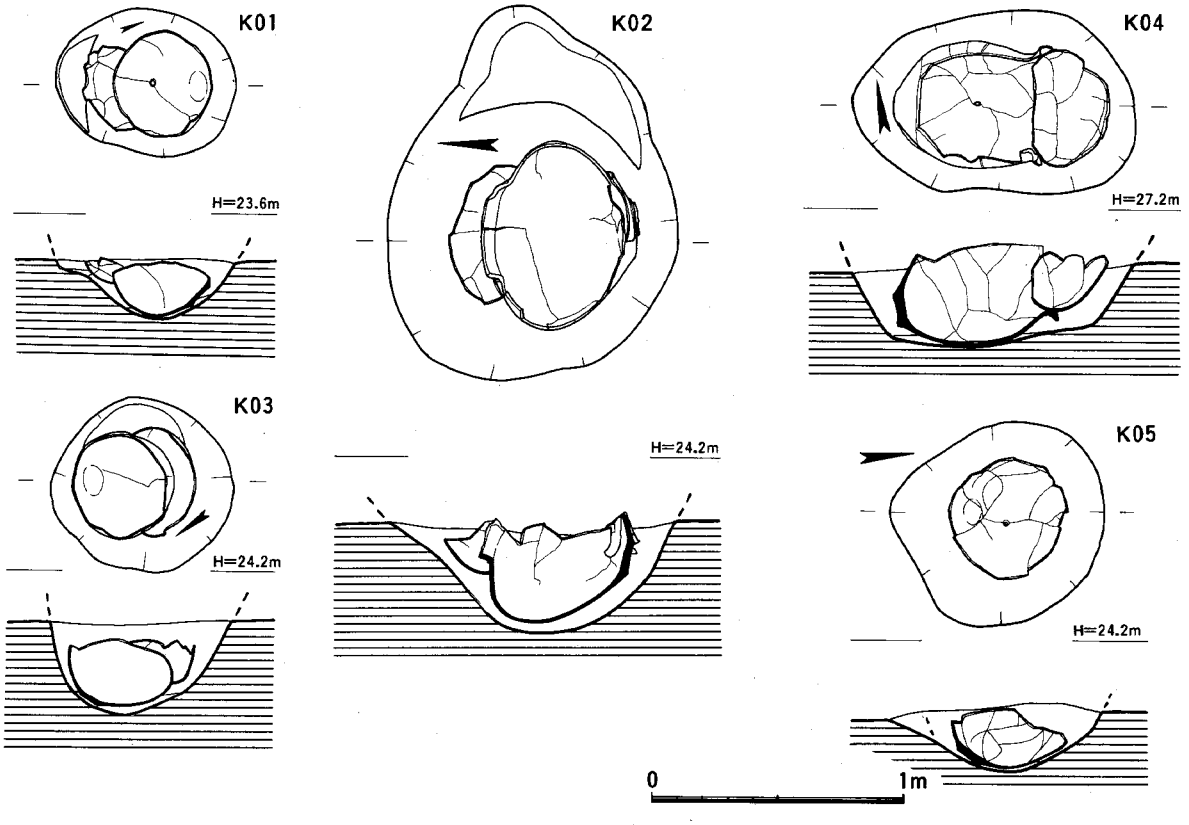


Fig.49　K01・02・03・04・05号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

Tab. 3　吉武遺跡第四・五次調査Ⅰ区弥生墓地遺構一覧

番号	型式				組み合わせ		規模	埋置方位	埋置角度	時期(型式)	備考
	単棺	複棺									
		接口	覆口	呑口	上甕	下甕					
K101	／	○	／	／	甕	甕	大型	N-22°-E	35.5°	前期末(金海式)	Fig.33・34・35, Pl.17・21 人骨頭部・腿部残存
K102	／	○	／	／	壺(打欠き)	甕	小型	N-76°-E	3°	中期初頭	Fig.33・43・44, Pl.17・21
K103	／	○	／	／	鉢	甕	小型	N-57.5°-W	16°	中期初頭	Fig.33・43・44, Pl.17・21
K104	○	／	／	／	／	甕	大型	N-80°-E	40°	前期末(金海式)	Fig.33・34～36, Pl.17・21 胴上半に刻目弧状文あり、小甕副葬
K105	○	／	／	／	／	壺？	小型	-	-	前期末	Fig.33・43・44, Pl.17・22 底部のみ
K106	○	／	／	／	／	壺	小型	N-15.5°-E	47°	前期末	Fig.33・43・44, Pl.17・22 胴部2次穿孔あり
K107	／	／	○	／	鉢	壺(打欠き)	小型	N-67°-W	22°	前期末	Fig.33・43・44, Pl.17・22 下甕に2次穿孔あり
K108	／	／	／	○	壺(打欠き)	壺	小型	N-10°-E	35.5°	前期末	Fig.33・43・44, Pl.17・22 下甕に2次穿孔あり
K112	／	／	○	／	甕	甕	大型	N-32°-E	31°	前期末(金海式)	Fig.33・37・38, Pl.18・22 下甕に鹿線刻画
K113	／	○	／	／	甕	甕	大型	N-30°-E	25°	前期末(金海式)	Fig.33・37・38, Pl.18・23 下甕に2次穿孔あり
K114	／	／	○	／	壺(打欠き)	壺	小型	N-17°-E	36°	前期末	Fig.33・43・45, Pl.18・23 下甕口縁に刻目、下甕に2次穿孔あり
K118	／	／	○	／	鉢	甕	小型	N-51°-E	25°	中期初頭	Fig.33・43・45, Pl.18・23 上下に2次穿孔あり
K119	／	／	○	／	壺(打欠き)	壺(打欠き)	大型	N-20°-E	17°	前期末(金海式)	Fig.33・39～41, Pl.18・24 小壺副葬、下甕に2次穿孔あり
K120	○	／	／	／	／	壺(打欠き)	中型	N-14°-E	43°	前期末	Fig.33・43・45, Pl.18・24
K121	○	／	／	／	／	壺(打欠き)	小型	N-14°-E	-	中期？	Fig.33・46・47, Pl.18
K122	／	○	／	／	鉢	甕	中型	N-1°-E	46°	前期末(金海式)	Fig.33・39・40, Pl.18・24 下甕に2次穿孔
K123	○	／	／	／	／	甕	小型	N-87°-E	-	前期末	Fig.33・46・47, Pl.17・24
K124	／	／	○	／	壺(打欠き)	壺(打欠き)	小型	N-16°-W	39.5°	前期末？	Fig.33・46・47, Pl.17・25
K126	／	○	／	／	壺(打欠き)	壺(打欠き)	小型	N-70°-E	25°	前期末	Fig.33・46・47, Pl.19・24・25 下甕に2次穿孔あり
K127	／	／	○	／	鉢	壺(打欠き)	小型	N-6°-W	62°	前期末	Fig.33・46・47, Pl.19・25 下甕に2次穿孔あり
K128	○	／	／	／	／	鉢	小型	N-14°-E	0°	-	Fig.33・46, Pl.19 倒置棺
K131	○	／	／	／	／	壺	小型	-	-	-	Fig.33・42, Pl.19・25 小壺副葬
K134	／	／	○	／	壺(打欠き)	壺(打欠き)	小型	N-22°-E	36°	前期末	Fig.33・46・47, Pl.20・25 M2北側小口に埋置、下甕に2次穿孔あり
K138	／	／	○	／	鉢	甕	中型	N-1°-W	-	前期末(金海式)	Fig.33・48 5次調査
K144	○	／	／	／	／	甕	大型	N-40°-E	-	前期末(金海式)	Fig.33・48 5次調査
K01	／	／	○	／	壺(打欠き)	壺(打欠き)	小型	N-18°-E	32.5°	中期初頭	Fig.49 D・E区
K02	／	／	○	／	壺(打欠き)	壺(打欠き)	小型	N-S	11°	中期初頭	Fig.49 D・E区
K03	／	／	○	／	壺(打欠き)	壺(打欠き)	小型	N-39°-E	57°	中期初頭	Fig.49 D・E区
K04	／	／	／	○	壺(打欠き)	甕	中型	N-81°-W	7°	前期末	Fig.49 D・E区
K05	○	／	／	／	／	壺？	小型	N-3°-E	48°	前期末	Fig.49 D・E区

料の塗布あり。口径50cm、器高57cm、底部径11.8cmを計る。胴下部に外面よりの2次穿孔あり。

K121号甕棺墓(Fig.33・46・47、Pl.18・24) 墓地東側に位置する単棺である。主軸はN-14°-Eを向く。

甕　棺　底部を残す壺である。内外面ともヘラナデで、器色は外面が暗褐色、内面淡褐色である。底部付近に小黒斑あり。外底以外の外面に黒色顔料を塗布する。底部径11.4cmを計る。

K123号甕棺墓(Fig.33・46・47、Pl.17・24) 墓地東側に位置する単棺である。主軸はN-87°-Eを向く。

甕　棺　底部を残す甕である。外面は細かいハケメで、外面黒色、内面淡褐色である。外底以外の外面に黒色顔料を塗布する。内側よりの2次穿孔後に断口は火に遭っている。底部径10cmを計る。

K124号甕棺墓(Fig.33・46・47、Pl.17・25)　墓地東側の小児棺群内にある上下に壺を使用した覆口式甕棺である。主軸はN-16°-Wに向け、傾斜39.5°の角度で埋置される。

上　甕　内外共ヘラナデ調整。器色は赤褐色。胴部に２次穿孔あり。残存器高28㎝、最大径18.4㎝。

下　甕　口縁下に１条沈線あり。外面はヘラナデ調整。器色は明褐～暗褐色。胴に外面よりの２次穿孔あり。外底以外の外面中位まで黒色顔料塗布。器高34㎝、最大径33.3㎝、底部径9.7㎝を計る。

K126号甕棺墓(Fig.33・46・47、Pl.19・24・25)　墓地東端部の小児棺群に位置し、上下に壺を使用した接口式小型甕棺墓である。主軸をN-70°-Eに向け、傾斜25°の角度で埋置される。

上　甕　外面はヘラナデ調整。器色は淡赤褐色。外面に大黒斑、黒色顔料塗布。最大径37㎝を計る。

下　甕　頸部に１条沈線あり。外面はヘラナデ調整。器色は暗赤褐色を呈し、外面胴部に黒斑多し。胴部下に外部より２次穿孔あり。残存器高33.5㎝、胴部最大径35.5㎝を計る。

K127号甕棺墓(Fig.33・46・47、Pl.19・25)　墓地東側の小児棺群内に位置し、上下に鉢と壺を使用した覆口式小型甕棺墓である。主軸をN-6°-Wのほぼ南北に向け、傾斜62°の角度で埋置される。

上　甕　口縁下に刻目突帯あり。器面はヘラナデ調整で、暗褐色。口径43.2㎝、器高19.7㎝。

下　甕　打欠き部は水平となるが可成りいびつである。器面はヘラナデ調整。器色は外面黒褐～暗赤褐色である。胴部中心に黒斑あり。外面に黒色顔料を塗布。器高32㎝、胴部最大径41㎝を計る。

K134号甕棺墓(Fig.33・46・47、Pl.20・25)　墓地中央の第２号木棺墓(M2)の北側小口に埋置されていた。上下に壺を使用した覆口式小型甕棺墓である。主軸をN-22°-Eに向け、傾斜36°で埋置している。

上　甕　外面ヘラナデ調整で光沢あり、黒色顔料塗布。器高26.5㎝、最大径41.7㎝、底部径9.4㎝。

Fig.50　第四・五次調査第Ⅱ区弥生時代墓地全体図(1/1000)

下　甕　底部は胴部に比べて小さいが、分厚い。外面は、ヘラナデと細かいハケメ調整。器色は黒～黒褐色で、全面に黒斑あり。全面黒色顔料を塗布。内面から２次穿孔あり。器高48.5cm、胴部最大径52cm、底部径10.6cmを計る。

その他の甕棺墓

以下にあげる甕棺墓は、以上に述べた甕棺と造営時期はほぼ同一（弥生時代前期後半～中期初頭）であるが、紙面の都合から出土状況のみを掲載した。（Fig.48・49、Pl.20）吉武遺跡群４次調査で見つかった特定集団墓（昭和59年度）の範囲確認調査（第５次調査）では成人墓を中心とした墓地が更に北側へ20m程広がり、殆ど例外なく副葬土器が見られる。また、Ⅰ区ではこの他に特定集団墓地の東・南東側などで同時期の小児棺が点々と見つかっている。詳細は一覧表を参照されたい。（Tab.3）

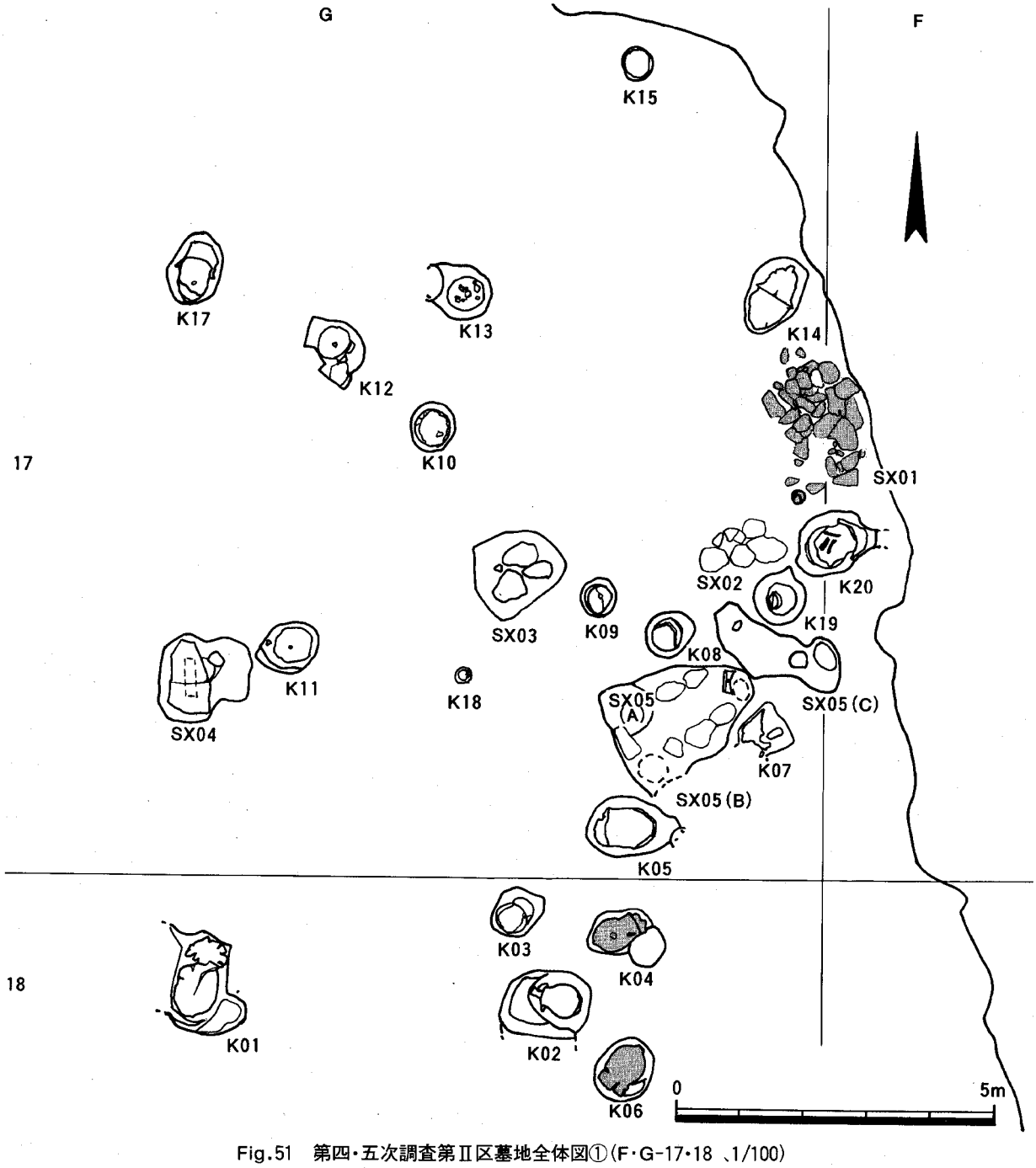


Fig.51　第四・五次調査第Ⅱ区墓地全体図①（F・G-17・18 、1/100）

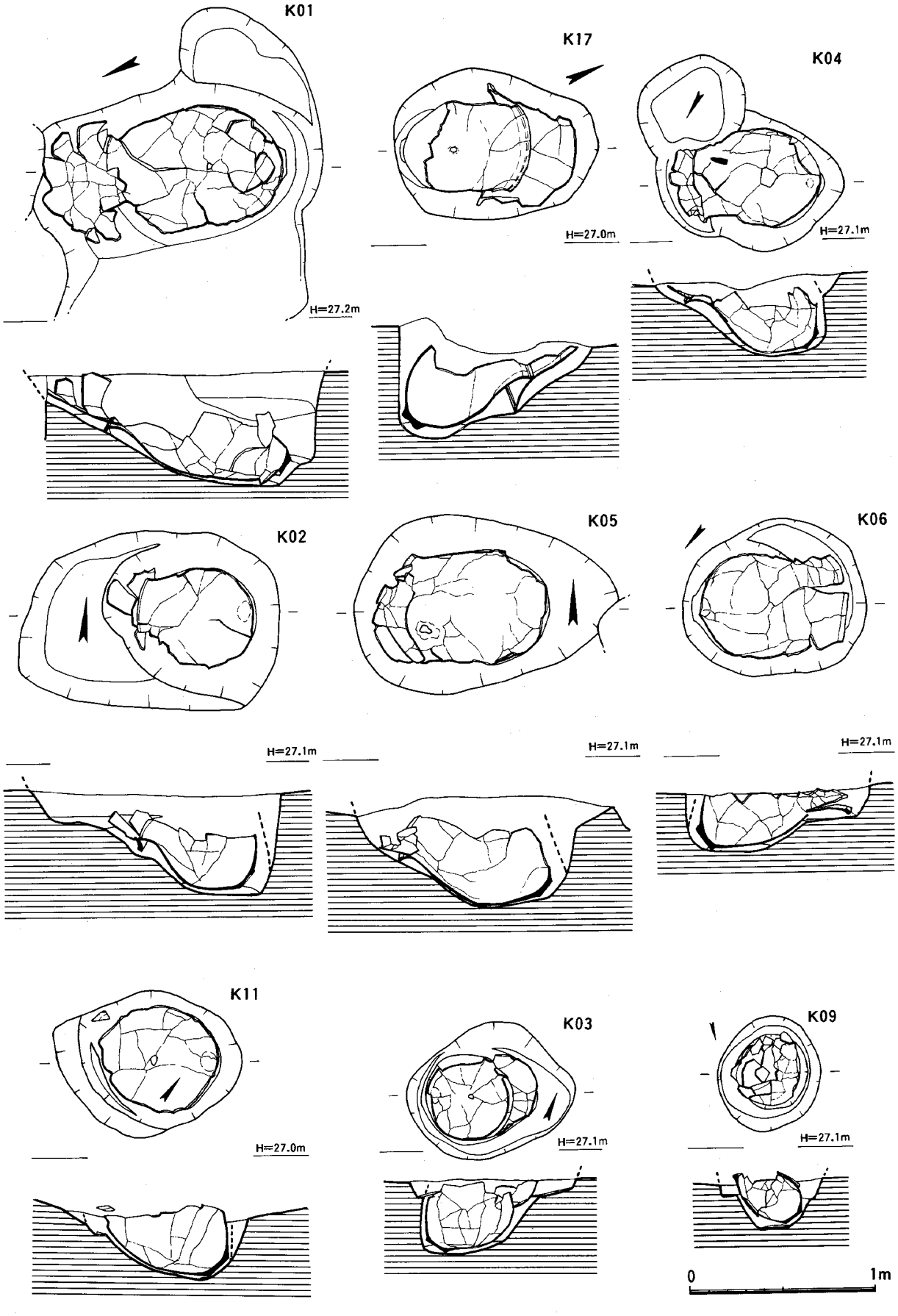


Fig.52　K01・02・03・04・05・06・09・11・17号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

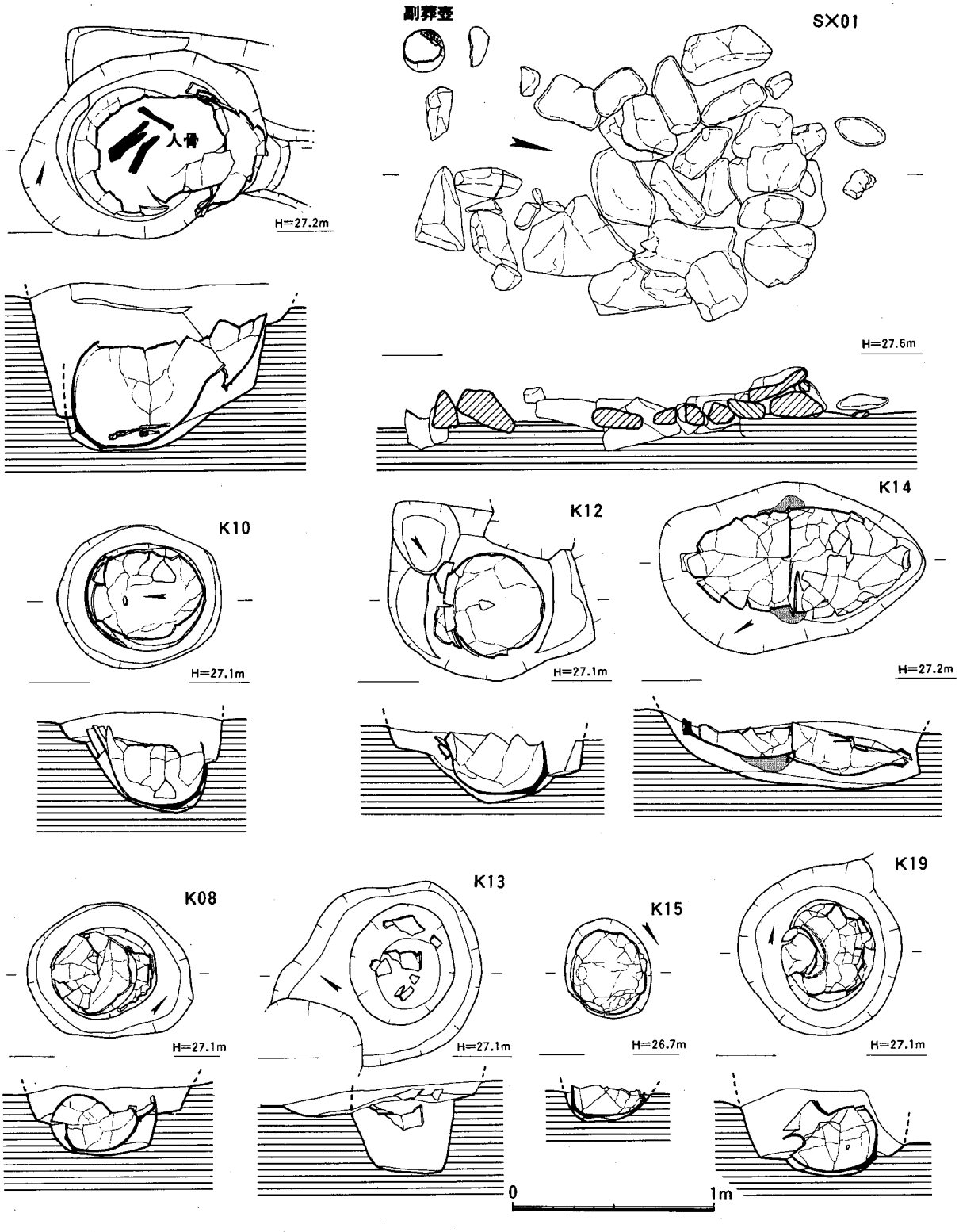


Fig.53　K08・10・12・13・14・15・19・20号甕棺墓・SX01石組み遺構出土状況実測図(1/30)

Ⅱ．第Ⅱ区の調査

第Ⅱ区は、吉武遺跡群を最大幅50m程度で南西から北東方向に450m以上延びる「甕棺ロード」の東南側の浅い谷を挟む位置にあり、東西に長い舌状丘陵上に２地点の弥生時代墓地が営まれている。

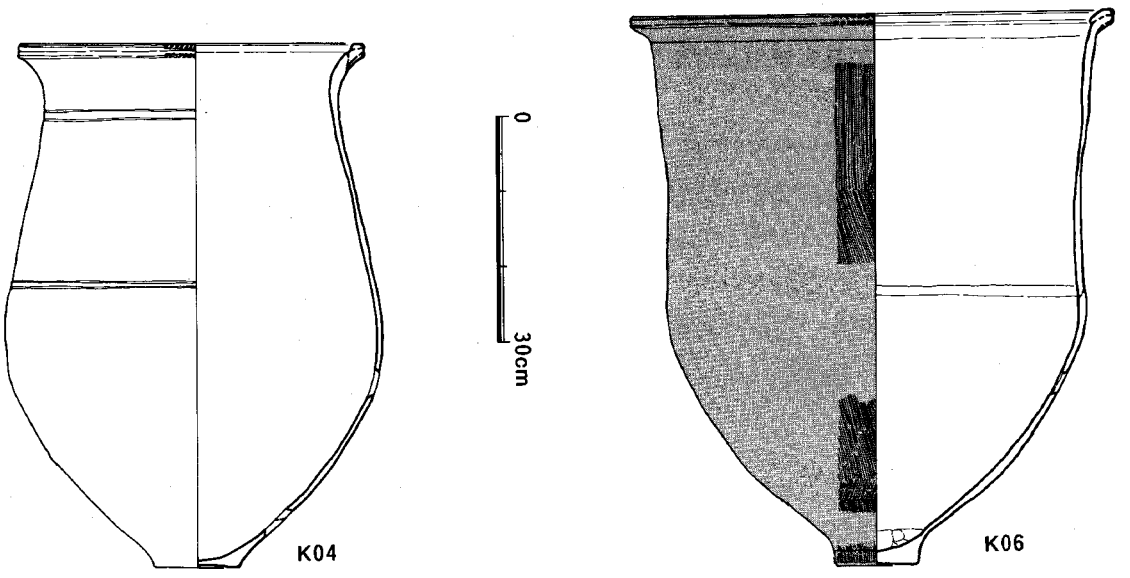


Fig.54　K04･06号甕棺実測図(1/10)

このうち東側(G-16地区)の墓地は、前期末甕棺墓20基、石組み遺構(SX)2基からなる小規模なものである。東側を削平されているため遺構数はさらに増えると思われる。これを第Ⅱ区東墓地と呼ぶ。

また、東墓地より西へ200mのところに甕棺墓32基からなる小規模な墓地がある。これは東西約60m、南北30mの範囲に細長く分布する墓地(H-17・18地区)であり、これを第Ⅱ区西墓地と呼ぶことにしたい。紙面の制限からここでは当該期の甕棺のうち、成人棺で共伴遺物をもつもの、副葬土器を伴う石組み遺構、特徴ある文様で飾るものなどを取り上げて報告する。他の甕棺については出土状況と遺構一覧表を参照されたい。

① **第Ⅱ区東墓地**(Fig.50～57、Pl.20・26)

K04甕棺墓(Fig.51･52･54･56､Pl.20･26)　墓地南側に位置する中型の甕棺墓である。上下に甕を使用する呑口式で、下甕から磨製石剣の先端部が1点出土した。甕棺は、主軸をN-57°-Eに向け、傾斜40°の角度をもって埋置されている。棺のうち上甕は図化に耐えず、下甕のみを報告する。

下　甕　肥厚する口縁を有し、口唇の上下に間隔の広い刻目を施す。また、口縁下と胴部中位よりやや上に2条ずつの沈線を巡らす。磨滅のため調整は不明。器色は、内外面ともに淡褐色を呈する。黒斑は、底部から20～50cmのところに小型が点在する。胴部下と底部に2次穿孔が見られる。口径46cm、器高68.8cm、胴部最大径50cm、底部径11cmを計る。胎土は、やや粗で粗砂を多く混入する。

共伴石剣　身は先端まで鎬が通るが、やや全体に厚みに欠ける。側辺もよく研ぎ出されているが、頁岩系統のやや軟弱な石材のためか自然の剝落が著しい。残存長13.7cm、最大幅4cm、厚さ0.8cmを計る。

K06甕棺墓(Fig.51･52･54･56､Pl.20･26)　墓地南端に位置す

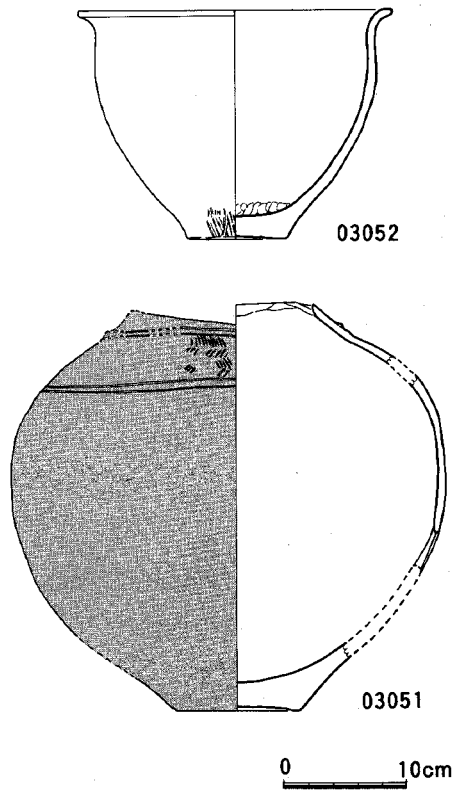


Fig.55　第Ⅱ区出土土器実測図(1/6)

る中型甕棺墓である。中型甕を使用した単棺である。主軸をN-48°-Eに向け、傾斜37°の角度で埋置される。木蓋を使用したものか。

甕　棺　甕は、胴部の中位からやや外方に開き気味に立ち上がり、胴部中位の内面はくぼんで段をなして肥厚する口縁とつながる。口縁外口唇の上下に刻目を巡らす。上端がやや小型で、下端が大型であるが、いずれも緩く押しつけた形となる。

調整は、外面が荒い縦ハケメ後に縦のヘラナデを施す。内面は、荒れが著しく、内底を指オサエする。器色は、外面が暗褐～赤褐色、内面が暗褐色を呈する。また、口縁下から胴部の上半部まで大黒斑が見られる。外面全面に黒色顔料を塗布する。胴部中位より下に外面よりの２次穿孔がある。

口径64.2cm、器高73.5cm、胴部最大径56cm、底部径11.4cmを計る。胎土は、やや粗で、粗砂の混入が多い。焼成は、堅緻である。

共伴磨製石鏃　先端・側辺ともによく研ぎだされている。扁平な断面をなす。石材は、青白色を呈する頁岩系統のものと考えられる。残存全長5.7cm、最大幅1.6cm、厚さ0.3cmを計る。

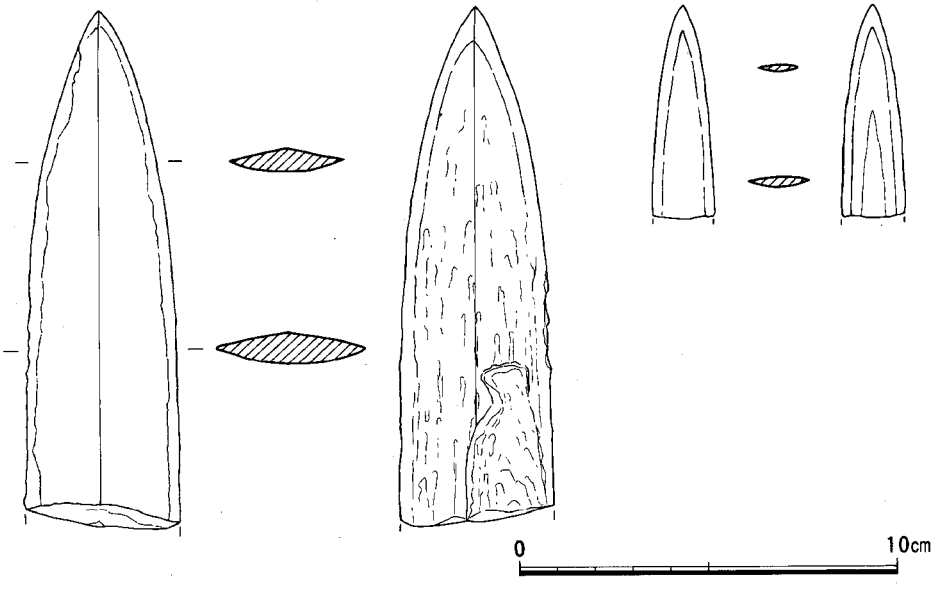


Fig.56　K04･06号甕棺出土石剣･石鏃切先実測図(1/2)

ＳＸ01石組み遺構(Fig.51･53･57､Pl.26)　墓地の北東隅に位置する。石組みは、0.4×0.3m程度の角礫を長辺が約２m、短辺が1.4m程度の長方形に一段に組む。検出した当初は甕棺墓の標石かと考えたが、下部に埋葬主体となる土坑などの遺構が見つからなかったため確実に埋葬に関連する遺構と確定できなかった。しかし遺構の小口にあたる西側には小型壺１個が置かれており、時期決定の良好な土器である。

副葬土器　大きな安定した底部を有する壺である。ややあげ底となる。

胴部の最大径の位置は高く、頸部に平行沈線を巡らし、この間に２段の無軸の羽状文を配する。口縁は小さく、外方に開く。

調整は、胴部下半に横・斜め方向のヘラナデを施し、底部近くには荒い縦ハケメが残る。内底部は、指オサエが残る。

胎土は、非常に密で、粗砂を多く含む。焼成は堅

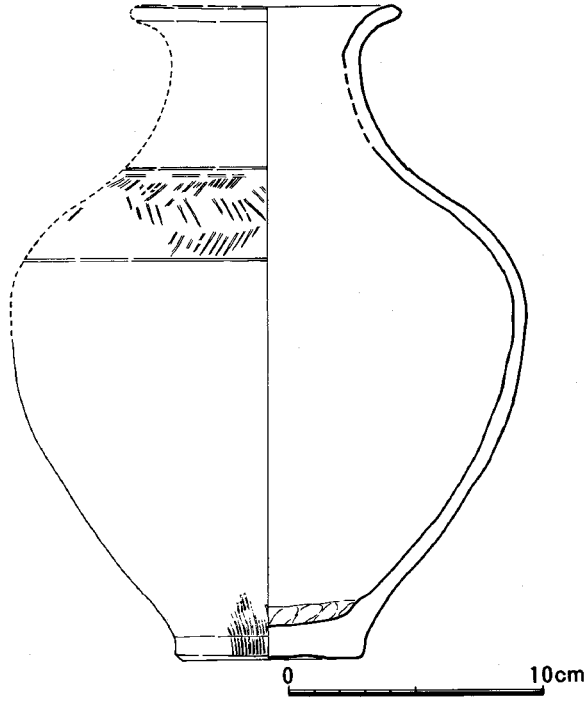


Fig.57　ＳＸ01石組み遺構副葬土器実測図(1/3)

緻である。

第Ⅱ区東墓地出土土器(Fig.55、Pl.26)　墓地内で出土した口縁打欠きの壺形土器**(03051)**と鉢形土器**(03052)**である。いずれも原位置を止めていなかったが、壺形土器では底部付近に2次穿孔が見られることと、鉢形土器の口径がほぼ壺の肩部径と一致することから、これらは本来覆口式甕棺のセットであった可能性が高い。

03051壺形土器　頸部の突帯以上を打欠いて整形する。胴部は扁球状で、全体に肉厚であり、重量感がある。底部はやや上げ底となる。頸部の突帯は段状となり、この下に2段の無軸羽状文を巡らす。さらに、この下にヘラ描きの二条沈線を巡らす。

調整は、外面がヘラナデか。内底に指オサエが見られる。器色は、外面暗褐色～黄褐色で、内面黄褐色を呈する。頸部付近に黒斑が認められる。外面は、丹塗りとなる。胴部中位よりやや下に外部よりの2次穿孔が認められる。器高32.7cm、胴部最大径35.3cm、底部径10.1cmを計る。胎土は、やや粗で、細～粗砂を多く混入する。焼成は、やや軟質である。

03052鉢形土器　底部の大きい安定した鉢である。口縁は端部で小さく引き出す。

調整は、外面が口縁下横ナデ、他は不定方向のヘラナデ、底部付近には荒い縦ハケメを残す。内面は、全面ヘラナデで、内底に指オサエを残す。器色は、外面が淡褐色で、内面は黒色で全体の1/4におよぶ。外面の胴部下半から底部外面にかけて大黒斑あり。また、内面は殆ど黒斑である。

口径24.6cm、器高18.3cm、底部径8.2cmを計る。胎土は、密で、粗砂を少し混入する。焼成は、堅緻

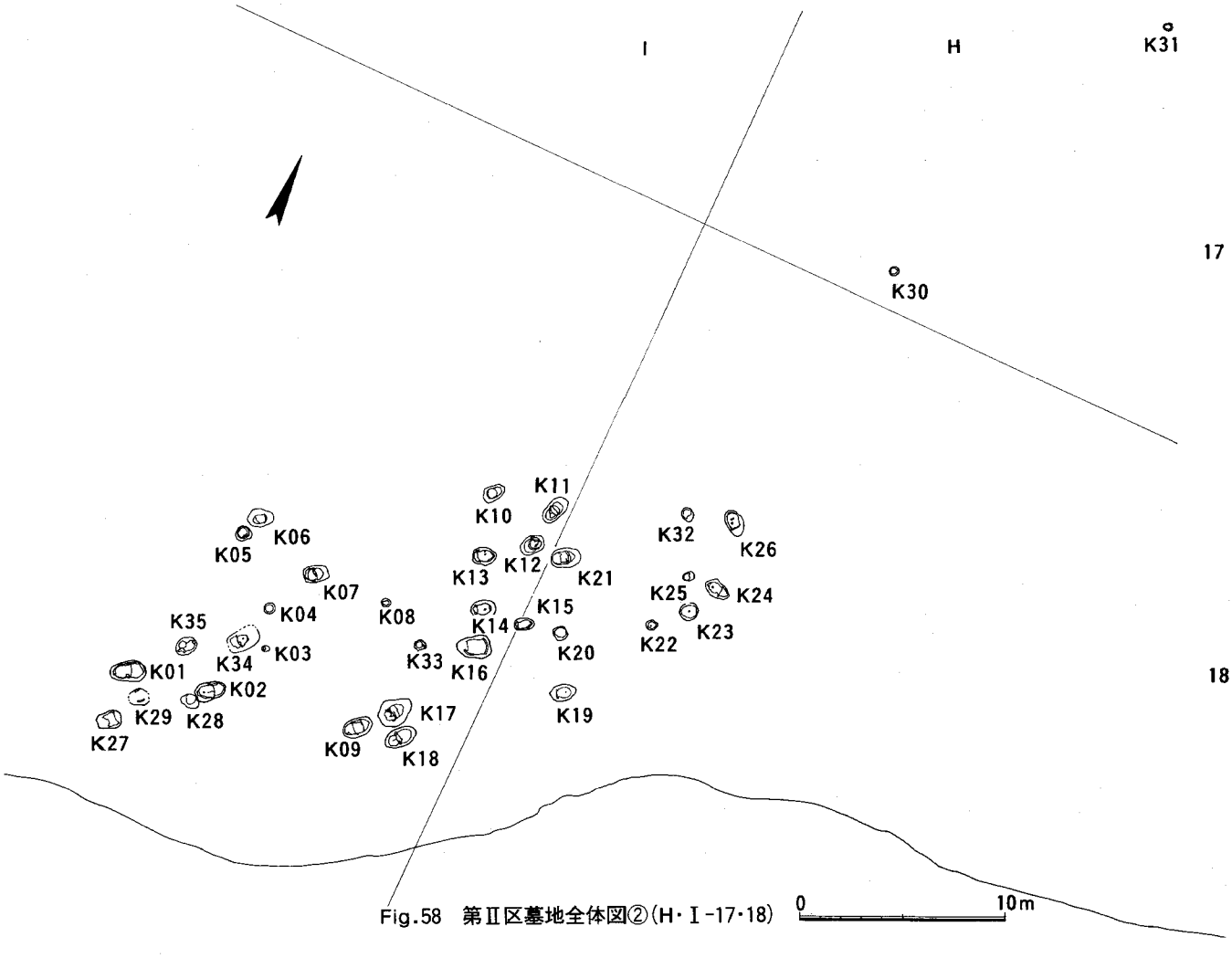


Fig.58　第Ⅱ区墓地全体図②(H・I-17・18)

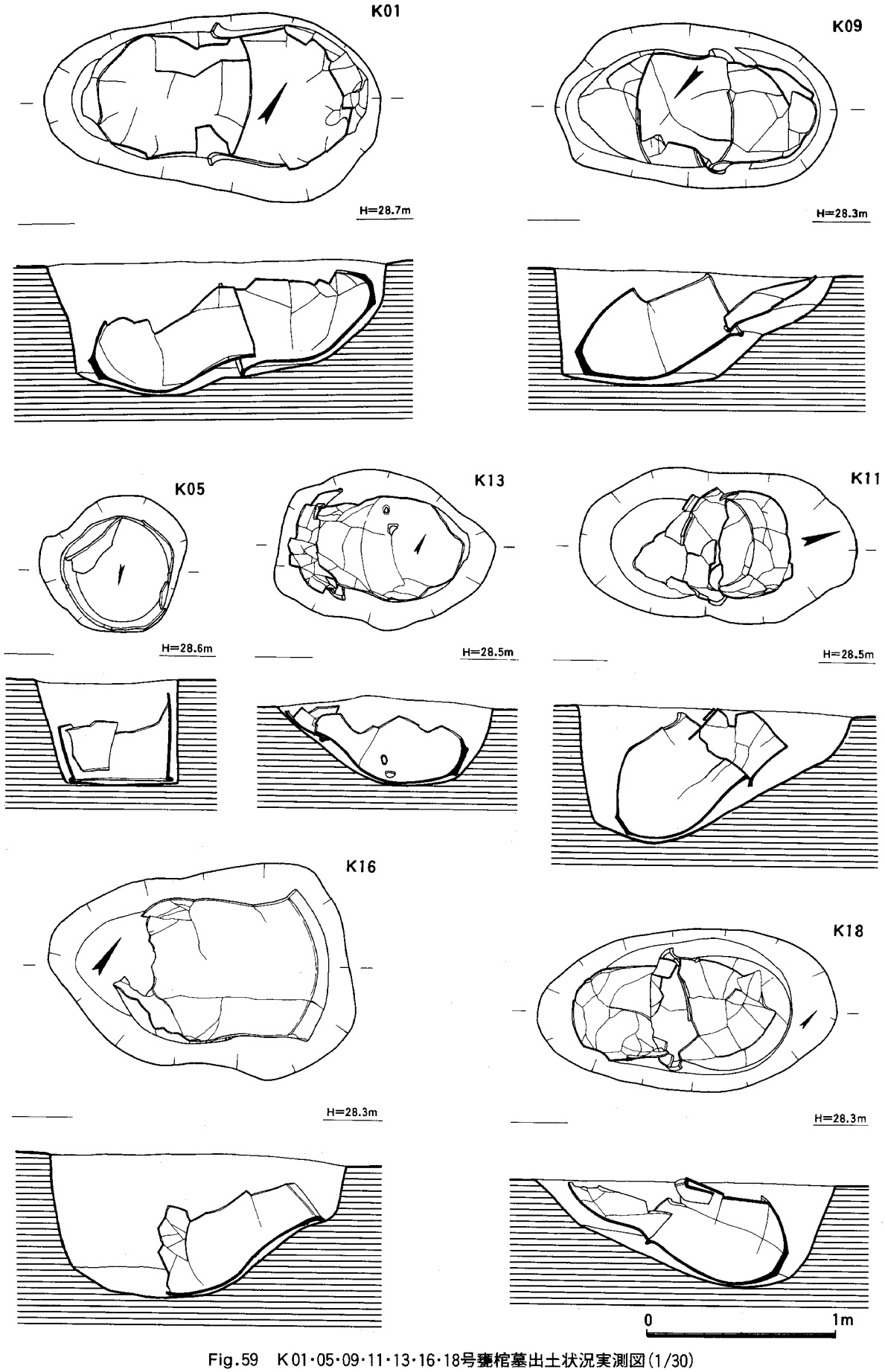


Fig.59　K01・05・09・11・13・16・18号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

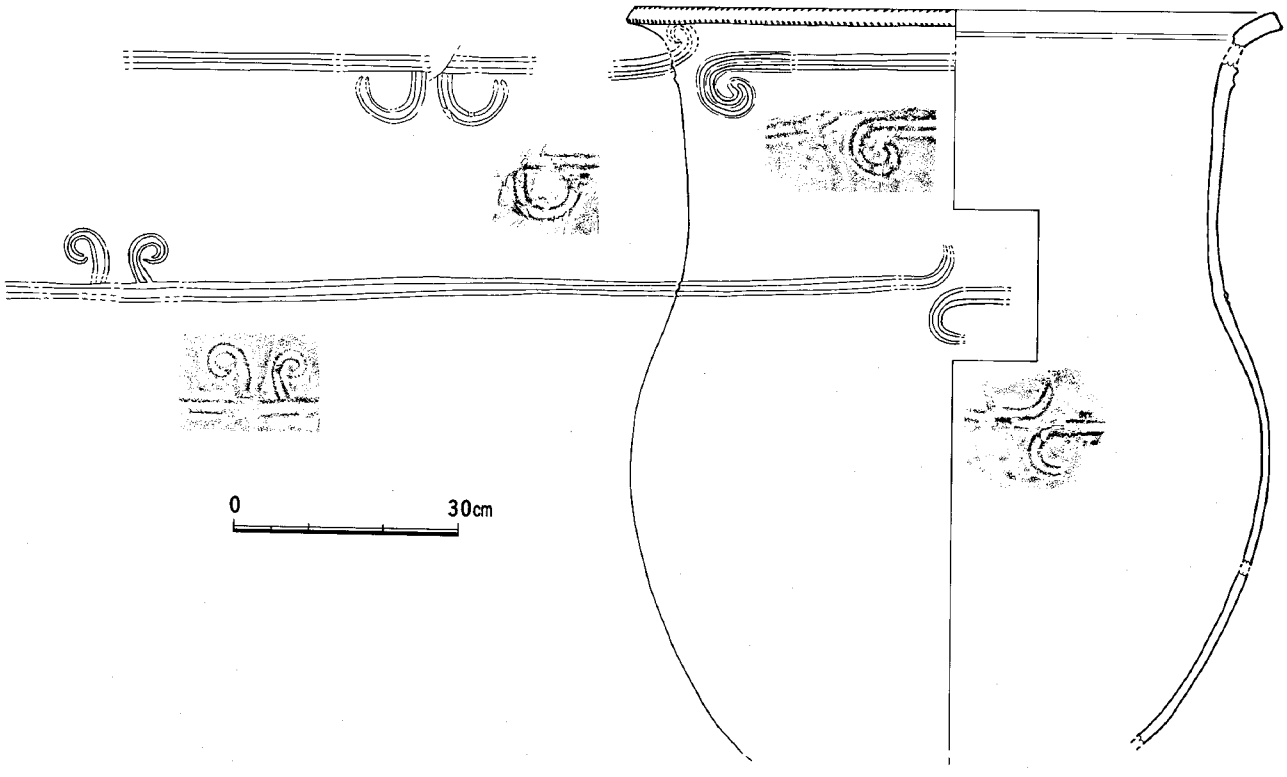


Fig.60　K16号甕棺実測図(1/10)

である。

これらの土器は、前述したように原位置を失ってはいるが、第Ⅱ区墓地周辺の土器のなかでは最も古い型式を残していることから墓地形成の時期を知るうえで貴重な土器であるといえる。

② **第Ⅱ区西墓地**(Fig.50・58～63、Pl.20・26)

本地区の西墓地は、東墓地の西側200mに位置し、舌状丘陵の南縁に偏って32基以上が見つかっている。

この中には成人墓と比較すると相対的に浅い墓坑の小型棺(小児棺)なども残骸となってはいるが、水田化による削平を受けているにも拘わらず検出できることからこの墓地は旧地形上では少なくとも尾根部よりもやや下った緩斜面に造られたと考えることができる。

西墓地では、甕棺への副葬遺物、共伴遺物など全く出土していない。そして時期的には弥生時代前期末から中期初頭の時期で完結することが知られる。

以下では紙面の制限から器面の装飾的文様に特徴のあるK16号甕棺を中心に報告しておくこととしたい。

K16号甕棺墓(Fig.58～60、Pl.20・26)　東西に長い西墓地中央の南寄りに営まれた単式甕棺墓である。棺には大型甕を使用し、口縁部付近の墓坑はすでに直立に近く立ち上がり、蓋として他の甕を使用する状況にないことから、合わせには木蓋を使用した可能性が高い。主軸は、N-54°-Eに向けて埋置される。

甕　棺　甕は、やや膨らんだ胴部から殆ど直立気味に頸部が立ち上がり、外方へ開く口縁につながる。全体に器壁が厚く、重量感がある。口縁部の上下端には細かい端正な刻目を巡らす。また、口縁下お

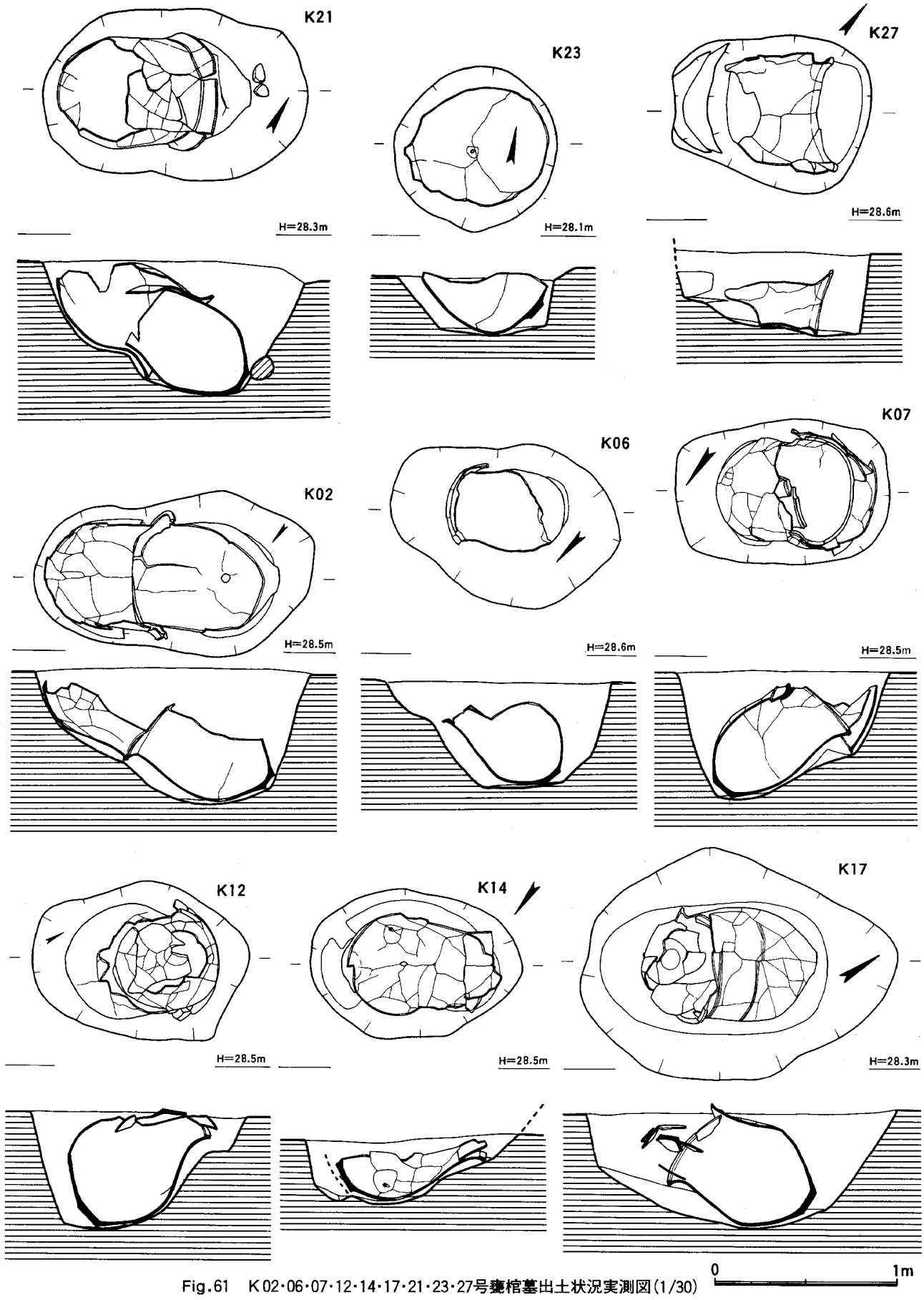


Fig.61　K02・06・07・12・14・17・21・23・27号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

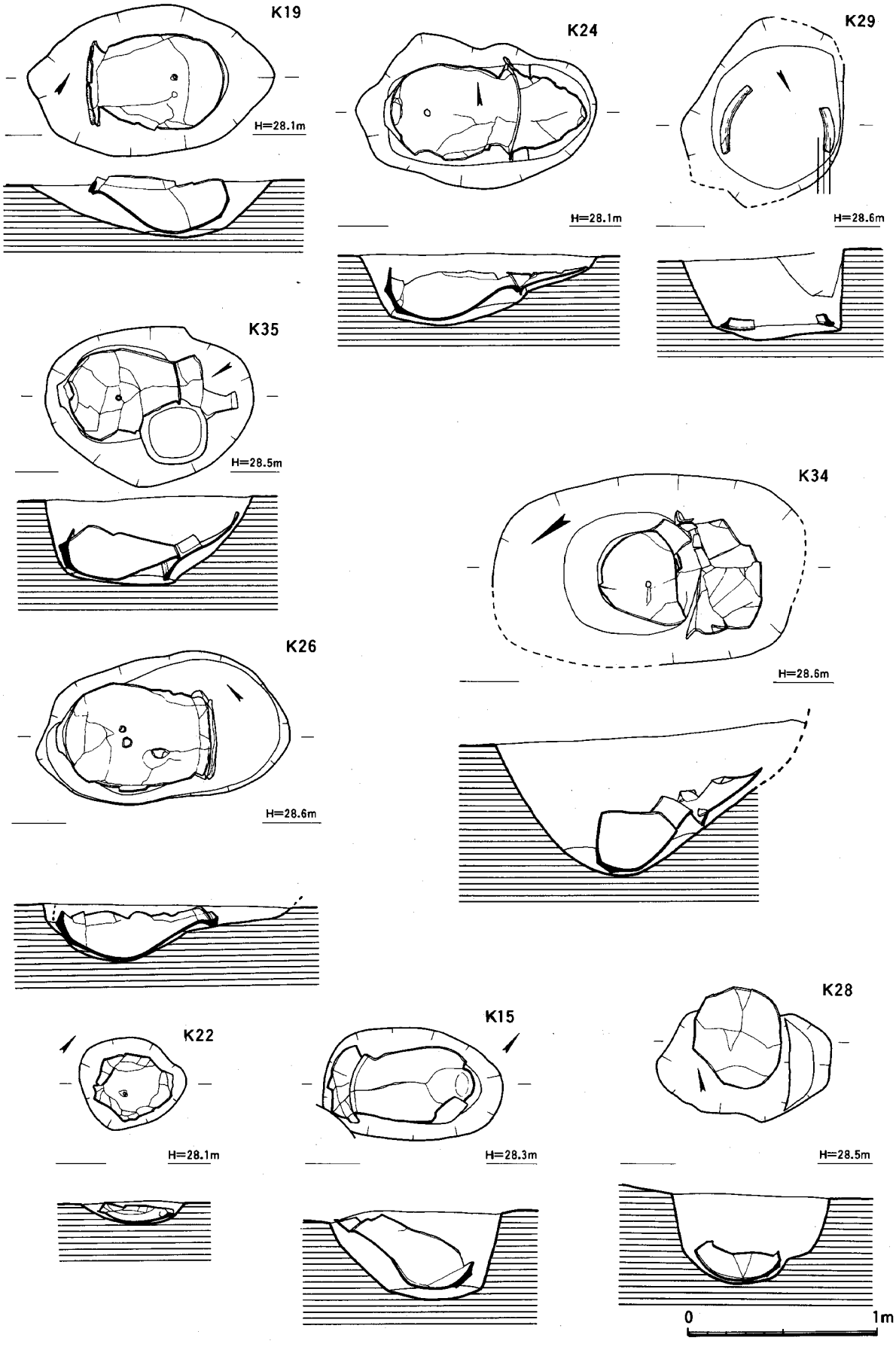


Fig.62　K15・19・22・24・26・28・29・34・35号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

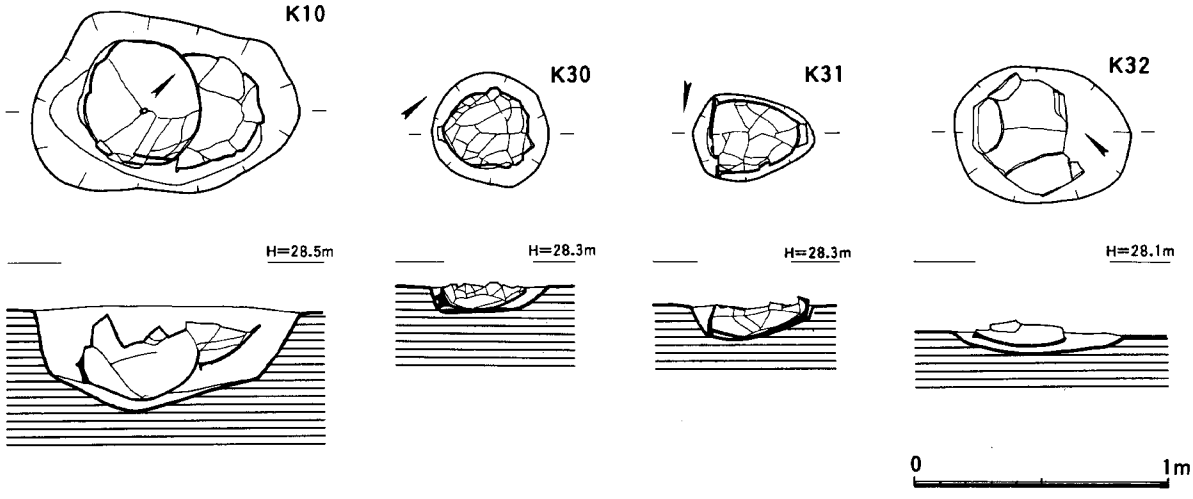


Fig.63　K10・30・31・32号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

よび頸部の位置に粘土帯張り付けの蕨手状文を巡らす。頸部の張り付け文様は、胴部に沈線であらかじめ粘土帯の原形を単線で描いた後に断面中窪みの粘土帯を張り付けて構成している。その文様は、別方向から張り付けてきた粘土帯の端部をそのまま接合せずに、その端部のそれぞれを対向するように逆時計回りに蕨手状に丸める。また、直線的に巡る粘土帯の下端に沿って半円形の粘土帯を2個対向するように貼り付けて双脚状とするものである。

また、頸部下端の文様は、口縁下のものと同様に直線的に貼り付けた粘土帯の端部を対向するように逆時計回りに蕨手状におさめているが、口縁下のものに比較して巻きは顕著ではない。さらに、この直線的な粘土帯の上端にはまさに芽吹いた蕨のように正立の状態の蕨手文2個を貼り付けている。

次に調整は、全体に磨滅が著しいために不詳であるが、ナデかと考えられる。器色は、外面が淡黄褐色で、内面は淡赤褐色を呈する。黒斑は、外面の胴部下半に見られる。口径87.2cm、器高120cm前後である。胎土は、やや粗で石英・長石・雲母の粗砂を多く含む。焼成は、やや軟質である。

その他の甕棺墓(Fig.58・59・61～63)　これ以外の甕棺墓については調査一覧表(Tab.4)を参照されたい。

この中にはK05・29号甕棺墓のような倒置棺も散見されるが、大部分は当該時期の葬法を守っており、埋置角度の強い、覆口もしくは接口式の形式をとっている。東墓地とほぼ併存した墓地と考えることができよう。

Tab. 4　吉武遺跡第四・五次調査Ⅱ区弥生墓地遺構一覧

番号	型式				組み合わせ		規模	埋置方位	埋置角度	時期(型式)	備考
	単棺	複棺			上甕	下甕					
		接口	覆口	呑口							
K01	／	／	／	○	甕(打欠き)	甕	大型	N-23°-E	38°	前期末	Fig.52 G-18
K02	／	／	○	／	甕	甕	中型	N-86°-E	41°	前期末	Fig.52 G-18
K03	／	／	○	／	壺(打欠き)	壺(打欠き)	小型	N-66°-E	57°	前期末	Fig.52 G-18
K04	／	／	／	○	甕(打欠き)	甕	中型	N-57°-E	40°	前期末	Fig.51·52·54·56 G-18 石剣1副葬
K05	／	／	／	○	甕(打欠き)	甕	中型	N-88°-E	39°	前期末	Fig.52 G-17
K06	○	／	／	／	／	甕	中型	N-48°-E	37°	前期末	Fig.51·52·54·56 G-18 石鏃1副葬
K08	／	／	○	／	鉢	壺(打欠き)	小型	N-46°-E	33°	中期初頭	Fig.53 G-17
K09	／	／	○	／	甕(打欠き)	甕(打欠き)	小型	N-76°-W	52°	前期末	Fig.52 G-17
K10	／	／	○	／	甕	甕(打欠き)	中型	N-2.5°-E	53°	中期前半	Fig.51·53 G-17
K11	○	／	／	／	／	甕	中型	N-50°-E	50°	前期末	Fig.52 G-17
K12	／	／	○	／	鉢	甕(打欠き)	中型	N-58°-W	42°	中期前半	Fig.53 G-17
K13	○	／	／	／	／	甕	小型	N-35°-W	—	中期前半	Fig.53 G-17
K14	／	○	／	／	甕	甕	中型	N-32°-E	10°	中期前半	Fig.53 G-17
K15	○?	／	／	／	／	壺?	小型	N-56°-W	55.5°	中期前半	Fig.53 G-17
K17	／	／	○	／	甕	甕	大型	N-20.5°-E	44°	前期末	Fig.52 G-17
K19	○	／	／	／	／	壺	小型	N-77.5°-E	46.5°	中期前半	Fig.53 G-17
K20	／	／	○	／	鉢	甕(打欠き)	大型	N-72°-E	50°	中期前半	Fig.53·57 G-17
SX01	／	／	／	／	／	／	／	N-14°-W	—	—	Fig.51·53·57 G-17 小壺副葬
K01	／	／	○	／	甕	甕	大型	N-56°-E	17°	前期末	Fig.58·59 H·I-18
K02	／	○	／	／	甕	甕	中型	N-52°-E	35°	前期末	Fig.58·61 H·I-18
K03	○?	／	／	／	／	壺?	小型	N-85°-E	—	前期末?	Fig.58 H·I-18
K04	○	／	／	／	／	壺(打欠き)	小型	N-52.5°-E	—	前期末?	Fig.58 H·I-18
K05	○	／	／	／	／	甕	大型	—	—	前期末	Fig.58·59 H·I-18 倒置棺
K06	○	／	／	／	／	甕	中型	N-48°-E	50°	前期末	Fig.58·61 H·I-18
K07	／	／	○	／	鉢	甕	中型	N-55°-E	47°	前期末	Fig.58·61 H·I-18
K09	／	／	／	○	甕	甕	大型	N-48°-E	25.5°	前期末	Fig.58·59 H·I-18

番号	型式				組み合わせ		規模	埋置方位	埋置角度	時期(型式)	備考
	単棺	複棺			上甕	下甕					
		接口	覆口	呑口							
K10	／	／	○	／	甕	壺(打欠き)	小型	N-40.5°-E	23°	中期初頭	Fig.58·63 H·I-18
K11	／	／	○	／	甕	甕	大型	N-18°-E	38.5°	前期末	Fig.58·59 H·I-18
K12	／	／	○	／	壺	甕	中型	N-26°-E	44°	前期末	Fig.58·61 H·I-18
K13	／	／	○	／	甕	甕	大型	N-62°-E	24°	前期末	Fig.58·59 H·I-18
K14	／	／	／	○	甕(打欠き)	甕	中型	N-55°-E	29°	前期末	Fig.58·61 H·I-18
K15	／	○	／	／	甕(打欠き)	甕	小型	N-49°-E	50°	前期末	Fig.58·62 H·I-18
K16	○	／	／	／	／	甕	大型	N-54°-E	—	前期末	Fig.58～60 H·I-18 蕨手文貼付
K17	／	／	／	○	甕(打欠き)	甕	中型	N-31°-E	31°	前期末	Fig.58·61 H·I-18
K18	／	○	／	／	甕(打欠き)	甕	大型	N-47°-E	26°	前期末	Fig.58·59 H·I-18
K19	○	／	／	／	／	甕	中型	N-60°-E	27°	前期末	Fig.58·62 H·I-18
K20	○	／	／	／	／	甕	中型	N-50°-E	—	前期末?	Fig.58 H·I-18
K21	／	／	○	／	甕	甕(打欠き)	大型	N-61°-E	32°	前期末	Fig.58·61 H·I-18
K22	○	／	／	／	／	甕	小型	N-47°-E	—	前期末	Fig.58·62 H·I-18
K23	○	／	／	／	／	甕?	大型	N-81°-E	39°	前期末	Fig.58·61 H·I-18
K24	／	○	／	／	甕	甕	中型	N-86°-W	26°	前期末	Fig.58·62 H·I-18
K25	○	／	／	／	／	甕?	小型	N-54°-E	—	前期末?	Fig.58 H·I-18
K26	／	○	／	／	甕	甕	中型	N-44°-W	28°	前期末	Fig.58·62 H·I-18
K27	○	／	／	／	／	甕	大型	N-47°-E	—	前期末	Fig.58·61 H·I-18
K28	○	／	／	／	／	壺(打欠き)	小型	N-77°-W	52°	前期末	Fig.58·62 H·I-18
K29	○	／	／	／	／	甕	中型	—	—	前期末	Fig.58·62 H·I-18 倒置棺
K30	○	／	／	／	／	甕	小型	N-37°-E	—	中期初頭	Fig.58·63 H·I-17
K31	／	○	／	／	?	甕	小型	N-79°-E	9°	中期前半	Fig.58·63 H·I-17
K32	○	／	／	／	／	甕	小型	N-43°-W	—	中期前半	Fig.58·63 H·I-18
K34	／	／	○	／	甕	甕	中型	N-36°-E	60°	前期末	Fig.58·63 H·I-18
K35	／	／	○	／	甕	甕	中型	N-33°-E	12°	前期末	Fig.58·62 H·I-18

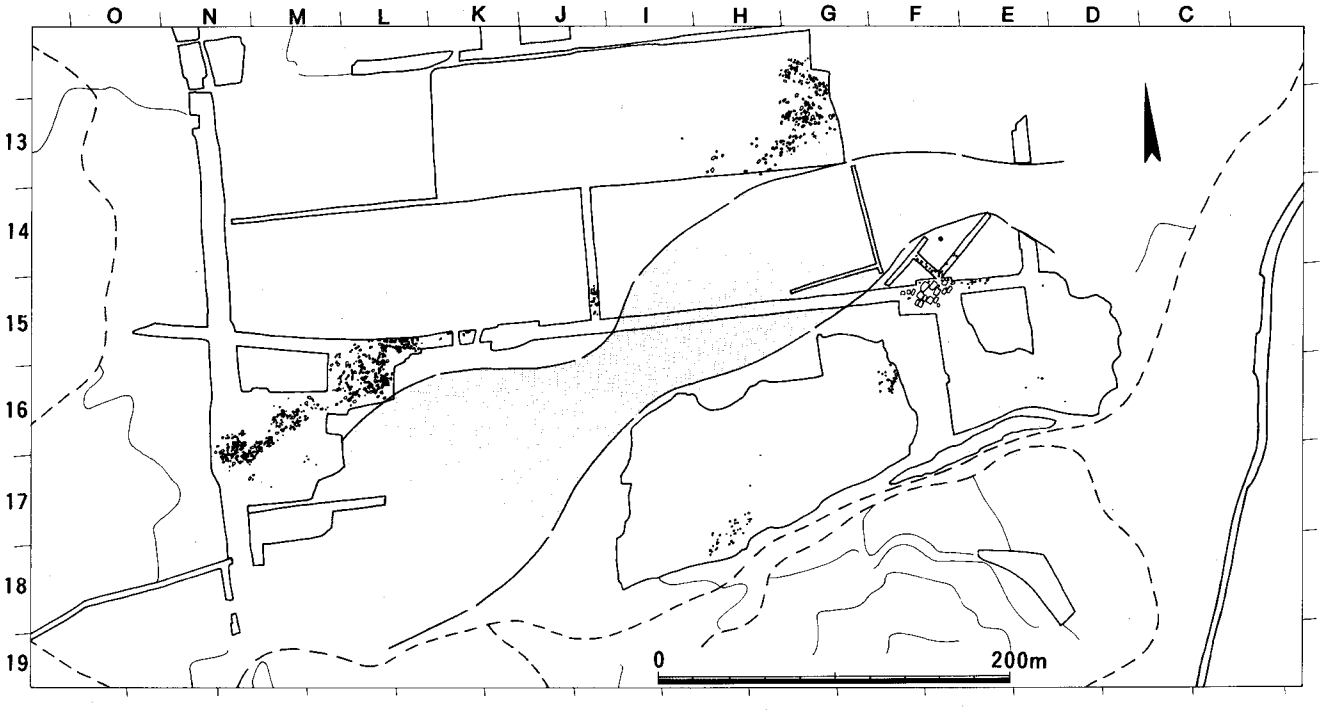


Fig.64　第四・五次調査第Ⅲ区弥生時代墓地分布〔1〕(1/4300)

Ⅲ　第Ⅲ区の調査

第Ⅲ区は、第Ⅱ区の北西側250m～300mにあたり、この間には浅い谷を挟む。この地区の弥生時代墓地は、時期的に前期末から後期前半の時期までの長期間にわたり造墓が行われた結果、甕棺墓を主体とする墓地が帯状の分布状態となっており、これを「甕棺ロード」とよんでいるが、このうち総数約1,200基が発掘調査された。この「甕棺ロード」は吉武遺跡群を南西から北東方向に貫くように延び、延長450m以上、幅20～50mを計り、北側の端部に位置するのが中期中葉頃に造営された樋渡墳丘墓である。(Fig.64)

このように累々と積み重なる甕棺墓地ではあるが、帯状分布の詳細は実は幾つかの墓地ブロックが複合したものであり、それぞれのブロックには墓地の初源となる古式タイプの甕棺墓が存在する。

今回報告ではM・N-16地区で見つかった前期末から中期初頭にあたるK05号甕棺墓、K08号甕棺墓および副葬品を出土した中期末のK67号甕棺墓（M-16地区）を報告する。

K67号甕棺墓(Fig.65～68、Pl.20・27)　調査区北側の１号幹線道路内（K・L・M-15・16地区）で見つかった接口式大型甕棺墓である。主軸をN-80°-Eにとり、傾斜９°の角度で埋置されている。棺には上下に大型の甕を使用する。下甕から１振りの副葬素環鉄刀が切先を東に向けて出土した。

本甕棺墓は周辺に密集する他の甕棺墓に比較して特に墓坑の堀方規模が大きいという事はなく、独立墓の様相もない。第６次調査でも同様に北側に延びる「甕棺ロード」で同時期の甕棺墓から鉄剣や櫛が出土しており、北端部の樋渡墳丘墓に参加出来ない階層の墳墓に相当するものであろうか。

上　甕　やや内傾する口縁直下に１条の断面三角突帯を巡らす。また、胴部中位置には断面裁頭三角形で、上端が平坦となる突帯２条を巡らす。なおこの突帯は、いずれも下方を向く。

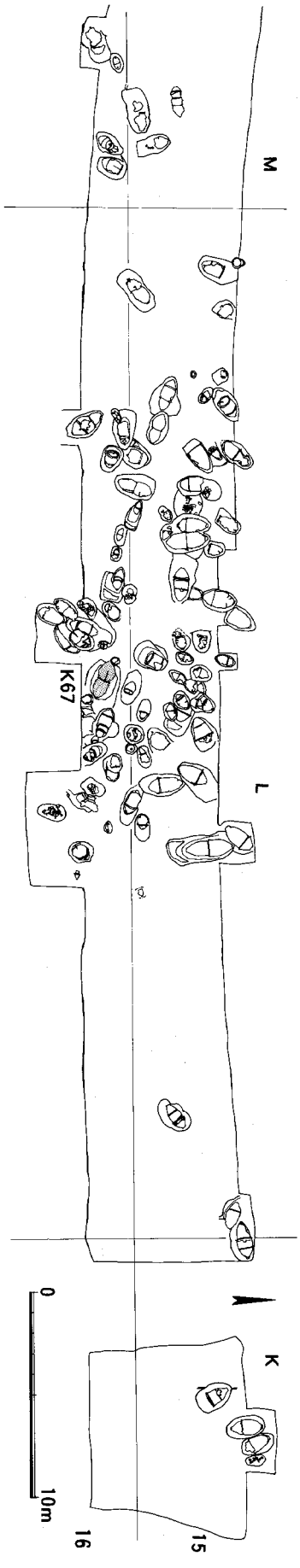


Fig.65　第Ⅲ区墓地全体図①
(K・L・M-15・16)

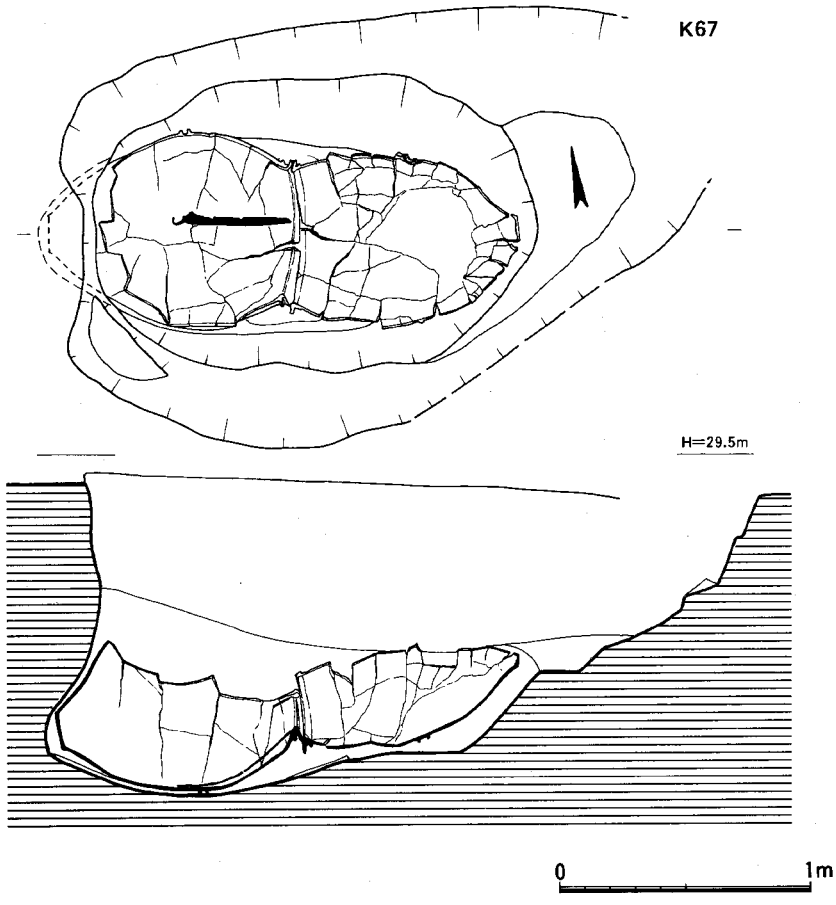


Fig.66　K67号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

調整は、全体に荒れが著しく、口縁上端部に強い横ナデが残る。器色は、外面が淡黄褐色－暗赤褐色、内面が暗赤褐色を呈する。

黒斑は、胴部突帯部及び上半部に大型のものが見られる。また、外面口縁平坦部及び胴部に黒色顔料の塗布が見られる。口径57.8㎝、器高90㎝、突帯部最大径59㎝、底部径12.2㎝を計る。胎土は、密で、細砂を多く混入する。焼成は、堅緻である。

下　甕　上甕より口縁部の内傾の顕著な大型甕で、口縁がよくしまっている。口縁直下には下方に垂れる１条の三角突帯を巡らす。また卵形の胴部の中位には上端部がやや窪む断面台形の突帯２条を巡らす。全体に薄づくりである。

調整は、口縁上端が強い横ナデで、他はヘラナデであろうか。また、内面は口縁に強い横ナデが残る。器色は、外面が淡黄褐色、内面が暗褐色を呈する。外面の一部に丹塗りの痕跡が残る。また、内外面ともに黒色顔料を塗布している。口径51.7㎝、器高96.7㎝、突帯部最大径76.3㎝、底部径17㎝を計る。胎土は非常に密で、混入砂は少ない。焼成は堅緻である。

副葬鉄刀　棺内に進入した土砂の圧力により５個に折れており、湿度が非常に高い状態に置かれていたため環頭の大半が錆化の為に失われていたがほぼ全体サイズを知ることができる。

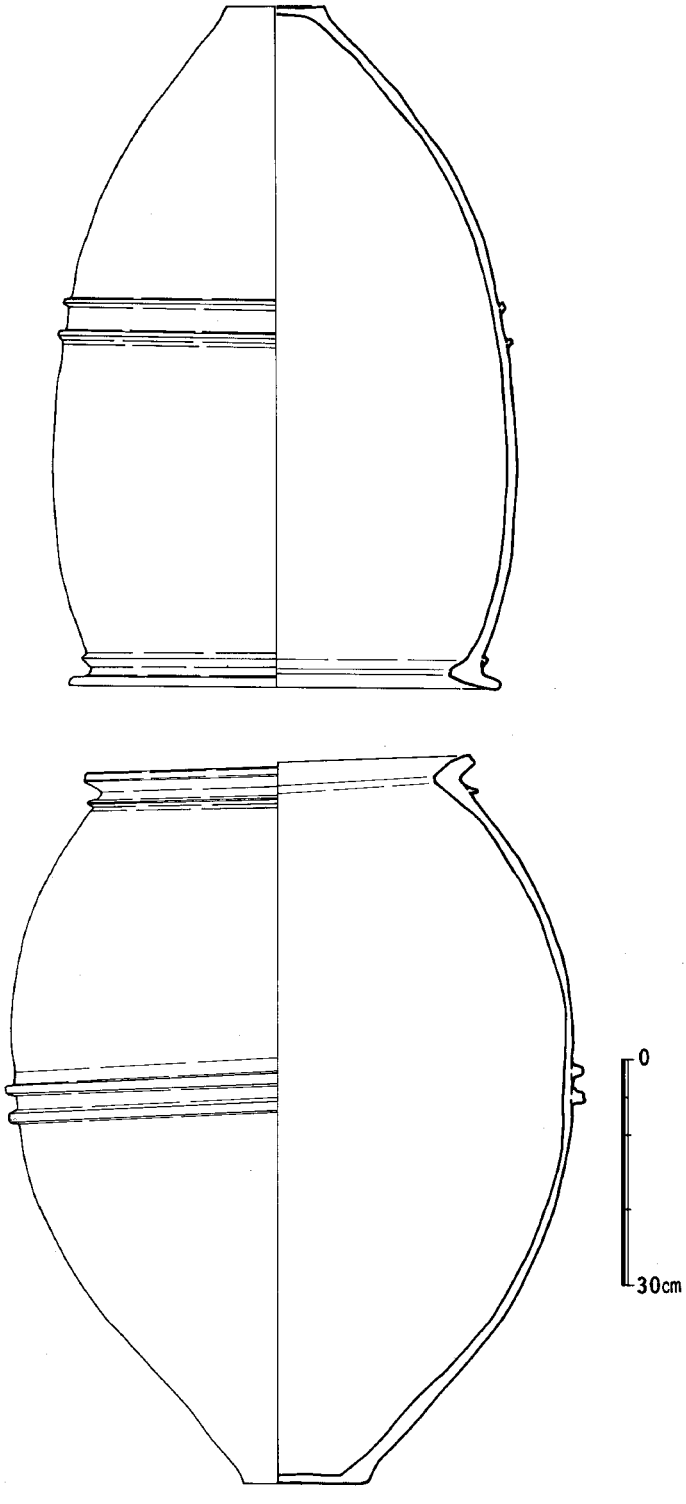


Fig.67　K67号甕棺実測図(1/10)

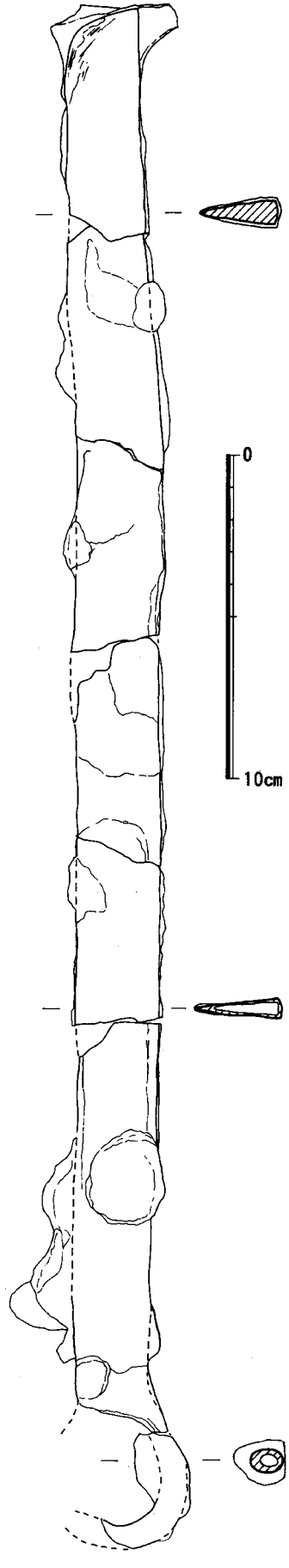


Fig.68　K67号甕棺副葬素環頭刀実測図(1/2)

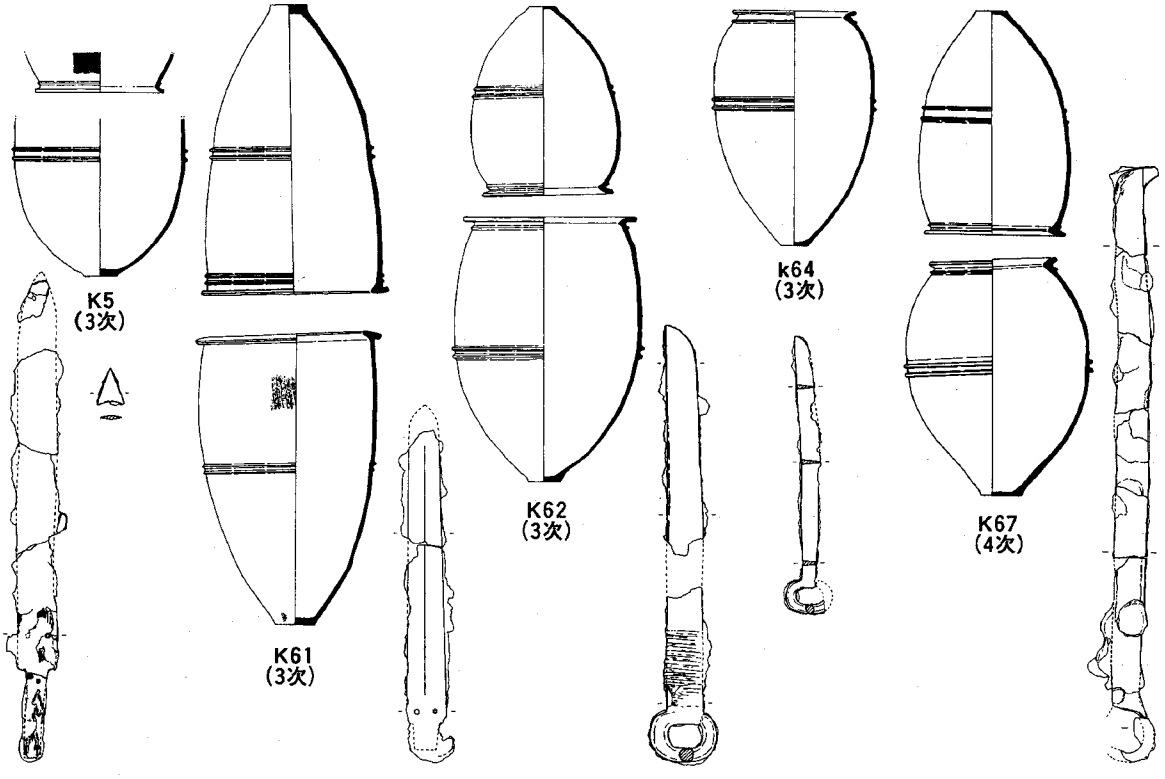


Fig.69　樋渡墳丘墓他にみる甕棺と副葬品図

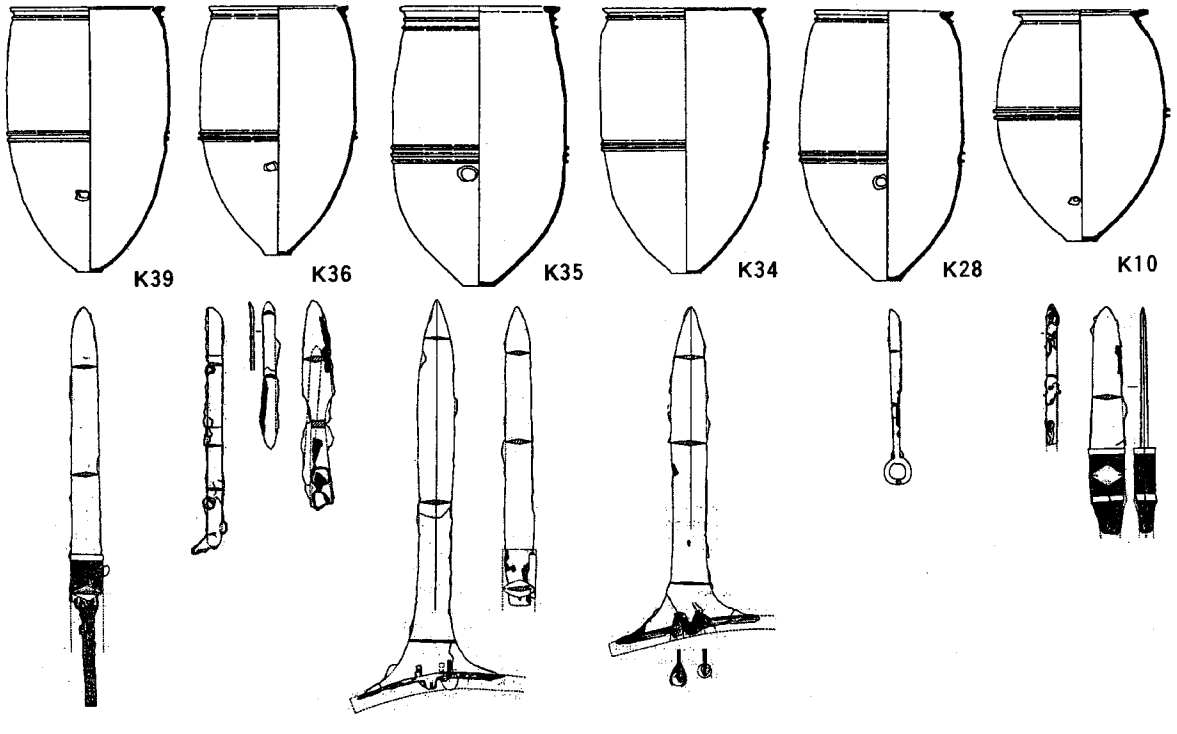


Fig.70　立岩遺跡にみる甕棺と副葬品図

環頭の断面は扁円形をなす。また身部は全体に断面がクサビ形をなすが、切先側がよく旧態を止めていると思われる。全長47.4cm。身幅は手元で2.7cm。切先側で2.4cmを計る。

K05号甕棺墓(Fig.72～74、Pl.20·27)　墓地の南側で見つかった呑口式の大型甕棺墓である。長楕円形の墓坑内にほぼ水平に埋置され、主軸をN-64°-Eにとる。棺は、上下に鉢型土器と大型の甕を使用するが、上下甕のサイズは口径のうえで非常な差があり、これを周辺に大量の青白色粘土で目張りをする事によって埋めている。

上　甕　大型の鉢形土器である。口縁はややひずんでおり、水平とならないが全体に薄づくりの製品である。

調整は、外面が口縁下に強い横ナデで、これ以下は細かい横・斜めのハケメ調整を施しており、内面は、横・斜め方向のヘラナデで、内底はヘラでナデ回している。器色は、外面黒褐色、内面暗赤褐色－黒褐色を呈する。黒色顔料を内外面ともに塗布する。口径46.8cm、器高27cm、底部径10.8cmを計る。胎土は密で、焼成も堅緻である。

下　甕　大型の甕形土器を使用する。よく整った胴部に肥厚する口縁をのせる。口縁の外端面は上下に突出し、上端にのみ大型の荒い刻目を巡らす。頸部下および胴部最大径部に3条単位のヘラ描き沈線文を巡らす。調整は、外面がヘラナデ調整か。内面はヘラナデ調整が主であろうか。口縁内に強い横ナデを施し、この下に荒いハケメが残る。器色は、外面が暗褐～赤褐色、内面が赤褐色を呈する。

黒斑は、胴部中央を主として口縁上端、外口縁や外底部にも及ぶ。また、内面上部にも大黒斑がある。外面に赤色顔料を塗った後、黒色顔料を塗布する。口径66cm、器高81.5cm、胴部最大径63.5cm、底部

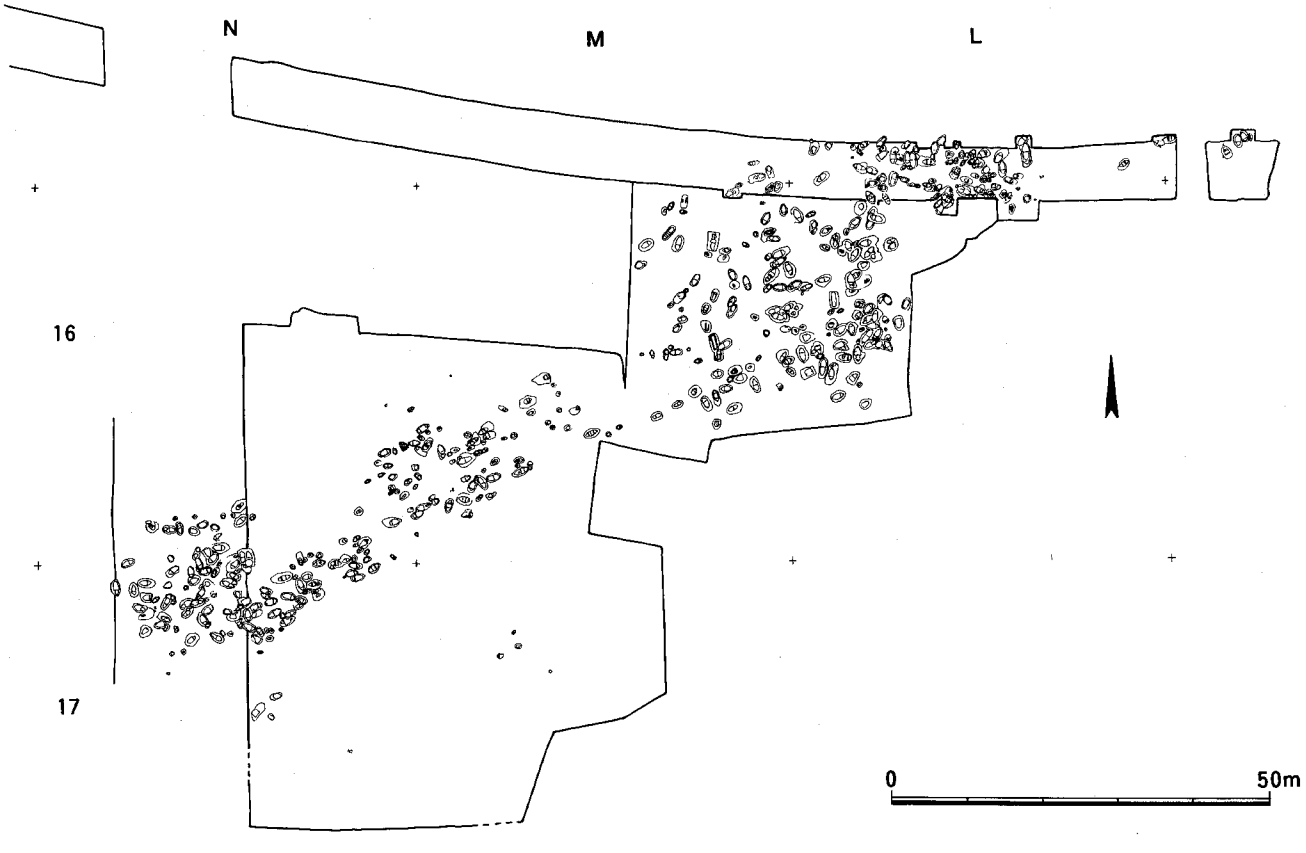


Fig.71　第Ⅲ区弥生時代墓地分布図〔2〕(1/1000)

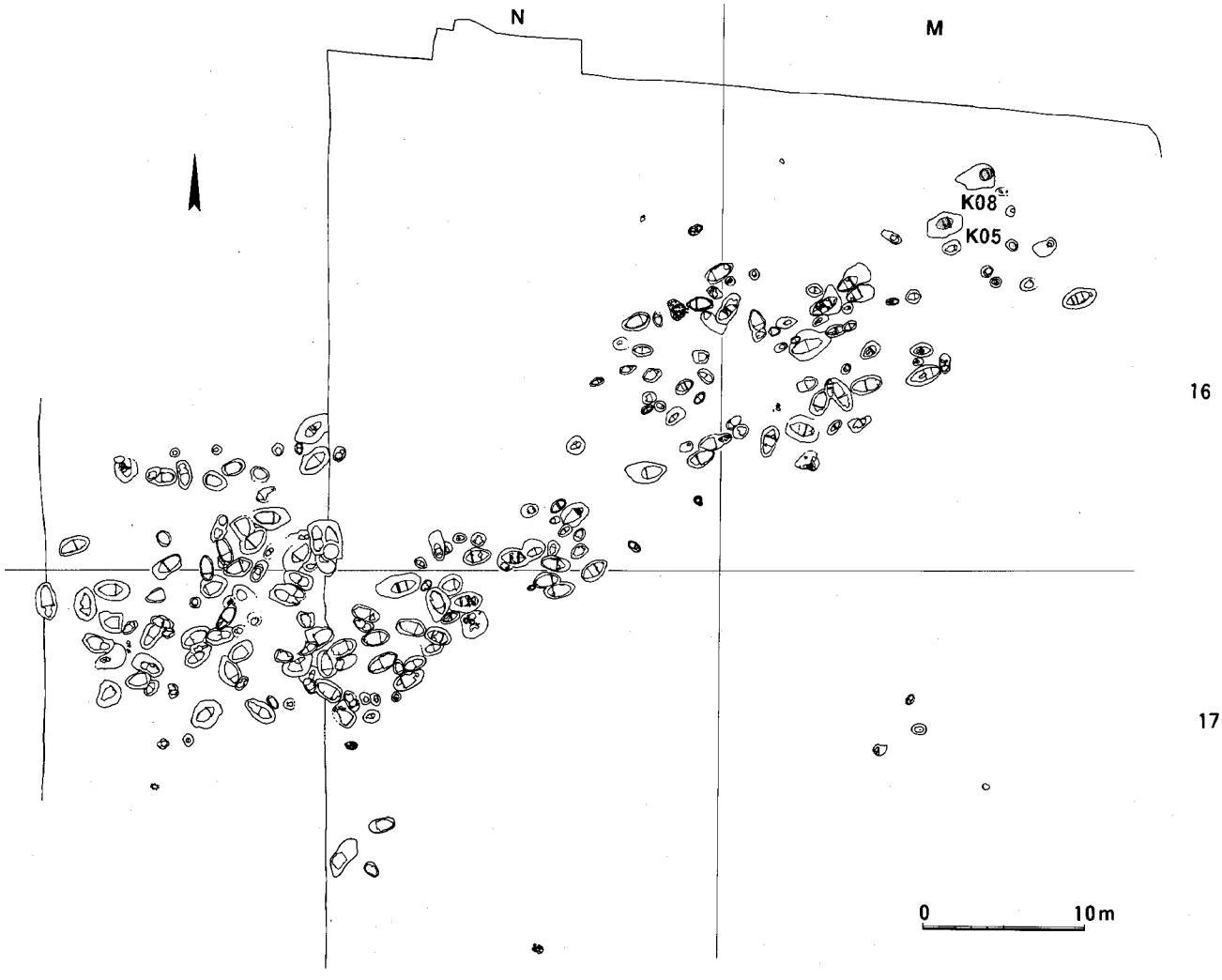


Fig.72　第Ⅲ区墓地全体図②(M・N-16・17)

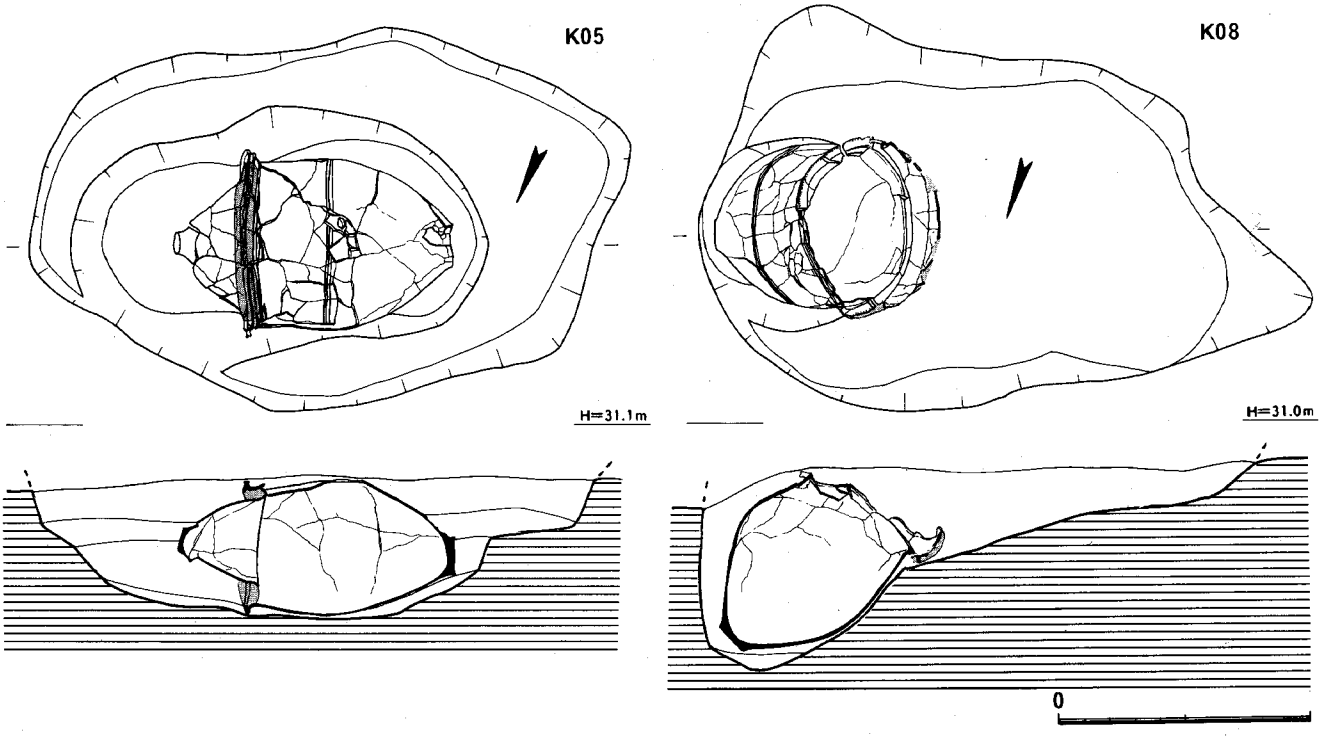


Fig.73　K05・08号甕棺墓出土状況実測図(1/30)

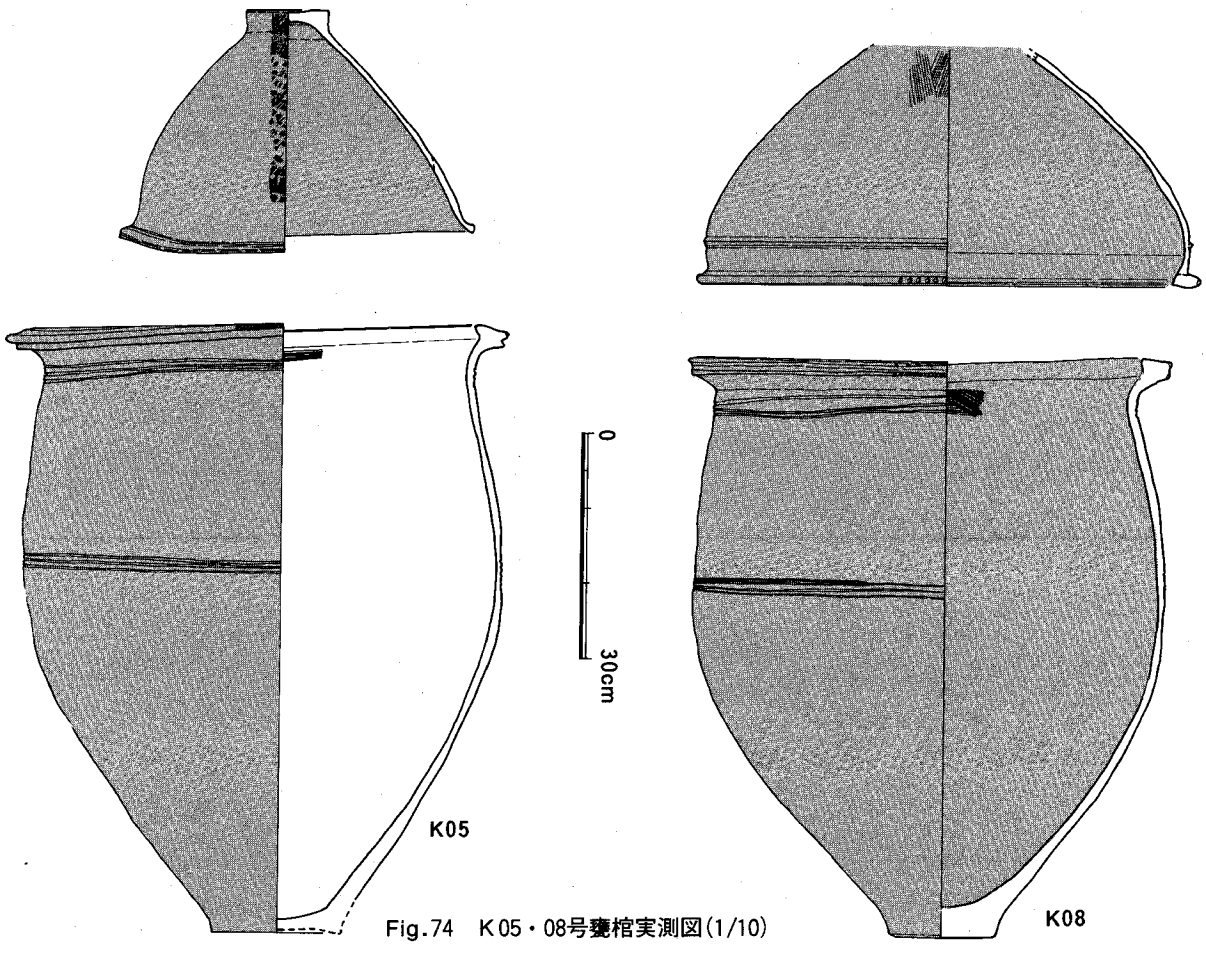


Fig.74　K05・08号甕棺実測図(1/10)

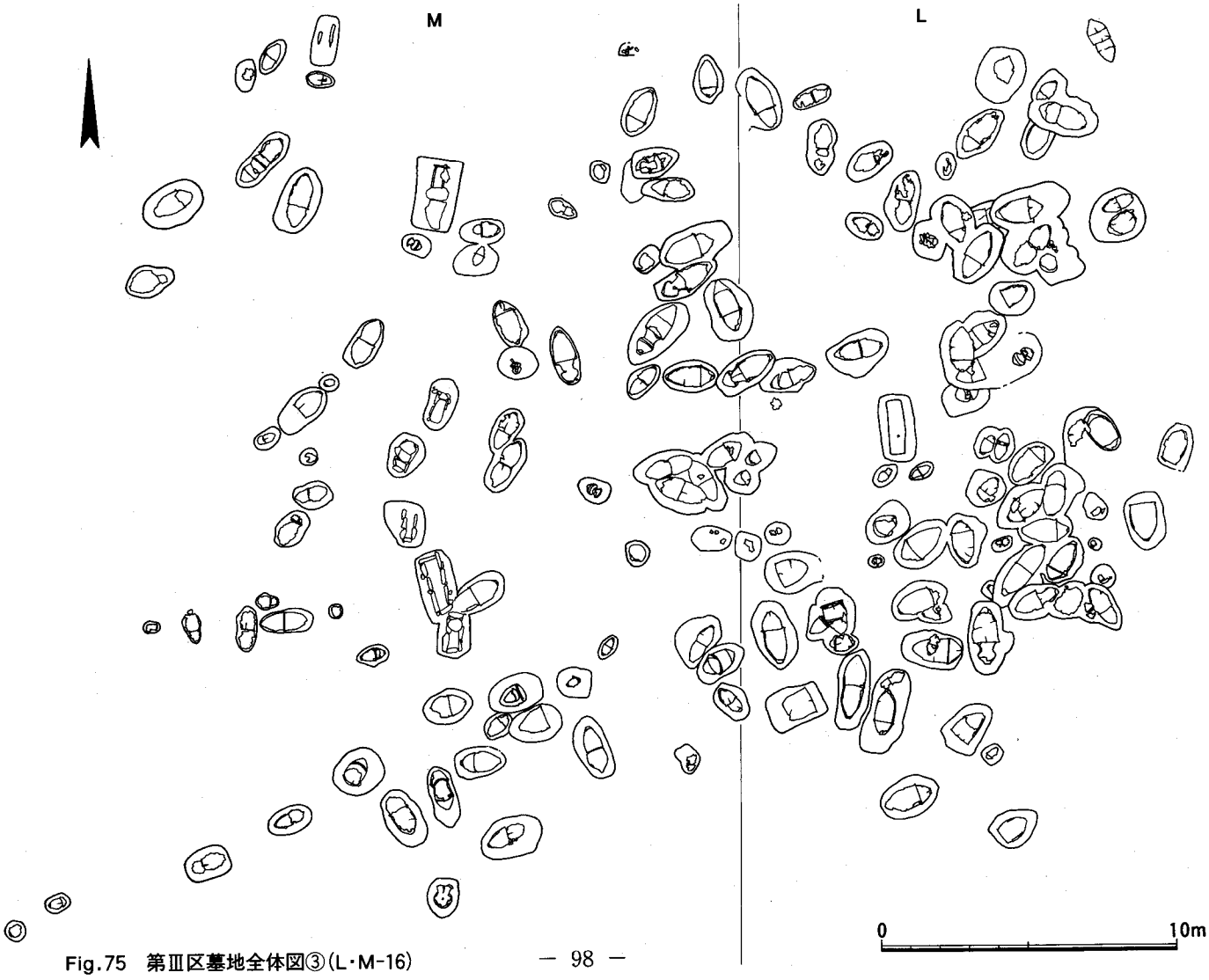


Fig.75　第Ⅲ区墓地全体図③(L・M-16)

径17cmを計る。胎土は密で、焼成は堅緻である。

K08号甕棺墓(Fig.72～74、Pl.20·27)　墓地の北端で見つかった棺の上下に鉢形土器と大形甕形土器を使用した接口式の大型甕棺墓である。K05号の北側に隣接して営まれている。墓坑は、不整形な長方形を呈し、短辺側に横穴を堀り、下甕を挿入している。棺は、主軸をN-70°-Eに向け、傾斜27°の角度で埋置されている。

上　甕　大型の鉢形土器であるが、器形は口縁直下でよくしまり、胴部の器厚より非常に分厚い平坦口縁へとつながっている。口縁直下には断面三角形の突帯1条を巡らす。また、口縁外面には荒く間隔の広い刻目を巡らしている。

調整は、外面が底部付近に荒い縦ハケメを残し、内面には口縁に強い横ナデが見られる。口縁上端部は磨滅が特に著しい。器色は、外面が赤褐色、内面が暗赤褐色を呈する。

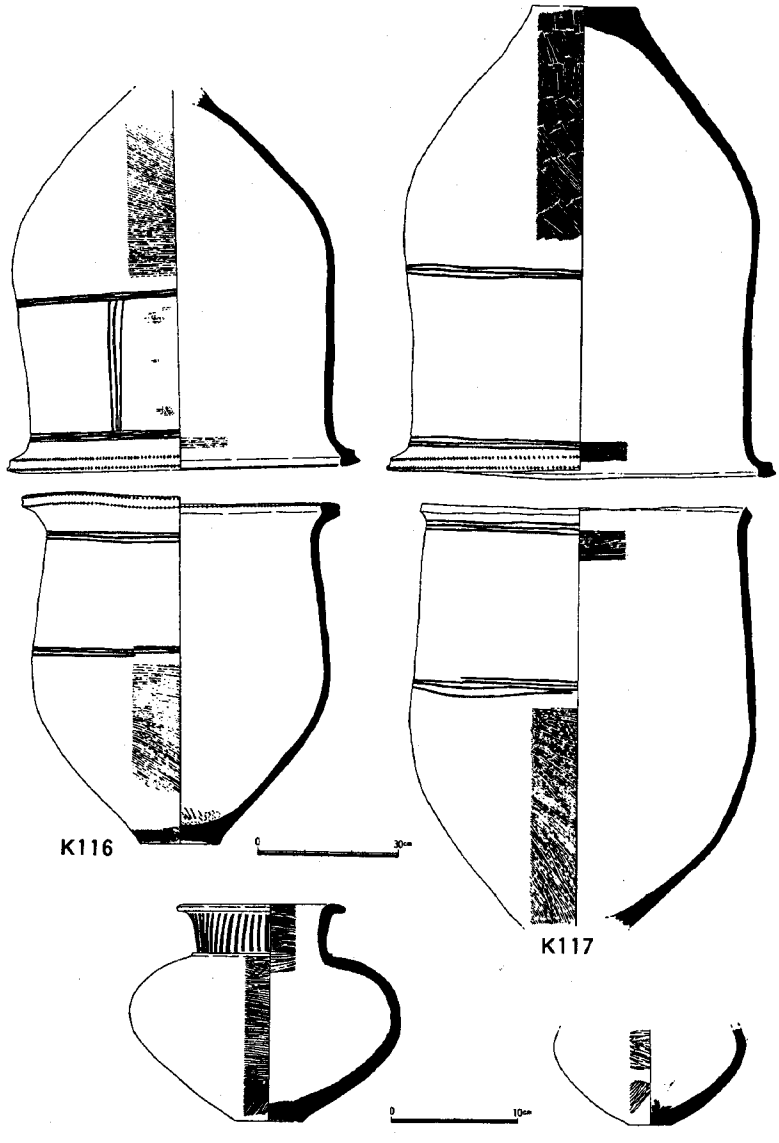


Fig.76　吉武遺跡群にみる甕棺と共伴する副葬土器

また、黒色顔料を内・外面ともに塗布する。口径66.4cm、残存器高31.1cmを計る。胎土は密で、焼成は堅緻である。

下　甕　大型の甕形土器である。器形は、よく均整のとれた胴部に小さく外開した肥厚口縁を載せるもので、底部の厚さも対応するように分厚い。口縁の外側上下に刻目を巡らすが、上端のものは荒く半月形をなし、下端のものは間隔が細かい半月形となっている。口縁直下及び胴部最大径部よりやや上部に3条単位のヘラ描き沈線文を巡らす。

調整は、外面がヘラナデか。内面は口縁よりやや下がった位置に荒い横ハケメを残す。

器色は、内外面ともに淡褐色を呈する。黒斑は、内面の全面に及ぶ。

また、赤色顔料を外面に塗った後、黒色顔料を内外面に塗布する。外面は残りが悪く痕跡的であるが、内面は特によく残り漆黒色を呈し、光沢を放つ。　口径63.5cm、器高77.2cm、胴部最大径62cm、底部径14cmを計る。胎土は密で、焼成は、堅緻である。

この甕棺の黒色顔料については現在サンプリングのうえ分析をすすめているところである。

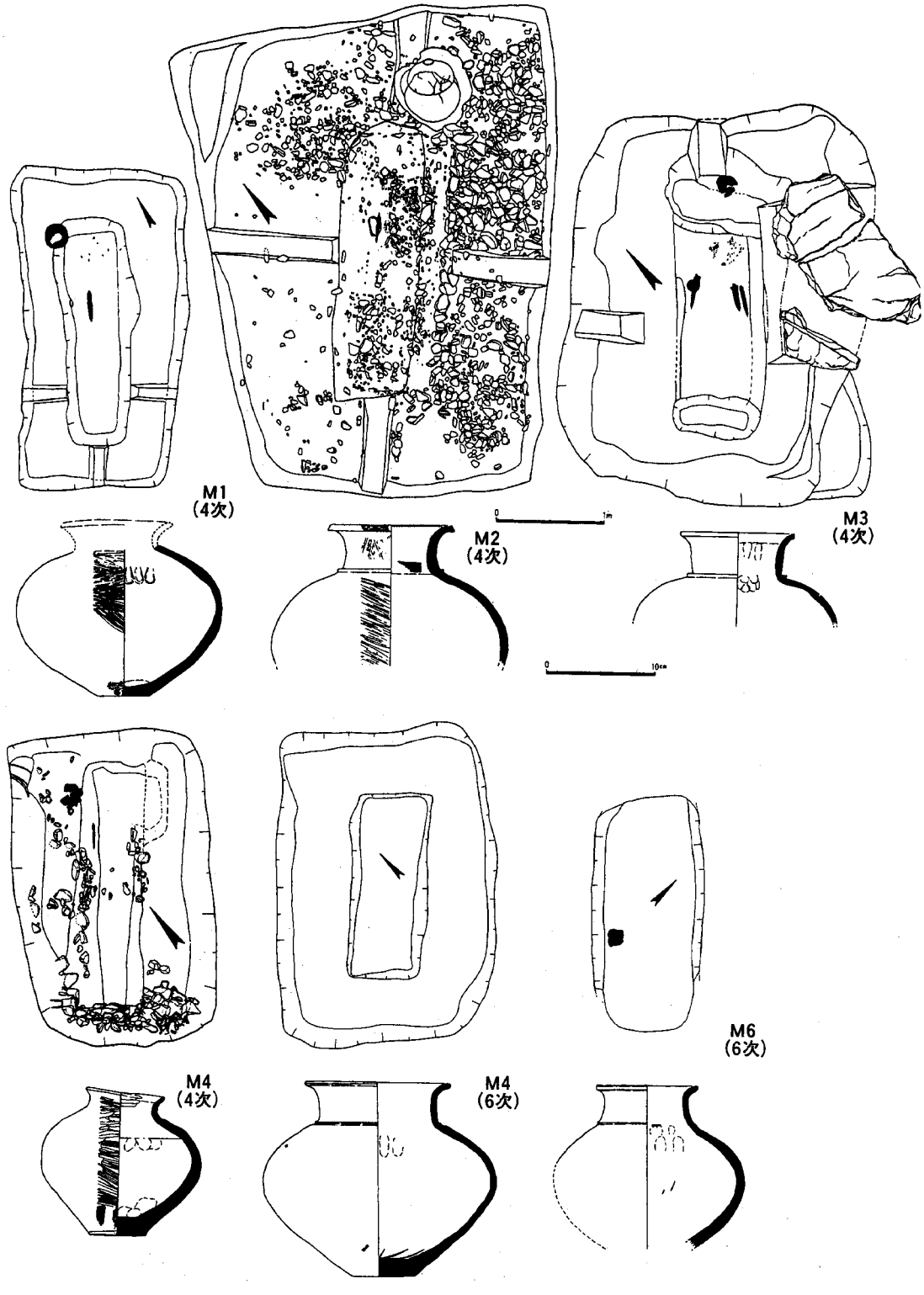


Fig.77　吉武遺跡群にみる木棺と共伴する副葬土器

Ⅳ　おわりに

以上、今回報告では弥生時代前期末～中期初頭期の甕棺墓を主として述べてきたが、紙面の制限か

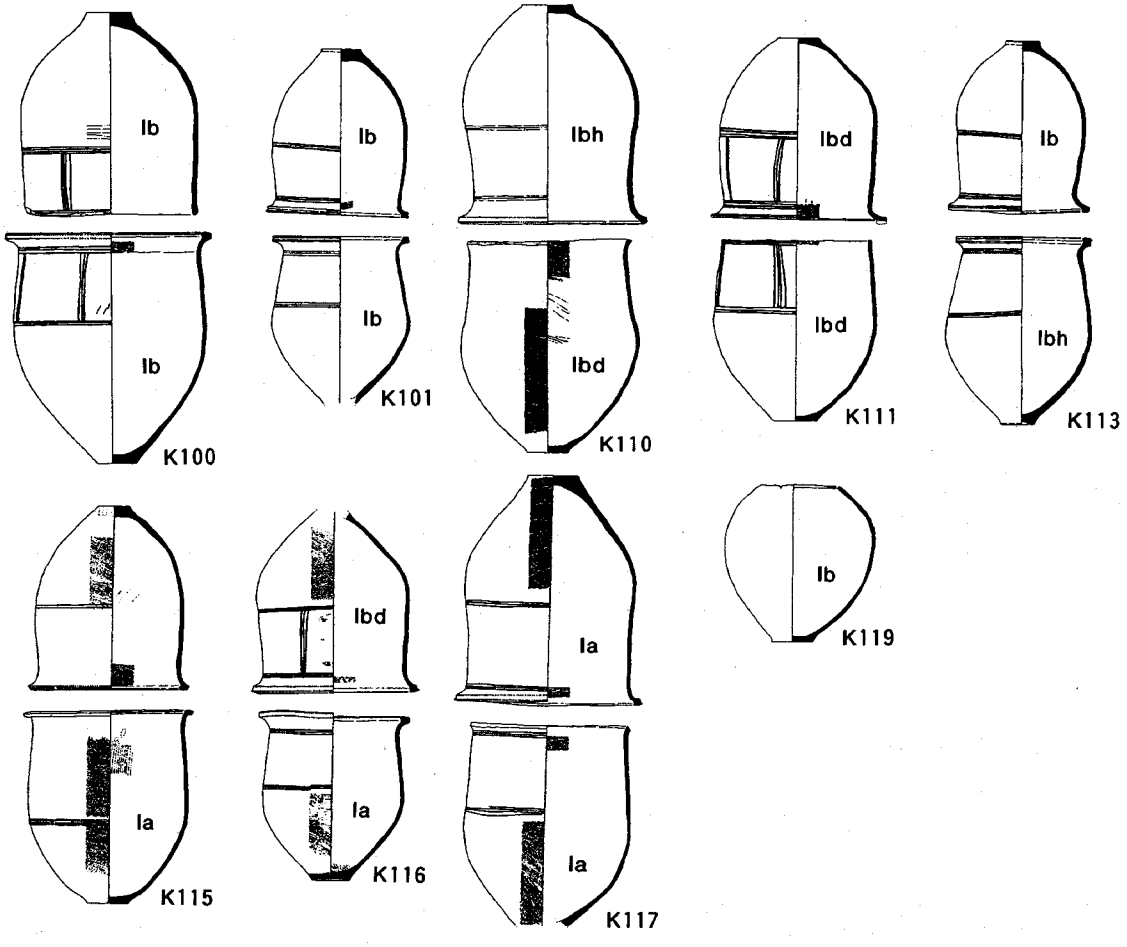


Fig.78　胎土分析を行なった吉武遺跡群の甕棺図

ら該期の甕棺墓の全てについて個別実測図を掲載することができなかった。以下では今回の整理作業を行うなかで気付いた幾つかの問題点を列記し、ささやかなまとめとしたい。

黒色顔料について　今回までに第３・４次調査の甕棺について実測する機会を得たが、これらの甕棺を観察するなかで、黒色顔料については少なくとも以下の点が指摘出来よう。

ア　黒色顔料が甕棺に塗布されるのは、時期的に吉武遺跡群の墓地が継続する全期間にあたる前期末から中期末までの間継続していること。

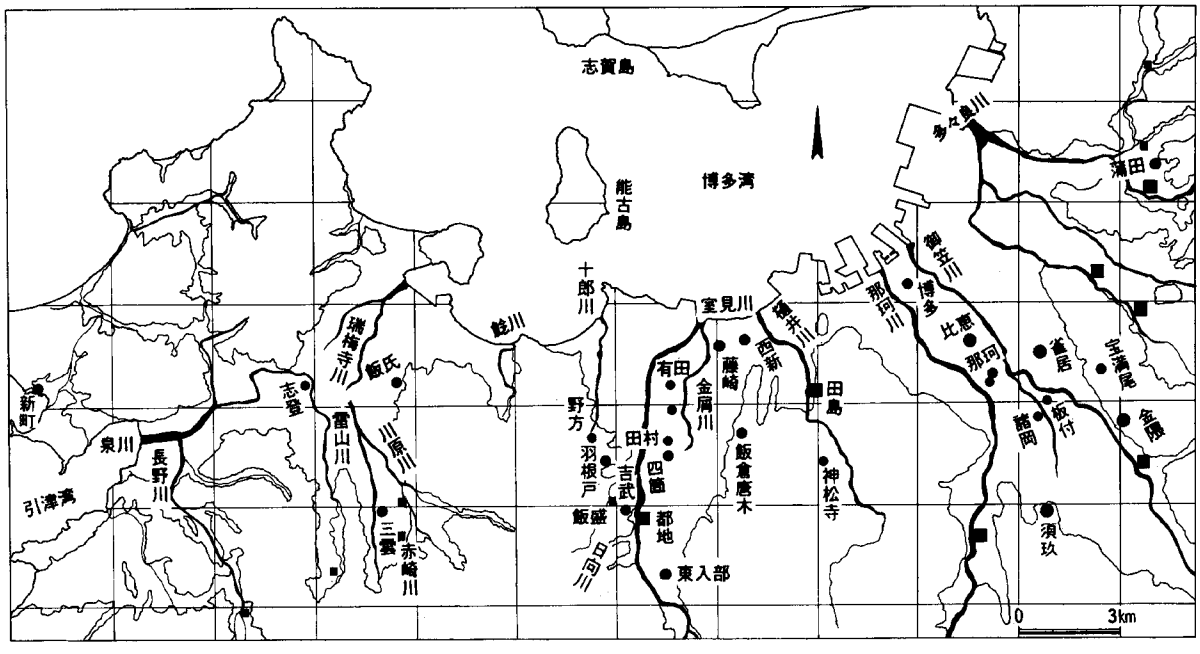
イ　複棺の場合にはどちらか一方に塗布される事はなく、両方の棺に塗布される。場所は主として外面が多く、大型棺の場合には外底部には塗られない場合が多い。

ウ　小型棺の場合では上甕で覆口したままで顔料を塗布するものがある。

エ　顔料の塗布は、丹塗り（赤色顔料）を行った後の甕棺に重ね塗りする場合と黒色顔料のみを塗る場合とがある。

オ　前期末から中期初頭期の小型壷を主とする副葬土器にも黒色顔料が外面を主に塗布されている。

以上のように黒色顔料を甕棺埋葬時には少なくとも棺の外面全体に塗りつける行為は普遍的なものではなかったかと推察される。棺として使用された土器類も生産地の違いや焼成時の調子によって器色なども変化に富んでいたと思われる中で、サイズが合い、ランク相応の棺が準備出来ればこの様な顔料を使用する事によって死者の家としてまた日常品として意識の上で容易に区別していたのではな



■ 土壌サンプル採取地点
● 主要遺跡

Fig.79　吉武遺跡群周辺の主要な河川水系図

いかと考えられた。

出土甕棺の胎土分析について　4次調査で出土した甕棺墓のうち9基16点（K100.101.110.111.113.115下甕.116.117.119下甕）の甕棺について胎土分析を行ない、予察としての報告を頂いたので以下に簡略に報告しておきたい。分析は、奥田　尚氏（当時－橿原考古学研究所嘱託研究員）によった。

今回の方法は、一般的に行われている破片を破壊して調査するものではなく、非破壊で行う。それは実体顕微鏡を使用し甕棺表面の観察を行い、胎土中にある砂礫の構成を調査するものである。

これは北部九州が種々の岩石が複雑に分布し、各平野を流れる河川ごとの砂礫に特徴が見られるという視点から各遺跡で出土した甕棺が製作されるにあたって、どの地域のどの河川のものを採取し、使用したかについての蓋然性を探っている。

奥田氏は、各遺跡から出土した甕棺の顕微鏡による表面観察から甕棺に含まれる砂礫種構成を7類型に分類した（Ⅰ類型－花崗岩質岩起源の砂礫　Ⅱ類型－閃緑岩質岩起源の砂礫　Ⅶ類型－片岩起源の砂礫）。この大分類を基準として細分化がなされた。ここで早良平野に関連する類型の一部を列記する。

Ia類型　花崗岩質岩起源と推定される砂礫からなる。

Ib類型　花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃緑岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

Ibd類型　花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃緑岩質岩・流紋岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

Ibh類型　花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃緑岩質岩起源と推定される砂礫・片岩を僅かに含む砂礫からなる。

吉武遺跡群4次調査分で分析を行った16点の前期末～中期初頭甕棺は観察の結果では、Fig.78に見るような予察結果が出ている。これは当該期の甕棺のうちIa類型、Ib類型、Ibd類型等が室見川の東側で採取された砂礫を使用していると推定され、これ以外のものは室見川の山地よりの砂礫を採取したと推定された。最後にこの分析結果に関し、文面をかりて奥田　尚氏に感謝の意を表します。

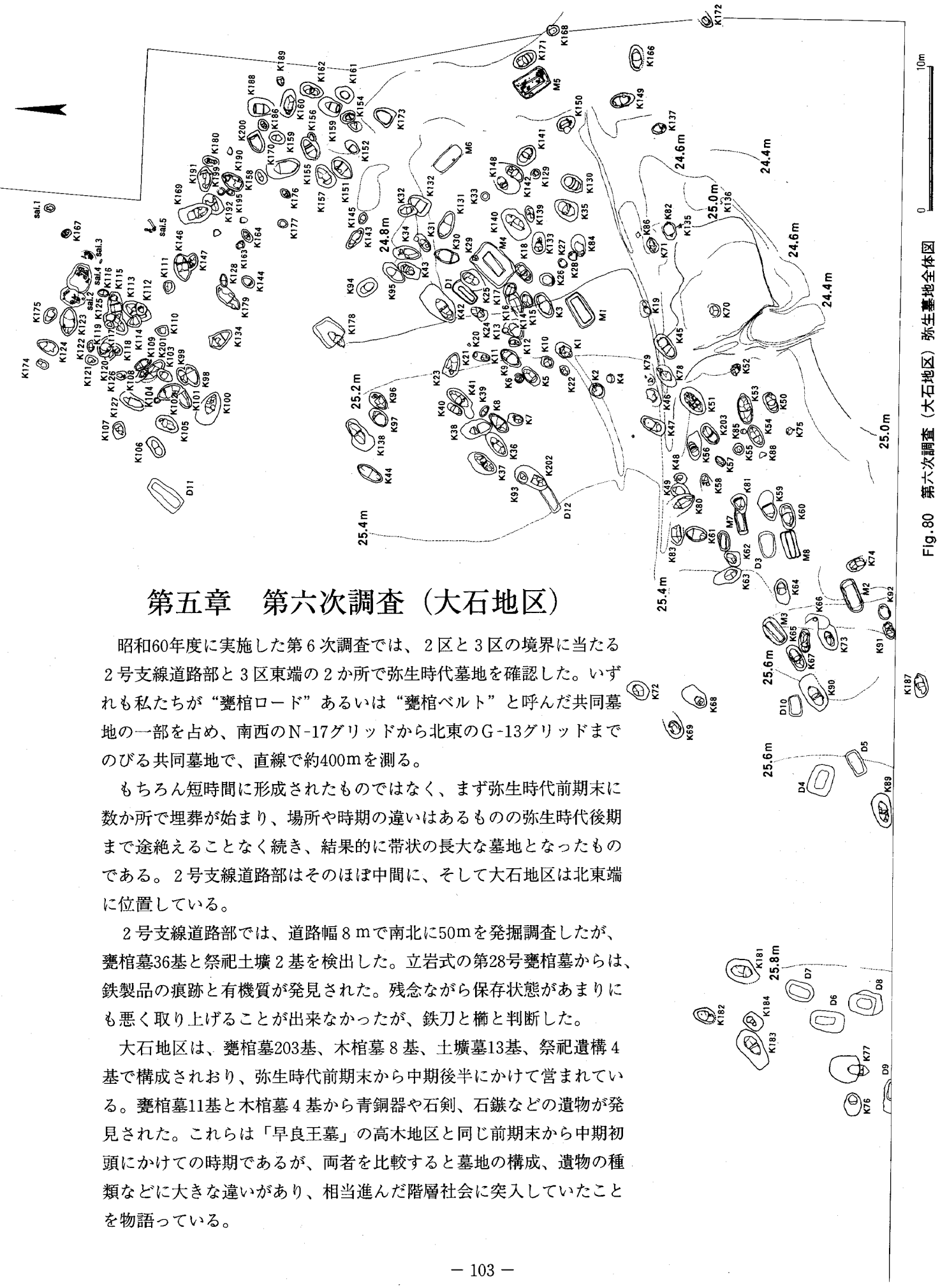


Fig.80　第六次調査（大石地区）弥生墓地全体図

第五章　第六次調査（大石地区）

昭和60年度に実施した第６次調査では、２区と３区の境界に当たる２号支線道路部と３区東端の２か所で弥生時代墓地を確認した。いずれも私たちが“甕棺ロード”あるいは“甕棺ベルト”と呼んだ共同墓地の一部を占め、南西のN-17グリッドから北東のG-13グリッドまでのびる共同墓地で、直線で約400mを測る。

もちろん短時間に形成されたものではなく、まず弥生時代前期末に数か所で埋葬が始まり、場所や時期の違いはあるものの弥生時代後期まで途絶えることなく続き、結果的に帯状の長大な墓地となったものである。２号支線道路部はそのほぼ中間に、そして大石地区は北東端に位置している。

２号支線道路部では、道路幅８mで南北に50mを発掘調査したが、甕棺墓36基と祭祀土壙２基を検出した。立岩式の第28号甕棺墓からは、鉄製品の痕跡と有機質が発見された。残念ながら保存状態があまりにも悪く取り上げることが出来なかったが、鉄刀と櫛と判断した。

大石地区は、甕棺墓203基、木棺墓８基、土壙墓13基、祭祀遺構４基で構成されおり、弥生時代前期末から中期後半にかけて営まれている。甕棺墓11基と木棺墓４基から青銅器や石剣、石鏃などの遺物が発見された。これらは「早良王墓」の高木地区と同じ前期末から中期初頭にかけての時期であるが、両者を比較すると墓地の構成、遺物の種類などに大きな違いがあり、相当進んだ階層社会に突入していたことを物語っている。

甕 棺 墓

大石地区の弥生墓地で前期末から中期初頭の甕棺墓はTab. 5のように58基を数える。このうち11基から何らかの遺物が発見された。今回は同時期の47基の甕棺墓について記す。しかし整理場所、印刷費など種々の制約から、甕棺を復元し図化出来たのは11基21個体に止まり、大石地区の全貌説明にはほど遠く、発掘担当者としての責任を痛感している。

K 2号甕棺墓　大石地区墓地のほぼ中央、細形銅戈残片を出したK 1の南西約3mに位置している。覆口式の複棺で、粘土で目張りをしている。下甕口縁部まで削平されているが、破片が残っていないことから口縁打ち欠きと判断した。

K 4号甕棺墓　K 2の南西側に方位や角度をほぼ同じくして並んでいる。墓壙が浅い分、削平も激しく、胴部下半だけが残る。

K 6号甕棺墓　磨製石鏃を出したK10の北西2mにある。同じように胴部下半だけなので単棺、複棺の判断は出来ない。

K14号甕棺墓　墓壙の一部をK12とK13に切られている。南西に傾く墓壙は深く、二つの大型甕を呑口式に埋置している。

K15号甕棺墓　大型甕の単棺で、楕円形の墓壙は埋置の工夫なのか口縁部の下に段を作っている。

K17号甕棺墓　中期のK16に下甕の胴部下半を切られている。この周辺の甕棺墓の多くが北東に頭位を置くのに対して，東を向いている。胴部中位に小孔を穿っている。

K18号甕棺墓　二つの大型甕を用いた接口式の複棺。M 4木棺墓の東南隅に接している。

上甕　底部を欠くが下甕と同じように70cm前後となるのであろう。金海式特有の砂粒の多い胎土で内外面とも灰茶色。口縁は大きく外に湾曲し、上に厚い粘土帯を貼りつけ、外端を強く横ナデして口唇状の断面を作る。その上下に刻み目を入れている。頸部と胴部中位に各3条の沈線を巡らせている。口径は65cmである。

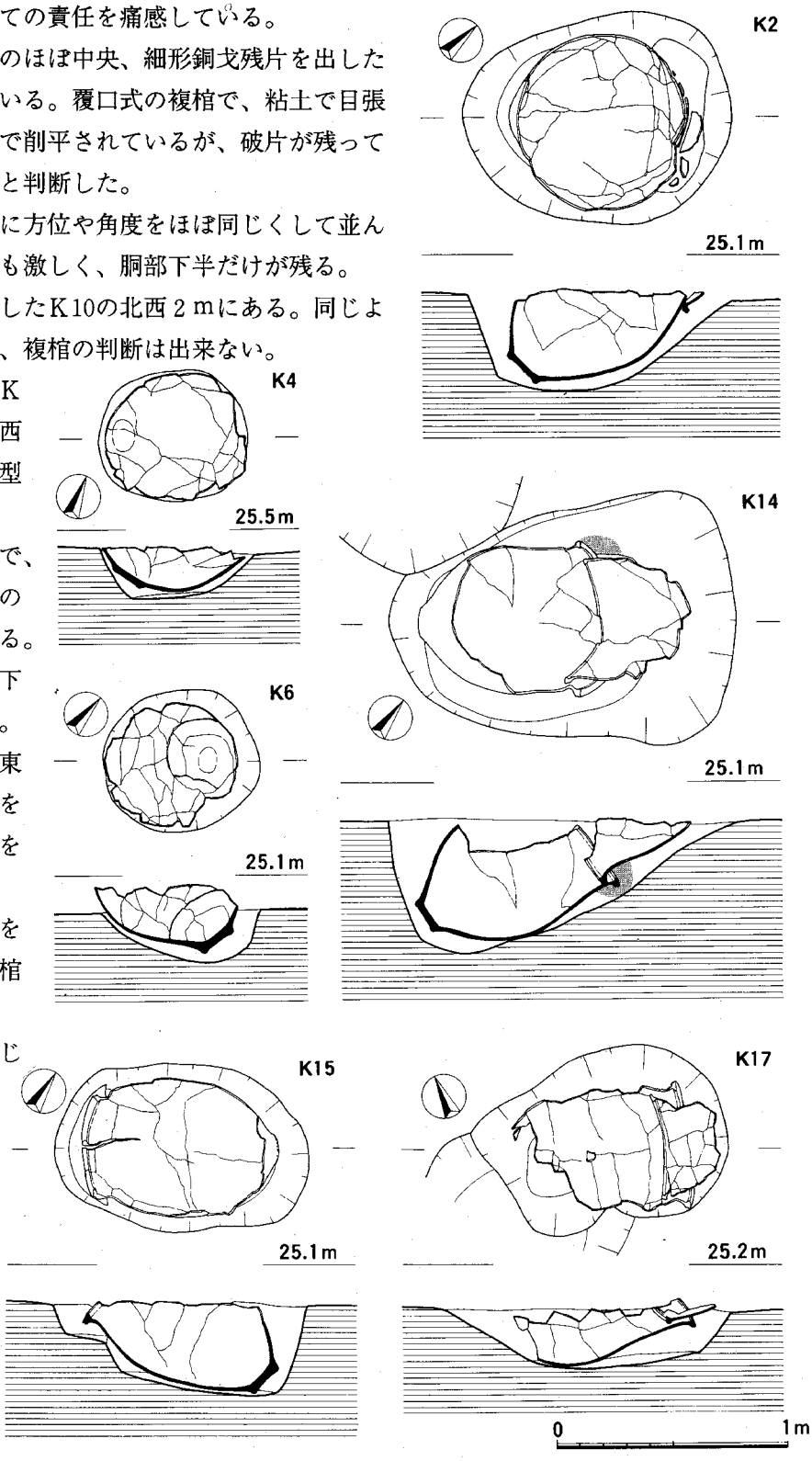


Fig.81　K2　K4　K6　K14　K15　K17号甕棺墓出土状況図(1/30)

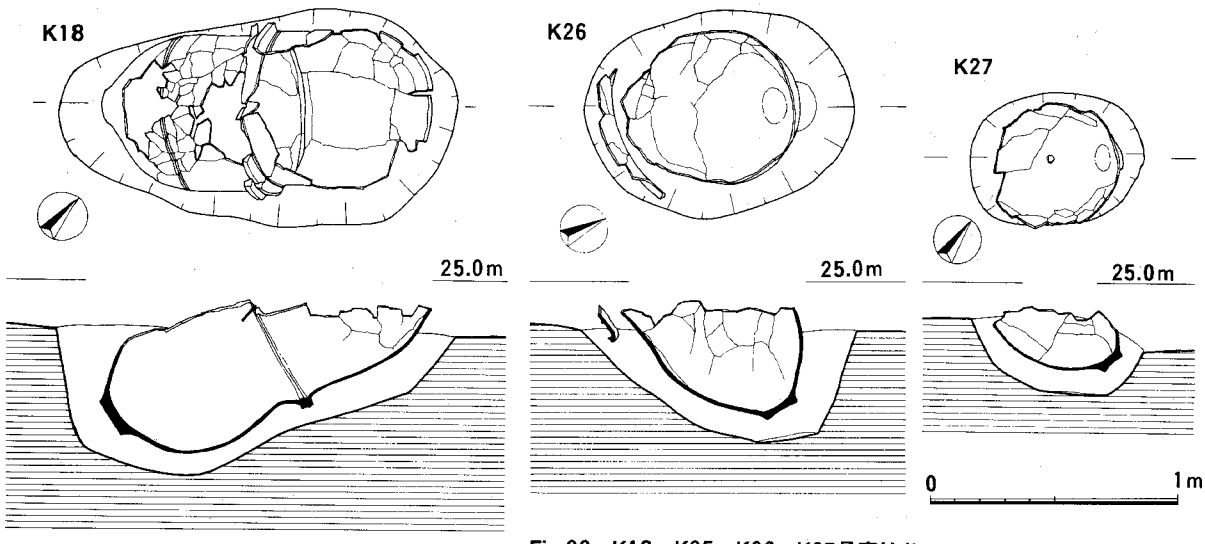
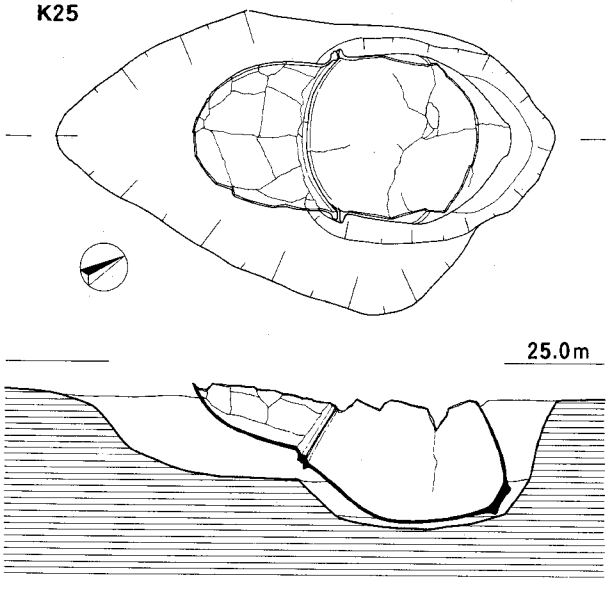


Fig.82　K18　K25　K26　K27号甕棺墓出土状況図(1/30)



下甕　口径71.2㎝、器高72.5㎝、上甕に比べ胴部の張りが弱く、器面も赤茶色と異なる。胴部の沈線は３本とも見事に外れている。一筆書きのように３周したり、１条ごとに１周するのではなく、３本を単位にして一周したのであろう。ただし３本とも並行ではないので３本を固定した工具ではない。胴部中位より下方に穿孔。外側が大きく剝がれていることから内側からの打撃か。

Ｋ25号甕棺墓　Ｄ１土壙墓の東側に並んでいる。楕円形の墓壙は下甕部を一段深く掘り込んでいる。

Ｋ26号甕棺墓　覆口式に上甕の一部が残っている。口縁部の下方に三角突帯が巡っており鉢か。埋置角が大きいことから鉢を被せた可能性もある。

Ｋ27号甕棺墓　Ｋ26と並んで南側に頭位を置く。墓壙や小型の甕を用いていることなどから単棺か。

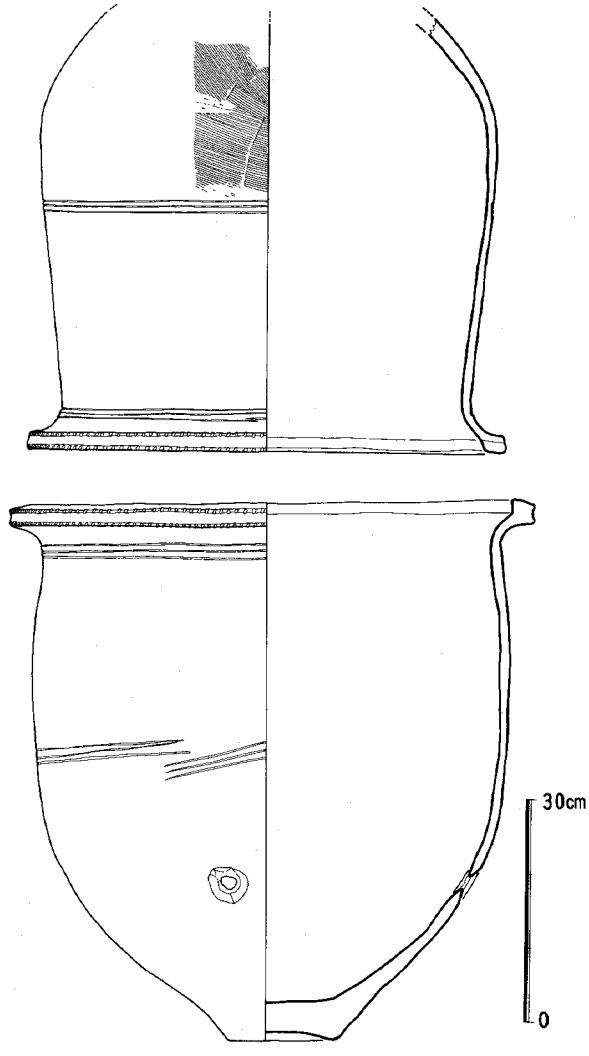


Fig.83　Ｋ18号甕棺実測図(1/10)

K35号甕棺墓　M4号木棺墓の東南側には、大型甕棺墓が集中しているが、本甕棺墓もそのうちの一つ。墓壙は不整楕円形で、斜面を利用して上下同じような大きさの甕2個を埋置している。

上甕　口径64.5cm、復元器高84cm。胴部上半が内傾しているのが特徴である。器面は外が灰茶色、内が明茶色。外に大きな黒斑がある。頸部と胴部に3本の沈線が巡らせ、この後9か所に縦の線を加えているが、区画幅は等間隔でなく、本数も3、3、3、5、3、3、5、3、6？と不揃いである。

下甕　口径72.5cm、器高82cm、底径17.5cm。胴部の張りは弱く、上半も直線ではなくわずかに外に膨らんでいる。器面は茶色、頸部内面に粗いハケ目が残る。分厚い口縁部の作りが特徴である。頸部と胴部に3条の沈線を巡らせているが、縦の区画線はない。器形も沈線も上甕に比べ端正である。

K43号甕棺墓　大石地区の金海式甕棺墓としては最も北端に位置している。上甕の口縁部は打ち欠き、下甕の口に合わせている。墓壙は長楕円形で、上甕側は2段掘りとなっている。

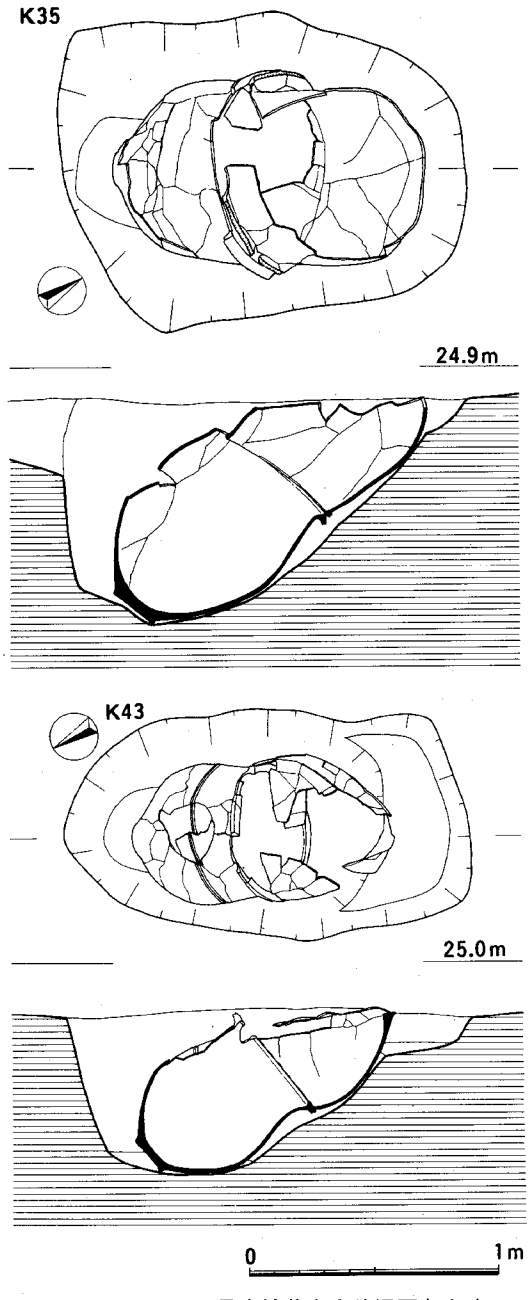


Fig.84　K35　K43号甕棺墓出土状況図(1/30)

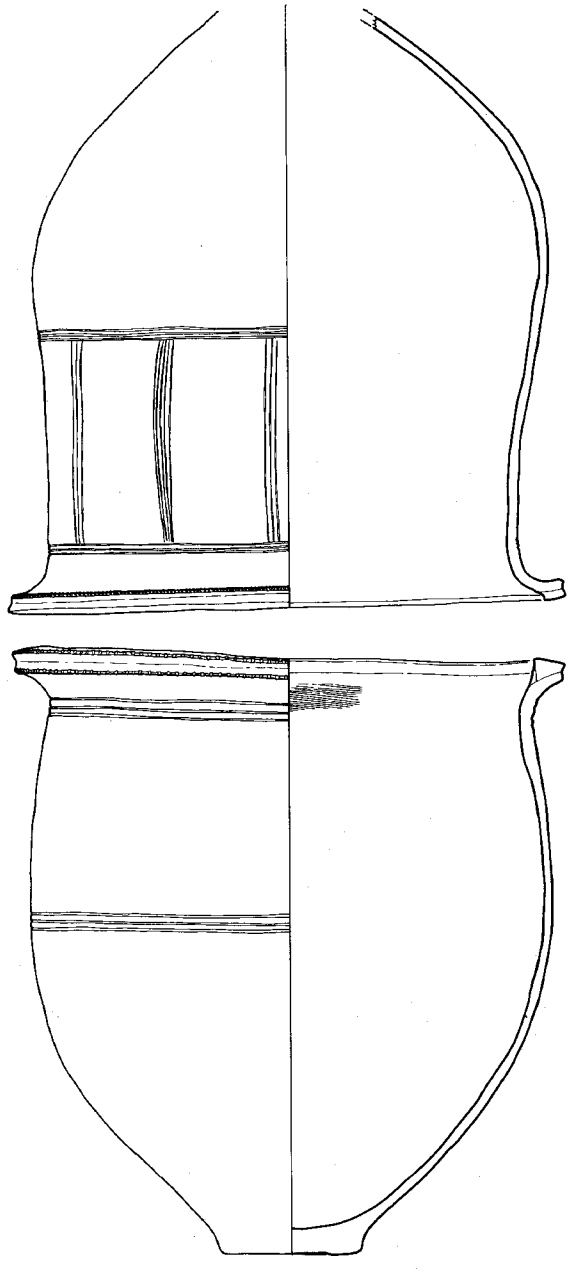
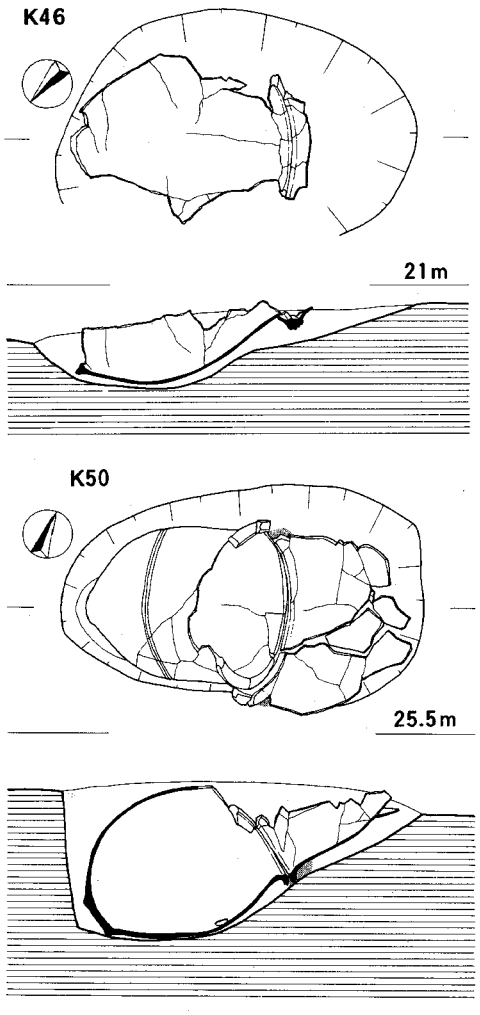


Fig.85　K35号甕棺実測図(1/10)



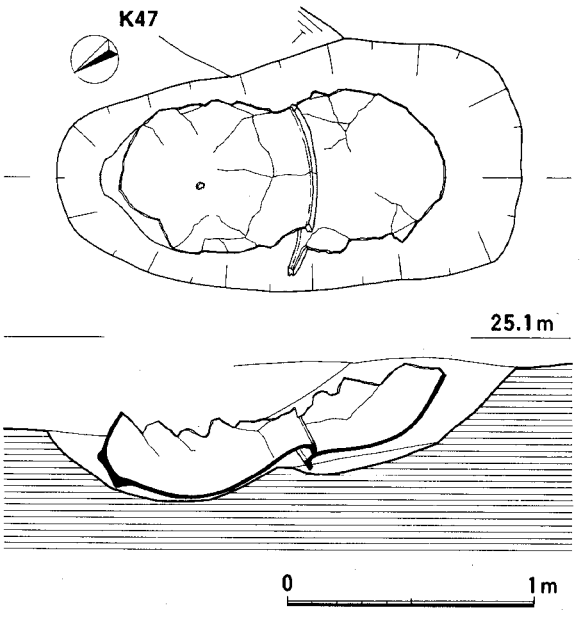


Fig.86　K46　K47　K50号甕棺墓出土状況図(1/30)

K46号甕棺墓　細形銅剣、管玉、赤色顔料を出したK51の北側1.5mにある。上部のほとんどを削平されているが、上下甕の口縁部が残っていることから接口式の複棺であるとが分かる。

K47号甕棺墓　K46の西側に並ぶ。方位、埋置角とも類似しているが、墓壙の底部がそれぞれ窪み、直線的な斜面とならない。下甕に小さな穿孔がある。

K50号甕棺墓　細形銅戈と石剣4点を持っていたK53の、南側1mと接近して並ぶ。接口式の複棺で合わせ目には粘土で目張りをしている。

上甕　口径63cm、胴部最大径よりも口径がわずかに1cm大きい。口縁部の外反は極端ではないが、上面に張りつけた粘土帯は分厚く断面台形となる。胴部外面は、上半部はナデ、下半部は左上がりにミガキ状の丁寧なナデ調整を加えている。頸部の沈線は一筆書きのために最初と最後が結合していない。外面の色調は黒茶褐色、内面は茶褐色で、胴部上半に点々と黒斑がある。

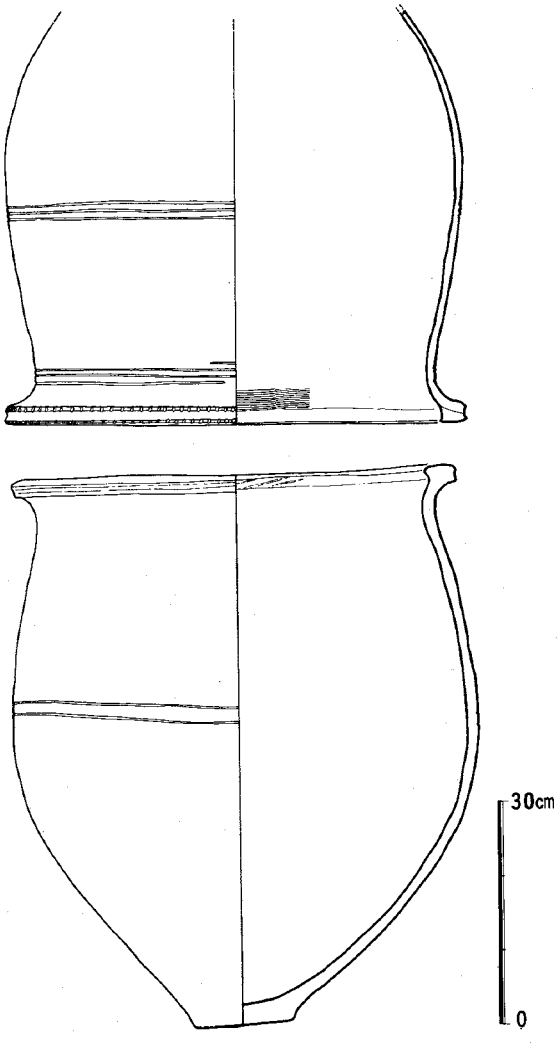
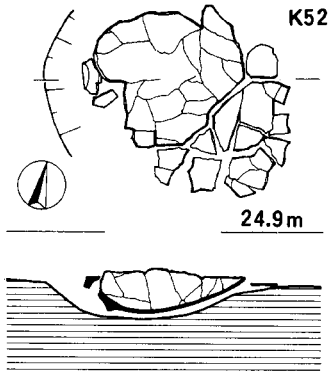


Fig.87　K50号甕棺実測図(1/10)

下甕　口径60.3㎝、器高74㎝、底径14.4㎝。頸部の締まりは弱く、口縁部の外反はさらに小さい。沈線は胴部だけに巡らし、頸部は省略している。口縁外端の刻み目もなく、簡略化が進んでいる。外面の色調は濃茶色、黒斑は外面だけでなく内面にも認められる。口縁上面は丸く盛り上がり、内面に粗い条痕がある。



K52号甕棺墓　上部が激しく削平されているので、墓壙も不整形となり、しかも押しつぶされたように状態で出土したので本来の形状は留めていない。おそらく単棺なのであろう。

K56号甕棺墓　後に記すK203と並んでいる。墓壙はまず20㎝の深さで不整形に広げ、甕棺の大きさに合わせて埋置する部分を掘り下げて2段掘りとなっている。墓壙は60㎝と深い。

上甕　口径56㎝、胴部にはほとんど張りがなく、ほぼ直立して上方にのび、外に湾曲して口縁部を作る。上面に粘土帯を張りつけているが、内面にも著しく突き出ている。器面は内外面とも灰茶色で、黒斑は胴部下半と口縁部の内面に着いている。沈線を頸部と胴部中位に巡らしているが、それぞれ方法が異なる。胴部は一筆書きで2周しているので螺旋状になり起点と終点は重なっていない。一方頸部の沈線は2条ともずれていることからすると、1条ごとに描いたのか、2本単位の工具を使ったのかであろう。

下甕　口縁は短径52.8㎝×長径54.9㎝で正円となっていない。胴上半は、わずかに内傾し、口縁部の外反も短いので下脹らみの器形となっている。器高78㎝、器壁は粘土帯の重ね部が凹凸となって残っている。胎土に2～3㎜大の砂粒を含んでいるが器面には露出していない。灰茶色の色調で、胴部下半は右上がりのナデ、上半は縦の粗いハケ目をナデ消し調整している。この後、頸部と胴中位に各2条の沈線を巡らしているが、胴部の沈線はきわめて繊細である。底部は2.8㎝と分厚い作りで、径は14㎝を測る。

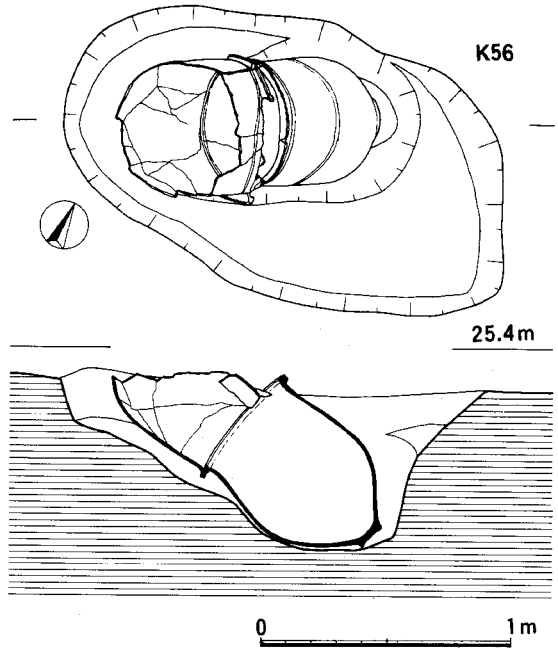


Fig.88　K52　K56号甕棺墓出土状況図(1/30)

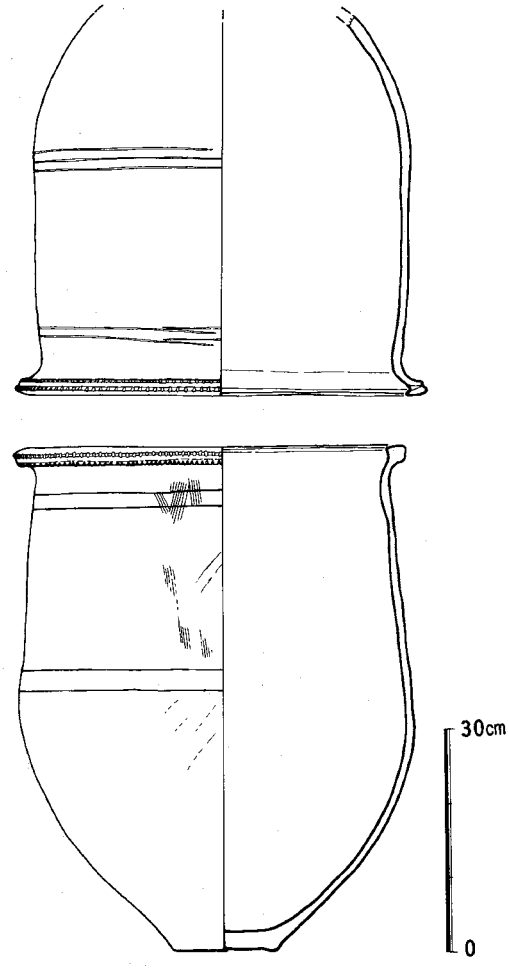


Fig.89　K56号甕棺実測図(1/10)

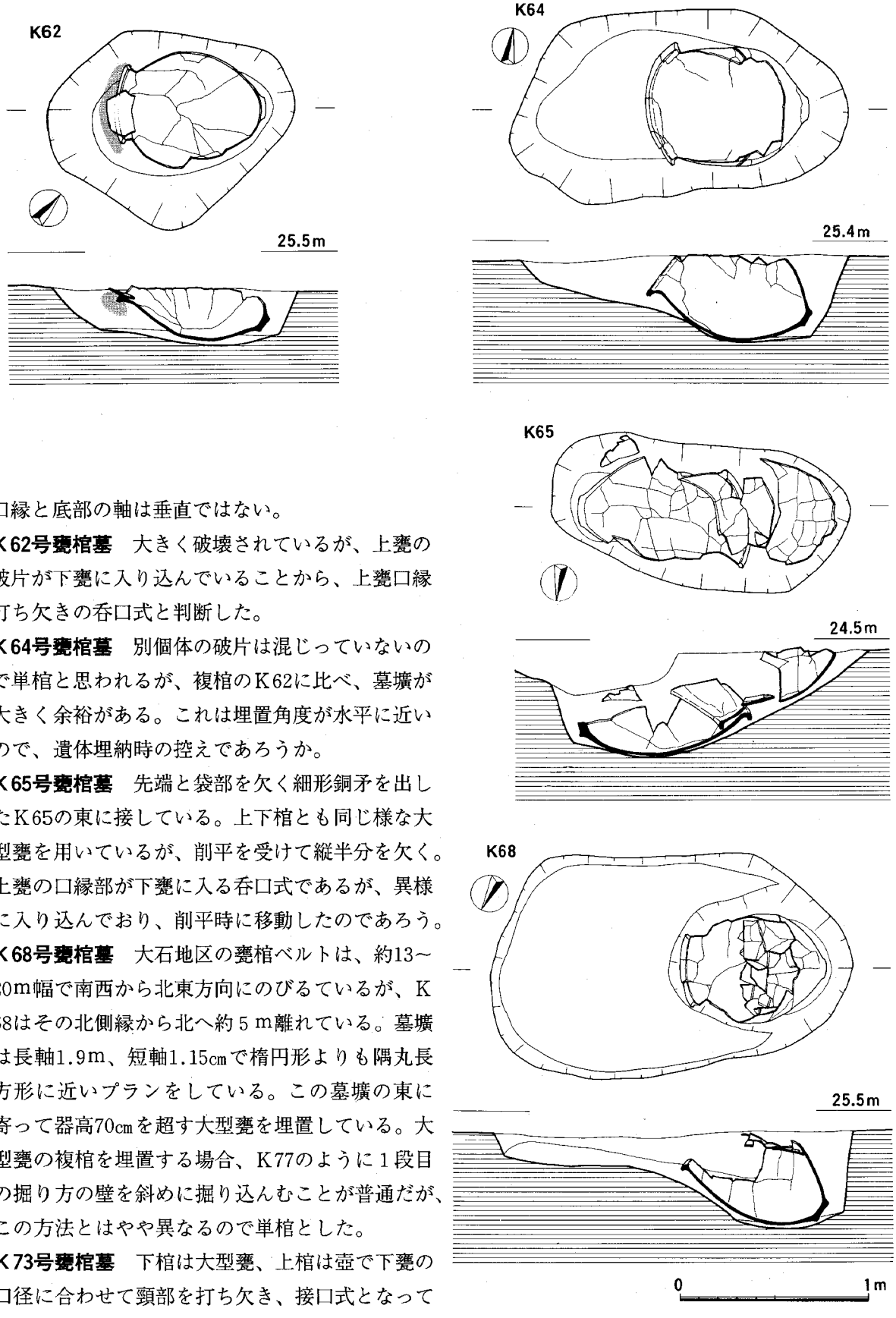


Fig.90　K62　K64　K65　K68号甕棺墓出土状況図
(1/30)

口縁と底部の軸は垂直ではない。

K62号甕棺墓　大きく破壊されているが、上甕の破片が下甕に入り込んでいることから、上甕口縁打ち欠きの呑口式と判断した。

K64号甕棺墓　別個体の破片は混じっていないので単棺と思われるが、複棺のK62に比べ、墓壙が大きく余裕がある。これは埋置角度が水平に近いので、遺体埋納時の控えであろうか。

K65号甕棺墓　先端と袋部を欠く細形銅矛を出したK65の東に接している。上下棺とも同じ様な大型甕を用いているが、削平を受けて縦半分を欠く。上甕の口縁部が下甕に入る呑口式であるが、異様に入り込んでおり、削平時に移動したのであろう。

K68号甕棺墓　大石地区の甕棺ベルトは、約13～20m幅で南西から北東方向にのびるているが、K68はその北側縁から北へ約5m離れている。墓壙は長軸1.9m、短軸1.15cmで楕円形よりも隅丸長方形に近いプランをしている。この墓壙の東に寄って器高70cmを超す大型甕を埋置している。大型甕の複棺を埋置する場合、K77のように1段目の掘り方の壁を斜めに掘り込んむことが普通だが、この方法とはやや異なるので単棺とした。

K73号甕棺墓　下棺は大型甕、上棺は壺で下甕の口径に合わせて頸部を打ち欠き、接口式となっている。楕円形墓壙の中央に埋置しているが、K66によって頭位側が一部切られている。

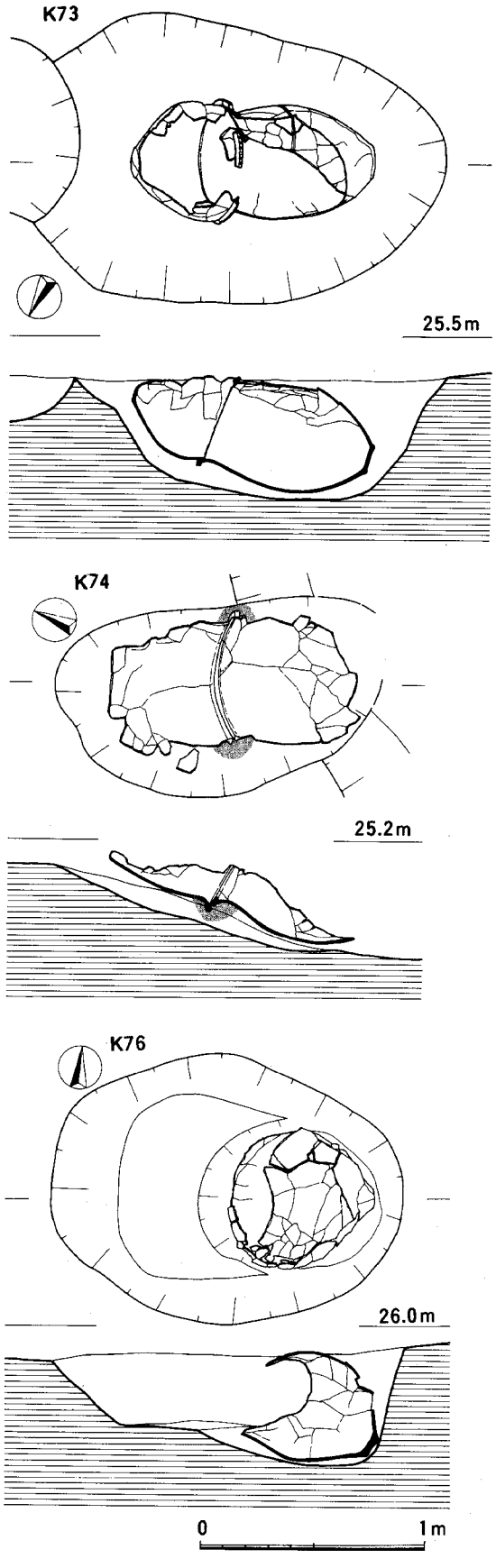


Fig.91　K73　K74　K76号甕棺墓出土状況図(1/30)

上壺　縦に半分しか残っていないので、復元反転して図化した。底部はわずかに凹んでおり、底径15cm。器面は風化で調整痕は観察出来ない。

下甕　口径66cm、器高70cm、底径13.5cm。胴部の張りは弱く、口縁部と同じような径である。頸部に3条の並行線、胴部は一筆書きで4周している。もし人が下から螺旋上に回ったとすると時計方向に動いたことになる。

K74号甕棺墓　甕棺ベルトの南縁に位置している。大きく削平を受けているが、埋置方法は知ることが出来る。上、下棺ともに大型甕を用い、接口式で粘土の目張りをしている。

K76号甕棺墓　K77と並んで大石地区弥生墓地の南西隅に位置している。大きめの墓壙の東寄りに1段深く掘り込み、大型甕を水平に近い角度に埋置している。

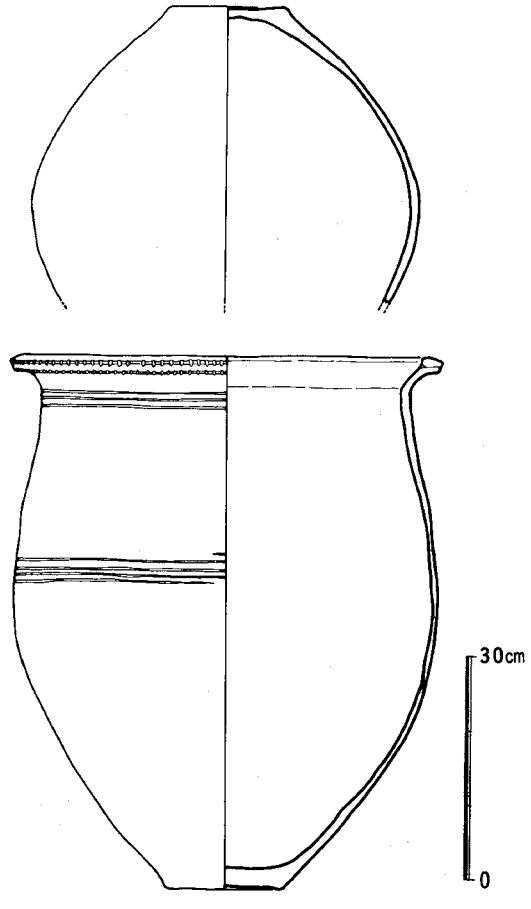


Fig.92　K73号甕棺実測図(1/10)

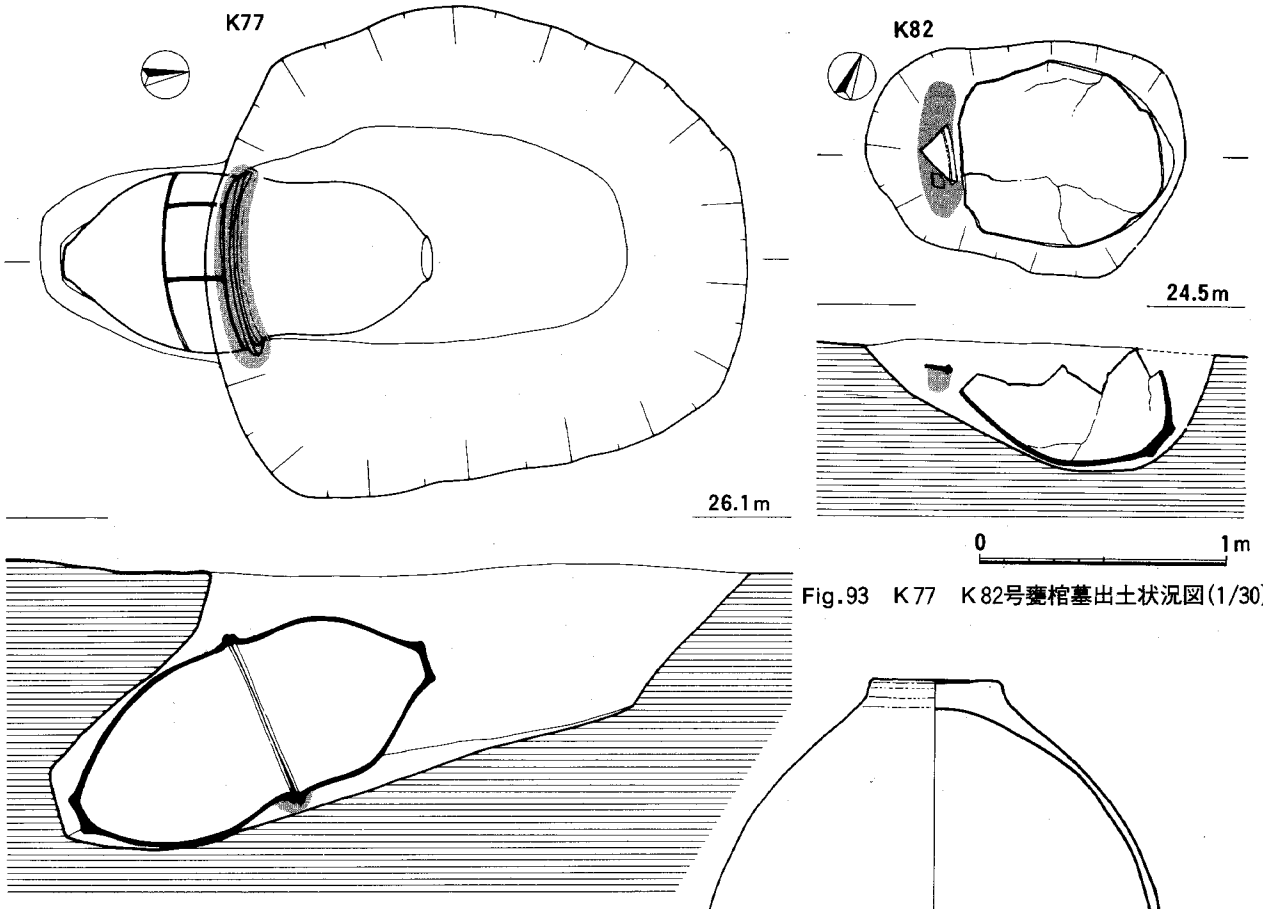


Fig.93　K77　K82号甕棺墓出土状況図(1/30)

K77号甕棺墓　大石地区の甕棺墓の中で最も保存状態がよい。隅丸方形墓壙の南側壁に下甕を挿入できるだけの斜壙を掘り、下甕を設置している。上甕も同じような大型甕が用いられ、接口式の口縁部には粘土で目張をしている。

上甕　口径68.5㎝、器高71.4㎝、底径17㎝、胴部最大径63㎝。口径に対して背が低い。口縁内端は上方に小さく突き出している。外端は強く横ナデして口唇状の断面となり、上下に刻み目を施す。この刻み目は右から工具を当てている。頸部と胴部の沈線は、一筆書きで3周している。外面の色調は灰茶色、胴部下半に黒斑がある。

下甕　口径67.8㎝、器高91.5㎝、底径15㎝。器面の色調は明赤褐色で、上甕とまったく異なる。背が高く、頸部も締まり、尖った印象の器形となっている。沈線を頸部と胴部に巡らした後、縦に沈線を入れて5区画する。縦沈線は、細く鋭いので、横沈線とは別の工具であろう。

K82号甕棺墓　細形銅剣の鞘飾りと思われる石製品が出たK71の東南に並んでいる。墓壙内に甕の口縁部破片が残っており、複棺の可能性が強い。

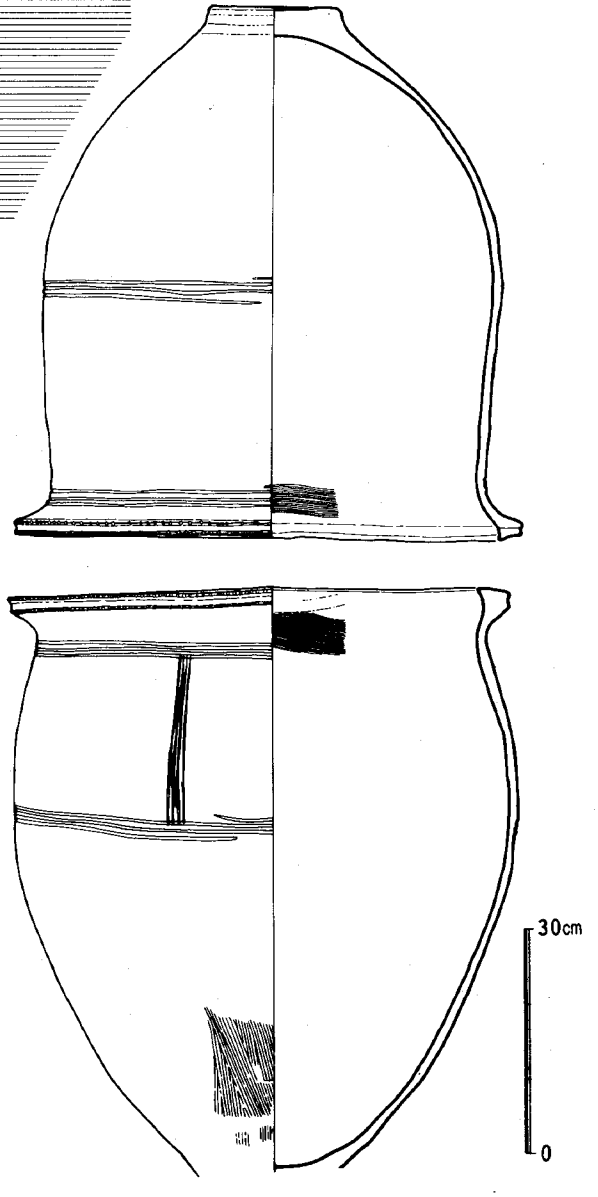


Fig.94　K77号甕棺実測図(1/10)

K84号甕棺墓　M1木棺墓の東側3mに位置し、墓壙の一部を中期小児甕であるK28で切られている。口縁部付近に別個体の破片があり、口縁部を打ち欠いた上棺があったのであろう。

K86号甕棺墓　わずかに底部だけが小さな凹地から出土した。分厚い作りや、2～3mm大の砂粒を多めに含んだ胎土などの特徴から金海式とした。K71の周辺にあるK82、K86、K135、K135がいずれも墓壙の底部だけになっているのは、現代の農道側溝が重なっていたためである。

K89号甕棺墓　発掘区南側の境界に接して発見された。長楕円形の墓壙は、上棺側が幅広く、ゆるやかな壁となっている。墓壙は深くはないが、水平に近い埋置角度なので削平の影響をあまり受けていない。上、下棺とも大型甕で、上甕の器高は70cmを超している。

K90号甕棺墓　M1号木棺墓、K89と一列に並んでいる。器高が80cmを超す大型甕を接口式にしているが、埋置角度が大きいので、下甕の墓壙が極端に深くなっている。

K91号甕棺墓　墓壙は、長径1.2m、短径75cmと小さな楕円形。深い西側に下甕を、一段高い東側に上壺を置く。墓壙内に口縁部の破片が見当たらないことから上下棺とも口縁打ち欠きであろう。

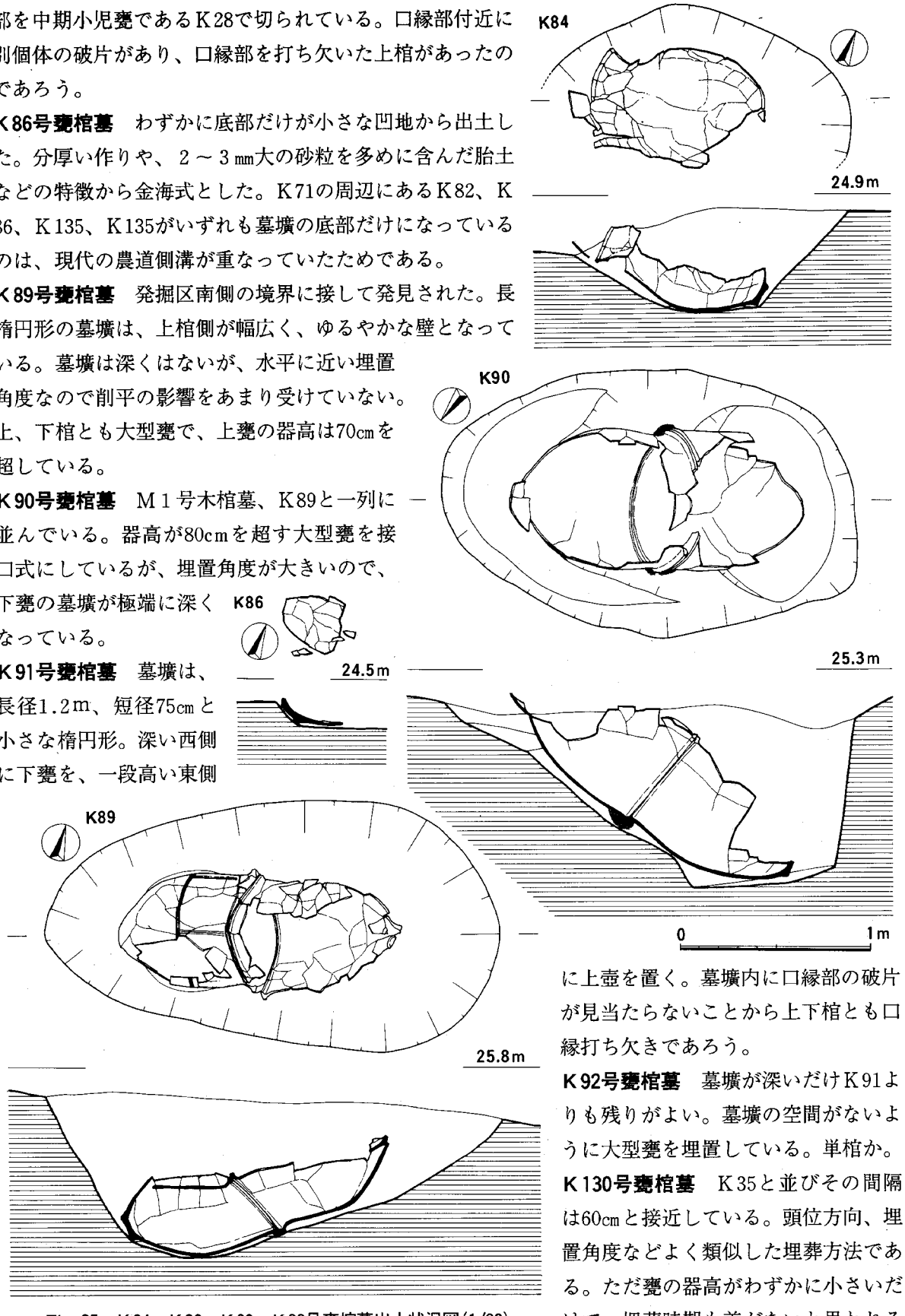


Fig.95　K84　K86　K89　K90号甕棺墓出土状況図(1/30)

K92号甕棺墓　墓壙が深いだけK91よりも残りがよい。墓壙の空間がないように大型甕を埋置している。単棺か。

K130号甕棺墓　K35と並びその間隔は60cmと接近している。頭位方向、埋置角度などよく類似した埋葬方法である。ただ甕の器高がわずかに小さいだけで、埋葬時期も差がないと思われる。

→

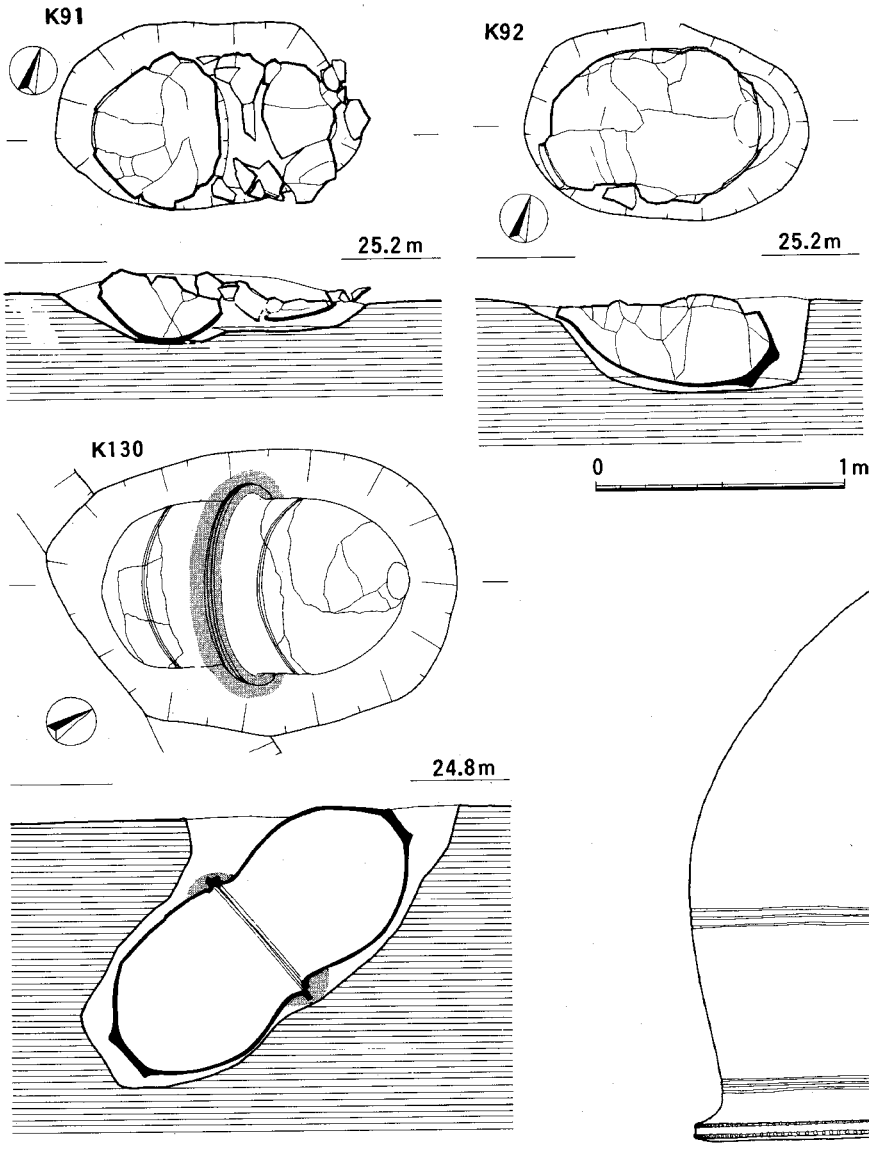


Fig.96　K91　K92　K130号甕棺墓出土状況図(1/30)

K135号甕棺墓

K136号甕棺墓　2基とも小破片であるが、胎土や色調から金海式とした。南の高木地区の間に小さな谷があり竜谷川が流れている。この斜面に農道よりも一段低い水田が耕作されていた。K135が破片だけになっているのはこのためである。

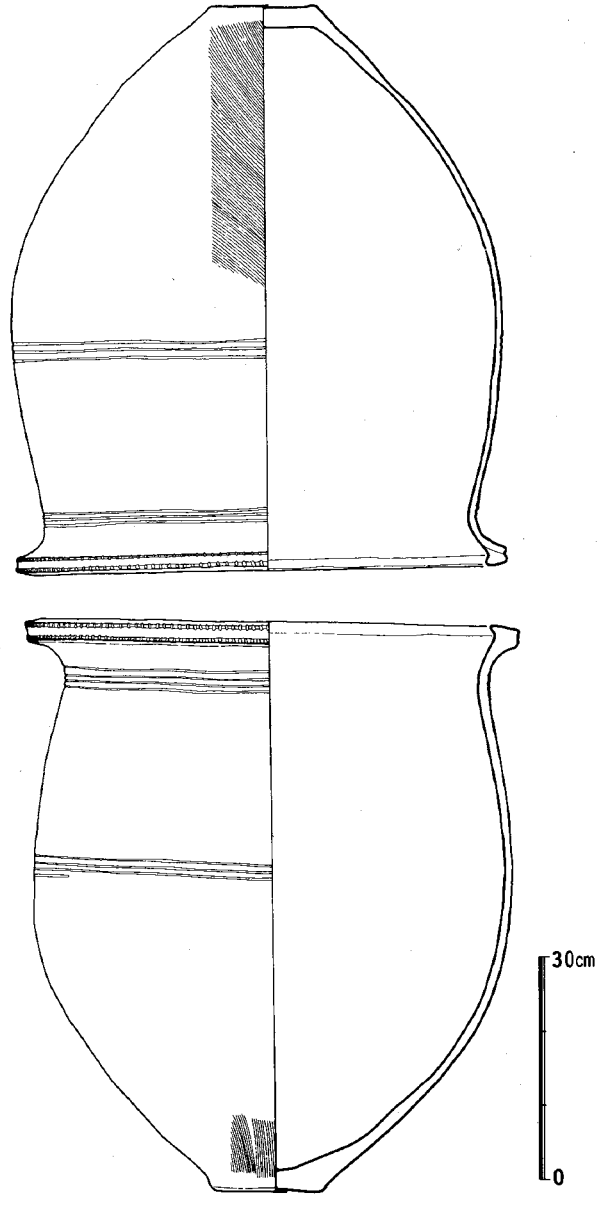


Fig.97　K130号甕棺実測図(1/10)

→ **上甕**　口径67cm、器高76.2cm、底径14cm。胴部最大径の位置は器高のちょうど中位に当たり、口径とほぼ等しい。頸部の締まりは弱く口縁部への外湾も小さい端部の上に断面台形の粘土帯を貼りつけ、肥厚した口縁部を作る。外端は強く横ナデして凹状とし、その上下に刻み目を加える。この刻み目は上下で間隔が異なることから、同時に刻んだものではない。沈線は頸部と胴部だけで縦の区画線はない。胴部下半は粗いハケ目調整が残る。上甕の重さは34kgである。

下甕　上甕に比べやや細身だが、同じ人間が作ったように大きさ、形状がよく似ている。口縁部は正円ではなく長径70.5cm、短径67.6cmと歪んでいる。器高77cm、底径17cm。頸部の沈線は4条。 ↗

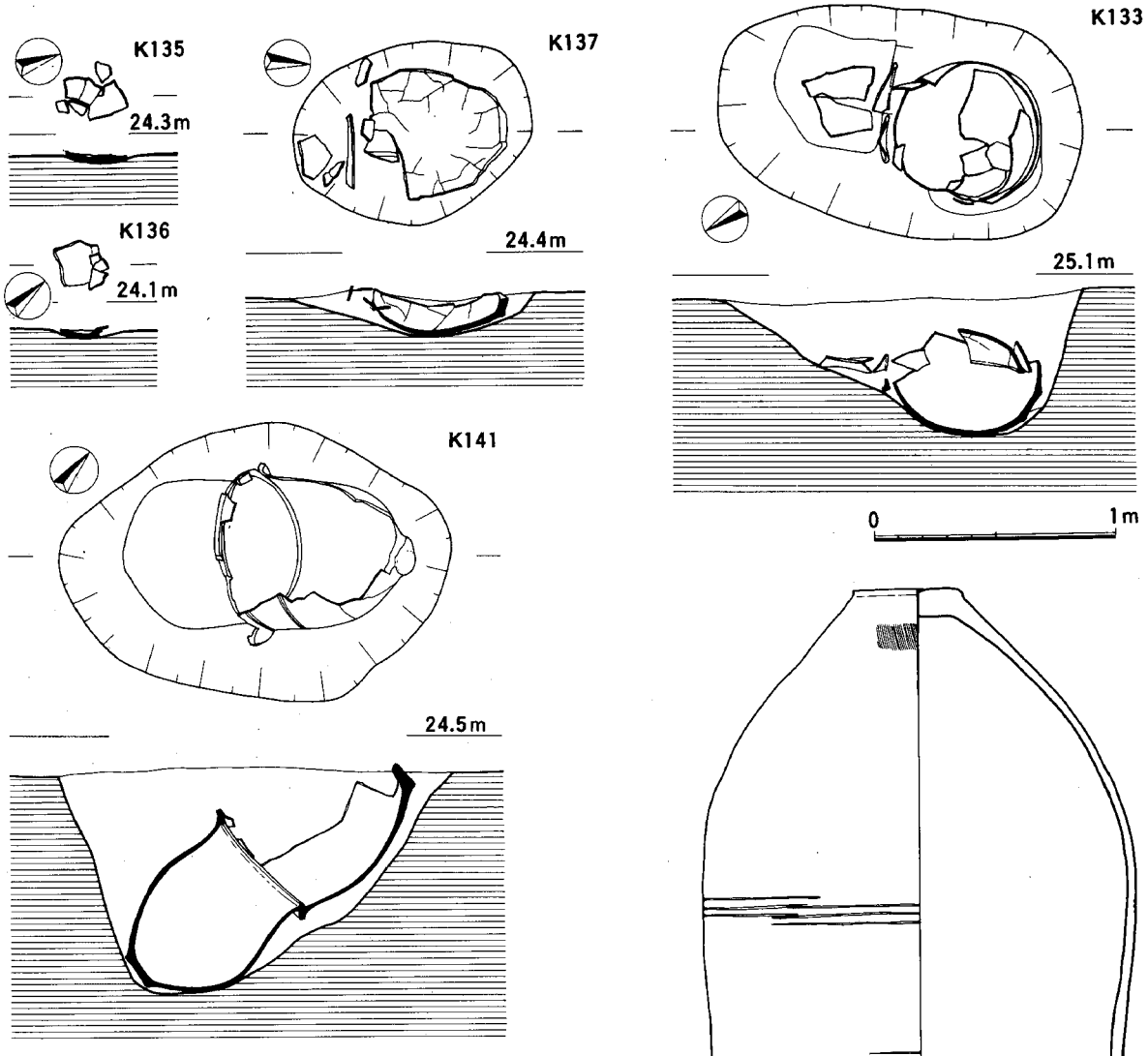


Fig.98　K133 K135 K136 K137 K141号甕棺墓
出土状況図(1/30)

K133 号甕棺墓　細形銅剣を持つK140 の南西側に接近して位置する。大型甕の複棺であるが、上甕が削平時に大きく割れて下甕に覆い被さっている。

K141号甕棺墓　埋置軸が、南西から北東方向にのびてきた甕棺ベルトにほぼ直交している。甕棺ベルトは、これより方向を変えて北に向かっている。

上甕　口径68cm、器高74cm、底径14.6cm。頸部からの外反が大きく、かつ長いのが特徴。口縁部外端の刻み目も大きく鋭い。沈線は頸部と胴部に各３条巡らせる。頸部は一筆書き。胴部は３本１組の工具で１周したのかずれている。

下甕　口径63cm、器高62.3cm、底径14.5cm。色調は上甕と同じような茶色であるが、風化が激しいせいかわずかに黄色みを帯びる。また焼成の影響か軟質で、口縁部の刻み目が残っていない。頸部内面のハケ目は底部よりも粗い。

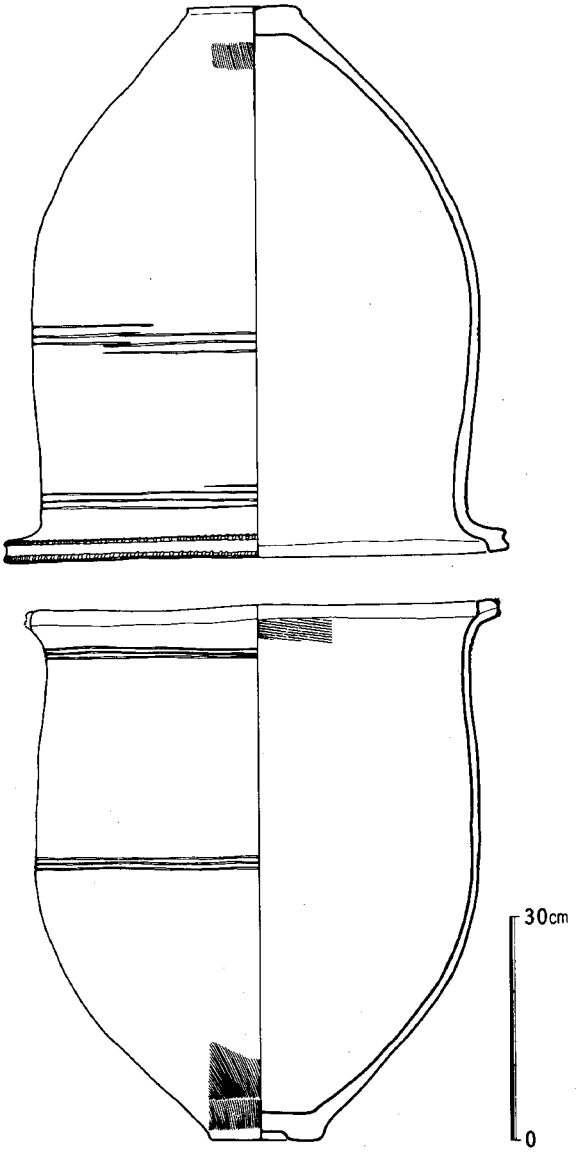


Fig.99　K141号甕棺実測図(1/10)

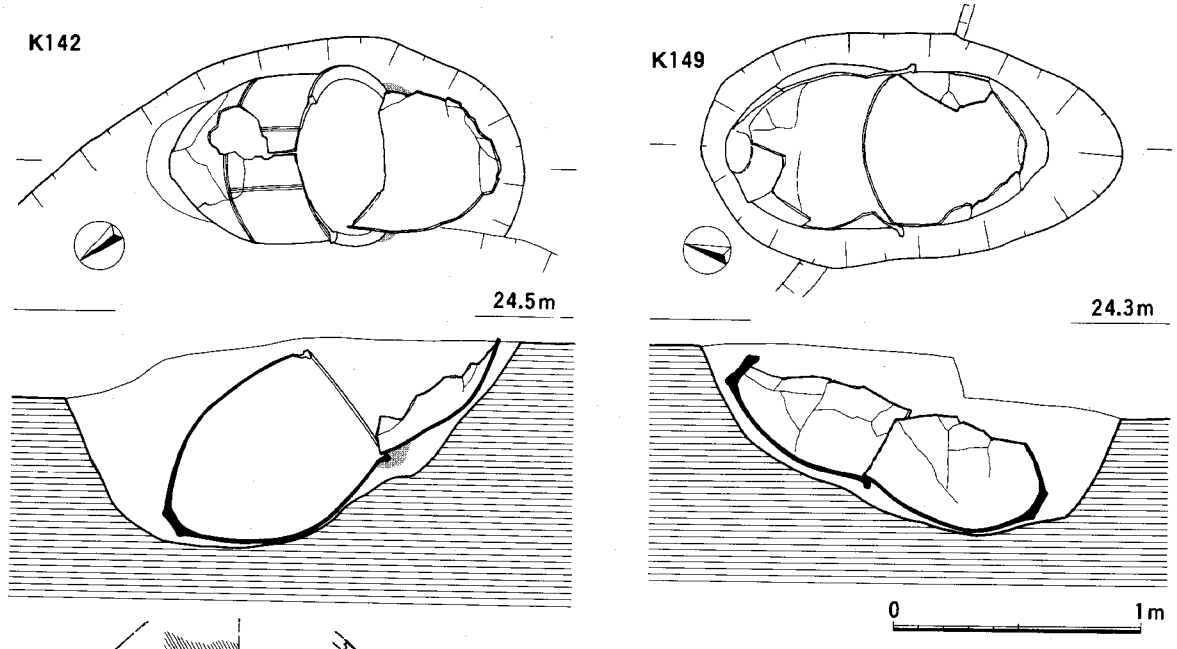


Fig.100　K142 K149号甕棺墓出土状況図(1/30)

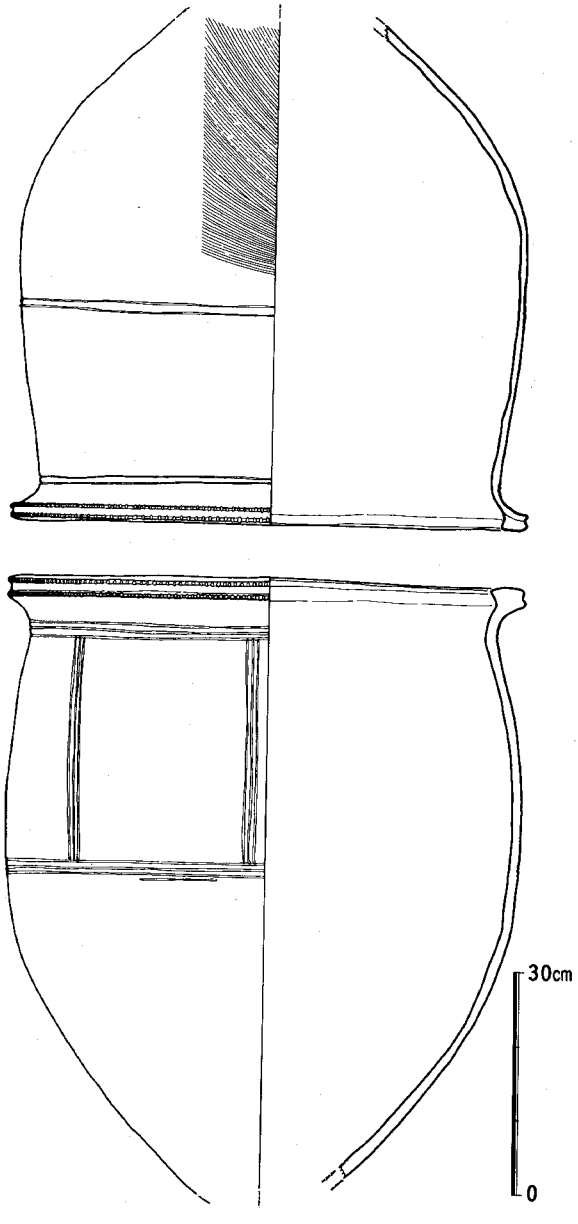


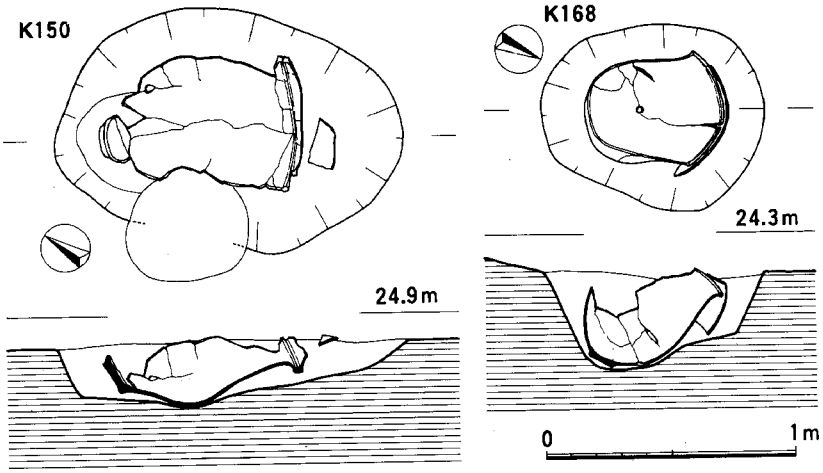
Fig.101　K142号甕棺実測図(1/10)

K142号甕棺墓　上下とも大型甕を用いている。遺構図では下甕の墓壙に空間があるが、これは中期前半のK142に切られているためである。また上甕の口縁を打ち欠いて呑口式のように見えるが、墓壙内に接合出来る口縁部があることから、全周ではなく一部を打ち欠いたのであろう。

上甕　口径69.4cm、色調は茶褐色で外面は黒みが強い。器壁が他の甕棺に比べ薄く、また凹凸が目立つ。口縁部外端は強く横ナデして凹状となるが、上下の刻み目は弱く浅い。沈線は頸部と胴部に各2条を巡らせる。胴部外面のハケ目は下部から上部へ移動している。

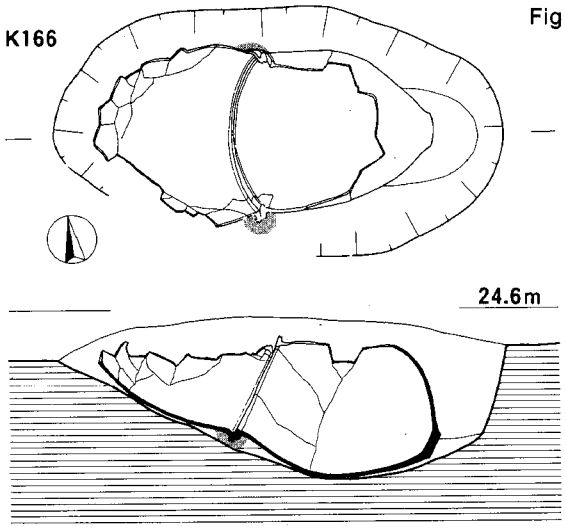
下甕　出土時は完形であったが、どうしても底部が接合出来なかった。口径70cm、推定器高70cm。上甕に比べると背が高いので細身に感じるが、胴部最大径は約2cm大きい。頸部の外反は短く、口縁部は厚い粘土帯を貼りつけている。内外面とも強く横ナデし、内端は細く突き出ている。沈線は頸部と胴部に各3条、この後、3本1組の縦線を6か所に入れている。ただ、その間隔は44cm、40cm、25cmのように等間隔ではない。色調はやや赤みを帯びた茶褐色で、胴部下半の調整はナデ上げ。

K149号甕棺墓　大石地区の東南隅の一群に入る。墓壙は、長径1.7m、短径92cmの楕円形。緩やかな壁に二つの大型甕を覆口式で埋置している。下甕の口縁部は打ち欠き。上甕で赤色顔料が認められた。



K150号甕棺墓　甕棺の半分以上が削平され、しかも後世の円形ピットで胴部が壊されているが、わずかに残った部分から、複棺で接口式であるとが分かる。ただ、上甕の大きさからすると墓壙に余裕がない。当初はさらに大きな墓壙だったのだろう。

Fig.102　K150 K166 K168号甕棺墓出土状況図(1/30)



K166号甕棺墓　大型甕の複棺で、上下棺の大きさに合わせて楕円形の墓壙となっている。25度と水平に近い埋置角なので、下甕も削平を受けている。

K168号甕棺墓　K172とともに大石地区の東端で発見された。下棺の中型甕を口縁部を打ち欠いた甕で覆っている。下甕の胴部中位に小さな穿孔がある。

K171号甕棺墓　鞘に納められた細形銅剣を出したM5木棺墓の東に並んでいる。大型甕を用いた複棺で上甕は口縁部打ち欠き、胴部の大半が削平で割れているが、図のように接合復元できた。

上甕　打ち欠き部径54.2cm、器高71.3cm、底径11.2cm。外面の調整は、底部から上方に向かって縦ハケ目の後、横方向の指ナデを加え、胴部中位にかけて縦の板ナデ、頸部にかけて縦ハケ目の後に横の板ナデを施している。頸部内面に粗い横ハケ目が残る。

下甕　口径61cm、器高80cm、底径17cm。胴部中位に小

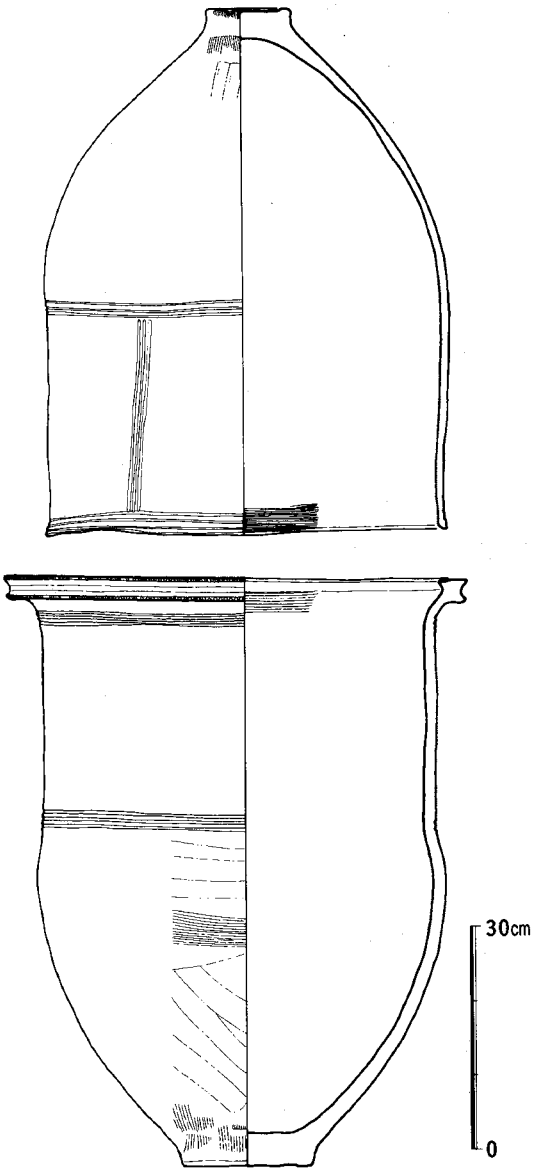


Fig.103　K171号甕棺実測図(1/10)

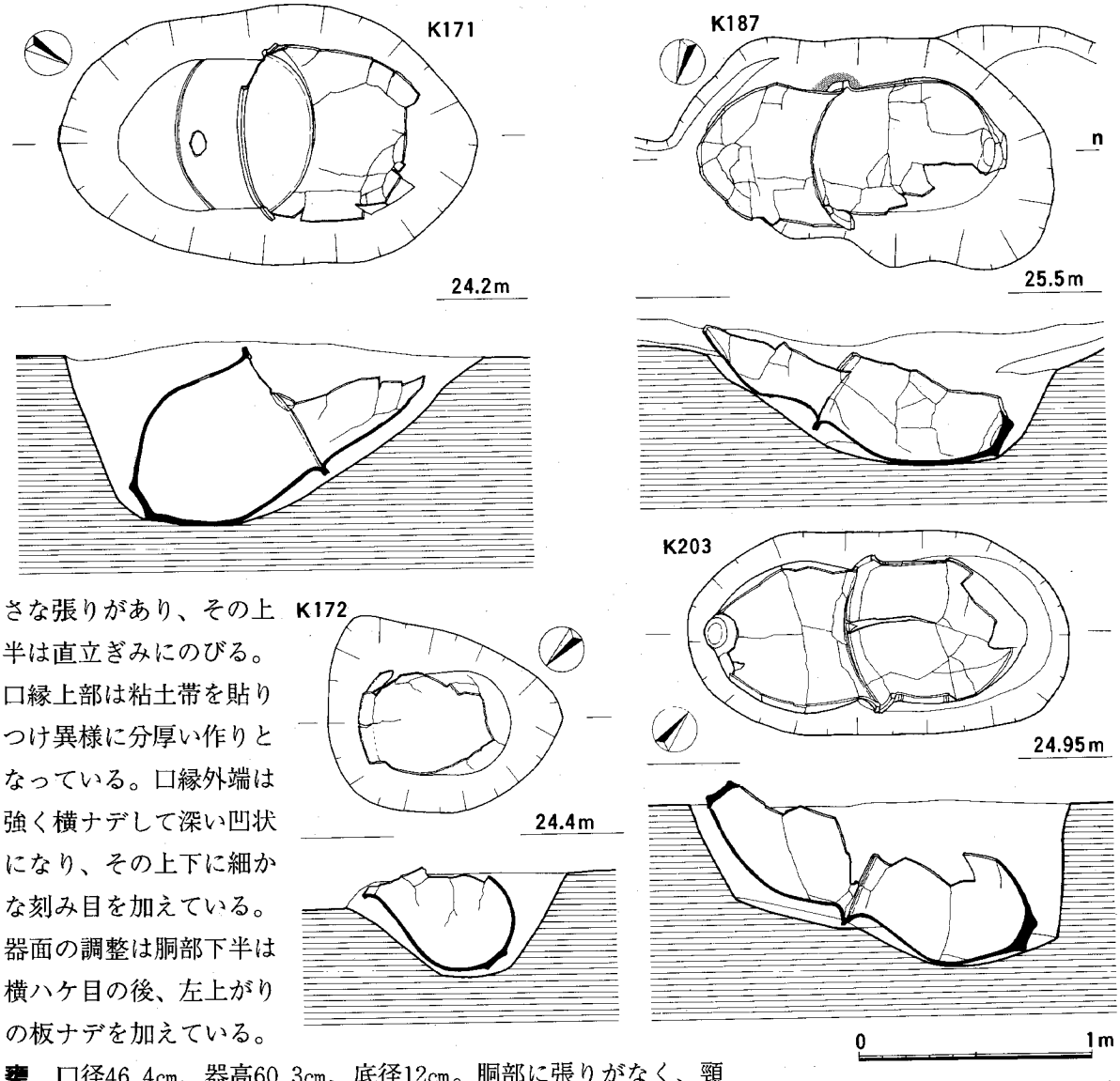


Fig.104　K171 K172 K187 K203号甕棺墓出土状況図(1/30)

さな張りがあり、その上半は直立ぎみにのびる。口縁上部は粘土帯を貼りつけ異様に分厚い作りとなっている。口縁外端は強く横ナデして深い凹状になり、その上下に細かな刻み目を加えている。器面の調整は胴部下半は横ハケ目の後、左上がりの板ナデを加えている。

甕　口径46.4cm、器高60.3cm、底径12cm。胴部に張りがなく、頸部がわずかに締まり、外湾してそのまま口縁部となる。胴部の調整は、下半は左右にハケ目を振り分け、中位から頸部まで縦ハケ目である。この後、頸部下に細く浅い2条の沈線を巡らせている。胴部の沈線や口縁部の刻み目はない。

K187号甕棺墓　大石地区の南に東西方向の用水路が建設されたが、これを超した所で発見された。大型甕を用いた複棺式で、上甕の口唇部を下甕口縁内側に密着させている。上甕胴上部に鋭い三角突帯を巡らせている。

K203号甕棺墓　細形銅剣や管玉を出したK51と同じ様な長軸で南西に並んでいる。器高70cmを超す大型甕を用いた複棺で、接口式に埋置している。

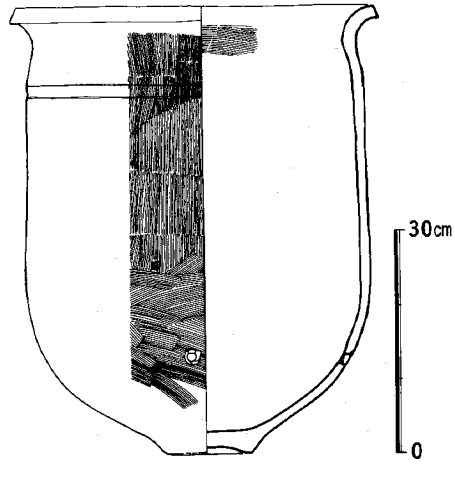


Fig.105　K172 号甕棺実測図(1/10)

Tab. 5　吉武遺跡第六次調査出土甕棺墓一覧

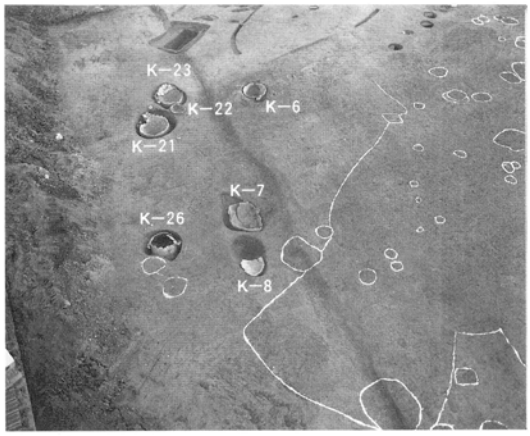
（前期末～中期初頭）

番号	単棺	型式 複棺 接口	型式 複棺 覆口	型式 複棺 呑口	組み合わせ 上棺	組み合わせ 下棺	規模	埋置方位	埋置角度	時期（型式）	備考
1				○	甕	甕	大型	N-32°-E	北東40°	金海式	細形銅矛細片1、大きく削平。
2			○ 粘土		甕	甕	大型	N-43°-E	北東40°	金海式	下甕は口縁部打ち欠きか？
4						甕	大型	N-66°-E	北東-	(金海式)	下甕の底部のみ残存。
6						甕	大型	N-45°-E	南西54°	(金海式)	下甕の底部のみ残存、大きく削平。
10						甕	大型	N-45°-E	北東30°	金海式	大きく削平、磨製石鏃1。
14				○	甕	甕	大型	N-53°-E	北東30°	金海式	K-12、K-13に切られる。
15	?					甕	大型	N-55°-E	南西45°	金海式	単棺か？
17				○	甕	甕	大型	N-66°-W	南東-	金海式	K-16に切られる。胴部に穿孔。
18		○			甕	甕	大型	N-49°-E	北東28°	金海式	
25		○			甕	甕	大型	N-28°-E	南西30°	金海式	
26			○		甕	甕	大型	N-24°-E	南西南60°	(金海式)	上甕の口縁下に突帯。
27	?					甕	小型	N-51°-E	南西50°	(金海式)	下甕胴部に穿孔。
35		○			甕	甕	大型	N-30°-E	北東46°	金海式	
43		○			甕	甕	大型	N-30°-E	南西38°	金海式	上甕の口縁部打ち欠き。
45		○			甕	甕	大型	N-56°-E	北東0°	金海式	細形銅剣1、細形銅矛1、頭位に朱。
46		○			甕	甕	大型	N-50°-E	南西-	金海式	
47			○		甕	甕	大型	N-32°-E	南西30°	金海式	
50		○ 粘土			甕	甕	大型	N-68°-E	北東35°	金海式	上甕の大半を削平。
51		○ 粘土			甕	甕	大型	N-47°-E	北東20°	金海式	細形銅剣1、管玉11、朱、抱石？
52	?					甕		N-77°-E	北東-	金海式	下甕の底部のみ残存。
53		○ 粘土			甕	甕	大型	N-78°-E	東北東12°	汲田	細形銅矛1、磨製石剣4。朱。
56		○			甕	甕	大型	N-67°-E	南西40°	金海式	上甕の下半部を削平。
60		○ 粘土			甕	甕	大型	N-73°-E	北東20°	金海式	磨製石剣1。
62				○ 粘土	甕	甕	大型	N-49°-E	南西35°	金海式	上甕は口縁部打ち欠き。
64	?					甕	大型	N-80°-E	西南西30°	金海式	
65				○	甕	甕	大型	N-82°-E	西25°	金海式	大きく削平。
67		○ 粘土			甕	甕	大型	N-58°-E	北東25°	金海式	細形銅矛1。
68	?					甕	大型	N-40°-E	北東35°	金海式	墓壙の大きさからすると複棺か？
70						甕	大型	N-71°-E	東北東30°	金海式	下甕の底部のみ残存。細形銅戈1。
71	?					甕	大型	N-74°-E	北東-	汲田	下甕の胴下半部のみ残る、青銅製品1、管玉製品38。朱。
73				○	壺	甕	大型	N-62°-E	北東15°	金海式	上甕は胴上半部を打ち欠き。
74			○ 粘土		甕	甕	大型	N-22°-W	北北西28°	金海式	上、下甕とも大きく削平。
76	?					甕	大型	N-83°-E	西30°	(金海式)	墓壙の大きさは複棺か？
77		○ 粘土			甕	甕	大型	N-7°-E	北25°	金海式	上、下甕とも完全に残る。
81				○	甕	甕	大型	N-65°-E	北東25°	金海式	磨製石剣1、M7を切る。朱。
82	?					甕	大型	N-65°-E	南西35°	金海式	複棺の可能性あり、
84		不明			甕	甕	大型	N-66°-E	南西30°	金海式	上甕は口縁部打ち欠き？
86	?					甕？		(N-68°-E)	北東-	金海式	下甕の底部のみ残存。
89		○			甕	甕	大型	N-74°-E	北東20°	金海式	上、下甕ともよく残る。
90		○ 粘土			甕	甕	大型	N-54°-E	南西39°	(金海式)	上、下甕ともほぼ同じ大きさ
91					壺	甕	大型	N-71°-E	北東-	金海式	上甕は口縁打ち欠き？大きく削平。
92	?					甕	大型	N-72°-E	南西35°	(金海式)	下甕のみ残る。
130		○ 粘土			甕	甕	大型	N-30°-E	北東40°	金海式	完全な姿で保存されていた。K35とほぼ並ぶ。
133			(○)		甕	甕	大型	N-81°-E	東30°	金海式	破片が落ち込んでいることから複棺か？
135		不明				甕？		(N-72°-W)	-	(金海式)	小破片、胎土から金海式とした。
136		不明				甕？		(N-39°-E)	-	(金海式)	小破片。
137		不明				甕	小型	-	15°	金海式	大きく削平されている、複棺か？
140		○ 粘土			甕	甕	大型	N-37°-E	北東25°	金海式	細形銅剣1、上甕に朱。
141			○		甕	甕	大型	N-50°-W	南西40°	金海式	上、下甕ともやや小さい。朱。
142				○ 粘土	甕	甕	大型	N-41°-E	南西35°	金海式	上甕は削平、K148に切られる。
149				○	甕	甕	大型	N-14°-W	北25°	金海式	上甕には赤色顔料、下甕は口縁部打ち欠き。
150		○			甕	甕	大型	N-32°-W	南東25°	金海式	上縁は口縁部のみ残る。
166		○ 粘土			甕	甕	大型	N-83°-E	西25°	金海式	上甕は大半を削平。
168			○		甕	甕	中型	N-23°-W	北西50°	金海式	上甕は口縁部打ち欠き、下甕胴部下位に穿孔。
171					甕	甕	大型	N-34°-W	北西30°	金海式	上甕は口縁部打ち欠き、下甕胴部上位に穿孔か？
172	?					甕	中型	N-44°-E	北東50°	(金海式)	口縁部は粘土貼りつけがない、口縁下に2条の沈線。
187		○			甕	甕	大型	N-70°-E	北東27°	(金海式)	上甕は口縁部打ち欠き、胴部に三角凸帯下甕は金海式。
203		○			甕	甕	大型	N-50°-E	北東27°	金海式	上甕の口縁部下端のみに刻み目。

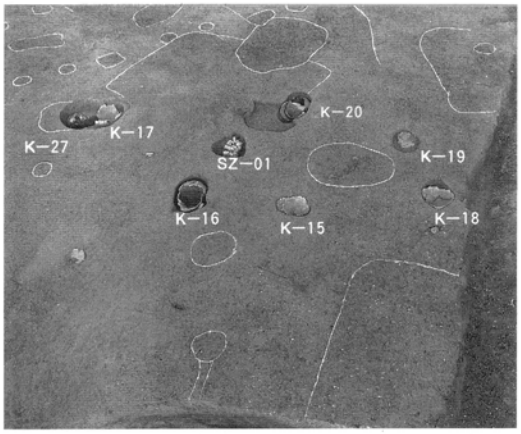
太字は何らかの遺物を持つ甕棺

図　版

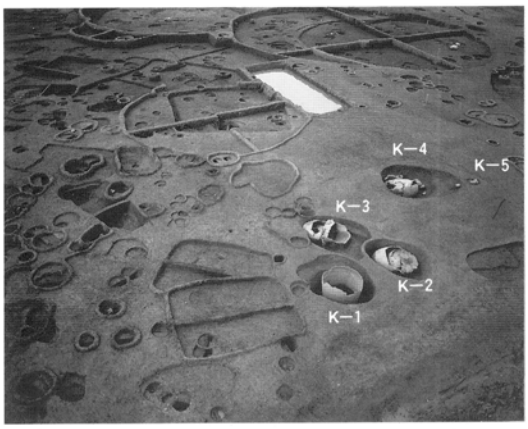
PLATES



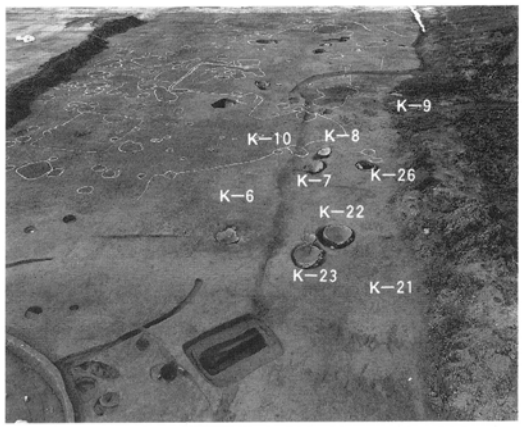
1.Ⅱ区北側甕棺検出状態(北から)1315



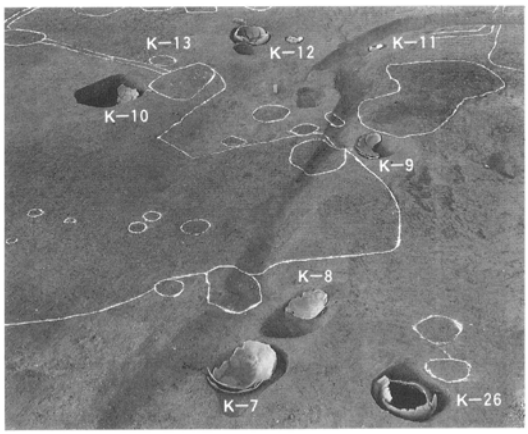
2.Ⅱ区甕棺と遺構検出状態(南東から)898



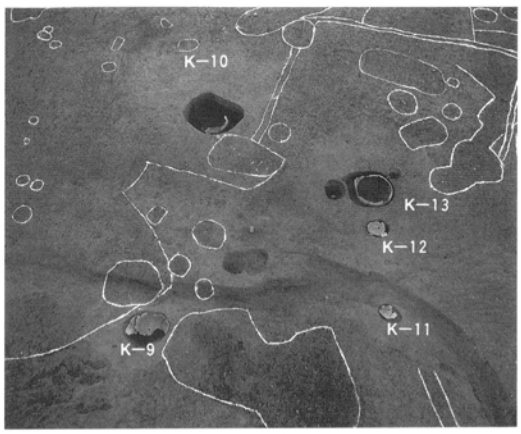
3.Ⅱ区甕棺、住居址切合い関係(南東から)1001



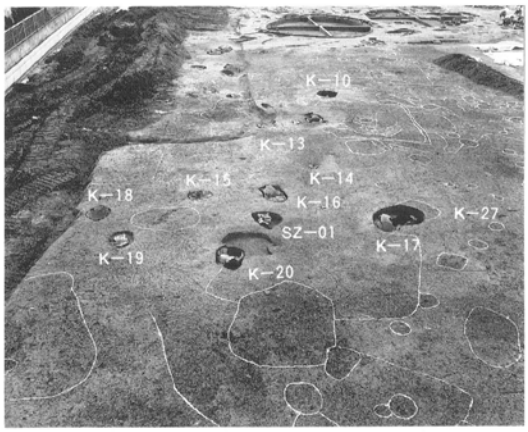
4.Ⅱ区北東側甕棺検出状態(南から)1312



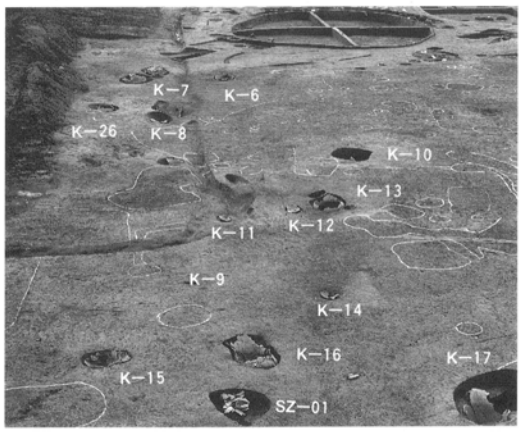
5.Ⅱ区K−7.8.26検出状態(南から)1314



6.Ⅱ区K−9〜13検出状態(東から)868

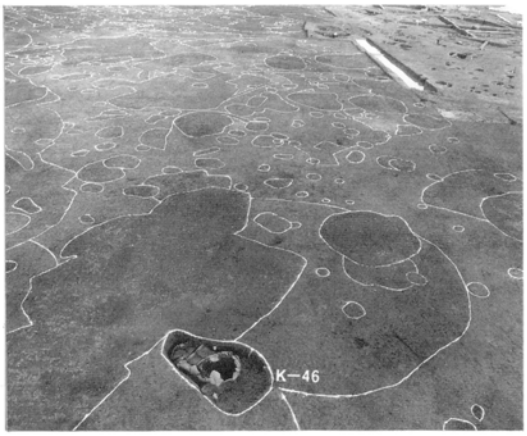


7.Ⅱ区甕棺と遺構検出状態(北から)876

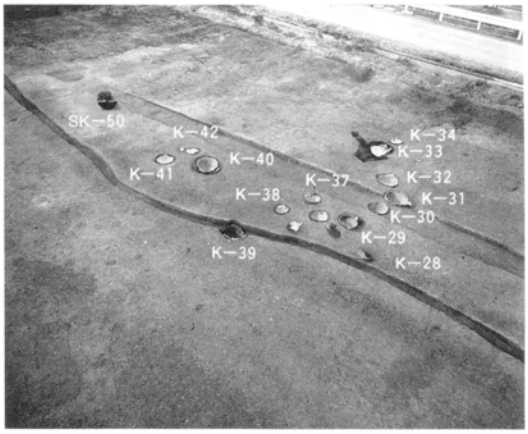


8.Ⅱ区北側甕棺検出状態(北から)1313

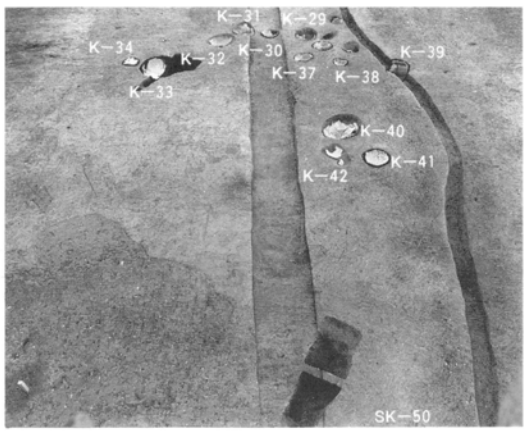
第一次Ⅱ区検出甕棺墓・木棺墓検出状態−1



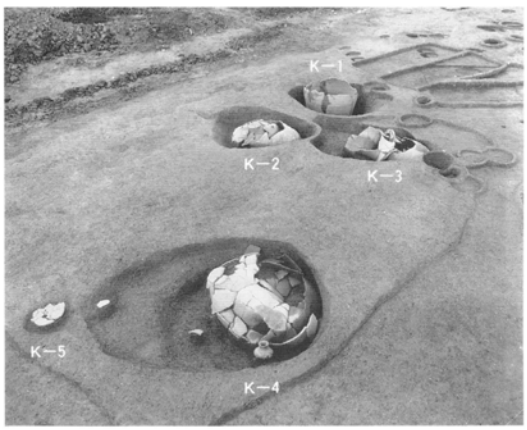
9.Ⅱ区北側未調査区(西から)573



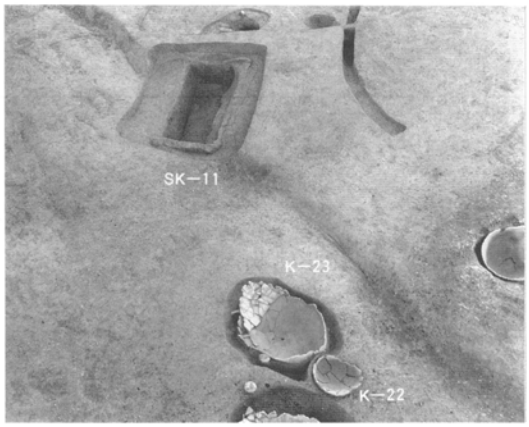
10.Ⅱ区北側甕棺検出状態(南東から)800



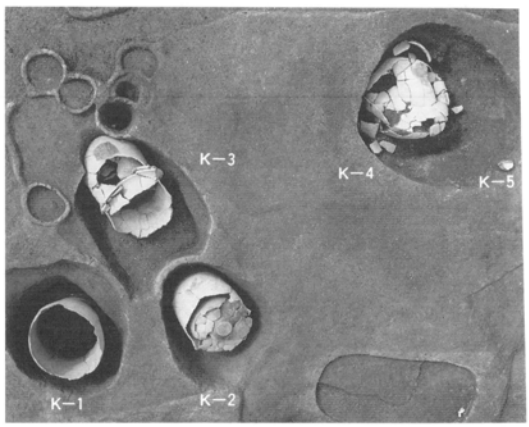
11.Ⅱ区北側甕棺検出状態(西から)807



12.Ⅱ区K−1～5検出状態(北西から)1129

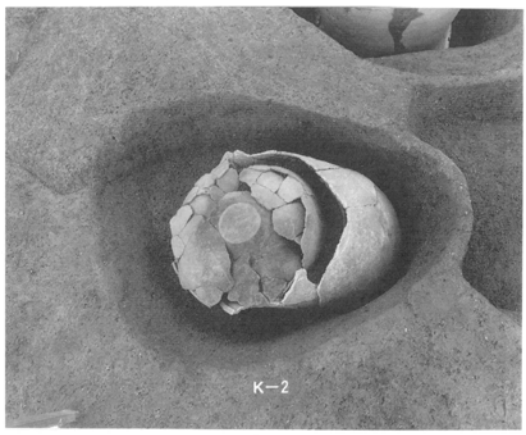


13.Ⅱ区K−22～23,SK−11検出状態(北から)1324



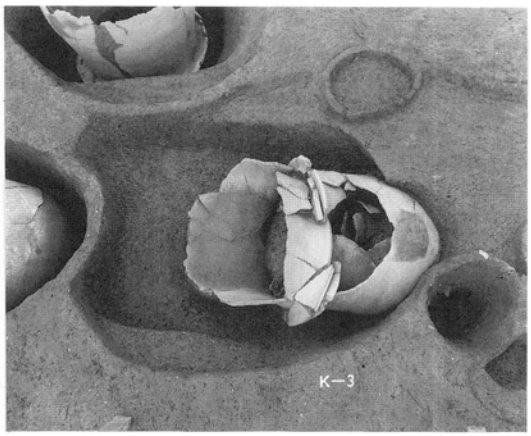
14.ⅡK−1～5検出状態(北から)976

15.Ⅱ区K−1検出状態(北西から)1134



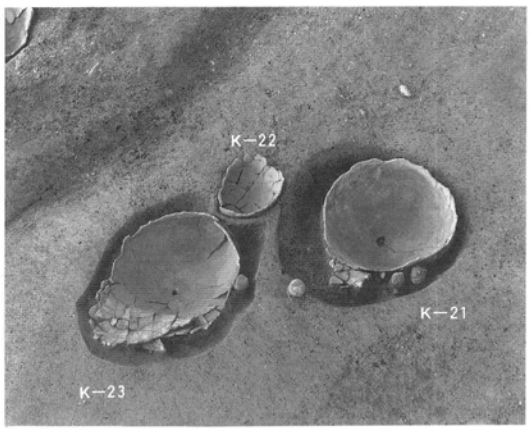
16.Ⅱ区K−2検出状態(北西から)1131

検出状態−2

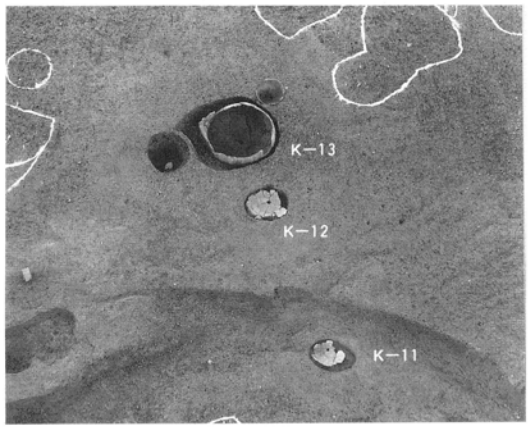


17.Ⅱ区K−3検出状態(北西から)1133

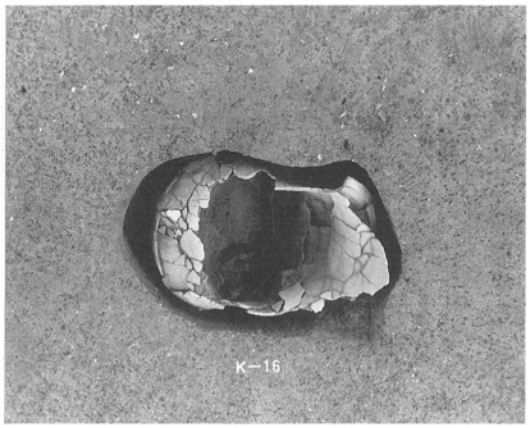
18.Ⅱ区SK−11近景(北西から)1232



19.Ⅱ区K−21〜23検出状態861

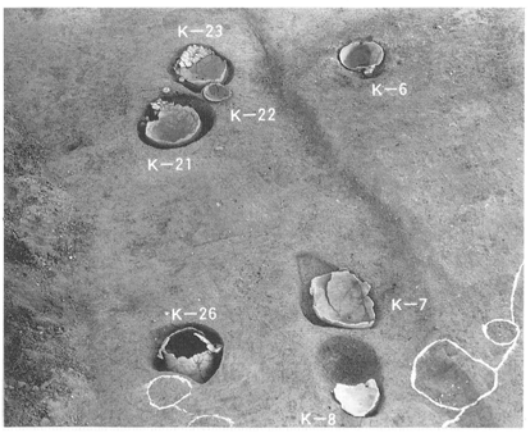


20.Ⅱ区北側甕棺検出状態(東から)1196

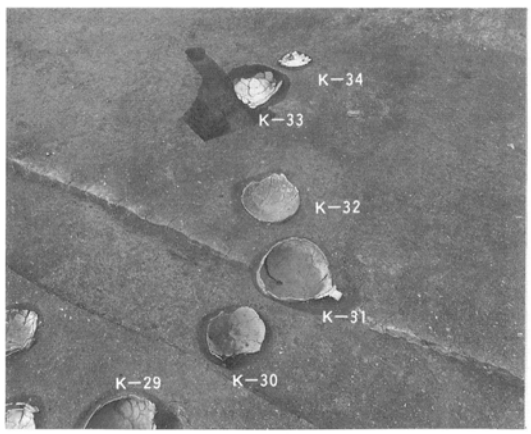


21.Ⅱ区K−16検出状態(西から)875

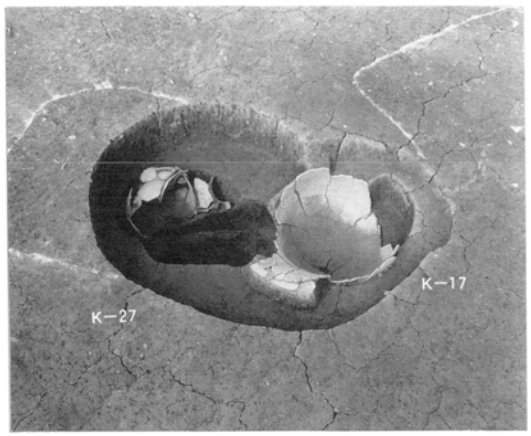
22.Ⅱ区K−20検出状態881



23.Ⅱ区甕棺と遺構検出状態852

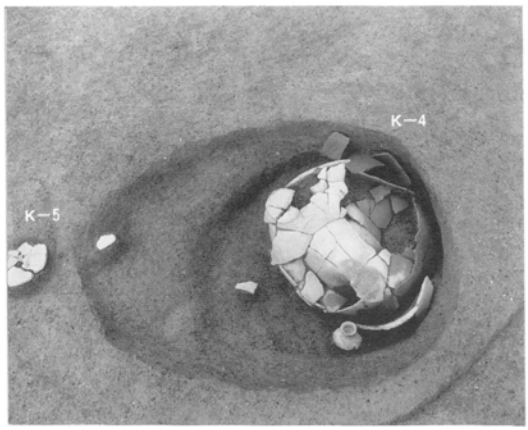


24.Ⅱ区北側甕棺検出状態(南東から)1318

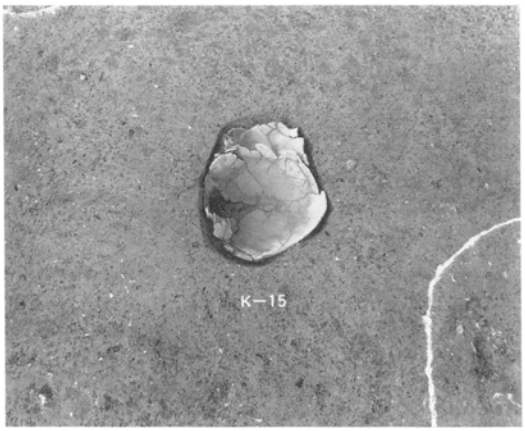


25.Ⅱ区K−17.27検出状態(北西から)767

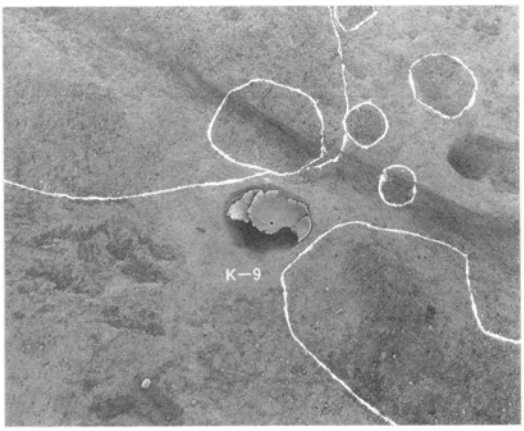
26.Ⅱ区K−26検出状態(東から)775



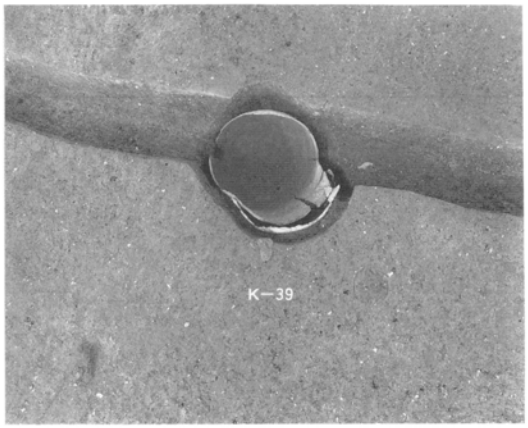
27.Ⅱ区K−4.5検出状態(北西から)1126



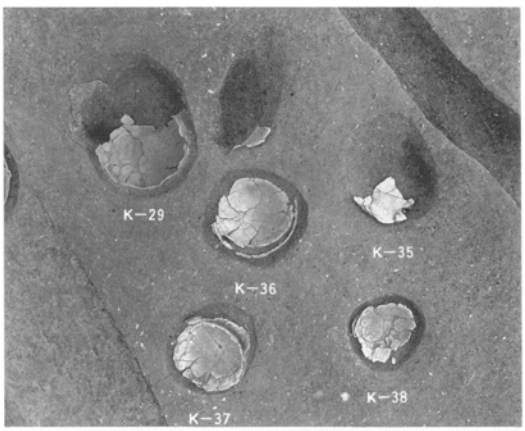
28.Ⅱ区K−15検出状態(東から)1326



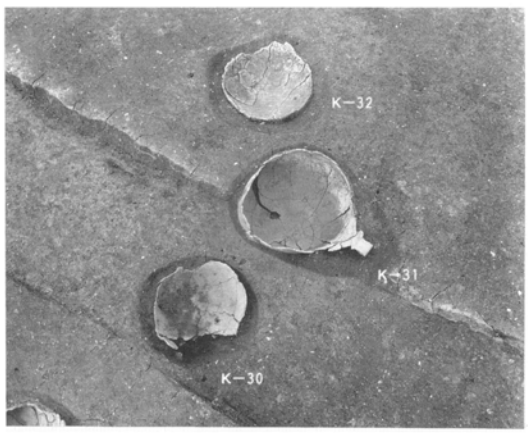
29.Ⅱ区甕棺と遺構検出状態(東から)850



30.Ⅱ区K−39 検出状態(南から)813

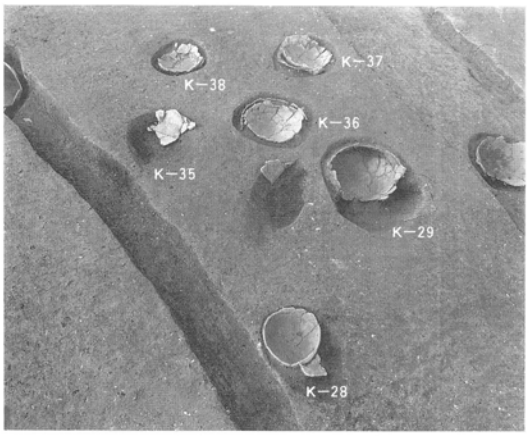


31.Ⅱ区北側甕棺検出状態(南東から)1320

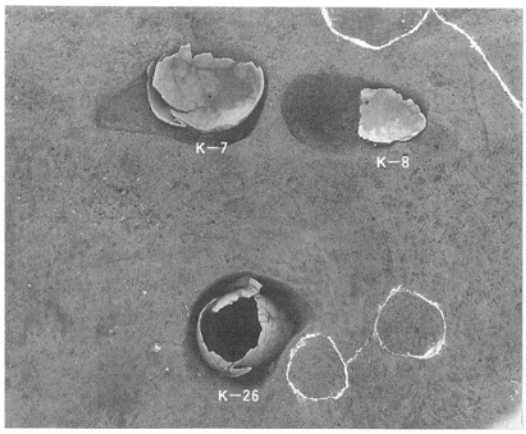


32.Ⅱ区K−30〜32検出状態(南東から)826

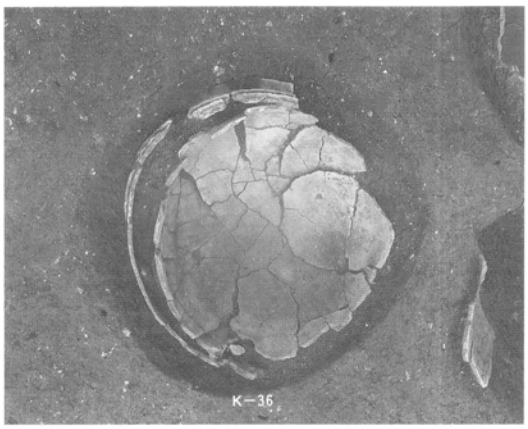
検出状態−4



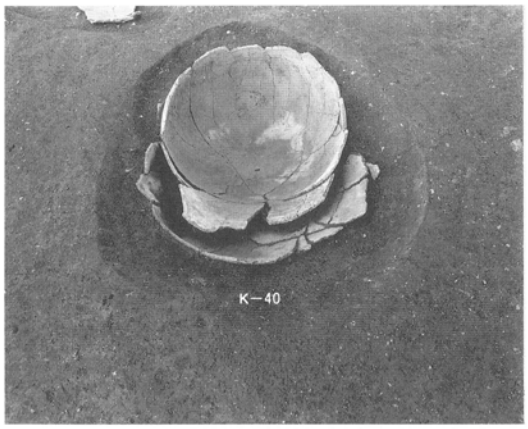
33.Ⅱ区北側甕棺検出状態(南東から)1319



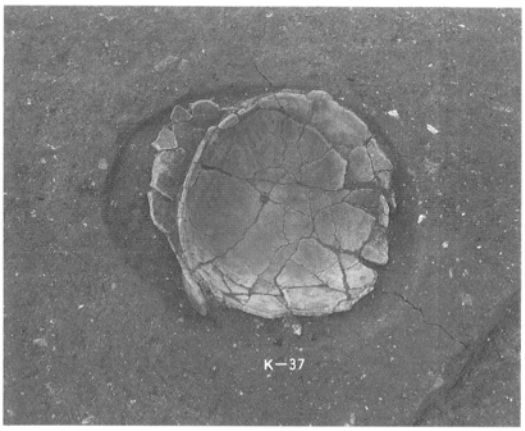
34.Ⅱ区K−7.8.26検出状態(北東から)864



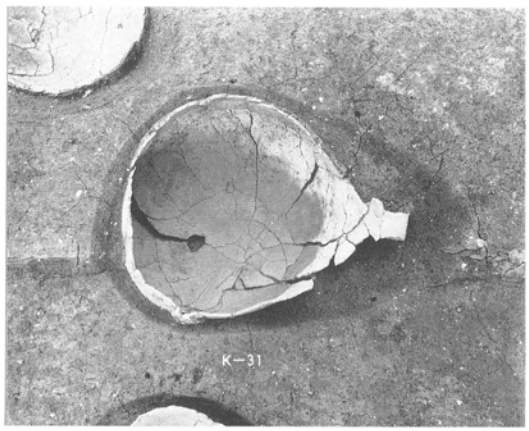
35.Ⅱ区K−36検出状態(北から)1317



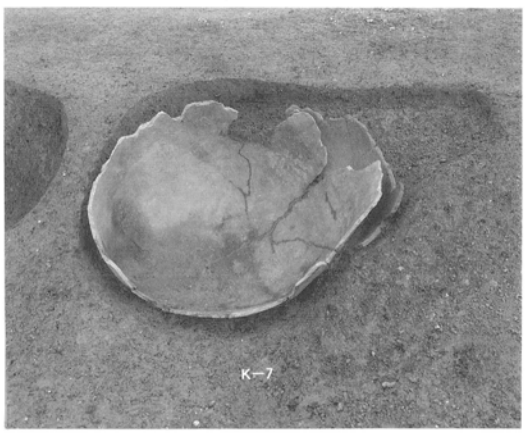
36.Ⅱ区K−40検出状態843



37.Ⅱ区K−37検出状態(北から)1316



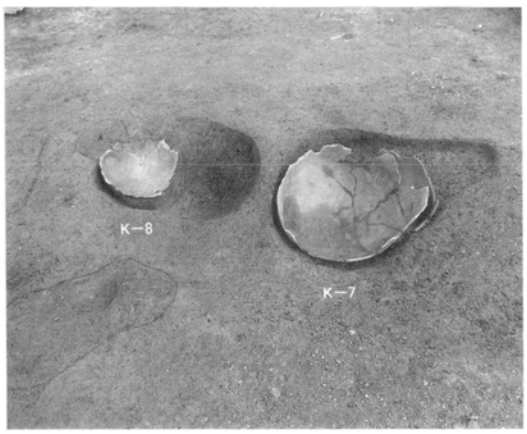
38.Ⅱ区K−31検出状態(南から)829



39.Ⅱ区K−7検出状態1197

40.Ⅱ区K−7.8検出状態　849

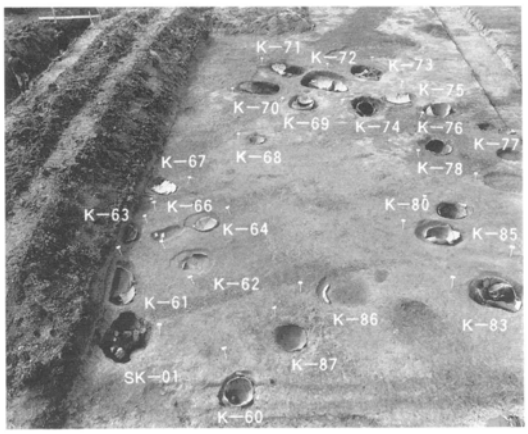
検出状態−5



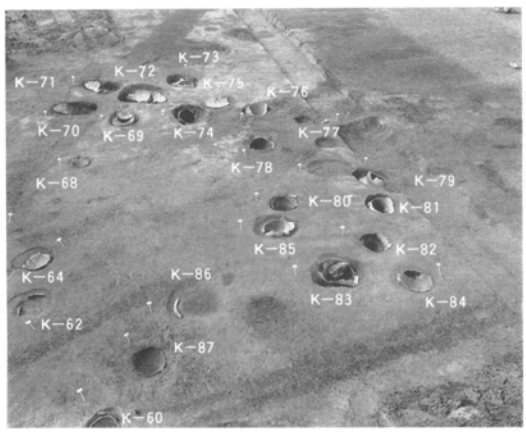
41.Ⅱ区K−7.8検出状態848

42.Ⅳ区調査区遠景(北西から)7

43.Ⅳ区調査区遠景(北東から)12



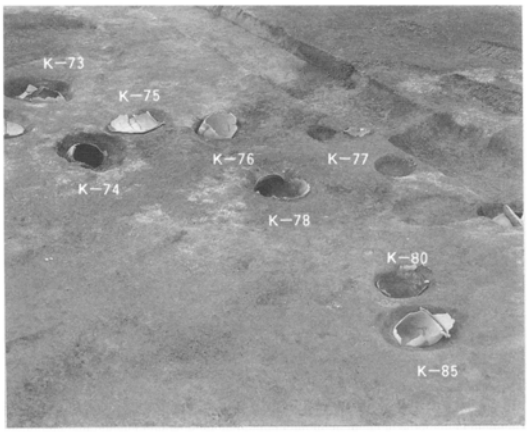
44.Ⅳ区南東側甕棺全景(東から)303



45.Ⅳ区甕棺検出状態(東から)433

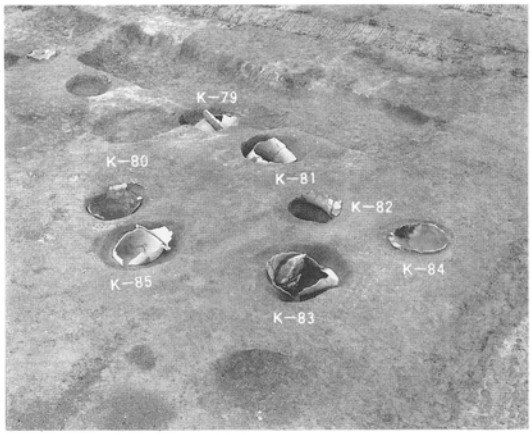
46.Ⅳ区甕棺検出状態(北から)407

47.Ⅳ区中央部遠景(東から)170

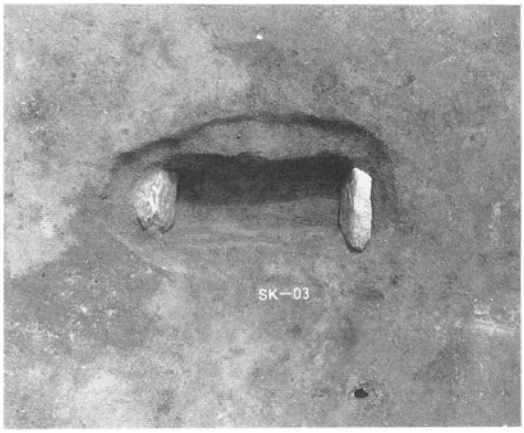


48.Ⅳ区甕棺検出状態(南東から)434

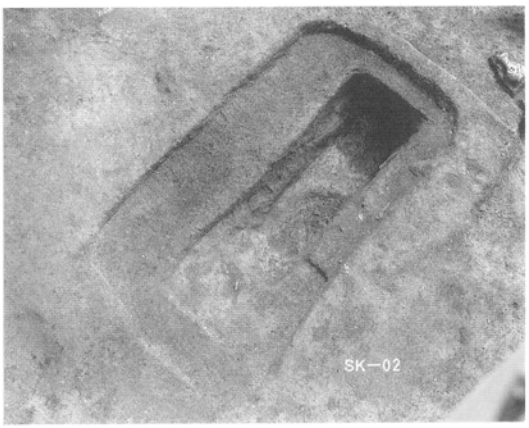
第1次Ⅳ区検出甕棺墓・木棺墓検出状態−1



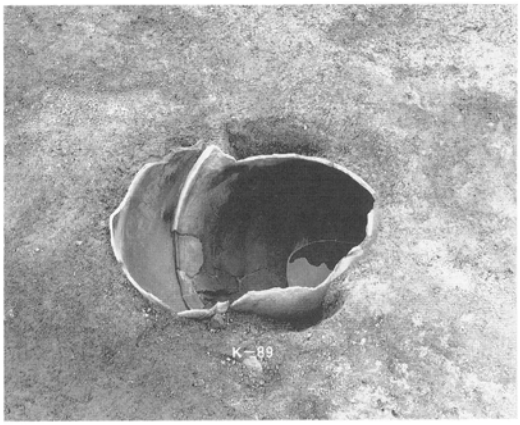
49.Ⅳ区南側甕棺遠景（南東から）327



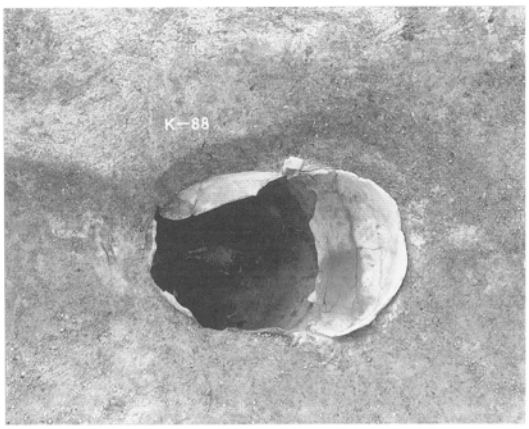
50.Ⅳ区SK−03検出状態（南西から）164



51.ⅣSK−02検出状態（北東から）163

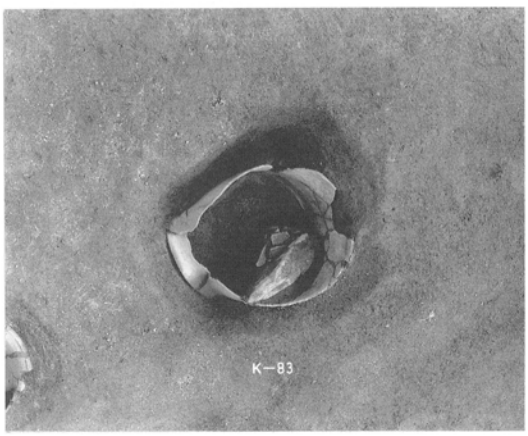


52.Ⅳ区K−89検出状態（東から）318

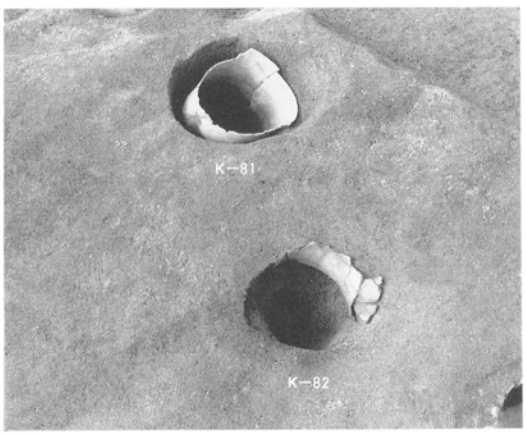


53.K−88検出状態（東から）306

54.Ⅳ区K−88内細形銅剣切先検出状態（東から）304

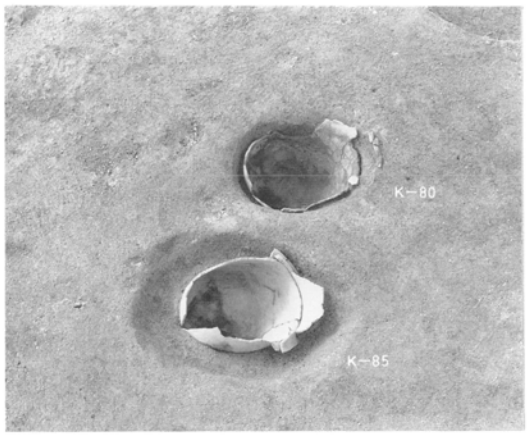


55.Ⅳ区K−83検出状態（東から）340



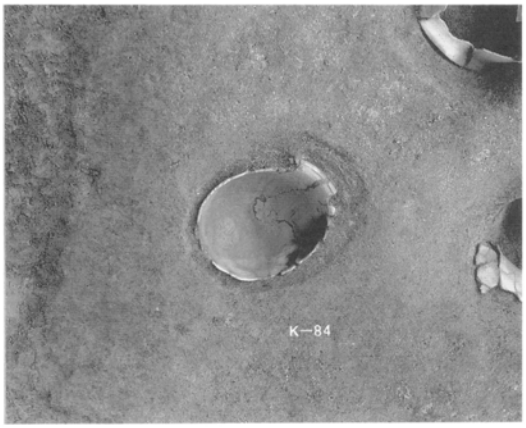
56.Ⅳ区K−81.82検出状態（南東から）442

検出状態−2

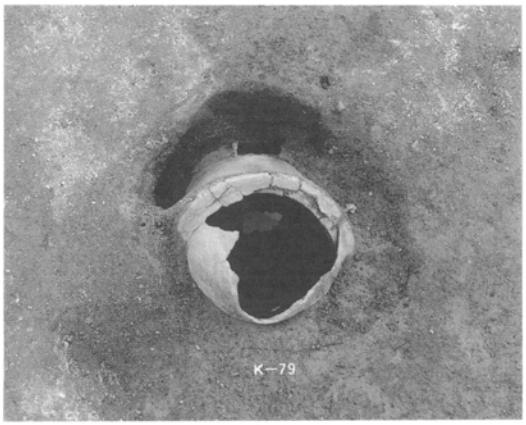


57.Ⅳ区K−80.85検出状態（南東から）441

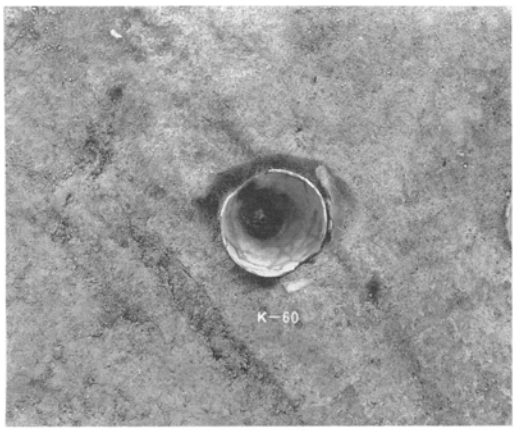
58.Ⅳ区K−74検出状態　377



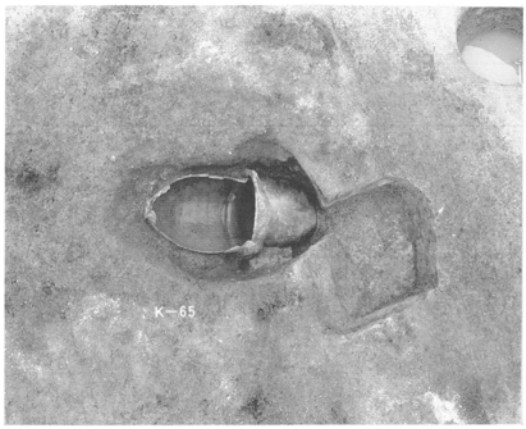
59.Ⅳ区K−84検出状態（南東から）341



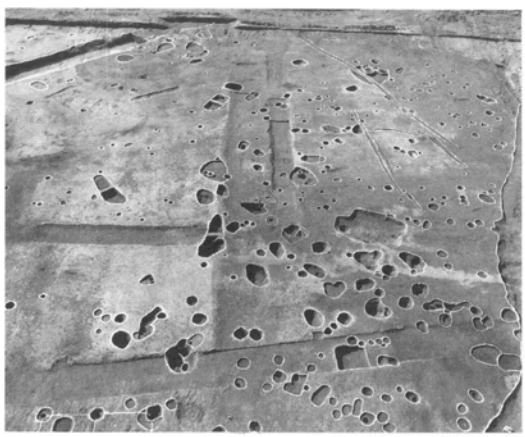
60.Ⅳ区K−79検出状態（北から）346



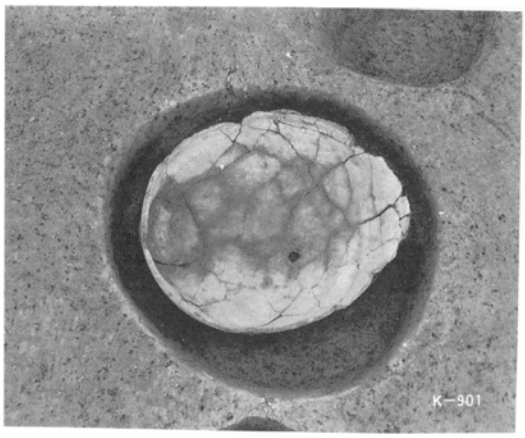
61.Ⅳ区K−60検出状態（北東から）337



62.Ⅳ区K−65検出状態（西から）244



63.Ⅸ区調査区北隅近景（北東から）816



64.Ⅸ区K−901検出状態　711

Ⅳ・Ⅸ区甕棺墓・木棺墓検出状態

K−1 810223001
1418 (Fig.15)

810223003
1421 (Fig.15)

810223005
1423 (Fig.15)

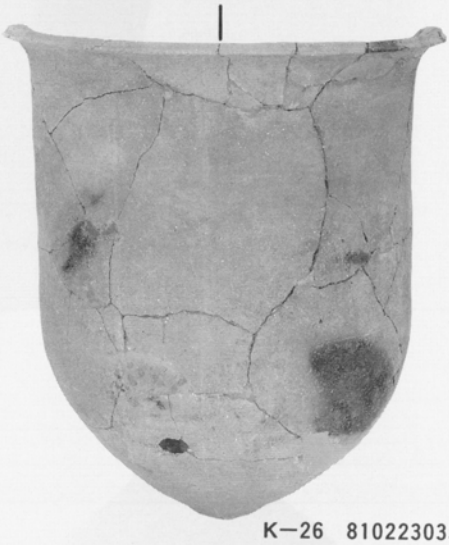
K−2 810223002
1420 (Fig.15)

K−3 810223004
1422 (Fig.15)

甕形土器−1

810223007
1425 (Fig.15)

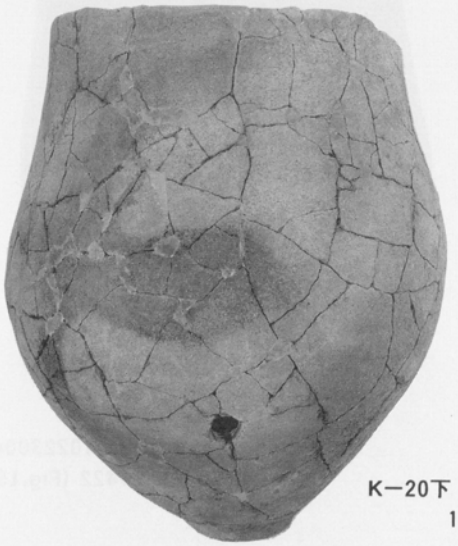
810223036
1428 (Fig.17)



K−26 810223035
1427 (Fig.17)

K−4 810223006
1424 (Fig.15)

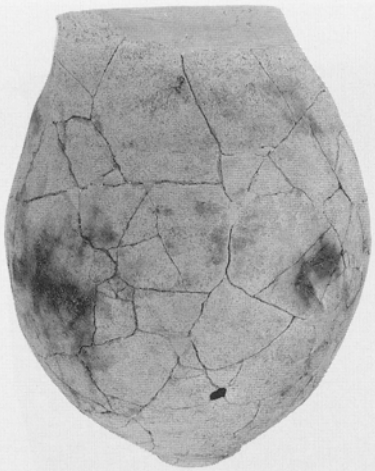
K−36下 810223047
1429 (Fig.17)



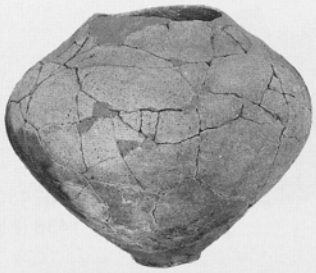
K−20下 810223028
1426 (Fig.16)

K−39下 810223052 1430 (Fig.17)

甕形土器−2



K—40下　810223054
1431 (Fig.17)



K—44下　810223060
1432 (Fig.17)

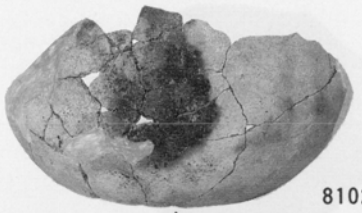
810223064
1434 (Fig.17)

810243007
1435 (Fig.25)

K—46　810223063
1433 (Fig.17)

K—65　810243007
1435 (Fig.25)

甕形土器—3



810243012
1438(Fig.25)

K－69　810243011
1437 (Fig.25)

K－76下　810243015
1441 (Fig.26)

810243017　1443 (Fig.26)

810243014
1440 (Fig.25)

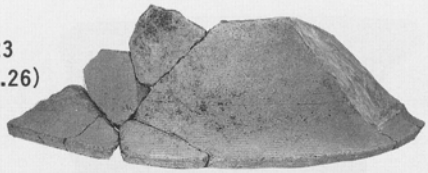
K－74　810243013
1439(Fig.25)

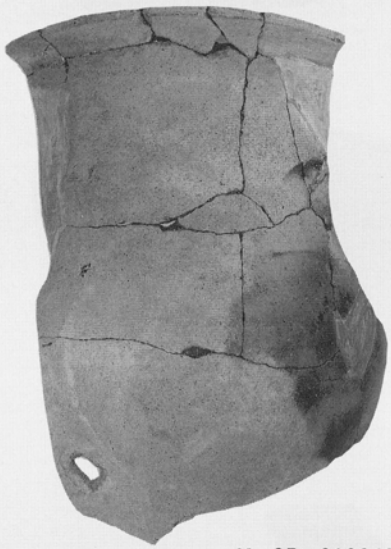
K－79　810243016
1442(Fig.26)

甕形土器－4

K—81 810243019
1445 (Fig.26)

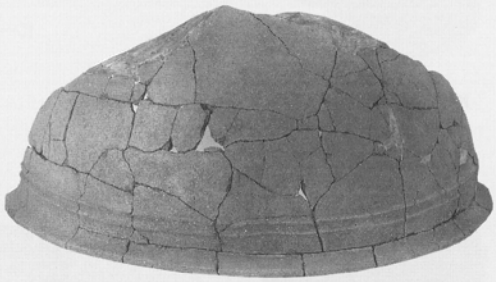
810243023
1447 (Fig.26)





K—85 810243022
1446 (Fig.26)

810243027
1449 (Fig.27)



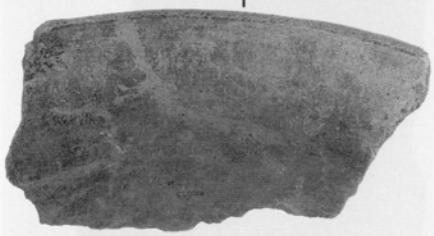
810243029
1451 (Fig.27)

K—88 810243026
1448 (Fig.27)

K—89
810243028
1450 (Fig.27)

甕形土器—5

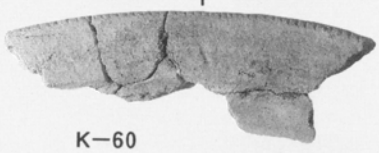
1473



K—83 810243020
1474 (Fig.27)

K—86 810243024
1476 (Fig.27)

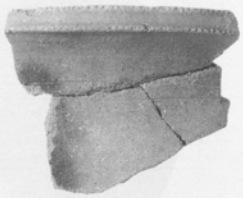
1466



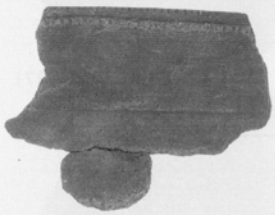
K—60
810243001
1467 (Fig.27)

K—84 810243021
1475 (Fig.27)

K—62 810243004
1468 (Fig.27)



K—66 810243009
1469 (Fig.27)



K—4 810223066
副葬品 1463 (Fig.18)

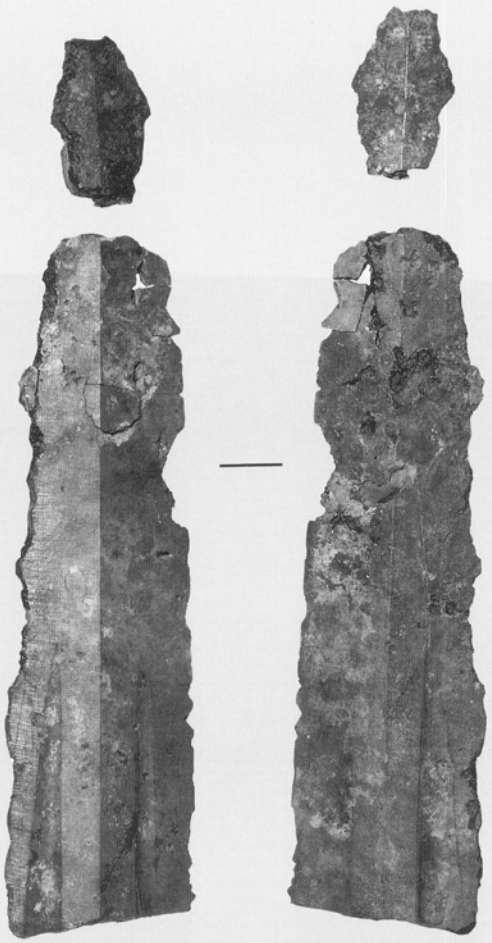
K—23下 810223033
1465 (Fig.18)

1470

K—82 810243031
1472 (Fig.26)

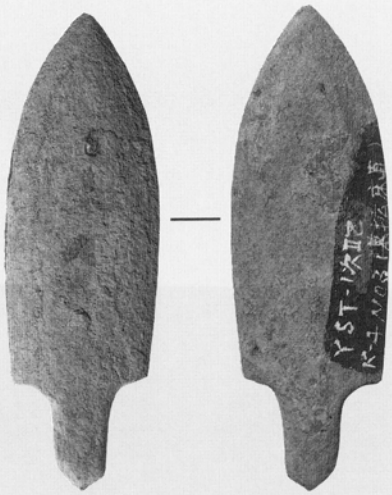
K—15上 810223021
1464 (Fig.18)

K—74 810243013
1471 (Fig.25)



K—88　810243033

1459　　1460
(Fig.28)



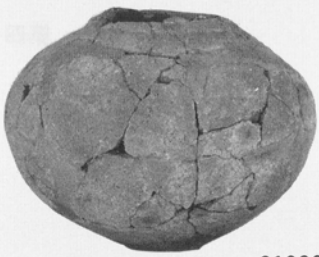
K—4　810223068

1457　　1458 (Fig.18)

K—4　810223065
1456 (Fig.18)

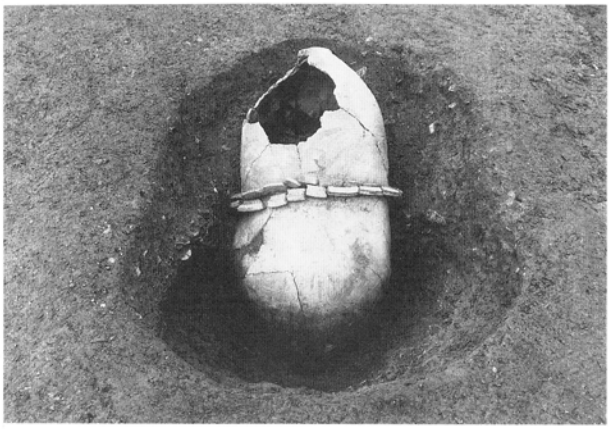
K—60　810243001
1455 (Fig.28)

SK—12　810224040
1452 (Fig.18)

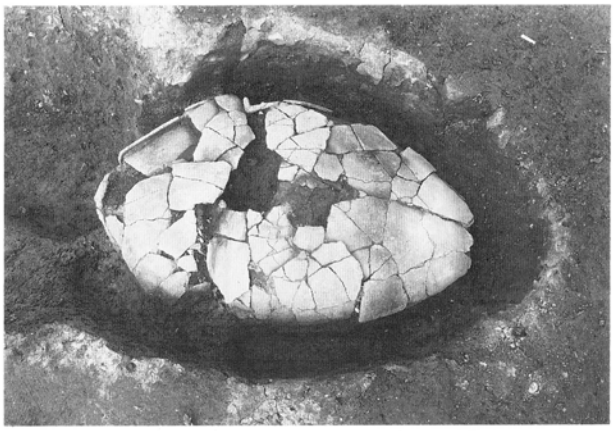


K—46　810223067
1454 (Fig.18)

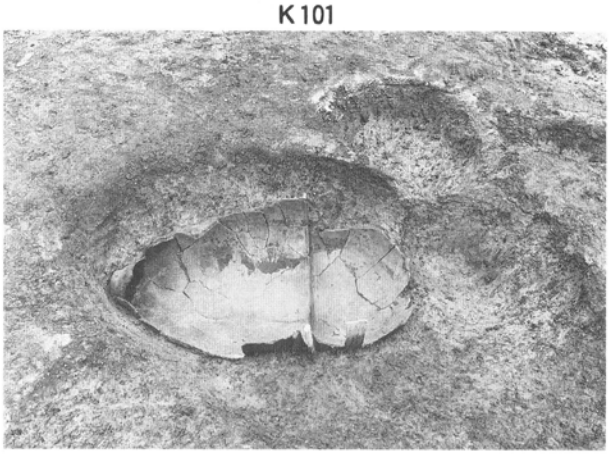
第四・五次調査　第Ⅰ区全景（南から）



K101

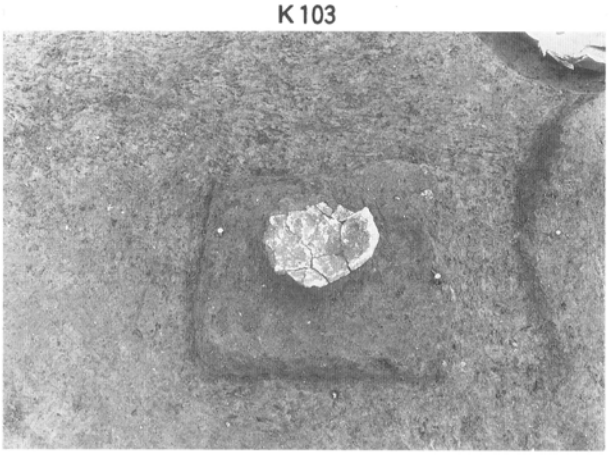


K102

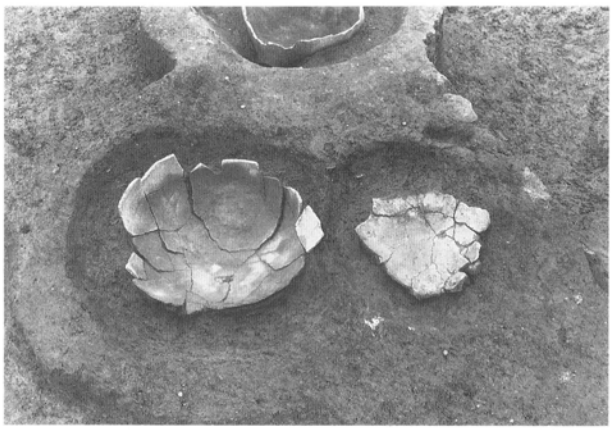


K103

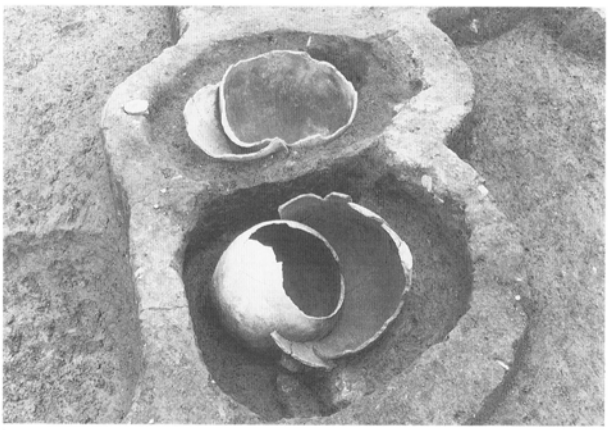
K104



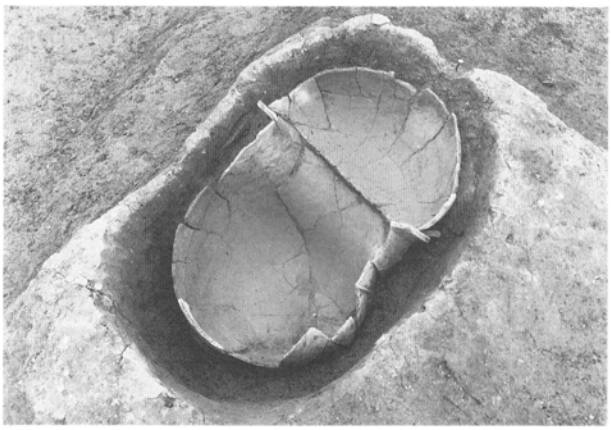
K105



K106・K123

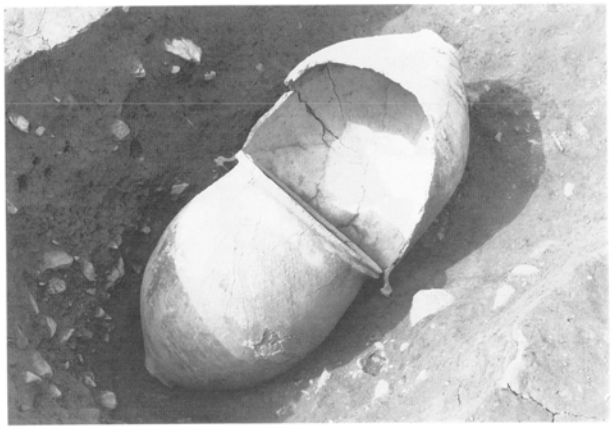


K107・K124



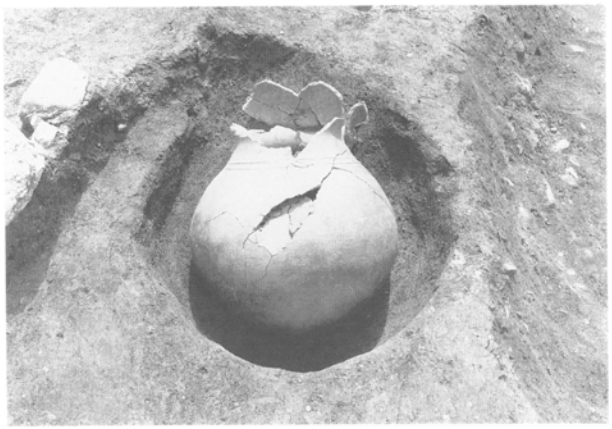
K108

K101・102・103・104・105・106・123・107・124・108号甕棺墓出土状況

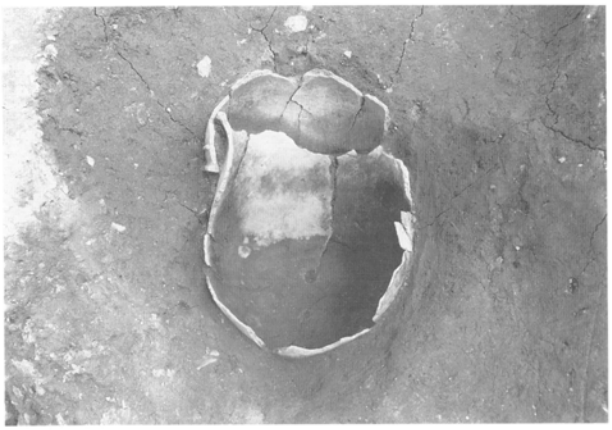


K112

K113



K114



K118

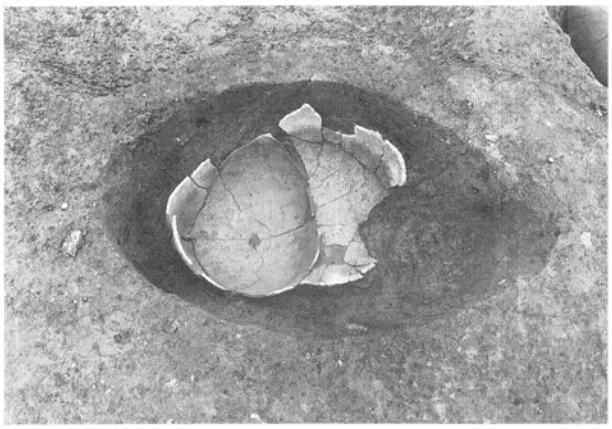
K119

K120

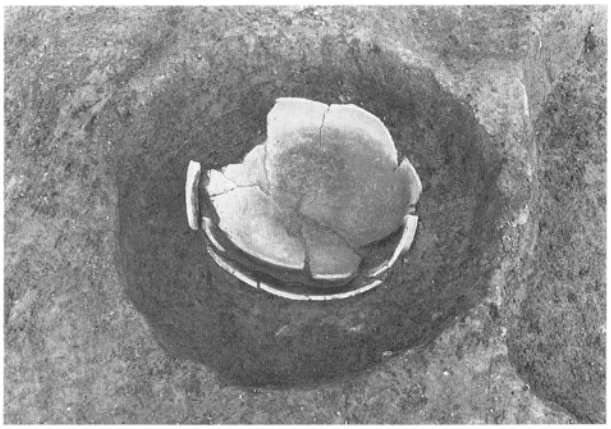
K121

K122

K112・113・114・118・119・120・121・122号甕棺墓出土状況

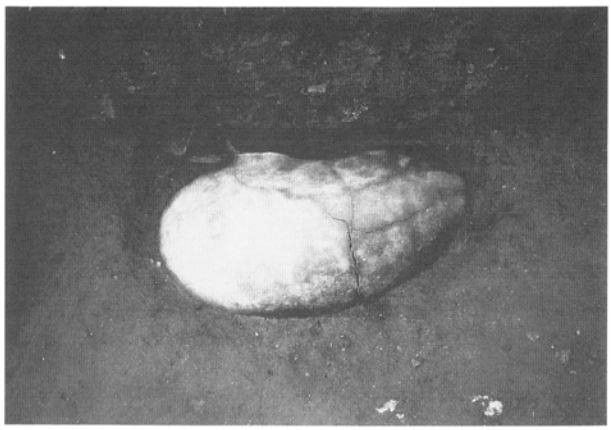


K126

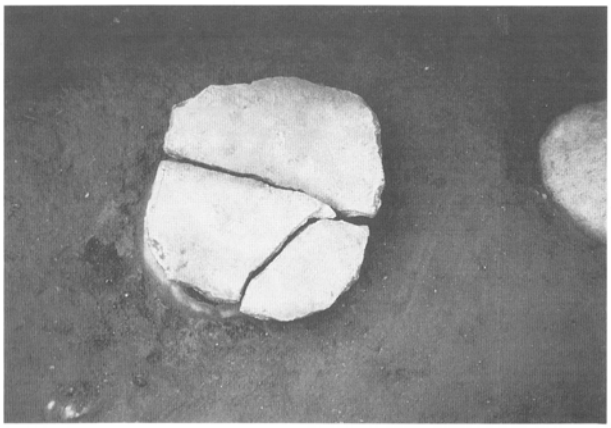


K127

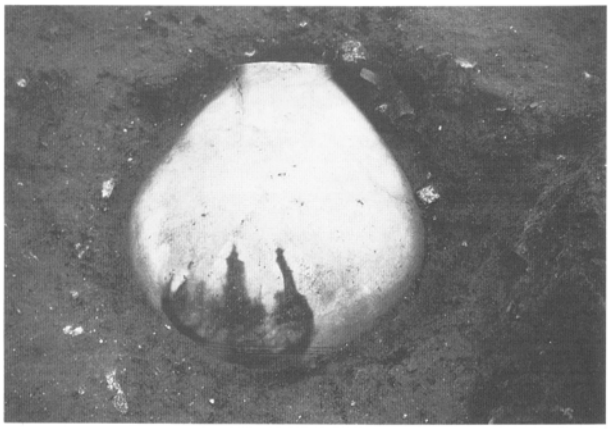
K128



K129



K130



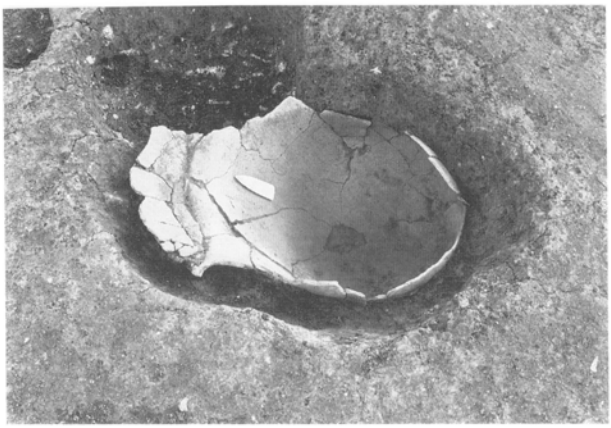
K131

K132

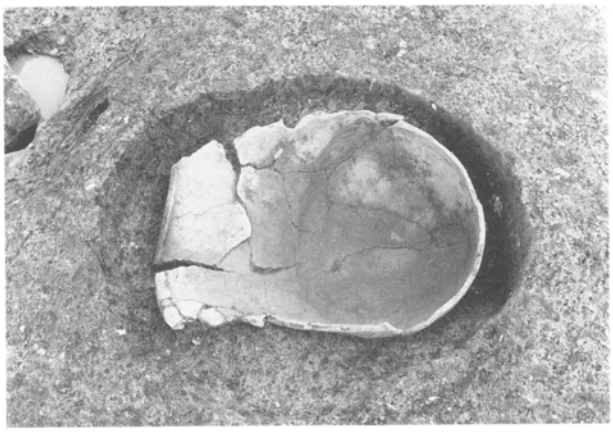
K133

K126・127・128・129・130・131・132・133号甕棺墓出土状況

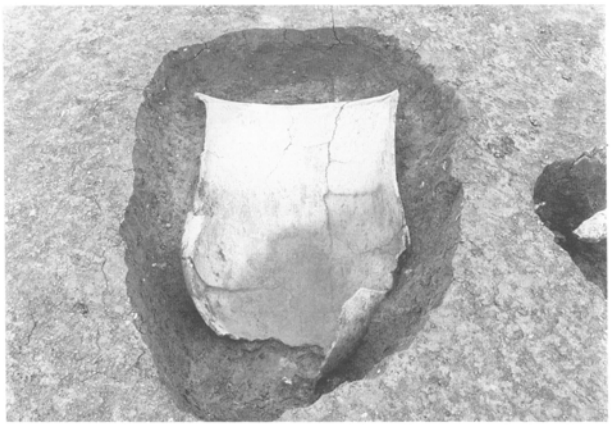
K134



K04

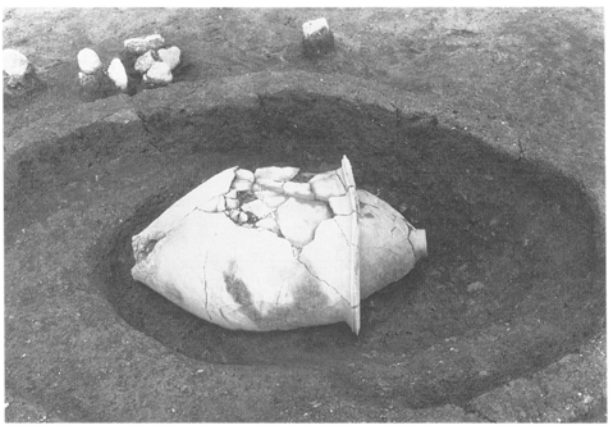


K06



K16

K67

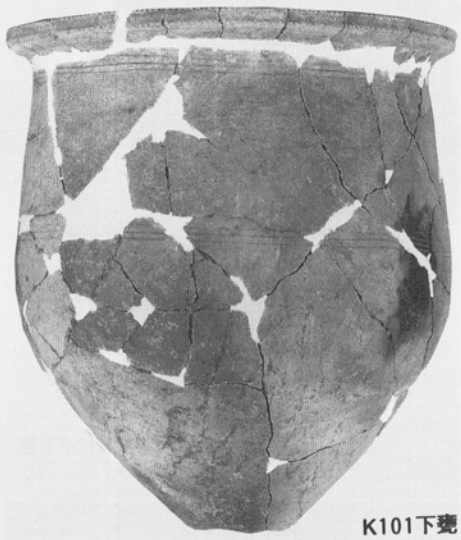


K05

K08

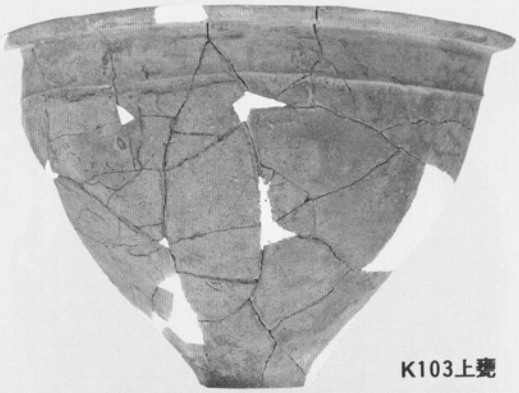
第Ⅰ区K134号、第Ⅱ区K04・06・16号、第Ⅲ区K67・05・08号甕棺墓出土状況

K101上甕

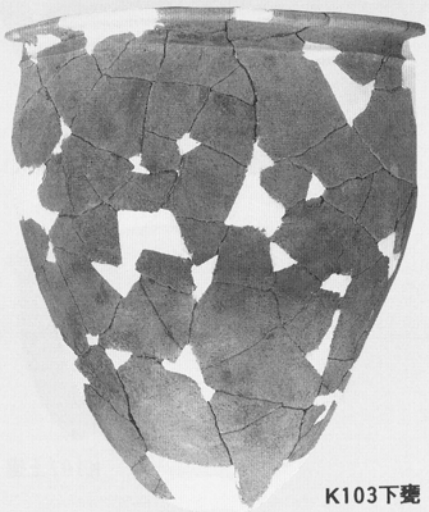


K101下甕

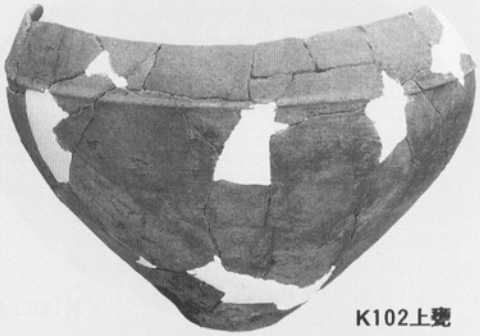
K104



K103上甕



K103下甕

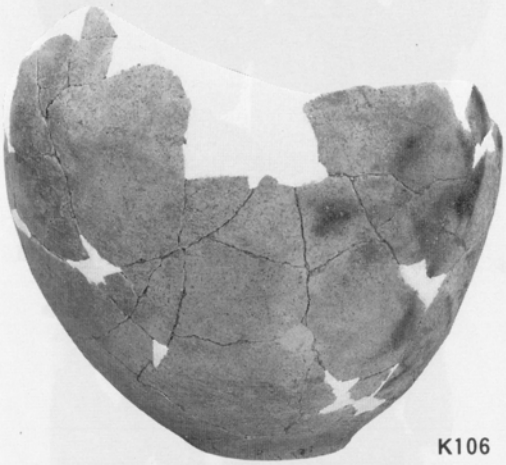


K102上甕

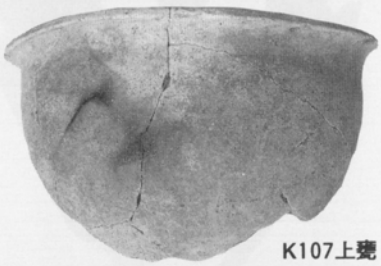
K102下甕

第Ⅰ区　K101～104号甕棺

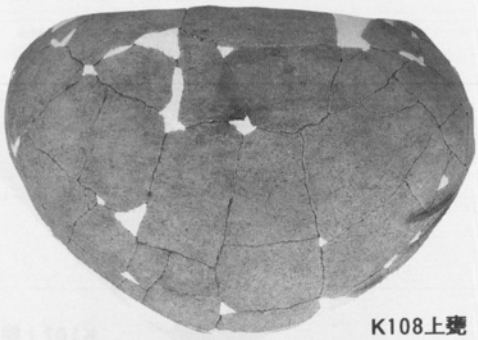
K105



K106



K107上甕

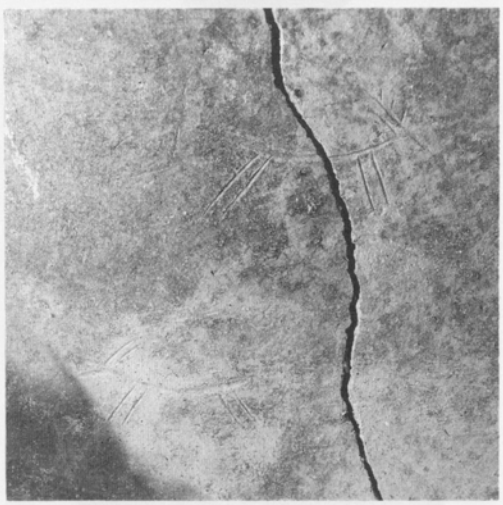


K108上甕

K108下甕

K112上甕

K112下甕



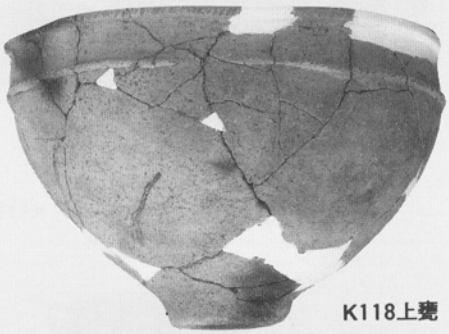
K112下甕鹿線刻画

第Ⅰ区　K105～108号・K112号甕棺

K113上甕

K113下甕

K114上甕

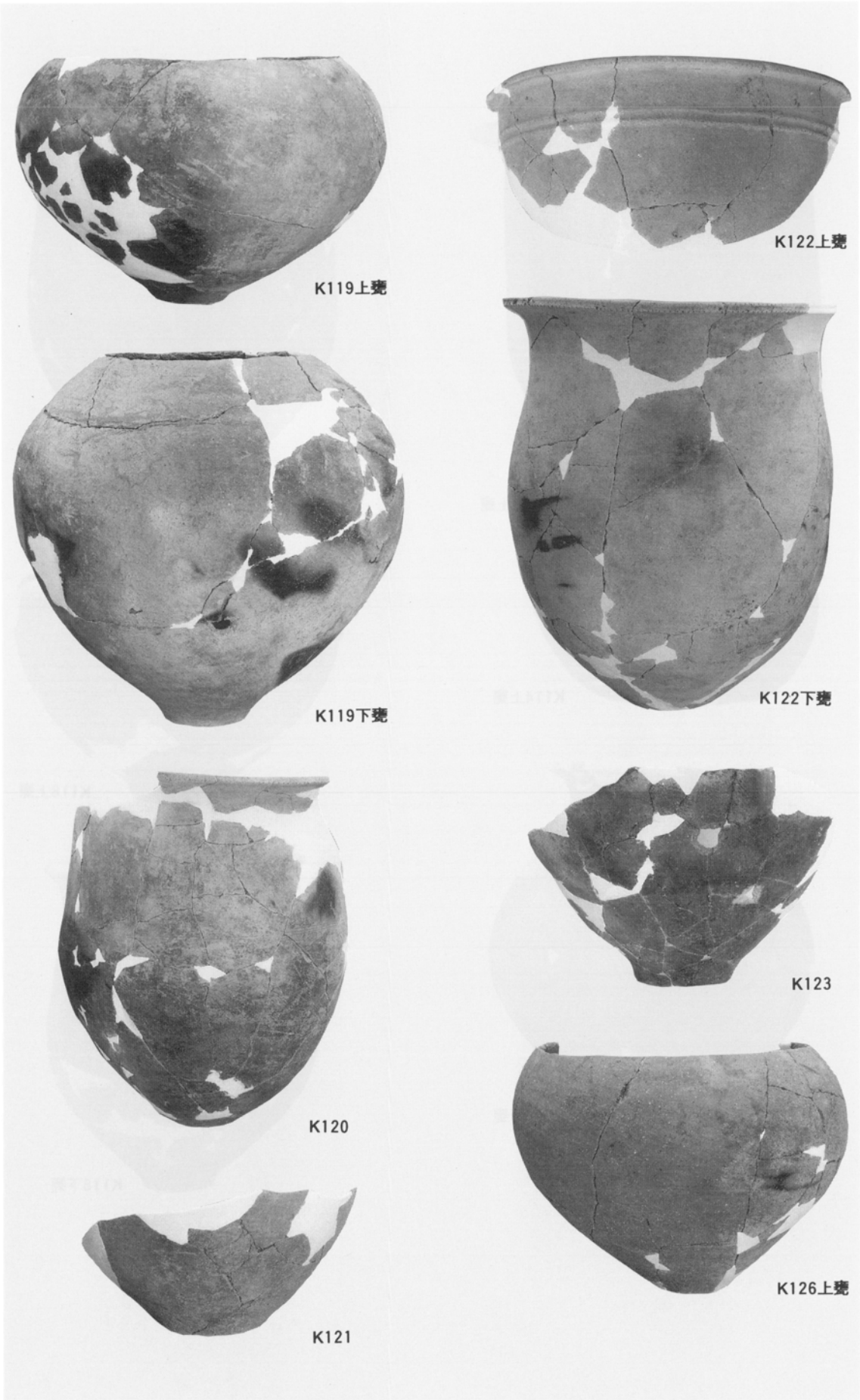


K118上甕

K114下甕

K118下甕

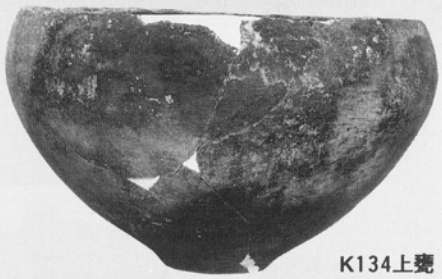
第Ⅰ区　K113・114・118号甕棺



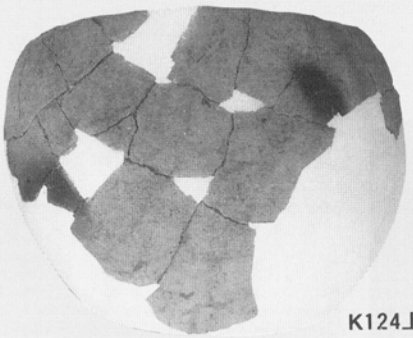
第Ⅰ区　K119・120・121・122・123・126号甕棺

K126下甕

K127下甕

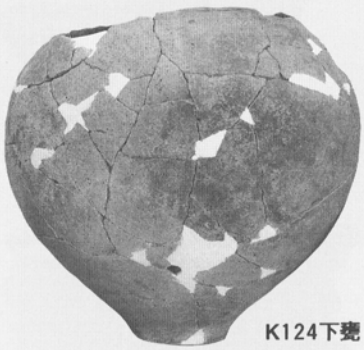


K134上甕



K124上甕

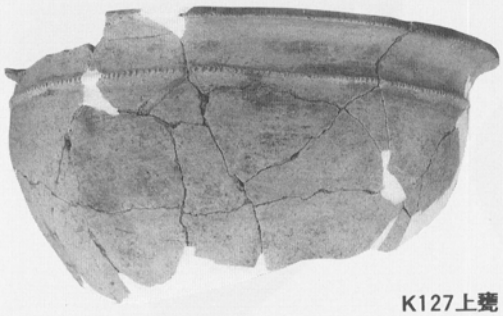
K134下甕



K124下甕

K104副葬土器

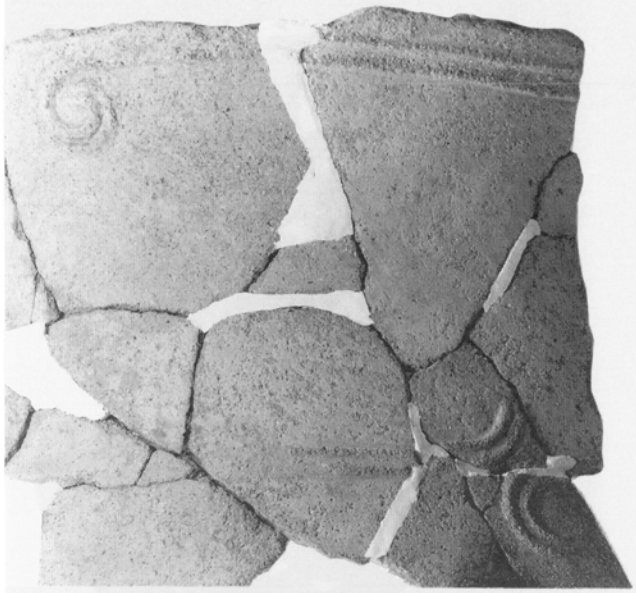
K131副葬土器



K127上甕

K119副葬土器

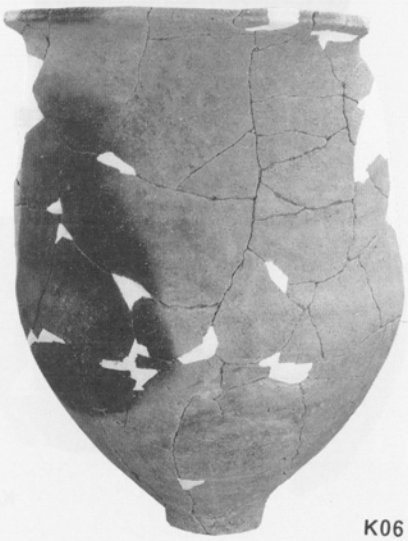
第Ⅰ区　K124・126・127・134号甕棺および
K104・119・131号甕棺、副葬土器



K16

K04

03051



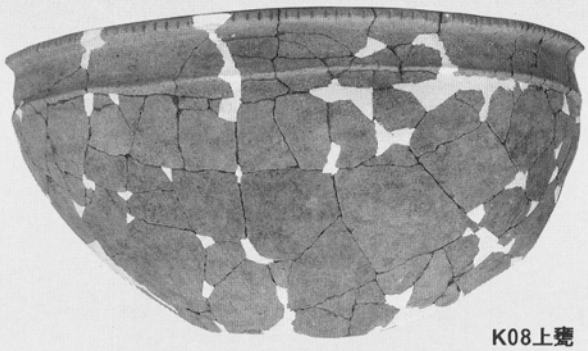
K06

03052

SX01副葬土器

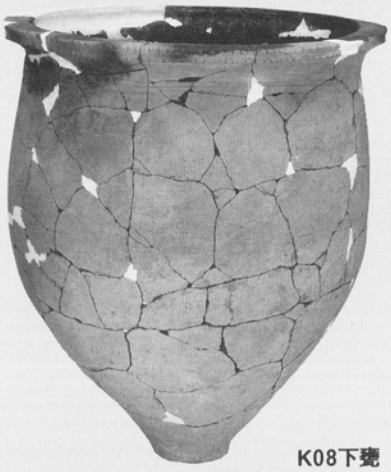
第Ⅱ区　K04・06・16号甕棺、SX01副葬土器、03051・03052土器

K05上甕



K08上甕

K05下甕



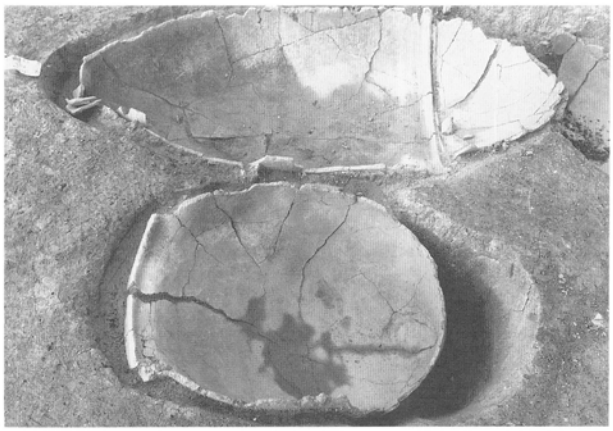
K08下甕

K67上甕

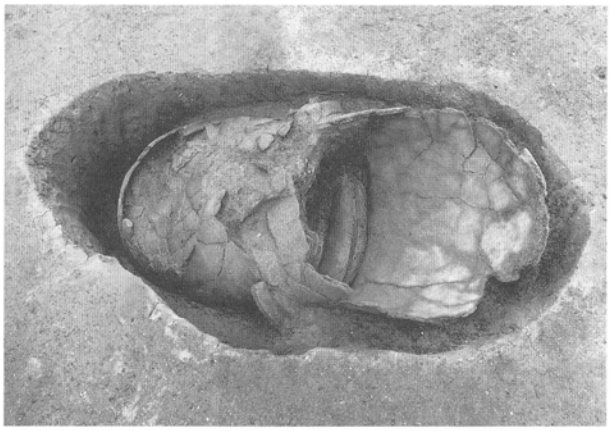
K67下甕

第Ⅲ区　K05・08・67号甕棺

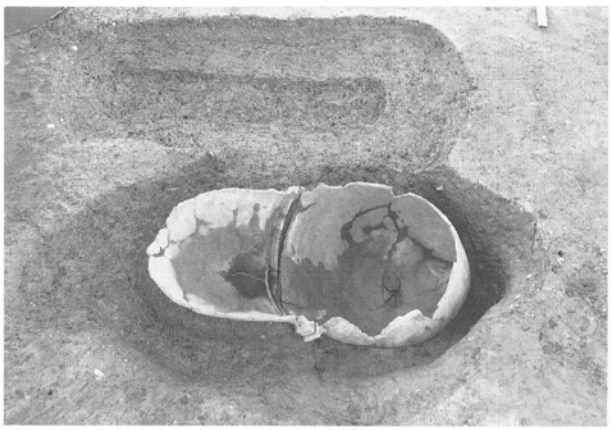
1　第六次調査（大石地区）弥生墓地全景
2　大石地区弥生墓地（南東から）



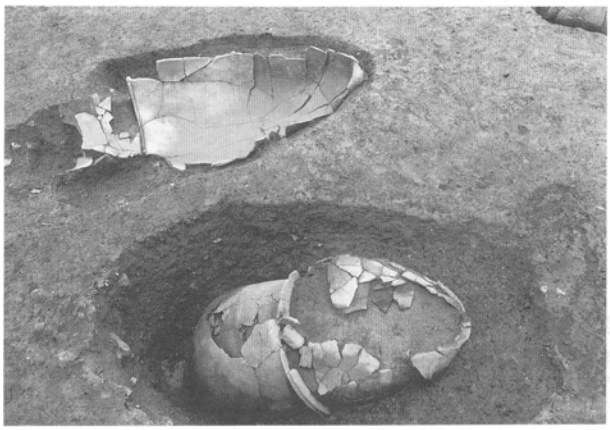
K15



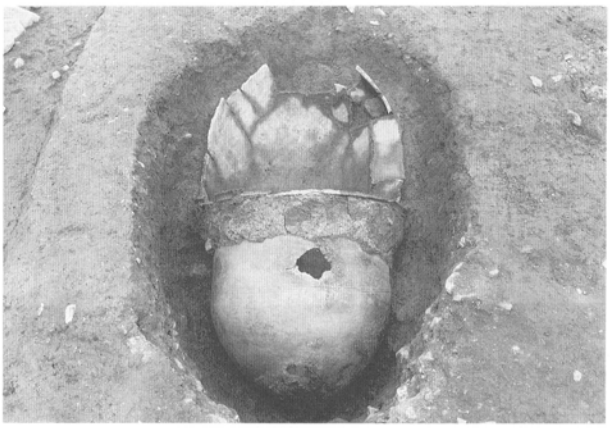
K18



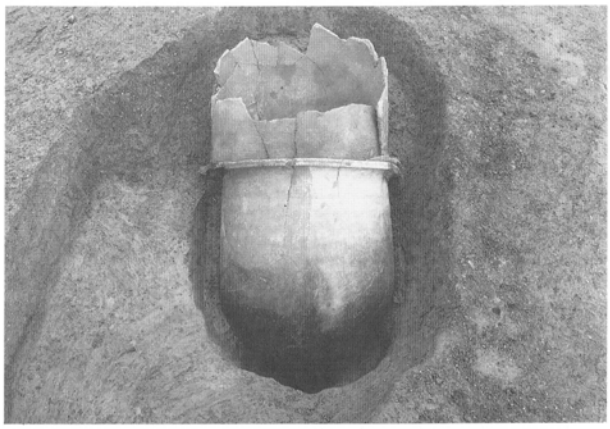
K25



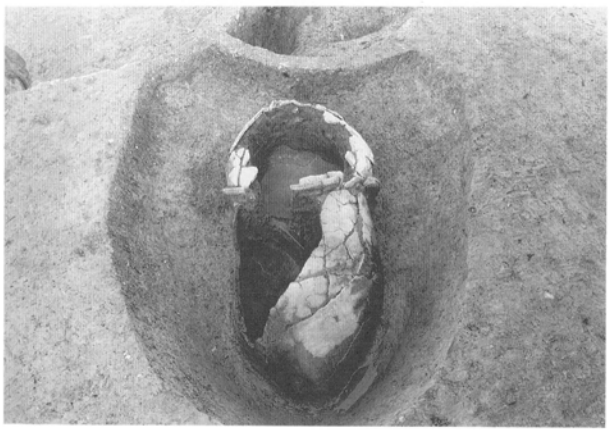
K43



K56



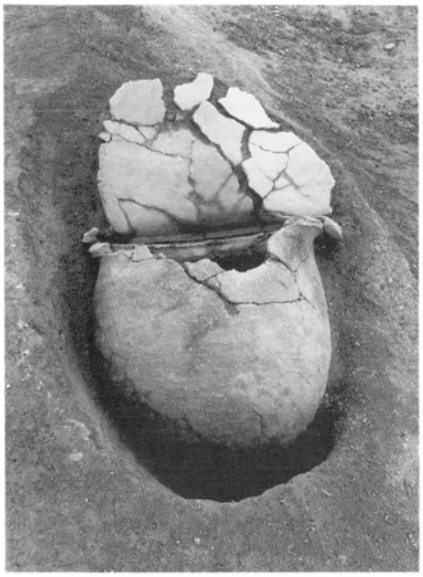
K73



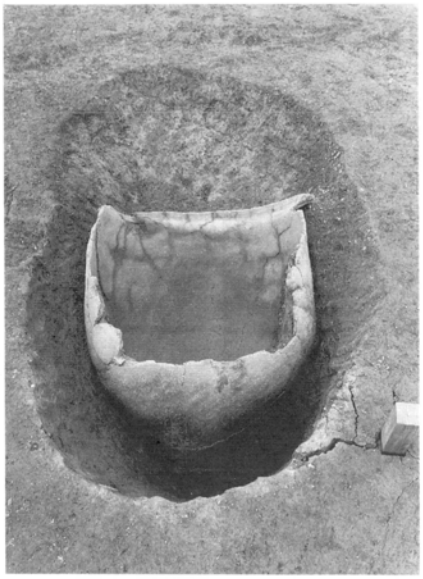
K171

K172

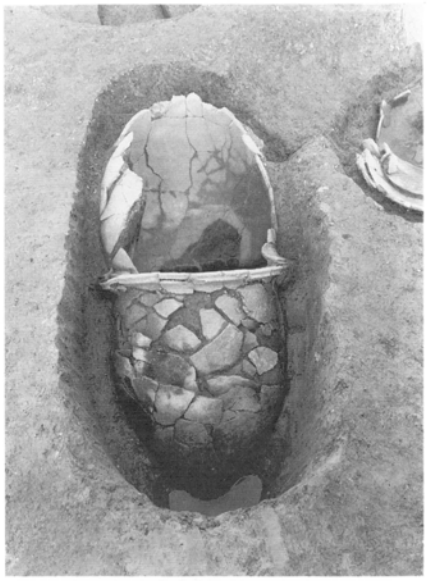
第六次調査甕棺墓出土状況



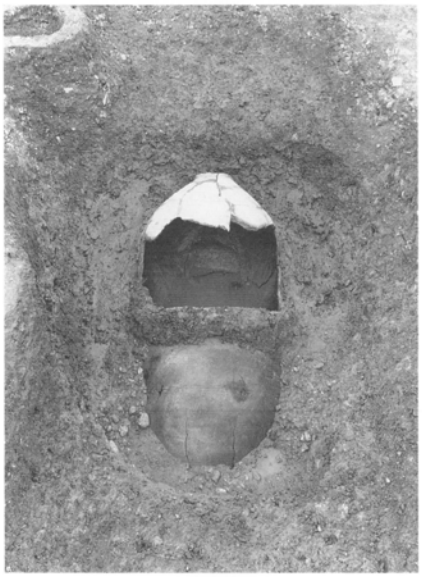
K 50



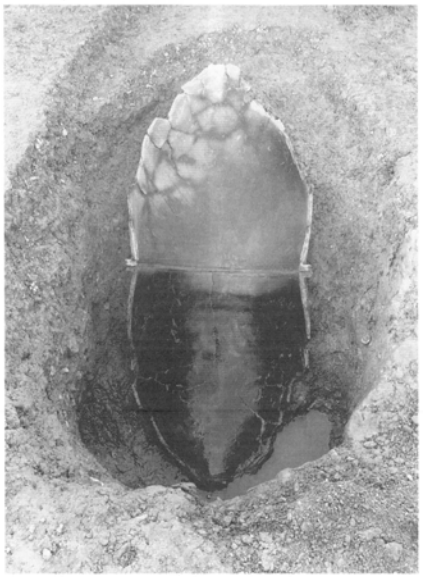
K 64



K 67



K 77

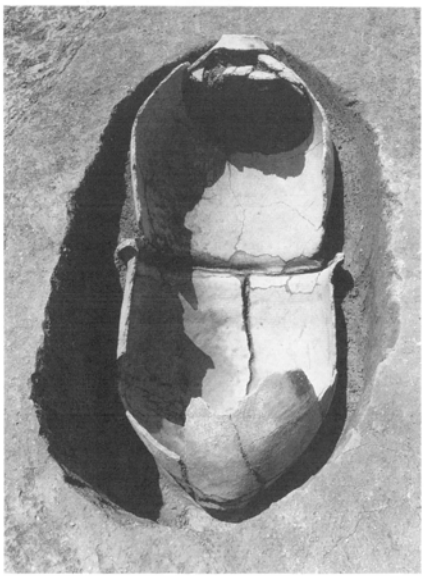


K 90

K 166

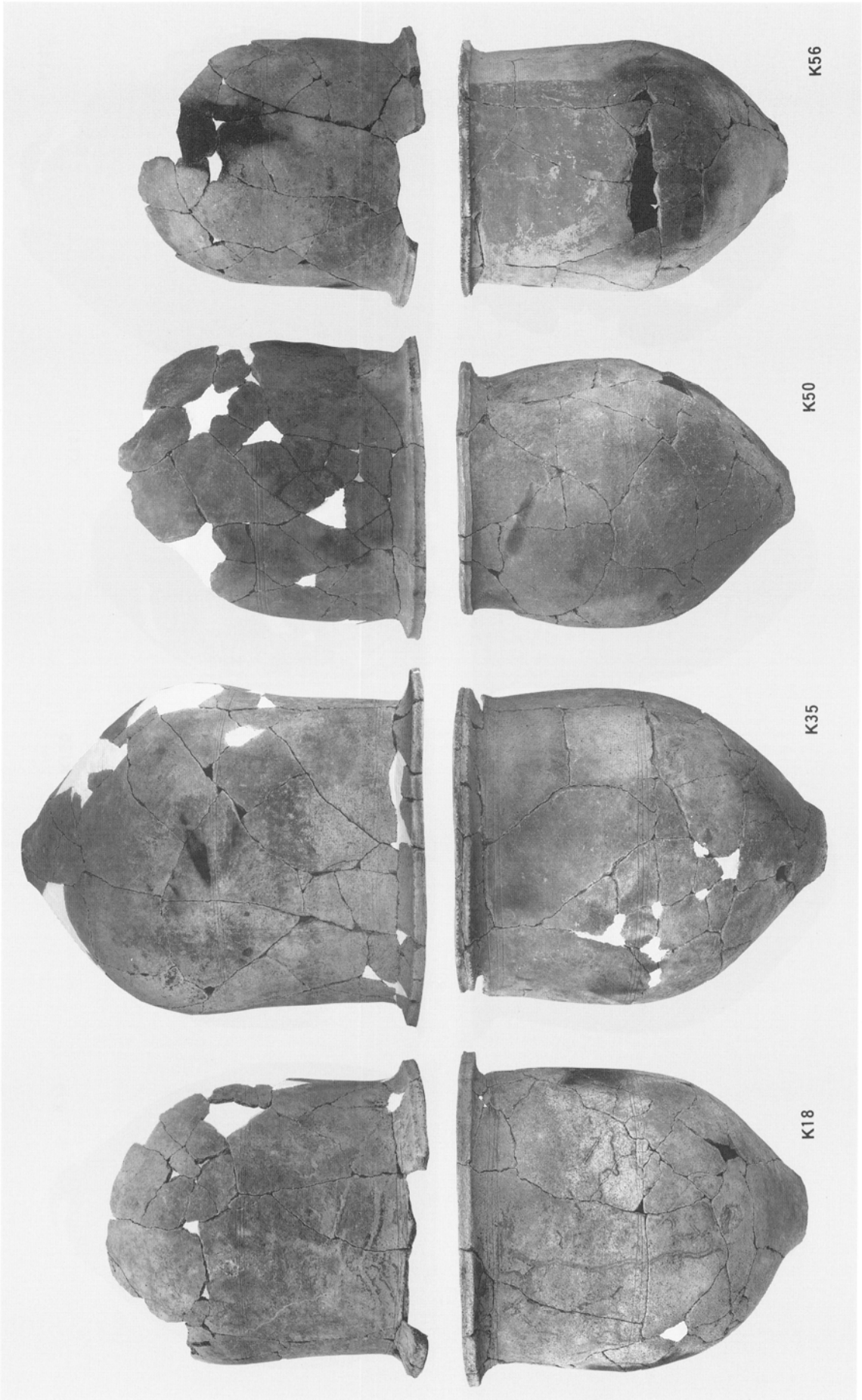
K 141

K 142

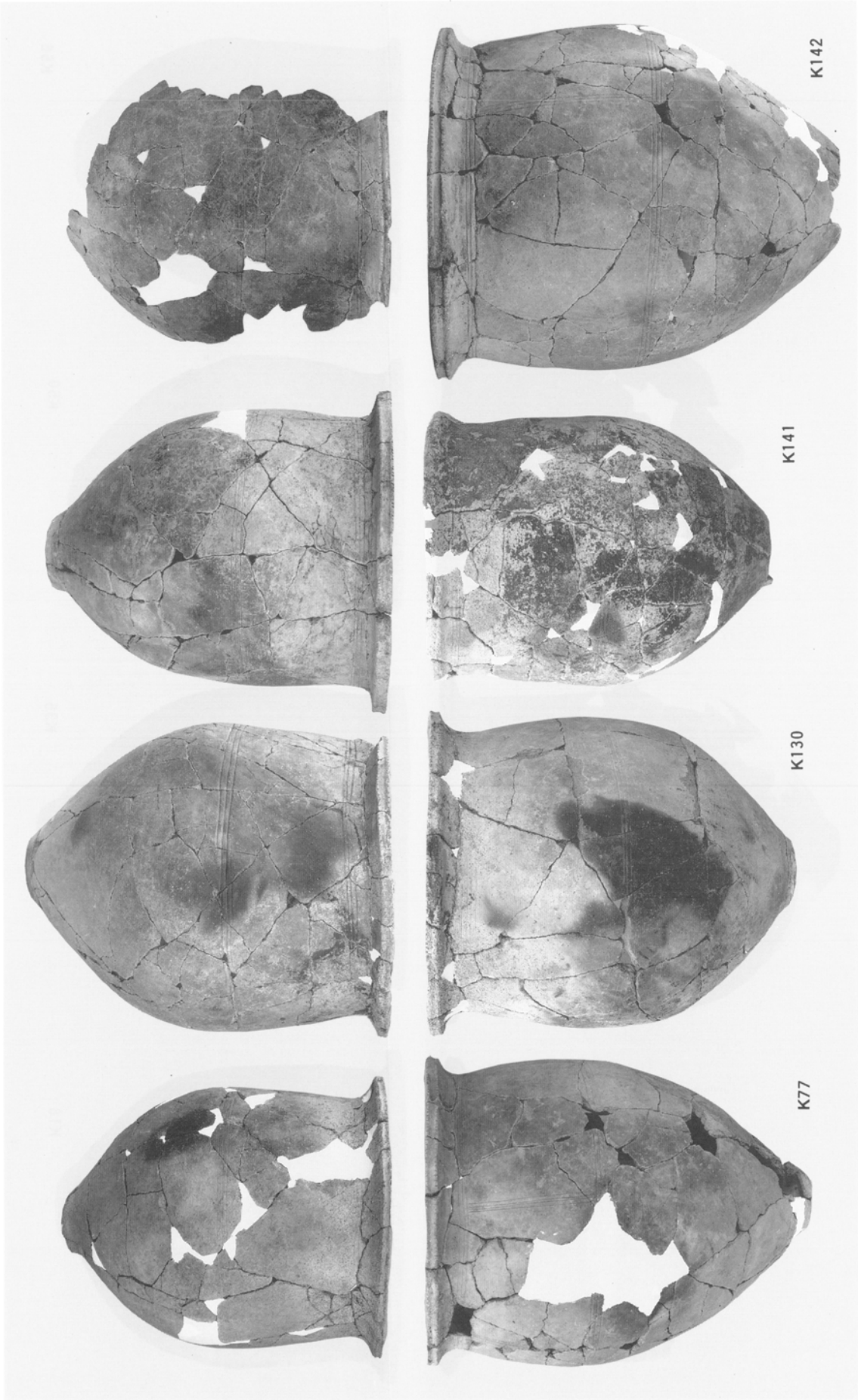


K 203

第六次調査甕棺墓出土状況



第六次調査K18　K35　K50　K56号甕棺



第六次調査K77　K130　K141　K142号甕棺

吉 武 遺 跡 群 X

－弥生時代の墓地の調査報告1－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第580集

1998年3月30日

発　行　福岡市教育委員会
　　福岡市中央区天神1丁目8番1号
印　刷　三栄印刷株式会社